

【修正中】 戦姫絶唱シン
フォギア ～遙か彼方
の理想郷～

風花

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女達の唱には奇跡が宿り、少年と少女の唱には呪いが刻まれている――

世界は“ノイズ”と呼ばれる特異災害に生存の危機に陥っていた。そんな中、唯一ノイズに対抗しうる“シンフォギア”を纏った者達がいた。過去に捨ててしまった絆を取り戻したい少年。過去に縛られし感情を捨てられない剣。過去より臉を開かない眠り姫。そして――全てに片が付く時、彼らが得る物とは。十全たる幸福か、それとも

目次

D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.
C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.
X II	X I	X	IX	VIII	VII	VI	V	IV	III	II	I
175	166	154	146	138	118	93	74	62	45	25	1

D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.	D.
C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.	C.
X X V	X X IV	X X III	X X II	X X I	X X	X IX	X VIII	X VII	X VI	X V	X IV	X III
347	331	316	299	282	267	244	238	229	219	204	193	184

532		P a r t o s s i a 幸 せ の カ タ チ 2	514	P a r t o s s i a 幸 せ の カ タ チ	D. C. X X X IV	D. C. X X X III	D. C. X X X II	D. C. X X X I	D. C. X X X	D. C. X X IX	D. C. X X VIII	D. C. X X VII	D. C. X X VI	492	479	460	449	433	419	401	384	364
-----	--	--	-----	---	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	------------------------------	-------------------------	--------------------------	----------------------------	---------------------------	--------------------------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

セ
カ
イ

P
a
r
t

o
s
s
i
a

優
し
く
不
平
等
な

546

私立リディアン音楽院。

この春、新たにリディアンに入学してきた生徒達。入学初日の初授業とあり全員緊張した面持ちで席に座る中、

「——立花さん！」

入学早々怒鳴られている女生徒が一人いた。

女生徒の名前は立花響。たちばなひびき

胸には白い猫が抱き抱えられており、場違いながら「にやあく」と鳴いている。

響は一応理由を述べていくが、

「立花さんっ!!」

結局怒鳴られてしまう。

たっぷり五分ほどかけて絞られ、ようやく解放された。

その時だった。

「すんませえん！ 遅れてすんませえん!!」

女性の声にしては低い声かけたたましい音を立てて開くドアから聞こえた。

全員が——当然叱っていた教師と響も見上げる——ドアを見上げると、一人の青年——

女性にも見える顔だが男だろう——が汗だくになって入ってきていた。小走りで階段状になっている席の合間を縫って下りていく。

首から下を完全防備と云つていいほど着込んでいる青年。手には手袋まではめてい
る。

当然生徒達は彼を不審に見つめる。ここはほぼ百パーセント、女子だけが通う学校
なのに何故同年代ぐらいの青年が入ってきているのだろうか

「あ、あなたもですか！——遠見先生！」

——は？

生徒全員の声が重なる。

遠見と呼ばれた青年は「すみませんでした！」と頭を下げている。

「まったく……あなたは教師としての自覚があるんですか!？」

「いや……家を出た時は間に合うつもりだったんですけど、轢かれそうな子猫助けてた
ら遅れてしまつて……」

「遠見先生!!」

「うわつ、ごめんなさい！　これ以後注意します!!」

土下座せんばかりに頭を下げ続ける青年。

叱つていた教師も溜め息を吐き、

「謝罪は結構ですから自己紹介してください。入学式に紹介できなかつたんですから」

こちらを見下ろす女生徒達の方へ促した。

青年は苦笑を浮かべ、自分を見下ろす生徒達を見上げ、

「はは……、本当は入学式で紹介に預かるはずだった遠見鏡華きようかです。一応色んなクラスを時々受け持つ非常勤講師です。教師と云う身分ですが、皆さんと歳はあまり離れていませんので、休み時間とかは遠慮なくタメ口を聞いてくれると嬉しいです」

そう言った。

生徒達は呆然としていたが、頭がはつきりしてきた一部の生徒は驚いた声を上げた。

——遠見鏡華

二年前まで人気ボーカルユニット、ツヴァイウィング専属で作詞作曲家ソングライターを務めていた青年。

二年前に死亡されたと噂されていた神童だった。

♪♪♪♪♪♪♪♪

——二年前。

立花響は奇跡的に生還を果たした。

幼馴染に誘われ、人気ボーカルユニット、ツヴァイウィングのコンサートに来ていた彼女はそこでノイズの襲撃を受けた。

崩れゆくライブ会場で呆然と立ち尽くす彼女が見たのは、謎の歌を口ずさみ、突如武装したツヴァイウィングの二人、天羽奏と風鳴翼あもつかなで かぜなりつばさがノイズの大群を掃討している姿だった。

その最中、彼女の胸に何かが直撃する。

そして彼女が最後に聞いたのは、

——生きるのを諦めるなっ!!——

そう、天羽奏が自分に叫ぶ声とその直後奏でた不思議な唱だった。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

(——そう、それが今の俺達の始まりだった)

放課後、こつてりと行われた説教から解放された鏡華は朝、先に説教を受けていた生徒のプロフィールが書かれた書類に目を通しながら心の中で呟いていた。

まさかこの学院に入学しているとは思ってなかった。

二年前の事はある程度、人から聞かされていた。

致命傷に近い傷を負っていた彼女はそれでも生きた。

(奏のおかげ、なんだろうか……。いや、そうだろうな)

奏が響に告げた言葉は今も憶えている。

——生きるのを諦めるなっ!!——

~~~~~♪

自分の携帯端末から流れる着信音に鏡華は現実引き戻される。

「旦那か……もしもし、俺です。ノイズでも発生しましたか？」

『いや、違う。一時間後にミーティングがあるんだが……来れるか？』

「……そこに翼は？」

『当たり前だが来る。……まだ伝えていないのか？』

鏡華は息を吐きながら細かい声で頷く。

この二年間、まったく連絡も寄越さず死んだと思わせて隠遁生活を送っていた。あの日から翼は自分を恨んでいると思っっている。それは分かっていたことであり、仕方ない事だった。

「……ここにいる以上嫌でも顔を合わせるんだ。旦那からは喋らないでくれ」

『……分かった。最後に聞かせてくれ。——奏の容態は』

「……………。二年前と変わらず、でお願いするよ」

そう告げて鏡華はケータイを切ってしまう。

空を見上げれば、あの日と同じ夕焼けに染まりかけていた。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

——全ては二年前が発端だった。

双翼、ツヴァイウイングと作詞作曲家と云う影から支えるもう一翼。

天羽奏。

風鳴翼。

遠見鏡華。

最高の三人の最後のライブとなつてしまった会場には長蛇の列が並び今か今かと入場したがっていた。

そんな会場裏の一室で鏡華は机に向かつていた。

床にはぐしゃぐしゃに丸められたコピー用紙が埋め尽くすかのように捨てられている。鏡華は書いては丸めて捨て、書いては丸めて捨てを繰り返している。

世間では天才作曲家などと云われているが鏡華は決して天才などではない。二人に近付きたいために努力した結果だ。

そんな鏡華に忍び寄り人影があつた。気付かれないように部屋に入り、そして、

「きよーかあ〜っ♪」

叫びながら跳躍。鏡華の背中に飛び付く。

「うひやあつ!!」

まったく気付いていなかった鏡華はすつとんきような声をあげ、飛び付いてきた人を掴み、投げ飛ばした。

「おつと?」

投げ飛ばされた人物は驚きながらも空中で体勢を立て直し、壁に激突するのを防ぎ滑るように床に下りた。

鏡華はそこでやつと飛び付いてきた人が誰か知る。

「か、奏か……驚かささないでよ」

ツヴァイウィングが片翼、鏡華の親友である奏だった。

重力に逆らっていた赤髪がふわりと元に落ち着く。

「あはは、わりー、わりー。開演するまでの、この時間が嫌なんだよね〜」

「だからって飛び付くか普通」

「こちとらさつきと大暴れたいってのに〜、そいつもままならねえからなく」

それより、と奏は言葉を中断しとある一点を指差す。

指を差したところにはソファがあり、

「……」

ツヴァイウィングのもう片翼、鏡華のもう一人の親友、風鳴翼がソファの上で体操座りで座っていた。

「えつと……翼さんはいつからそこにいたのでしょうか？」

「……。……十五分くらい前……」

「声掛けるよっ！」

思わずと云ったツツコミ返してしまふ鏡華。

だが、翼は同じ姿勢のまま視線だけを鏡華に向ける。心なしか恨みが籠められているような気がした。

「掛けたよ！ 何回も呼んだのにまったく気付いてないだけでしょ！」

「うっ……それは……ごめん」

謝る鏡華をよそに、奏はまるで玩具を見つけたかのような笑みを浮かべると、翼の隣に座りそのまま抱き着く。

「もしかして翼、緊張とかしちゃってたり？」

「あ、当たり前でしょ！ 櫻井女史も今日は大事だつて……」

そんな言葉の途中に、奏は翼の額にでこぴんを見舞う。

真面目がすぎるねえ、とまた奏は笑う。

鏡華も椅子に座り直しながら苦笑する。

「奏、翼、鏡華。ここにいたか」

そう言いながら部屋に入ってくる人物。赤いスーツを身に纏った男性。  
風鳴弦十郎。

翼の叔父であり、翼と奏の上司でもあり、鏡華の後見人でもある。

鏡華曰く、「人間を超えた超人類並みのおっさん」だ

なにしろこの弦十郎、足を振り下ろしただけで地面がひび割れ、跳べば小さなビルの屋上ぐらゐまで到達するとなんでもない実力の持ち主なのだから。

口々に弦十郎を愛称で呼ぶ。

「分かっているとと思うが……今日——」

「大事だつて言いたいんだろ？ 分かっているから、大丈夫だつて」

「ふっ……分かっているなら、それでいい」

強気な、だけどいつもと変わらない口調で告げる奏に、弦十郎は薄く笑いながら言葉を区切る。

鏡華も今日の事はある程度聞いていたので心配していたが、彼女の様子なら大丈夫だろうと思ひ、口には出さなかつた。

「今日のライブの結果が、人類の未来をかけてるってことをな」

「まったく……奏、翼。張り切りすぎるな、とは言わないけど無茶はすんなよ？」

「ああ！ 任せとけっ！」

「うん！」

い ここまで言えばこれ以上鏡華が言える事はない。後は二人を信頼して見ていれればい

鏡華は脇に置いていた楽譜が入っている大きめのカバンを肩に掛けると、弦十郎と共に部屋を出ていった。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

程なくしてライブは暗闇から始まりを告げた。

会場を彩るスポットライトを浴びながら舞い降りる翼と奏。

ツヴァイウイング。

流れ始める曲は鏡華が作り上げた三人の絆の証。二人は歓声に応えながら舞い、歌を響かせる。曲に合わせて変化するステージはサビに入るとその天井を開く。

二人の歌姫をさらに輝かせ、美しくさせる。歌声には力が増し、会場の熱気は最高潮に達していく。

その発生源がたった二人の歌姫。

「まだまだ行くぞーーツ!!」

観客と自分の興奮に応えるかのように奏はマイク越しに叫ぶ。

全員が胸の内から迸る感情を抑えきれない。だが、それでいい。

思い切り今と云う時間を各々楽しめば良いのだ。

そしてそれは鏡華だって例外ではない。

「――」

別れてその足で観客席へ訪れた彼は最初から最後まで観客として居続けた。

ステージの下では極秘裏に研究が行われている最中だが、そちらは弦十郎や教授達に任せればよい。今は眼の前に見蕩れていた。

自分が思い描き、詩として生まれたそれが今まさに産声を上げているのだ。それも自分が想像していた以上の美しく力強い唱。自然と汗ばんだ手を嬉しそうに強く握り締めている自分に気付いた。

――と、ポケットが小刻みに震えた。手を入れ、携帯端末を取り出し耳に当てる。

「はい。遠見です」

『どうだ、そつちは』

相手は弦十郎。

聞こえやすいように鏡華は屈み出来る限り音を拾えるように姿勢を変える。

「最高です。実験は？ うまく云ってる？」

『今のところ順調だ。心配する必要は——』

そこまで言った時、会場こんなばしょでも分かる緊急信号アラートの音が鏡華の耳に飛び込んだ。

弦十郎の言葉を疑いながら言葉を掛けようとして、

「……え？」

今の今——気付いた。一つの事に集中すると周りが見えなくなる癖。

眼の前で広がっていたのは、もう最高のステージなんかじゃない。

阿鼻叫喚の——地獄絵図だ。

『……すまない前言撤回だ！ 総員——』

「こつちも訂正。——ノイズが来た!!」

『——』

「……切れたのかよ、くそっ!!」

鏡華は吐き捨てるように叫ぶと立ち上がり階段を飛び降り、半分しか開いていなかったドアを全開にして避難誘導を行う。

——ノイズ

有史以来、世界各地にてたびたび観測されてきたものであったが、とある年の国連総会にて正式に議題として取り上げられ、限りなく未知に近い既知の存在として、公式に

認定されることで一致した特異災害。

理由は依然不明だが、ノイズは人間を問答無用で襲い、触れた人間を炭化させ分解してしまう。

対して人間が使用する武器、兵器、どれを以つてしてもノイズには一切効果を与える事が出来ず、現時点で民間人がノイズに対するには逃げ、姿を消すまで身を隠すしかなかった。

このノイズに対抗しうる人類最後の切り札があった。

——シンフォギア。

天敵ノイズの駆逐のため、人類が備えうる、唯一絶対の切り札の保有と、その行使である。

シンフォギアシステムを身に纏ったものだけが、ノイズに対して効率的、有効な攻撃手段を備え、撃退することを可能とする。

だが、既存の技術体系とは一線を画す、異端技術の結晶でもあるシンフォギアは、同時にノイズを殲滅せしめる強力な武装でもあるため、米国との安全保障条約や、周辺諸外国に対する影響も鑑みられ、現在の政府与党判断によって、完全に秘匿されている状態でもある。

そして、それを扱う者——それがツヴァイウイング、天羽奏と風鳴翼。

それと――

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

疾る。

疾る疾る疾る疾る疾る疾る！

誰よりも速く！

奴らがこれ以上進撃せぬように、翼と奏は走る。

その身には先ほどのような衣装は纏っていない。戦士として。戦場に相応しい姿だ

そんな彼女達は、歌う。

――蒼ノ一閃――

――閃ッ！

――裂ッ！

身の丈よりも長い刀身を持つ刀で両断する時も、

――STAR DUST ∞ FOTON――

――輝ッ！

――疾ッ！

—撃ッ!

大量複製した槍が幾つ、幾十ノイズを突き刺しても、彼女達は歌う。

倒してもキリがない。

それでも歌い、倒していくしかない。

避難誘導を済ませ、戻ってきた鏡華にもそれは見えた。

逃げ遅れた少女が一人、呆然と立ち尽くしているのも。

「何やってんだあ!! 早くこっちに来いッ!!」

鏡華は叫び、少女は我に返ったように鏡華の方を見る。駆け出すが、少女に気付いた

ノイズも同時に駆け出してくる。

それを同じように見た奏がノイズの前に立ち塞がる。

ノイズが何を感じたのかは分からない。

少女を狙ってきたノイズは標的を奏に変更し、身体を槍状に変化させ襲いかかる。

「ぐうっ……!」

「奏ッ!!」

とつさに槍を盾にし防ぐ。だが、既に奏の“時限式”は時間を過ぎている。

翼は助けたいがノイズが邪魔で行くことができない

鏡華は駆け出すが、距離が離れすぎている。

そして、限界がきたのか、奏の槍は耐え切れず半壊し、

一切

その破片が逃げていた少女の胸に突き刺さった。

奏は急いで少女の元へ向かい血の池の真ん中に崩れ落ちた少女を抱き起こす。

「おい死ぬな！ 目を開けてくれ!!!」

叫ぶ。

これ以上眼の前で命を消してたまるか。

そんなことはもう嫌だ。

だから奏は叫ぶ。 あらん限りの想いを籠めて。

「生きることを——諦めるなッ!!」

「……………あ」

声が届いたのか少女はわずかに眼を開く。

奏は安堵の息を漏らすと、少女を瓦礫に凭れさせ、半壊した槍を手にする

「いつか、心と身体——全部空っぽにして、思いつきり歌いたかつたんだよな。今日はこんななにくさんの連中に聞いてもらえるんだ。だから——あたしも出し惜しみはなしでやっていく。とっておきのをくれてやる」

——絶唱を。

そして。

奏は歌いだした。

透き通るような、しかし芯の通った。

静かに、しかし激しく高ぶるような。

天上へと昇らんとする歌を。

「奏……？ いけない奏ツ、歌つては駄目エツ!!」

「ば——ツか野郎!!」

言うが早く、鏡華はカバンを投げ出し、さらに駆ける。

もう、秘密なんて知ったこつちやない。

——全速力だ!

瓦礫と化した観客席を踏み抜き、驚異的な跳躍を見せる。

「奏ええええええええええええええええ!!」

吼える。

それを聞いたノイズが襲い掛かる。

「鏡華!! 駄目、逃げてえっ!!」

翼は悲鳴のように叫ぶ。

だが鏡華は今空中にいる。どこに回避すれば良いのか。  
否——

「邪魔をするなあああああ!! —— It, s not made to finis  
h with a dream」

——撃ッ!

回避する必要などなし!

槍状に身体を変えたノイズの一撃を鏡華は、激昂した声とは裏腹な静かな声で紡ぐ歌と共に繰り出された蹴りで弾いた

「え……?」

呆然と翼は眩く。

今、鏡華は何をした?

生身の身体で——ノイズに対抗した!?

翼の思いとは裏腹に着地した鏡華は歌いながらも一直線に奏に駆ける。  
すでに奏は終焉サビに入らんとしている。

最後の一步を鏡華は跳ぶように踏み抜き、奏に飛びつき、紡いでいた口を手で押さえ  
る。

「むぐ……ッ!」

「てめえ自身が生きること……諦めんじゃねえ!! ——An Utopia is

in my breast!!」

代わりに——鏡華が片腕を突き出し歌いきった。

突き出した腕の先に光が収束して一つのモノと成す。それは——鞄。

「おい、それって……(っ)ほッ」

「ッ、ああそうだよ! 奏の想像通り——(っ)ふっ……だから、黙って生きたいと願ってくれ! 翼のために——俺のために——自分のためにつっ!!!」

共に口から多量の血を流す。

奏は彼の言葉を聞いて確信した。

これは——絶唱。

そして——

——輝ッ!

奏を覆っていた紅の光は会場に広がり、一瞬にしてノイズを消滅させ、

鞄から放たれた黄金の閃光は、奏と鏡華を包み込んだ。

「お、おお——おおおおおおおおおおおおおおおおおッッ!!!」

軋と

軋軋軋——と!

腕が軋みを上げる。亀裂が生まれ血が噴き出る。奏を抱き支える腕に力が籠る。

それでも諦めない。

だってこれは——守るためにあるのだから！

そして——

全てが終わわり、ノイズは奏の絶唱で消滅し、奏と鏡華は倒れる。

翼は重なるように倒れた奏と鏡華に駆け寄る。すでに鞘は消えていたが、そんな事どうでもよかった。

「奏!! 鏡華!!」

何度も叫び揺さぶる。

「……………ツ……………が……………」

「ツ、鏡華！」

咳き込み、血を吐き出しながら鏡華は起き上がった。

「大丈夫……………だ。それより……………奏は……………？」

鏡華に言われ、翼はさつき以上に奏を揺さぶり名前を叫ぶ。

だが、奏が眼を開けることは無い。

「奏! 眼を覚ましてよ奏!!」

「……………めん」

「ツ、何がごめんなの!? それより早く司令に——!」  
知らせないと。

そう言おうとしたであろう翼の口を鏡華は封じた。翼の腹に拳を叩き込んで気を失わせる行為によつて。

崩れ落ちる翼を抱きとめ、地面に横たえた鏡華はポケットから携帯端末を取り出し耳に当てる。

「おつ……………ツ、旦那、聞こえる?」

「……………その声は、鏡華か?」

かなりの時間を要したが、弦十郎の声が返つてきた。

無事な事にほつと息を漏らす。

『無事か!? 翼と奏は……………』

「翼は無事。だけど奏が……………絶唱を歌つた」

『何だと!?! それでは……………』

「ううん、命は繋いだよ——俺の唱で」

『……………そうか。見せたのか——番外聖遺物<sup>アガアロ</sup>を』

かつて、とある一国を治めた彼の騎士王の失われた鞘。騎士王に不死と不老を与える

奇跡の体現。

そして、これは弦十郎以外誰一人知らない聖遺物。

研究者である教授こと櫻井了子、翼、奏の誰にも。

故に——番外聖遺物。  
エクストラナンバ

「旦那。俺はこれから奏と俺自身の治療のために姿を消す。手伝ってほしい」

『ふっ——覇ッ！ それは構わない。だが、翼はどうする？ 生活は？』

瓦礫を、恐らく素手でぶち壊しながら弦十郎は訊いてくる。

鏡華は衣装に戻った翼を奏が助けた少女の隣に凭れさせ、奏を腕で抱き上げ答える。

「翼にはいなくなっていた、とでも。生活は手伝って言って言ってるんだけど。——とに

かく俺の長いわがままでよ」

『……分かった。もう何も言わん。奏を頼む』

「……うん」

通話を切った鏡華はちらりと翼を見て、

——ごめん。

同じ言葉をもう一度告げ、瞳を閉じる。

「Agios, avalon eleison imas——」

どこまでも透明に響き渡る聖詠。

奏のガングニールや翼の天羽々斬と違い装着することはなかった。

だが、鏡華を中心に黄金色の光が集まり、

「行こう、奏——」

二人の姿は戦場と化した会場より消えた。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

ノイズによるライブ襲撃事件の詳細は「いつもどおり」おおやけ公にならなかった。

ほとんどの情報は弦十郎以下、特異災害対策機動部二課の情報操作によつて書き換えられている。

ツヴァイウイングの二人が戦うことは、特に絶対秘匿だ。トップシークレット

今回国民に報じられた情報は以下のようなになった。

・ 人気ボーカルユニット、ツヴァイウイングのライブ中ノイズが発生。

・ 死者、行方不明者は約一万三千人。

・ ツヴァイウイングの天羽奏、ソングライターの遠見鏡華も行方が分からないことから死亡した可能性がある。

・ ツヴァイウイングの解散を決定。風鳴翼はソロとして活動すると。

## D. C. II

それは何年前だっただろうか。

十数年ぐらいいしか経っていないのに、ひどく記憶が曖昧だ。

場所は——確か穀物の名前が入ったところ。

両親と以前から懇意にしていたらしい弦十郎の旦那の三人に連れられ、とある遺跡に行つたのだ。別に何の変哲もない大昔の遺跡だったはず

二人して考古学者をしており、ここがどんな遺跡なのか懇切丁寧に説明する両親。二人の間で手を繋ぎながら初めての遺跡に見入っていた自分。後ろから時々茶々を入れながらも基本は傍観してくれていた旦那。

凄く楽しかった——この時まで。

終点まで見終わり、戻ろうとした時だったろうか。

父親が何かに気付き、ある壁に触れた。

そこからの記憶は、まるでパズルの欠片と雑音ノイズになっている。

壁から鞘が出てきて、

ノイズがいきなり現れ、

——と——、——が引き裂かれ炭化していく。

——が自分に——を——ながら崩れ去った。

気付けば——

自分と旦那は助けられていた。

自分は瓦礫などによる擦り傷。旦那は瓦礫を殴りつけた軽傷だけと云う奇跡。

両親は——己のことを省みず自分を助けた結果になった。

鞘は自分と旦那の二人だけの秘密となり、周りには「ノイズに襲撃され、自分の両親が死亡」ぐらいいしか説明しなかった。

それが、鞘が、

番外完全遺失物、アヴァロンになったのは、

すぐ後だった。



「——と、まあ話はしてないけど、あの子に会えたんだ。なんか奏に似てたよ。ううん、容姿とかじゃなくて雰囲気だ」

廃棄されたマンションの最上階一室に鏡華は住んでいた。

過去にノイズの襲撃を受け、住人が住むことのなくなったマンションだが未だに電気とガス、水道は通っていた。

否——通してもらっていた。

もつとも、それは限られた部屋であつて、鏡華が住む部屋がそこだった。そんな部屋で鏡華は所々カビが生えている畳の上に申し訳ない程度に敷いたタオルの上で胡坐を掻いて楽しそうに会話を続ける。

眼の前の、こんな場所には絶対に似合わないベッドには一人の少女が眠っている。

——天羽奏。

二年前から依然眼を覚ましていない。

植物状態——遷延性意識障害に近い状態。

しかし、違う点はいくつもある。

長い吐息を三回。休んで、短い吐息を五回

長い吐息を四回。休んで、短い吐息を三回

長い吐息を二回。休んで、短い吐息を一回

——そっか。

「……うん、そうなんだ」

それは会話が成立している事。

未だ目覚めることのない眠りについている奏。だが、意識がないわけはなく、耳に入る音は聞こえている。ただし、言葉を発することは不可能だったので、奏は呼吸で言葉を伝えているのだ。

長い吐息であゝわの横十一列を。

休み、短い吐息であゝおと云った縦五列を。

鏡華が気付くにはかなりの時間を要したが。

二年前と比べれば快調に向かっていた。

少なくともこの一年以内に眼を覚ます可能性は五割にまで増している。

それもこれも——アヴァロンのおかげだった。

完全遺失物は一度起動してしまえば、常時百パーセントの力を誰でも使うことが出来る。伝承によれば、アヴァロンは彼の騎士王に不老と不死を与えたとされている。

そして、その身を粒子に変換し騎士王の身体に埋め込むことも。

身を以って体験している鏡華はアヴァロンの半分を奏に埋め込んだ。

半分によって効果は減ることになったが、それでも絶大だった。LINKERと呼ばれる制御薬を大量に摂取し、すでに限界に迫っていた奏の肉体がこの二年でほとんど完治したのだから。

ならば全部を埋め込めばすぐに眼を覚ますのではないかという考えもある。

しかし、それはできなかつた。

何故なら――

「それより……窓ガラス越しだったけど、翼を見かけたよ。旦那經由で聞いたとおり一本の剣みただった」

長短の吐息。

それを頭の中で言葉に直していく。

「……うん。奏の言うとおりだ。あれじゃあ本当にぼつきり折れちやいそうだった」

俺が原因なんだけどな。

胸の内で言葉を締め括る。

弦十郎から聞かされたあの後の翼。

曰く、眼を覚ました翼には報道と同じ情報を渡した。

曰く、自責の念か、その日より感情を捨て、剣になろうとしている。

曰く、片付けは相変わらず不得手（一応、翼の眼を盗んでマネージャの緒川と一緒に鏡華が片付けているのだが）。

「あれから二年か……いや、まだ二年って言った方がいいな。俺達、どうなるんだろう」  
奏に対して言ったわけではない。

壁に凭れ、手を天井に向けかぎす。三人とも始まりは場所も時間も別々だったが、そ

れ以降はずっと一緒だった。ほぼ毎日一緒にいた三人の絆は絶対だった

なのに、それを自分が壊した。

別に奏の治療のために姿を消す必要はなかったかもしれない。一緒にいて、治療すればよかつたかもしれない。だけど、それはできなかつた。

できない理由があるから――

できる事なら、鏡華は元に戻りたかつた。仕事とか戦士とか関係なく、彼が詩を作り、彼女達が楽しそうにそれを歌として紡ぎ笑いあう。そんなどこにでもある関係に、鏡華は戻りたかつた。

そう、思いに耽っていると、

——♪

携帯端末が鳴る。

「はい。もしも――」

『――、反応を絞り込み、位置の特定を最優先としています』

「――ッ！」

籠もつたような遠くから聞こえる声。

鏡華は言葉を呑み、息を潜める。

これは弦十郎からの電話。片方のケータイのスピーカーを最大にすれば両者の言葉

を大音量で拾える。

もし場所が近ければこちらが行きノイズを殲滅すればいい。その際、翼と会えれば云う事はあるまい。

しかし――

『反応、絞り込めました！ 位置、特定ッ！』

『ノイズとは異なる高質量エネルギーを検知！』

――え？

あちらで何が起こっているのだ。

耳を澄ませる鏡華に衝撃の報告が飛び込んできた。

『まさかこれって――アウフヴァツヘン波形!?!』

『ガングニールだとおっ!?!』

「つな――!?!」

驚愕と云った弦十郎の叫びに、鏡華も思わず我を忘れ、  
「んだとおーッ!!!!」

あらんかぎりの声で叫ぶのだった。

♪♪♪♪♪♪♪

『んだとおーッ!!!』

モニターにあのガングニールの識別コードが表示されたのに絶句していた翼にさらなる衝撃が襲った。

スピーカーからのような籠った、だが司令室全体に轟く怒声に翼を含め、全員が何事かと振り返る。唯一弦十郎だけが頭を抱えていた。

翼はその怒声の人物を知っていた。

忘れることができないその声の持ち主は。

いつも傍にいてくれて、必ず奏と自分をフォローしてくれ、

いつしか恋慕の情を抱き、ずっと傍にいてほしいと想うようになり、

二年前に奏と共に自分の前から消えた——

「鏡華——?」

弦十郎は珍しいため息をこぼすと、胸ポケットにしまっていた携帯端末を取り出した

『旦那、どう云うことだ! 本当にガングニールなのか!』

「……ああそうだ。位置も特定した。行くのか?」

『当たり前だ! つーか光が見えた!』

「現場には翼も向かわせる。いいな?」

『あつ……』

我に返つたように呟く鏡華。だが、悪態を吐くと「もちろん！」と叫び通信を切つた。携帯端末をしまふ弦十郎に翼は後ろから声をかける。声が震えているのが自分でもよくわかつた。

「司令……どう云うことですか……」

「……」

「叔父様ッ！」

それでも弦十郎は答えない。まるで答えられないとでも言うかのように沈黙を続けている。

代わりに声をあげたのはオペレーターふじたかさくやの藤堯朔也。

「あ、新たに高質量エネルギーを検知！ 異なるアフヴァアツヘン波形です！」

「該当する識別コード……ありません！」

モニターに表示されるエネルギーの正体。

その姿はまさしく――

「鏡華——!!」

♪♪♪♪♪

——翔る。

翔る翔る翔る翔る！

夕焼けと同じ色を天空に放つ光の柱に向かって鏡華は屋根づたいに天地を翔る。

その姿はすでに私服に非ず。純白のライダースーツ調に漆黒の胸鎧、籠手、脚甲を纏った騎士装束。

（くそつ、ガングニールの適合者?! 奏がいるのにそんなの……）

いるわけがない。

そう思った時、ある思い出が頭に甦った。

二年前、奏が守ったあの少女——立花響。

あの時、彼女は何かが胸に直撃して怪我を負った。炭化しなかったことからノイズではない。あの時は瓦礫の破片か何かと置いていた。

だがもし——もし、あの時受けたのが瓦礫の破片ではなく、破損したガングニールの破片であつたなら——！

全ての辻褄が合う。

（もしそうなら……奏、お前どんだけ凄いだ！）

あの時助けた立花響しやうじやをもう一度助けたのだ。

奇蹟と呼ばずなんと呼ぶ。

そうこう考えている間に——見えた。

鏡華は跳躍のために踏み込んだ足を、

——蹴ッ！

——疾ッ！

突撃に変更し、滑り込むように少女を抱き抱えている響の隣に着地した。

「わあああ!? ……つて、遠見先生!」

「よっ、立花。よく頑張ったな。もう少し頑張れ!」

驚く響に鏡華を勇気付けるように言うのと、静かに歌い出す。

通常、完全聖遺物に歌など必要ないが鏡華はそれでも歌を奏でる。

周りに具現化する数十本の幅広の槍。

——貫き穿つ螺旋棘——

——疾ッ！

——撃ッ！

——撃撃撃撃撃ッ！

同時に射出され何十体ものノイズを穿ち、撃破する。

残ったノイズは一斉に槍と成り三人に襲い掛かる。

「ッ……!!」

「やらせないっ! その子を下に入れて姿勢を低くしてろっ!!」

「は、はいっ!」

少女に覆い被さるように蹲る響。

鏡華は突き出すようにして腕を構え、槍状になったノイズに向かって聖母が描かれた盾を具現化し、

—— 護れと謳え聖母の加護 ——

—— 破ッ! ——

弾き、炭化させる。

それを十、二十、三十と。

全て弾き壊し、響と少女を守る。

「す、凄……!!」

驚きの声をあげる響。

もしかしたら、と思うが、次の瞬間には更に焦る。

先ほど自分に襲い掛かってきた巨大ノイズがこちらに来ているのだ。

「せ、先生! あれはどーするんですかあ!?!」

「ん? ああ、あれか。あれは厳しいねえ……」

「す、凄く他人事に聞こえるのは私の気のせいでしょうか!」

「いや……だって——」

最後まで言葉を告げる前に、

——断ッ!

何かが天空より飛来し、ノイズを断った。

見上げれば、落ちてきたのは馬鹿でかい剣。そしてその上には一人の少女が立っていた。

「翼、さん……?」

「ま、まこう云うこと」

普段どおりに言いながら鏡華はこちらを見下ろす翼だけを見つめていた。

翼も鏡華と、響が纏ったガングニールを見つめて——



ノイズの掃討が完了すると、特異災害対策機動部に所属する隊員や研究者が飛び込むように現場に訪れた。当然通じる道路には進入禁止の簡易バリケードが設置され完全に封鎖されている。

ちらりと見れば響が助けた少女と再会を果たした母親が規制事項を機関銃の如く説明され呆気に取られていた。

苦笑を浮かべ歩いていると、響が飲み物をもらっていた。

「あの、温かい物どうぞ」

「あ……あつたかい物、どうも」

少し冷まし、一口飲んだ彼女は肩の力を抜いていた。

すると、気が緩んだせいなのか纏っていた防護服が淡く光を発し、元のリディアンの制服に戻った。

「うわ、と、とっ……！」

突然のことでバランスを崩した響はそのままたたらを踏み、後ろから誰かに抱き止められた。

響は慌てて体勢を立て直し、振り返り眼を見開いた。

抱き止めたのは、蒼の長髪と間違えるはずのない容姿。誰であろう、風鳴翼本人だった。

「あ……っ！ あ、ありがとうございますっ！」

頭を下げて感謝を述べるが、何も反応がない。見上げれば、翼は響を見ておらずただその奥を見て——否、睨んでいた。

響も振り返ると、そこには自分と同じように防護服を解いた遠見鏡華がいた。

鏡華も何も言わずに翼を見つめている。

その場に居づらくなつた響は一步下がると、

「そ、それじゃあ私もこれで……」

退散を決め込む。三十六計逃げるに如かずだ。

だが、阻む者がいないわけじゃない。

まるで半円のように響と鏡華を囲む黒服達。その中に翼も含まれている。

「あなた達をこのまま帰すわけにはいきません」

「な、何ですかあつ?!」

「特異災害対策機動部二課まで同行をしていただきます」

まったく視線を合わせず事務的に告げていく翼。

絶句している間に柔和な笑みを浮かべる男性が響の手首全体を覆うほどの手錠をかけた。

次に鏡華の前に立つ。

「やあ、緒川さん。ご苦労様です」

「いつものことです。すみませんが……」

「ま、規則ですからね」

はい、と自ら腕を差し出す鏡華。緒川と呼んだ男性は苦笑すると鏡華の手にも手錠を

嵌める

そのいつものような会話に翼が緒川を睨む。

「緒川さん……まさか鏡華のこと……」

「半年ぐらい前に偶然に、ね。彼と司令から土下座されてまで黙っていて欲しいって言われてましたから」

「……帰還してから司令も含めて全部聞かせてもらいます」

そう言った翼は少し離れていた場所に駐車していた漆黒の車に乗る。鏡華と響も同じ車に乗車する。

終始穏やかにしていた鏡華とは裏腹に響は、

「だから……何でえええッ!!?」

終始驚き、叫びつなしたった。

♪♪♪♪♪♪♪♪

到着したのは午後九時を少し回った頃か。

場所は——リディアン音楽院。その中央棟に車は停車する。

「あの……、ここって先生達がいる中央棟、ですよね……?」

夜中、それも誰もいない場所を歩くことにわずかに恐怖しながら響は訊ねる。

正直黙っていたままでは、ちよつと恐いのだ。

「そうだよ。つーか、初日早々説教されるなんて思わなかつたよ」

応えたのは鏡華。拘束された手で頬をぽりぽりと搔く。

同じように説教された響はあはは、と苦笑を浮かべる。

誰もいない廊下を歩き、今度はエレベーターに乗る。端末にケータイをかざすと壁から何かが飛び出る。翼はこれに掴まり、響も緒川が掴まさせる。

鏡華も掴もうとした瞬間、

—轟ッ!

エレベーターが落下を始めた。

それも尋常ならざる、エレベーターが出していいはずでないだろうスピードで。

当然掴まるのが遅れ、掴まれなかつた鏡華は宙に浮き、

「がっ……!」

天井に頭を強打してしまう。

「鏡華!」

「遠見先生!」

「鏡華君!」

手すりに掴まらなくとも大丈夫になり、鏡華が床に落ちると翼が慌てて鏡華を抱き起こす。先ほどまでの冷たい態度が嘘のようだ。

「大丈夫!? 鏡華!」

「くくつ。いったあ……」

後頭部を押さえながら鏡華は呻く。

つう、と額から一直線に赤い線が垂れる。

「大変……!」

翼は膝に鏡華の頭を乗せるとポケットからハンカチを取り出し傷口に当てる。少しずつハンカチが紅く染まっていく。

その間再び無言が続く。

すると、ぼつりと何かが鏡華の頬に落ちてきた。

触れると、少し冷たく水みたいだった。

「翼……?」

「心配したんだ……鏡華に殴られて、眼を覚ましたら二人が行方不明になって……。探しても……探しても探しても、見つからなくて……。戦闘<sup>M</sup>中行方不明<sup>A</sup>で捜査は打ち切られて……。死んだ可能性が高いって聴かされて……。でも、信じられなくて……。何で……。何で、私の前から消えたのッ……!!」

ぼろぼろとこぼれ落ちる涙。

それを避けることなく浴びていた鏡華は眼を伏せる。

「奏と鏡華はいつも勝手だ……！」

「……ごめん」

それ以上何も言えず俯く翼の髪を優しく梳く。

奏が豪快に見える梳き方とは真逆の静かな梳き方。

二年前と変わらない梳き方は翼にとって心地よいもの。

一方、

(わ、わーッ！ これ、どこのラブコメですかッ!?)

空気となっていた響は近距離で見せられ、視線を右に左に泳がせる。

そんなパニくっている響の肩をそっと叩く人物。振り向けば同じく空気となってい

た緒川が指を唇に当てている。

静かに、と云う意味だろう。

もつとも——

—パァン！

「ようこそ！ 人類最後の砦、特異災害対策機動部二……か、へ……お？」

熱烈な歓迎を準備してドアが開いた瞬間にクラッカーを鳴らし、驚かせる準備は万端

！ みたいな弦十郎以下職員に今のシーンは、沈黙を生むのに十分なようだった  
結局、最初に響いたのは響と緒川の苦笑。それと、翼の悲鳴と急に立ち上がり後頭部  
を再びぶつけた鏡華の悲鳴だった。

## D. C. III

歓迎会並びにメデイカルチエックが済んだ響を返し職員は元の仕事に戻っていった。

しかし、翼、鏡華、弦十郎、了子、緒川はとある一室にいた。

「……………話して下さい鏡華、司令……………全て」

翼の一言に弦十郎は鏡華を見る。

元は鏡華自身が言った「わがまま」だ。鏡華が話さなければ弦十郎も口を開く事は出来ない。

もちろん鏡華は「ある程度」は話す気を持ってこの場所に帰ってきたのだ。翼を見ながら頷く。

「うん……………だけど、話せることはまだ少ないから」

「何で……………！」

「俺も目的を持ってこの場にいるんだ。ごめん……………、だけど、時が来たら必ず話す。絶対にだ」

「……………絶対だから」

引いてくれた翼に鏡華は微笑みながら「ありがとう」と返す。

弦十郎達は何も言わない。これは二人の問題なのだから。

「まずは……あれからのこと、聞かせて」

あれから——つまり二年前のライブ襲撃から。

詳しく云えば鏡華が翼を気絶した後。

静かに鏡華は話し出す。

「あれから……俺は奏を連れてライブ会場から出た——いや、逃げた。俺の聖遺物を知られたくなかったし、奏を治すことができるのは俺だけだったから一人で治療したかったんだ」

「でも、鏡華は医療に詳しいわけじゃない。奏を治療するなんて……」

「いいや。あの状態にしたのは他ならぬ俺なんだ。それに、あの奏を医者もしくは科学者に見せたら——どうなると思う？　翼」

「どうなる……？」

翼は鏡華の問いに首を傾げる。要領を得ない、かつこちらに意味が伝わらない質問だった。

医者なら分かるが、ここで何故科学者が出てくるのだろうか。一先ず科学者を置いておいて医者だけの答えだけでも考える。

眠っていたのだから、当然起こす処方を与える。

それを鏡華に伝えると、

「まあ、当然の答えかな。普通だったら正解」

そう言った。

でも、「今回は五十点」とも言う。何故、と問うと、

「じゃあ今度は櫻井教授に聞きます。——あなたはもし、未知の研究物質を見つけたら

どうしますか？ 例えば未知の完全聖遺物とか」

「うん？ あたし？ そうねエ、一先ず嚴重に保管して、ゆっくりじいっくり、隅から隅

まで調べるわア」

了子らしい返答に弦十郎と緒川は苦笑を浮かべる。

だが、鏡華は笑つてもすぐに真面目な顔に戻り翼に向き直った。

「つまりはそういうこと」

「え……？ よく分からないんだが……」

「あの時の奏の状態はまさにそんなだったんだ。検査されれば最後、目覚めないのをいいことに医療発展だとか何とかぬかされて、実験体《モルモット》にされるはずだ」

「ツ——!?!」

息を呑む翼。そんな状態だったのか、と今になって驚く。

でも何故そんな状態になったのか。翼の表情で分かったのだろう、鏡華は片手を突き

出した。

「そんな状態になった——否、したのが俺の聖遺物」

そう眩いた途端、

—輝ッ！

光が手の中に集まり輝きだした。

それは少しずつカタチを成していき、最終的には、黄金に輝く逆二等辺三角形のよう  
なカタチを成した。

「鞘——？」

「そう。これが俺の聖遺物。正式名称不明、彼の騎士王が所持した鞘。俺はこれを伝承  
を振って《アヴァロン》って呼んでいる」

「まさかこれって……完全聖遺物!？」

了子は眼を見開き、慌ててモニターを操作する。

さつき言ったとおり調べるつもりだろう。だが、鏡華はそんなこと許さない。

腕を下ろし、鞘を光の粒子に変え霧散させた。それによりモニターには何の反応がで  
なかつた。

「ちよ、ちよつとオ！ 何で消しちゃうのよ〜！ 現時点で唯一の覚醒した完全聖遺物

なのよ、調査させなさいッ!!」

「嫌ですよ。こういう人がいるからずっと隠していたんです。別に外国に売り渡す気なんかこれっぽっちもないんですから放つて置いてください」

——まあ確かに。

緒川は内心でそう思いながら苦笑を浮かべる。ついでに、次のスケジュールはいつだったかなあ、と思い出している。

完全に空気扱いだ。

了子は完全聖遺物、それも騎士王に不老と不死を与えていた鞘の有効性を懇切丁寧に説明して渋っていたが、終始鏡華は首を縦に振ることも譲歩することもなかった。

そして、夜も遅いことで今日は解散だ、と弦十郎は告げた。立ち上がり出て行こうとする鏡華に翼は最後に訊ねる。

一番聞きたかったことを。

「鏡華。奏は今、どうしてるの?」

鏡華は振り向き、やるせないような笑みを浮かべて、

「二年前と変わらなず、だよ」

そう、嘘を吐いたのだった。

♪♪♪♪♪♪♪♪

一方、こちらはリディアン音楽院の学生寮

バレないように学生寮の近くまで送ってもらった響はやつとのことで自分の部屋に  
辿り着いた

「ただいまあ〜」

疲労感六割、申し訳なき四割の声で声を出す

すると、部屋の奥からルームメイトが姿を現した

彼女は小日向未来<sup>みく</sup>

幼い頃からの付き合いで共に互いの一番の親友と自負している

時々度が過ぎる場合もあるが、ここでは置いておこう

「響……? もう、こんな時間までどこに行つてたの?」

「ごめ〜ん。ちよつとCDで色々あつて……」

もちろんこれは嘘である

帰り際に鏡華から打ち合わせられた提案だった

響はのろのろと畳みの場所まで来るとそこでべちよーと寝そべる

「色々?」

「うん〜。CDショップに行つただけだねえ、お店の手違いで初回特典が一個しかな

かったんだあ。そこでちようど遠見先生も予約してたらしくてね、譲って譲らないの問答があつたの〜」

「へえ……つて、響、鏡華先生とお話したの!?!」

突然の豹変に響は身体を起こしながら「ああそつか」と思い出した

彼女、未来は以前から鏡華の大ファンなのだ

響が翼の大ファンなのと同じか、それ以上

親友としてはそれが恋慕か憧れなのかはつきりしているので応援している

「未来、遠見先生の大ファンだったよね。……あれ? ソングライターにファンって言葉あつてるっけ?」

「う、うん……。鏡華先生が作る歌はどれも凄いから……。そ、それで鏡華先生と結局何してたの!?!」

「えつとねえ……。最初はジャンケンで決めようつてなつただけど百回あいこが続いて、飽きたから長距離走で勝負した」

結局負けちやつたけどね、と響は「たはは」と笑う

「い、いいなあ……」

何がいいのかはまったくの不明だが、未来はそう眩く

そうして、響はシャワーを浴びると未来と共に就寝するのだった

ただ——

仲が良いからと云って同じベットで眠るのは度が過ぎているとツツコミを入れられても

仕方のない光景だった

~~~~~

翌日——

今日は前日と同じ響や未来がいるクラスで授業を行うことになった

ただし、昨日は説教で終わってしまったので実質的に今日が初日同様である

「改めまして初めまして。昨日は説教喰らって落ち込んでいた遠見鏡華です」

ぺこりと頭を下げる鏡華に口々に失笑や苦笑、言葉を返す生徒達

やはり、作詞作曲家《ソングライター》と云う裏方で有名なだけあってあまり騒がれることがない

大いに助かることなどだが

「えー、そうですね。私の授業は基本的に楽譜関係ですが、今日は初日なので私の自己紹介で時間を潰すとうしましょう」

つまり授業をサボっているのと同じことだ

生徒達は大いに喜ぶ

鏡華は「はいはい、騒がない。節度を持ってねえ」と嗜める

「先生！先生のプロフィールを教えてください！」

「直球な質問ありがとう。でも、これ以後は私が許可してから手を挙げてくださいね。——名前は遠見鏡華。遠くを見ると書いて遠見、鏡華は鏡の華と書いて鏡華です。歳は十九歳。血液型はB型。好きなものはジャンクフード、嫌いなものはちまちましたフルコース系。特技は音楽全般の歌詞の創作。趣味は……あんまりないな。——一先ずプロフィールは以上です。はい、質問コーナーに移ります」

言うが早く生徒達から挙手が一斉にあがる

空気を切らんばかりだ

よく見れると、響だけ場の空気を読むようにゆっくりと挙げている

それに苦笑しながらも一人当てる

ちなみに、鏡華は仕事柄で人気はなくとも、顔で人気があった

奏曰く、「顔と声で女みたい」とかなんとか

さらに余談ではあるが、昔奏と了子に女装させられた過去を持っていた

あくまで余談である

「先生って彼女いるんですかっ?」

やっぱきた……

予想はしていたので対処は可能だ

だが、敢えて――

「立花響が彼女です」

ふざけてみちやったり!

当然の如く教室は騒然となり、

「ちよつとー……っ!!?」

いきなり彼女にされた響は叫びながら立ち上がる

「と、とと遠見先生!? 何て嘘をつくんですか!? 凄く視線が痛いんですけどっ!? 未

来もそんな眼をしないでー!」

「たはは……場に馴染もうとしたけど、やっぱ駄目か。――えー、もちろん冗談です。

彼女はいませんし立花とは別に何の関係もありません。精々風鳴翼のCDを奪い合う

仲間だけですからご安心を」

「奪い合う仲って言われても私が安心できませんよ!」

鏡華の言葉に響は再びシャウト

周りから笑いが漏れる

「ほら、立花座れ。おかげで距離が縮まったから。——はい、次の質問に移るよ。それじゃあ……君」

「好きな女の子のタイプを教えてください！」

「またかよ……」

眩く鏡華は「ちよつと待ってね」と考えに入る

これだけは答えが出ていたのだが、どう言えばいいのか分からないのだ

— 先ず、

「好きなタイプは……、そうだな、歌が好きな子かな」

そう答えておいた

「はーい、先生は何で手袋まで嵌めているんですか？」

「色々とわけありだね。想像にお任せするよ。あ、間違っても外さないでね。先生怒っ

ちやうから」

と、まあ

こんな感じで質問コーナーは楽しくすぎたいき

もうそろそろチャイムが鳴る時間となった

「さて、時間も迫っているようだし、次を最後にしようか。それじゃあ……」

そこでふと眼にとまった生徒がいた

もしも当たらなかつたら泣いてしまいそうな雰囲気を出している少女

小日向未来

確か響のルームメイトで

それから――

「――小日向」

未だ憶えきれてない生徒の中で二人だけ憶えている名字を呟く

未来は名字を憶えてくれたことに驚きながら席から立つ

「鏡華先生は、二年前に行方不明になったってニュースで聞きました。あれからどうしてたんですか？」

「……………」

これがくるとは思わなかった

鏡華は頬をぼりぼりと掻き、全ての教室に置いてあるピアノに凭れる

真実を伝えることはできない、当たり前だが

「……色々と理由があつてね、ずつと療養に専念していたんだ。おかげで今ここで皆と授業をしたられる」

説明が終わると、ちょうどチャイムが鳴り響く

「はい、今日はこれでおしまい。次からは教科書が必要だから忘れないこと。次の授業

に遅れないようにするんだぞー」

はい、や、ありがとうございましたー、と口々に挨拶を返す

鏡華はカバンを肩にかけるとドアではなく響のところに向かう

「おーい、立花ー」

「は、はいっ!？」

鏡華が声をかけると響は警戒するような視線を送る

そこまでさっきの発言が警戒させるのか、と鏡華は思うが、構わず近付く

「そんな警戒しないでよ。さっきのはジョークなんだから」

「ジョークでクラスのほとんども敵に回させないで下さいよお。未来にまで怖い顔され

たんだから」

「あはは、悪い悪い。小日向も信じないでくれよ?」

鏡華はそう言って笑いながら未来に話しかける

未来はやや紅潮した顔で「は、はいっ!」と返す

頷いた鏡華はカバンから何かを取り出し響の前に置いた

それは打ち合わせていた話題であった翼のCDだった。初回特典も付いている

「これって……」

「昨日奪い合ったCD。さっきのお詫びってことで。ああ、開封はしてないからね」

「いいいんですかっ!？」

驚いたように訊く響に鏡華は頷く

響は喜び、大切そうにカバンの中にしまいこんだ

鏡華は忍び笑うと、未来に視線を向ける

「さて、と……何で自分を知ってたのか、聞きたいよね？」

「は、はい……!？」

「答えは簡単。面接官をしていた先生から聞いたんだ。『今年の新入生に君に憧れている生徒がいる』ってね」

そう、それはまだ入学式が始まる前の日

顔合わせに来ていた鏡華に面接官をしていた教師が話したのだ

それを話すと未来は顔を真っ赤に染め、俯く

「す、すみません……!？」

「謝る必要なんかはないよ。俺なんかに憧れてくれる人がいてくれて嬉しかったし。――

――いつか小日向のピアノ、聞かせてね」

そう言うのと教室から出て行く鏡華

未来はしばし呆然としていたが、

「ひ、響……これって夢、かな……?？」

「夢じゃないよ。やったじゃん未来っ！」

親友からそう言われて

彼女には珍しい大声で喜んでいた

♪♪♪♪♪♪

「ふう……」

静かに、悟られないように息を吐く

弦十郎から表の世界へ戻る時にもらったこの仕事はかなり疲れるな、と思った

アイドルである翼や奏と違い、ソングライターの鏡華は大勢の人の前に立つのに慣れ

ていない

できる限り自然体を装っていたが、実はかなり緊張していたのだ

それにしても、と鏡華はさっきの二人を思い出す

立花響と小日向未来

まるで昔の自分達を見ているかのようにだった

カバンから昨日借り受けていた響の書類を取り出しある一項目を見る

——大好きな——

そこに響は《小日向未来》と書いていた

未来の方には自分の名前が書かれていたのだが

まるで——

まるで二人のこれからが

自分達みたいな気がしてならないのだ

シンフォギアは最重要機密事項

それに関わってしまった響はどんなに大事な親友であろうと彼女に嘘をつかなくてはならない

嘘をつく痛み、そしてそれが発覚し崩れる悲しみ

「それに……」

未来は感受性が人一倍高い子だ

さっきの冗談を誰よりも本気に信じ込んでいるような瞳をしていた

もしそれが隠し事に反応して連鎖して云ったら——

絶対に関係は崩れ去ってしまう

どんなに強固な絆を築こうと、壊れるのは何倍も簡単なのだから
「俺達の二の舞だけには絶対にさせない。させて——たまるかつ」

新しい目標を胸に

鏡華は一人、歩き出す
全てを取りこぼさないために

D. C. IV

—— どうして、こうなったのだろうか

心の内でそう呟く鏡華

その身にはアヴァロンの騎士甲冑を纏っている

—— どうして、こうなったんだろう

もう一度呟く

自分達は放課後に翼に拘束され、再び二課へ来ていた

そこで響にシンフォギアの説明と協力の要請

彼女の身体に摘出不可能なガングニールの破片が体組織と融合していることを説明した

それが終了してからすぐ後にノイズが発生した

無論全員が向かい、殲滅は成功したのだが——

—— 私と一緒に戦ってください！

そう言った響に、

—— そうね。あなたと私—— 戦いましょうか

翼はそう言つて天羽々斬を向けたのだ

当然鏡華は響の前に立ち、翼に立ち塞がる

「どうしてその子を庇うの鏡華」

「こつちの台詞だよ。どうして立花と戦うんだ翼」

翼の後ろではノイズを殲滅した《蒼ノ一閃》の一撃によつて発生した炎が舞い上がっている

まるで翼の心を表しているかのように

「風鳴翼はその子を受け入れることができない。奏のガングニールを使うその子と共に戦うなど——風鳴翼が許せるはずがない」

「翼さん……」

「構えなさい立花響。あなたが身に纏うシンフオギアそは何者をも貫き通す無双の一振り、ガングニール。常在戦場の意思たる胸の覚悟を体現し、アームドギアにし、構えてごらんなさい——！」

「いやいやいや！ 昨日たまたま発動した立花がアームドギアなんて出せるわけないよね?! そこんところ理解した上で言つてやがりますか!？」

口調はふざけていてもその顔は真剣そのもの

そして片手を空に差し出す

「ガングニールは奏のものだ！ 奏のものを勝手に使うのも許せないのに——胸の覚悟もないまま遊び半分のまま戦場に立つその子が、奏の何になり——何を受け継いでいるというの!？」

「……ああ、もうっ！ 俺達がいなくなつて少しは変わったと思つてたけど、全然これっぽっちも変わつてないじゃん！ むしろ石頭になつてるよね!？」 ——上等！ 頭冷やさせるためにその一騎打ち、俺が受けたっ!」

——希望成る騎士国^{ブリテン}の赤き竜——

鞘を取り出し、何も納められていない鞘から剣を抜く動作をする
すると、剣が光より生まれる

絢爛豪華な装飾が付いたどちらかと云えば儀式に使うような剣

それは騎士王が王になった証と呼べる選定の剣——銘をカリバーン
鞘を消し、鏡華は両手で構える

「つたく……俺は別に翼と戦いたいわけじゃないんだけど——元の関係に戻りたいだけなんだけど」

夜空に浮かぶ月を仰ぎながら鏡華は小さく呟くと、

—— //翼が真面目すぎるのは昔からだろ？ な、鏡華//

声が頭の中で響く

鏡華は驚くことなく胸の内できすりと笑う

「まったく……その通りだよ、”奏”」

そして

両者共に腰を落とすと

—疾ッ!

同時に駆け、

「はあああああああ————っ!!」

「ちつくししょうううがあああああああつ!!」

—閃ッ!

—戟ッ!

—裂ッ!

—轟ッ!

衝撃が閃光の如く、弾けた

♪♪♪♪♪♪♪♪

翼と鏡華の戦いを当然司令室にいた面々はモニターを介して見ていた

素人から見れば、さながら互角に戦っているように見える

だが、武術を嗜んでいる者が見れば、鏡華が押されていると見える

当たり前だが、翼は幼少時より鍛錬に勤しんでいたのに対し、鏡華が本格的に武術に取り組んだのは二年前から

いくら完全聖遺物と云う強大な力を有していても結局は使用者が強くなくては宝の持ち腐れなのだ

「なっ……何をやっているんだあいつらは!？」

「んーッ、青春真つ盛りって感じねエ」

驚く弦十郎をよそに、了子はどこか楽しそうに顔を綻ばせ呟く

そんな了子にため息を吐きながら弦十郎は席を立ち、個人高速エレベーターに向かう
「司令、どちらへ?」

「誰かが、あの馬鹿者共を止めなきゃいかんだらうよ……!」

そう言つて地上へ上がっていく

あつという間に見えなくなると、了子はまた呟く

「こつちも青春してるなア……。でも、確かに気になる子よねエ? 放つておけないタイプかも」

その顔に喜色や好奇心、妖艶、そして獲物を見つけたような表情が浮かんでいたのはその場の誰一人、知ることはなかった

♪♪♪♪♪

「ツ……！」

「うひゃあっ！」

後ろで情けない声が聞こえるが、振り返ってられない

押されることはすでに分かっていた

長年鍛錬してきた翼と違い、こちらは二年——しかもその内、半年ぐらいはずっと

治療に専念していたのだ

加えて、鏡華は翼のように剣一本に絞っていない

騎士王が岩より抜いた選定の剣——カリバーン

騎士王が持ち甥を貫いた名槍——ロン

聖母が描かれた誰かを守るための聖盾——プライウエン

この三つを状況によって切り替えている鏡華はそれぞれの鍛錬をしなければならな

い

故に鏡華は、あれだけ言っておいて

実はピンチに陥っていた

—— なっさけねえなあ。それでも男かよ

(うるさいっ！ 俺だつて好きで防戦一方じゃないやい！)

頭に響く呆れ声に怒鳴りながら《蒼ノ一閃》を《護れと謳え聖母の加護》で防ぐと、思つたら今度は天空から《千ノ落涙》——数十本の剣を降らしてくる翼流石に守りきれないのでそれらを《貫き穿つ螺旋棘》で迎撃

そして——

——天ノ逆鱗——

《蒼ノ一閃》の時よりも巨大な剣を投擲する翼

そればかりか柄に蹴りを叩き込み、速度を加速させる

「絶対加減してないよね翼さああん!!」

シャウトしながらプライウエンを掲げる

流石のあの一撃を無傷で受け止めるのは聖遺物ができても鏡華には無理

ならば——

(立花だけでも——！)

守りきつてみせる！

瞬間に来る衝撃に耐えるために鏡華は足に力を入れ踏ん張る
そして――

「――おらあッ!!」

――破ッ!

――撃ッ!

――轟ッ!

衝撃はこなかった

眼の前には、鏡華に背を向け《天ノ逆鱗》に“素手で対抗している生身”の人間がいた

赤いワイシャツにスラックス。つまりは――風鳴弦十郎に他ならなかった

「叔父様ッ!?!」

「旦那ッ!?!」

――ダンナッ!?!

二人と聞こえない声が重なる

どうして生身の人間が素手でシンフォギアに対抗できるのかまったく不明だが

しかし、これで終わってはいなかった！

「——フンッ!!」

—轟ッ!

—破ッ!

—裂ッ!

—震ッ!

拳で受けた衝撃を受け流すかのように地面から、離していない。足で踏み抜くと、人間では壊すのがほぼ不可能なアスファルトをいとも簡単にひび割り、抉り、吹き飛ばす

その範囲、——実に半径数十メートル!

さらには埋まっていた水道管を破裂させ、間欠泉の如く溢れ出る

翼と鏡華はその衝撃に吹っ飛び受身も取れぬまま地面に落ちる

「あだっ。くっくっ」

落ちた時、ちょうど昨日切った場所だったので地味に痛く呻く鏡華

すでに防護服は解除され、元の私服または制服に戻っている

「あーあ、こんなにしちまって。何やってんだお前達は」

(責任転嫁!!? それやったの旦那だよね!?)

—— やっぱすっげーなダンナは

呆れるような口調の弦十郎に鏡華はツツコミを入れておく

確かに戦闘をしていたのは自分達だが、ここまでやったのは弦十郎の《震脚》と呼ばれる中国拳法のせいだ

今ネタにした破裂しづらさがっているような革靴で弦十郎は翼に歩み寄る

「らしくないな、翼。ロクに狙いもつけずにぶつ放したのか、それとも——」

そこではたと気付く

「お前、泣いている——」

「泣いてなんかいませんっつ!!」

拒絶するように

いや、まるで自分に言い聞かせるように叫ぶ翼

「涙なんて、流していません……! 風鳴翼はその身を剣と鍛えた戦士です。だから……!」

見ていられない

全員の感想だった

鏡華は立ち上がり、弦十郎はそれ以上何も言わず翼を抱き上げようとして、

響は必死に思いを告げる

「あのっ……私、自分が全然駄目駄目なのはわかっています。だから、これから一生懸命

頑張つて——頑張つて、〃奏さんの代わりになつてみせます〃！」

それが度が過ぎた慰めの言葉と知らず

響は宣言した

流石の鏡華もぎよつとする

そして、その言葉を受けた翼は

「——ッ！」

全ての想いが止まれなかつた

怒り、悲しみ、何もかもを動員させ、最後の力《おもい》で左手を振るつた

翼を連れて弦十郎が一足先に帰るのを見届けながら、鏡華は響に近寄る

響は未だはたかれた頬を押さえ呆然としていた

「……まあ、当然の結果なんだけどさ……」

響の横に並び立つ

「誰も誰かの代わりになんて、なれやしないんだよ。ましてや俺や翼にとって奏は絶対

の存在。感情を捨てたつて言つてるはずの翼が立花をはたくのは無理ない」

「……私は……どうしたら……翼さん、泣いてた……」

「うん、泣いてた」

どうしたらいいかなんて、正直鏡華が知りたかつた

そして、同時に横に並ぶ子は羨ましいとも

結果的に負の感情だったが、それでも「今の」翼から感情を引き出したのだ

鏡華自身、あれから学院内で会っても、二課で会っても感情を出してもらっていない

「——さ、もう帰ろうか。小日向が心配してるだろうし、近くまで送るよ」

「……ありがとうございます……」

だから、鏡華は響が羨ましかった

もしかしたら、彼女こそきっかけを作ってくれるのではないか、と考えてしまうほど

に——

D. C. V

あれから――

正確には響がガングニールの適合者として目覚め

翼と鏡華の二年ぶりの喧嘩が起こり（結局乱入した弦十郎の圧勝だったが）

響が翼にはたかれてから――

約一ヶ月が過ぎようとしていた

その間、当然ノイズの襲撃は絶え間なく発生し、否応なく戦闘を繰り返していた

もうそろそろ戦闘にも慣れていい頃である

これまでの戦闘の記録をモニターに映して見ていた弦十郎は、

「……一月《《ひとつき》》経っても変わらんか」

ぼつりとそう呟いた

元々戦闘を繰り返し死線を潜り抜けてきた翼は当たり前のこと、完全聖遺物と云う性能《《スペック》》の高い武装を以ってして戦いに臨んでいる鏡華は高い戦闘力を有している

だが、この二人に比べて響は一ヶ月前まで何も知らぬ日常で生活していた。また、戦

闘訓練なども学生と云う身分のため時間が思うように取れない

それに彼女には嘘を付かなければならない未来《しんゆう》がいる

バレないためにどうしても自由な時間全てを削るわけにはいかないのだ

しかも、響は未だアームドギアを具現できないでいた

だが、これには鏡華がある他のメンバーには内密に仮説を立てていた

響はあくまでアームドギアとして具現した GANG ニールの「破片を」その身に宿している

防護服を形成するための大元の GANG ニールは現在も奏が所有している

アームドギアを具現化するための欠片は奏が所有しているのではないのだろうか

だから響はアームドギアを具現化できないのではないだろうか

あくまで鏡華の想像でしかなかったがあながち間違いではないと弦十郎は思っている

さらにあの一件以来、言葉にこそ出さないが翼と鏡華、響の間に亀裂が入ってしまった

どんなに鏡華がいつも通りに接しようと口を開くどころか視線さえ合わせようとしていないのだ

そんな状態で関係などできるわけがなく、必然的に翼は一人でノイズと戦い、鏡華は

響のフォローに入りながら殲滅していく

結局、一緒に戦わないのでまた亀裂が深まるばかり

悪循環としか表現できなかった

「何とかしないとな……」

弦十郎

だが、そうは言っても良い案が浮かんでいるわけではない
どうすればいいのか、一人悩む弦十郎だった

♪♪♪♪♪

時刻はおおよそ四時半近く

時計を持っていない鏡華は適当にそう決め付け、学生寮へ歩いている

五月だが、すでに月が薄っすらと昇っているのが見えた

——— おい、鏡華。いい加減どうにかしろよなー

月が昇っていると認識した途端、頭の中に響く声

周りに誰もいないのを見回すと、鏡華は深くため息を吐く

「あのねえ……、俺がどれだけ苦労してるか君には分かんないの？ 廊下ではわざわざ

翼の移動ルートに「先回りして」声を掛けたり、定時ミーティングの時はできるだけ相づちを打って話を渡したりしてるのに……。それを何？ ガン無視？ 酷いと思わない!？」

——いや、知ってるよ。「月が出てる間の事は」。半分は翼が悪いってことも「半分? もう半分は俺が悪いって言いたいのか?」

——そんなわけないだろ? 鏡華が悪いわけじゃないじゃないか
まるで母親が子供に言い聞かせるように声の主——奏は言う

その声は優しく頭に響いていく

——もう半分は誰も悪くなんかないんだ。翼も、鏡華も、響って子も。皆悪くない。もう半分は、こんな風にした運命って奴が悪いんだ。あたしがこんなこと言うのはおかしいかもしれないけどさ

「……………」

学生寮に着き、寮母に挨拶しているため、鏡華は何も答えない

否——今の言葉に返す言葉が思いつかない

——それじゃあ、そろそろ着くみたいだし、寝させてもらおうよ鏡華。また何かあったら呼んでくれよ、熟睡してない限り起きるからさ

「……………うん。——奏」

——うん？

「ありがと。奏がそう言ってくれるだけで俺は、また頑張れる気がする」

——ッ、あ、ああ、おやすみ、鏡華

「ああ、おやすみ、奏」

そう言うのと、今まで感じた繋がりがりみたいなのが消えるのを感じた

いつものことなので気にはしない

鏡華は深く呼吸をすると、「よしっ！」と意気込み、

——こんにちは

眼の前のドアを叩いた

ドアの横に貼り付けられたカードには

小日向未来

立花響

と、書かれていた

奥から「はい」と聞こえる

がちやり、とドアが開けられ、未来が顔を出すと、

「やあ、小日向。夕方にごめんね。立花、いる？」

鏡華はいつも通りの笑みでそう、声を掛けた



「——いきなりでほんとにごめん。こつちも急に頼まれてさ」

「い、いえつ、全然！ むしろ大歓迎です！ ばつち来いです！」

「未来く、深呼吸、深呼吸」

突然の訪問にパニくる未来をテーブルに頬をべちよくと着けている響がフォローする

普通は立場が逆なのでかなり珍しい光景だ

鏡華は二人のそんな光景に微笑むと、コートから缶ジュースを取り出してテーブルに置く

「二人に差し入れ。ここ、寮に在る間って水かお茶しか飲めないっしょ？」

「あ、ありがとうございます……。でも、もしバレたら……」

「気にすんな。ルールつてのは破るためにある……っつてのは学生にはちよつと無理があるか。ま、気にすんな。いざって時は俺が庇うから」

笑う鏡華に響と未来も釣られて笑い、「それでは」とプルタブを開ける

こくこく、と喉を嚥下していくジュースの味が心地よい

ほうと息を吐く響と未来を見て、鏡華はにやり

さらにポケットから缶を取り出すと

それを見て驚いている二人に気にせず、少し仰った

「先生……それ、お酒なんじゃ……」

「そうだよ。ノンアルコールだけど、立派なお酒」

「先生確か未成年でしたよね……?」

「Yes——ま、口止め料は払ってんだし、二人は報告できないけどねえ」

二人はしばし、互いの手に持つ缶を見て、「……あー」と声をあげた

だが、今となつては後の祭り。鏡華にまんまと乗せられた

鏡華は呆然とする二人を見て笑うと一息に仰いだ

「ぶはっ……。ここを出たら、真っ直ぐ中央棟に行かなくちゃならないんだ。少しは多

めに見てくれ」

「……そう云えば、響に用があつて来たんですよね?」

「え、私ですか?」

いきなり自分に振られて声をあげる響

鏡華は空になった缶を持ってきていたビニール袋に片すと、自分が来る前からテーブルに置かれていたノートをとんとん、と叩いた

「これ」、回収して来いってさ。不良教師に対する罰さ」

「ああ、これ」ですか……これまたご迷惑をお掛けしました……」

これ、とは響が担任から提出するよう言われたノイズに関するレポートだ

ここ最近響は授業中に人の話はうわのそら、居眠りはすると云ったことで注意されていた

もちろん本人は悪気があってやっているわけではない

朝から夕まで本業の勉強を

夕から深夜はノイズと戦うための「勉強」を

こんな生活スタイルで居眠りしないはずがない

かく云う鏡華だって、授業がない時間はもっぱら睡眠に使い、それで他の教師に注意を受けていた

響は謝るが、それに対し未来は、

「鏡華先生は不良教師なんかじゃありません……!」

「そこ」を重点的に受け止めていた

「未来……」

「鏡華先生は凄く真面目です。どんな生徒にも分け隔てなく接してくれる優しい先生です。時間がないはずの時だって生徒の質問に真剣に答えてくれるただ一人の先生です

！ 先生が不良だなんて、嫌がらせと同じです！ 優しくて、真面目で、生徒思いで、そんな先生この学院には一人もいません！ いるのは私が大好きな鏡華先生だけです！！」

感情に任せて怒鳴り散らす未来だったが、最後に意味不明な恥ずかしいことを言っている事に気づき、顔を真っ赤にして慌てて鏡華から視線を外す

そんな未来を、鏡華はじつと見詰める

ふうと息を吐くと、この後の展開を期待している響の前で

「ありがとな小日向。心配させたみたいで……」

ぼん、と頭を撫でながらお礼を言った

たったそれだけ

まさかとは思うが鈍感なのだろうか、と響は思う

——と、

「くっつあ……っ！」

突然頭を押さえる鏡華

驚く二人の前で鏡華は額を押さえ、

「なんなんだよ……こんにやる……」

と、誰かに言うように呟いていた

響と未来は心配そうに声を掛けるが、「大丈夫」と安心させるように呟く

実際、ただ寝ていたはずの奏が、急に鏡華の頭の中で叫んだからだ

一切の肉体攻撃ができない奏が喰らわせる唯一の攻撃だが、これがまた地味に痛い何しろ頭の中に反響するのだ。かなり響く

閑話休題

未だ仕上がっていないレポートを鏡華監修の下、仕上げてしまい鏡華はそれを受け取る

かなり字は汚いが、まあこれで教師は納得するだろう

すると、鏡華のポケットが振動を始めた

ケータイなので取り出し、確認する

弦十郎からで、定例ミーティングの召集だった

「……はあ」

それを見た鏡華はため息を吐くと、レポートをカバンにしまい立ち上がる

「どうかしたんですか？」

「もう少しいたかったんだけど、先輩教師から催促が来たんだよ。ついでに多少お話したいから立花も連れてくるようになって」

無論、嘘をつく

「ま、またですか……。ごめんね、未来」

「……仕方ないよ、呼び出しなんだから。でも——」

未来はそう言うのと自分のパソコンの画面を響に見せる

モニターには動画サイトに投稿されていること座流星群の動画が映し出されていた
「こつちの方はなんとかしてよね」

「あ……うん！ 何とかするから、だから……ごめん」

響も立ち上がり部屋着を脱ぎ、服に手を掛ける

それに慌てたのは鏡華だ

「わあっ！ ちよ、ちよつと！ 俺がまだいるのに着替えんなっ！」

「そ、そうだよ響！ 鏡華先生は先に出てくださいつ！」

「お、おうっ！ —— あ、ちよつとその前に小日向！」

「は、はいっ」

「ポニテ、似合ってるよ。いつもと違った雰囲気で可愛い」

「っ——!？」

未来が驚いている内に鏡華は即座に外に出た

鏡華に「可愛い」と言われた未来はそのままぽけー、とあまりの嬉しさに放心してしまっ

横で脱げない部屋着をもそもぞさせていた響に気付くまで後数分——

♪♪♪♪♪

それはまだ、シンフォギア——天羽々斬に出会う前

叔父の弦十郎に連れられてきた少年と出会った

少年はまるで女の子みたいで、最初本当に間違えて泣かせてしまった

そんな彼には恥ずかしい、自分には懐かしい大切な出会い

それから少年とはいつも一緒にいた

異性の友達は何一人で、すでに彼に惹かれていたのは間違いない

その出会いから数年後

今度は保護されたと云う椅子に縛られた少女に出会った

最初はとも恐かった。今にも襲い掛かってきそうな猛獣みたいだった

少女は「ノイズを倒す力をくれ」と叫び、弦十郎はそれに応えた

唯一あつたガングニールの欠片の適合者候補となれた少女だったが、自分みたく適合率が高いわけではなく薬品による無理矢理な適合だった

血反吐にまみれながらも手にした力を喜ぶ少女に自分はまた惹かれていた

そんな二人がいてくれたから自分は剣ではなく、人間（ひと）として生きてきた
一緒にいれば何も恐くない

なのに——

その二人は、ある日を境に消えてしまった

死亡の可能性が高いと公表され自分もそう思い、だけど、心のどこかでは生きている
と信じていた

でも、生きる理由をなくした

二人がいたから自分は人間（ひと）として生きていけたのだ

二人がいなくなってしまうたら自分はどうすればいいのだろうか

眼の前が真っ暗になった

落ちて、落ちて、落ちて——気付いた

二人がいなくなつたのは、自分が弱いせいだと

強くならなくてはならないと

だから——

自分は己を剣とした

感情なんかいらぬ。無機物《つるぎ》に有機物《ひとのこころ》なんか必要ない
必要なか——ない

それなのに、私は——感情を捨てられなかった

♪♪♪♪♪♪

やれやれ、と奏は普段搔けない頭を搔く

現在の彼女は、云わば幽霊に近い存在だ

月が出ている夜の時間だけ、彼女は鏡華を通して見たり聞いたりすることができた
何故かと聞かれれば返答に困るのだが、調べてきた鏡華によると

アヴァロンの正式な所有者、つまりは騎士王

彼は生前月の加護を得ていたとされており、月が出ている間のみ三倍の力を発揮する
と云う伝説を持っている

恐らく、それが関係しているんじゃないかと鏡華は語る

まあ、そんな「些細な」こと奏にはどうだっていいのだが

そんな奏は、真つ白とも真つ暗とも、広くとも狭くとも、家具があるともないとも感
じる空間にいた

どこかなんて知らないが、ここが鏡華と繋がっている時の奏の場所

そんな場所で、奏は胡座を搔いて座るようにしている

「まったく……鏡華つてば、鈍感なんだよなあ。あの未来つて子、絶対惚れてるだろ」
まったく、ともう一度呟く奏

今の自分はあるな風に鏡華に身体を触れられても感じることはできない

鏡華の笑みに笑うことはできても、笑顔を向けることはできない

本当の自分は今もお眠り続けている

精神的に繋がっているが、それだけでは足りない

次いで、思い出す

大切な思い出を

天羽奏の初めてできた異性の友達

初めて会った時、手を伸ばしてきて、思わず反射で噛み付いて泣かせてしまった

弦十郎の下、兄弟姉妹のように接してきた家族

食事中、時々舟を漕いでいた鏡華のおかずを取って喧嘩したり、修業の時は色々と無

茶をさせた

鏡華と翼——三人でいればどんなことだつてできる最高の仲間

自分に向ける笑った顔

困ったような、だけど仕方ないとも云う顔

怒った顔、寝ている顔

そして――

真実を知ったあの悔しそうに泣いた顔――

「つて……あたしはどんだけ鏡華に惚れてんだい」

自分の感情に思わずツツコミを入れてしまう奏

だが、それは紛れもない彼女の本音

でも、と奏

自覚している

それでも顔が紅潮するのを抑えられない

「あたしは――鏡華が大好きだ」

声にして呟く

誰にも聞かれることのない自分の想いこころ

翼も持つ――同じ想い

奏は自分で宣言してからふるふる、と頭を振る

この想いは眼が覚めてから言葉に、もしくは歌にすればいい

当然その時は翼と一緒にだ

今は、と奏は鏡華にバレないように繋ぎ、鏡華の見ている光景をテレビでも見るかの

ように見る

実はバレないようにこっそり見るのにハマっている奏だつた
場所は一課

眼の前には翼が席に座りコーヒーを飲み、響が立つてノイズについて説明している
了子のノイズの襲撃が作為の可能性があると云う説明やオペレーターの朔也、友里あ
おいからのハッキングされたと云う報告を聞いてほえーとしている

「あはは、やっぱ翼と真逆で面白いな響は」

そんな感想を抱く

反対に翼は聞きながら人知れず紙コップを握りつぶしていた

その時聴かされていたのが、アビスと呼ばれる最下層に嚴重封印されている完全聖遺物、デュランダルについて

たぶん、翼が思い出しているのはデュランダルではなく、「二年前に盗まれた」とされる完全聖遺物、ネフシユタンの鎧のことだろうと奏は思う

二年前——つまりあの時のライブ襲撃だ

鏡華が所持するアヴァロンもだが、完全聖遺物はその内に秘めるエネルギーが未知な
上、膨大だ

手荒に扱い、もし暴走でもさせたらどんな大惨事になるか分からない

故に起動させるための実験の申請が許可されるのはかなりの時間を有する

ネフシユタンの鎧はようやく実験にこじつけ、二年前、奏と翼——ツヴァイウイン
グが歌う真下で極秘裏に行われた

だが、実験は失敗

その時ネフシユタンの鎧が盗まれたらしい

政府はネフシユタンの鎧紛失の件でさらに完全聖遺物起動実験については固くなっ
たらしい

しかも、現在唯一研究が進められているデュランダルをアメリカが安保をたてに再三
の引き渡しを要求しているらしい

直属の上層部である国会の官僚達は危険性を考えず完全聖遺物を外交のカードの一
枚として考えているらしい

また、自分が知らないところでも、それ以外の国家や組織、個人が狙い、日夜闘争を
繰り広げているらしい

「……ま、あたしにはどうでもいいことだけどなあ」

そんなとても大切なことを奏はどうでもいいと投げ捨てる

今のだって鏡華が話してきて、適当に受け流していた報告の数々だ

今、ふっと思いついたただけだ。どうせすぐに忘れる

「どうでもいいこと、だけど……」

どうして人間同士が仲良く出来ないのか

どうしてみんなで一緒に進もうとしないのか

どうして争いはなくならないのだろうか

どうしてなのか

奏には分からなかった

そして

奇しくもその疑問は

自分のシンフォギアを引き継ぐ響も考えていたことだった

D. C. VI

「くあーっ、いい天気だあ」

屋上の手すりに凭れながら鏡華は眩く

見上げる空は蒼空と呼ばれるほど蒼く、雲がとても少ない

星を見るには絶好の天候だった

「見れるといいなあ……はむっ」

そう眩きながらお手製のハムマヨサンドを口に放り込む

ハム故にはむつと齧る

……とても冷たいシヤレだった

確か響と未来も見る約束をしていたはずだ

(来んなよなノイズ……。ま、そんな時は休ませりやいいか)

空を仰ぎながら咀嚼し思う鏡華

次第にその体勢がきつくなり、体勢を逆に変え下を見るように凭れる

すると、視線の先にとあるグループが見えた

その中に響と未来もいる

響は隣の生徒（いたばゆみ板場弓美、てらしましおり寺島詩織だつたか）に弁当を食べさせてもらいながら何かを書いていた

それも必死に

「あん……？ まさか……昨日提出だしたよな……」

疑問に思うが、本人に聞けばいいかと思ひ、鏡華は息を吸い込む

そして、

「うおーっ！ 立花響いーっ！ っ!!」

聞こえるように大音量で叫ぶ

当然誰もが驚き、きよろきよろ辺りを見回す

呼ばれた本人に至つては「な、何ですかあつ!？」と叫んでいた

そんな姿に鏡華はくくく、と笑つてしまう

相変わらず面白い少女だ

少しすると未来が気付き、指を差して一緒に食事をしていた全員に鏡華の場所を知ら

せる

鏡華は手を振ると手すりから少し乗り出し、左右を見る

近くを歩いている生徒はなし

教師の姿も見えない

だったら、

「そおい……つとー！」

手すりから身を乗り出し、飛び降りた。

ちなみに、全校舎は大体三階か四階の造りとなっている

少なくとも地面まで二十〜三十メートルはあると言うことだ

それを鏡華は何の躊躇いもなく、飛び降りた

悲鳴をあげる生徒がいたが、気にせず地面に着地する

流石、アヴァロンを身に取り込んでいるだけあって、地味に痛いと言うだけで済んだ

鏡華は呆然とこちらを見る生徒の視線を受けながら響達に近付く

「よっ、食事中失礼」

「その前に何やってんですか……っ!!？」

いつも通りに声を掛ける鏡華に響はシャウト

「何でいきなり人の名前叫ぶんですか!?! 何で普通に飛び降りてんですか!?! 何で怪我

してないんですか!?!」

「おお、三連ツツコミ」

「無視しないでくださいよお……っ!!」

「うっせえよ。一番呼びやすかった、一番近道だったから、身体が丈夫だからだ、なんか

文句あつか？ あん？」

「ぎゃ、逆切れされても……」

「それよりこれなんだよ」

鏡華は響が驚いた時に落とした紙束を拾い集め、眼を通す

それは昨日未来が手伝い、自分も隣で見っていたノイズについてのレポートだった

「なんでまた書いてんの？」

「え、えつと……それはそのう……もう一回書こうかななんて……」

「鏡華先生、響、朝に再提出するように言われたんです。字が汚いって」

誤魔化そうとする響の前に座っていた未来が本当のことを話した

どうせいずれバレることだ

「あ、ちよつ、未来〜」

「大丈夫だよ響」

未来はにっこり笑う

反対に鏡華は不機嫌だった

「別に字が汚くたって読めりゃいいだろ、読めれば……まったく、あの先生、細かいとこまでうるさいんだよな。だから三十路過ぎても結婚できないんだよ」

「ちよつ、トミー先生、それバレるとまづい発言じゃ……」

「気にすんな。どうせ奴さん達だつて俺のことで文句垂れてるに違いないんだから」

安藤創世くりよの声に鏡華は逆に悪態を吐く

トミーとは彼女特有の鏡華のニツクネームである

「まったく……。立花、もう一本シャーペンあるか？」

「え？ えつと……。ごめんなさい、持っていないです」

「あ、私が持ってます」

未来はそう言うのとポケットからシャーペンを取り出し鏡華に渡す

「お、サンキュ」

「あの、何する気ですか遠見先生？」

「決まってるだろ？ 手伝つてやるよ」

「えつ……。そんな、悪いですよ！ それにもし先生にバレたら……」

「バレたらバレただ。一応、見ていた俺の責任もあるんだ。それに今晚、小日向と流星群見るんだろ？ こんなくだらなことで時間なんて取らせるか」

鏡華は自分のカバンからボードを取り出すとそこに響のレポートを貼り付ける

ボードを膝の上に置き、元のレポートをじっくり見つめると

両手のシャーペンを同時にレポートに走らせた

「うわっ、凄いつ」

「あ、アニメみたい……」

創世と弓美が驚いて声を出す

しかも微妙に汚く書いて響の書いた文字に似せている所がまた凄い

「ソングライターなんて仕事してるとな、時々期限までに楽譜が書き終わらないなんてことが時々あるんだよ。だから自然と両手で書けるようになるんだ」

「へえ……」

響は呟きながら預けていた自分の弁当のおかずを口に運ぶ

二枚一斉に書くだけあり、あっという間に書き終わる

「はい、できたと。ほら」

書き終えたレポートをまとめ、響に手渡す

お礼を言いながら受け取る響

「はあく、久し振りに締め切り気分を味わったぜ。んじや、抜けるとしますか」

そう言つて腕を伸ばすと、立ち上がる鏡華

当然もう少しいて欲しい未来は引き止める

「あ、あの、鏡華先生。もう少しお話しませんかっ」

「んあ？ うーん……つつても俺、男だしさ。女の子の趣味とかは知らないよ」

「別に私達のことじゃなくても構いません。えつと……鏡華先生のこととか……」

最後の辺りはぼそぼそとか細かい声で呟く

それを横で見ている響達は

(ねえ、ビッキー。やっぱりヒナってトミー先生のこと……)

(うん、ご想像通り。私は応援してるけど……)

(生徒と教師の禁断の恋……。アニメみたいでいいじゃない)

(じゃあ私達は小日向さんを応援しましょうか)

小声で応援団らしきものを結成していた

結局悩んでいた鏡華は、

「それじゃあお言葉に甘えて、失礼します」

もう一度座りなおすのだった



夕焼けに染まりかけていた頃

鏡華は街に繰り出し、ふらわーと云うお好み焼き屋で食事を取り帰宅していた

野菜と肉がしっかりと取れて、かつ安価なので料理があまり得意ではない鏡華にはあり

がたかった

(食らった食らった、と。相変わらずおばちゃんのお好み焼きは飽きないや)

のんびりしていると、ケータイが鳴る

マジかよ、と眩きながら鏡華はケータイを取った

「はい、遠見です」

『鏡華か？ ノイズが発生した、現場へ急行してくれ！』

「了解。……あ、旦那。立花には連絡したのか？」

『これからだ。どうした？』

「……あいつには知らせないであげてほしいんだ。立花、今日は親友と流れ星を見る約束を前々からしてたんだよ」

『だが……』

「俺がその分働くから。な、たの——」

鏡華は最後まで言うことはできなかった

眼を見開く

できない理由が、眼の前に——いた

騎士の装甲に身を包み

黄金の剣を手に握る

黒髪赤瞳しやくとうの少年を——

『鏡華？ どうした？』

声を発せない

——まだいたのかよ

そう言いたいのに声が出ない

すると

少年は口元を歪め、顎で示す

——早くしろよ

とても言いたいかのように

我に返った鏡華は震える声を必死に隠し、

「——ごめん旦那。今の発言は忘れてくれ。立花にも連絡を」

一方的に切った

ケータイをしまうと、鏡華は少年に向き直る

「……お前、まだ諦めてなかったのか」

「いや。今日は別件だ。雇い主クライアントからお前の捕縛命令が出ている」

「……はっ、雇い主クライアントか。そいつの名前——「フイーネってんじやねえだろうな」

「さあな。雇クラリアントい主の情報を標ターゲット的に教えるものか」

「ちつ、だろうな——」

鏡華は歌わず防護服を身に纏う

——希望成る騎士ブリテン国の赤き竜——

具現した剣を、カリバーンを顔の前で掲げる

同様に少年も黄金の剣を、“エクスカリバー”を顔の前で掲げる

そして、同時に騎士の作法にのっとり、見事な礼をとつた

もう見ることのできない——決闘の儀式

——己きずなが栄光を祖国の為に——

——己フオウ・サムバディ・グロウリが栄光を祖国の為に——

すでに彼らには眼の前の騎士てきしか眼中にない

もうこれで何度目だろう

未だ決着の付いていない決闘

「いくぞ——遠見鏡華」

「上等だ——夜宙ヨソラヴァン」

遠見鏡華と夜宙ヴァン

カリバーンとエクスカリバー

二人は同時に構え、互いを目指して駆けた

♪♪♪♪♪♪♪♪

それは月明かりに姿を現した

起動前と変わらぬその攻撃的な鋭い突起

鋼色の装甲が月光を白銀に反射している

顔は上半分がバイザーに覆われ見えないが体軀から少女だろう

二年前、あのライブ会場での実験の末に暴走し、結果として紛失した完全聖遺物

「ネフシユタンの……鎧……」

それが起動し、シンフォギアとなった姿が——眼の前にあつた

「へえ……つて事はあんた、この鎧の出自を知ってた」

少女の声音は推測するに響と同じか一つ上の年頃のほど

しかし、その恰好、声音、どれを取ってしても日常に身を置く雰囲気ではない

明らかに非日常で生きてきた様相である

翼が忘れるはずがない完全聖遺物、ネフシユタン

“己の不始末”で奪われたものを、忘れることなどできない！

劍を構える翼

弦十郎の声が耳朶を打つが、聞いていられない

時を経て、鏡華を除き全てのシンフォギアが揃った皮肉なる運命

だが、翼にはその残酷さが——ひどく心地よくてならなかった

さあ、歌おう

あの時盗まれたネフシユタンは

今、ここで取り返す！

「やめてくださいいっ、翼さん！ 相手は人です！ 同じ人間なんですっ！」

腰にしがみ付いてくる立花響

そんな甘いこと——

「戦場いくさばで何を馬鹿なことをっ!!」

何故か敵と声を重ねて叫んだ

気付いてから敵を見て、そして笑う

こんな半端な覚悟の持ち主よりずっと話が分かりそうだ

「あなたの方が気が合いそうね」

「だったら仲良くじゃれ合おうかいっ!?!」

刺々しい鞭を振るい、上段から落としてくる

翼は腰にしがみ付く響を引き剥がして避けると、空に駆ける

疾ッ！

——蒼ノ一閃——

一閃の下に撃ち放たれた斬撃

少女は躲《かわ》すことなく、鞭の一振りのみで軌道を逸らす

「——ッ」

まさかたつた一撃で弾かれるとは思わなかった翼はわずかに眼を見開く

落下の加速を籠めた大剣の一撃、不意を突いての《逆羅刹》

その悉《ことごと》くを最低限の動きで避ける

そして、横に薙いだ一閃を容易に防ぐと、

——蹴ッ！

がら空きの腹部に蹴りを打ち込まれる

(これが……完全聖遺物の潜在能力……！)

だが、それだけではない

ネフシユタンを纏う少女の力も籠められている

これは簡単に終わりそうにない

少女は響を見て、杖らしきものからノイズを生み出していた

あの實力に加えてノイズと云う雑魚の壁

(ならば――)

使おうではないか

そして見せてやるのだ

甘ったれた彼女に防人としての覚悟を――！

――戟ッ！

――轟ッ！

その時だった

翼と少女のちようど真ん中に何かが降ってきたのは

地面を砕いたのか、砂煙が舞い上がる

砂煙が晴れると、そこには

「くっ……おお――！」

「っ……あああ――！」

鏡華ともう一人の騎士が似た黄金の剣で鍔迫りをしていた

「鏡華――！？」 「ヴァン――！？」

♪♪♪♪♪

「翼……？」 「クリス……？」

かちやかちや、と火花がこぼれるのを間近で感じながら敵越しに仲間の名前を呟く鏡華とヴァン

ああ、そう云えばノイズのこと忘れてた、と鏡華

ああ、そう云えばもう片方の標的ターゲットのこと忘れていた、とヴァン
共に後ろをちらりとのぞけば、敵の姿がある

「ッ、ネフシユタンの鎧……！」 「ほう、天羽々斬か」

また同時に呟く

重なった声に鏡華とヴァンは互いに互いを睨む

「おい、真似してんじやねえよっ!!」

またまた重なる

睨みながらも視線を逸らし、

「翼！……いつもシンフォギア適合者だ！」

「クリス！……いつも標的ターゲットの一人だ！」

「だから真似してんじやねえよっ!!」

……案外似たもの同士なのかもしれない

鏡華とヴァンは鏢迫り合っていた剣を無理矢理振り払うと仲間の隣に跳ぶ

「……………あいつは……………?」

「一年ぐらい前から俺を付け狙う奴だよ。シンフォギア、エクスカリバーの適合者」

「……………だが、そんなシンフォギア……………」

日本には記録されてない

鏡華は頷く

「たぶん俺と同じ番外聖遺物エクストラナナルバなんだと思う。……………ところで翼。立花は?」

「……………」

響のことになると途端に口を閉ざす

一応、剣で場所を教えてくれる

そこに視線を向けて、

「いや、あの捕らえ方はなんかエロいぞ!」

またもや異口同音だった

睨もうかと思つたが、やめた

捕らえられている響だが

ノイズの口(?)から吐き出された粘着性のある液体に動きを封じられている

その姿は何と云うか——煽情的なので思わず叫んでしまったのだ

だからと云つて欲情するわけではないが

——貫き穿つ螺旋棘——

具現化した四槍で動きを封じているノイズを串刺す

解放される響だが、力が入らないのか地面にへたり込んで

いや、精神的に辛かったのかもしれない

別の理由もありそうだが——

「翼……ネフシユタン少女の方、頼める？」

「愚問だ。あれは私の汚名。雪がなければならぬ」

「……分かった。そのことについては後でじっくり話し合おう。俺が隙を作りエクスカ

リバーとやるから。無理はしないでよ」

「……………」

翼は応えない

だが、これ以上構つてやれない

——鏡華、翼はあたしが見ててやるから

奏が言う

頷く鏡華は剣を構え、駆け出す

それを見てヴァンも駆け出す

敵が己の範囲リーチに入るのを直感で感じると

——閃ッ！

ヴァンは剣を振るう

しかし、鏡華は振るわず飛び越えるように躲すとその奥つまりヴァンがクリスと呼んだ少女に迫る

「なんだよ……あたしとやろうつてのかわ？」

「いいや、ネフシユタン少女。お前—— ヴィーネの名前に心当たりは？」

「——ッ!？」

クリスだけに届く声で訊かれた問いにクリスは息を呑む

答えはしなかったが、それで鏡華には察せられた

にやりと笑うとさらにクリスも飛び越え、後ろからの横薙ぎを回避する

「ちっ……クリス、あっちの標的ターゲットは頼むぞ！」

「あ、ああ！」

鏡華を追うように飛び越すヴァン

同時に——

「——はあっ！」

いつの間にか翼がヴァンが飛びあがった直後にクリスに一閃を繰り出してきていた

驚くクリスはギリギリのところまで上体を逸らし回避する

「奪われしネフシユタン……今、取り戻し、この身の汚名を雪がせてもらおう！」

「——そおーかいっ」

♪♪♪♪♪♪♪

「ちつ、まったく、女みたいな顔をしてやるじゃないか」

「……ああそうだよねえ。女みただよな夜宙ヴァン……お前もそう思うんだな？」

「……すまん、遠見鏡華。どうやら触れられたくないモノのようだな」

会話だけ聞くと何をのんきに世間話をとと思うかもしれないが彼らはまさしく決闘の最中にいた

鏡華の一撃をヴァンは跳びあがり回避する

鏡華も飛び上がると驚異的な跳躍でヴァンの真下から刺突を炸裂させる

弾き返すヴァンは近くの木を足場にして突撃

それを剣で防ぎ、上空からぶつかり合う鏡華

そして、振り抜かれた剣を流すように捌くとその刀身を素手で掴み、遠心力を加えながらヴァンごと地面に放り投げた

吹き飛ばされても投げられただけなのでヴァンは綺麗に着地すると、同じく着地した鏡華に向かつて駆ける

横に振るう一撃をヴァンは上空に跳んで避けながら剣で強襲する

即座に横に構え、防ぎながら撥ね返す鏡華

後ろに下がり、追ってくるヴァンに走り跳びながら真上から側転するように斬りつける

止めとばかりにヴァンは後ろを向いて着地した鏡華に向かい振るう

はつきり云えば以前翼と戦った時とは比べ物にならない戦闘だった

何故か。それは最初発動した《己が栄光を祖国の為に》が原因だ

《己が栄光を祖国の為に》は一種の決闘儀式だ

発動中は全てのステータスを上昇させることができる

だが、決着が付くか、邪魔をされるか、決闘以上の理由ができてしまうと発動が解除されてしまうし、決闘の敵と決めた敵には剣でしか傷を与えられないと云う欠点を持つ

「ッ……」

「どうした？ 完全聖遺物の力は欠片である俺に劣るのか？」

「馬鹿言わないでくれ。完全聖遺物の全力はこんなものじゃない」

「なら何故全力を籠めない」

「できない理由があるんだから仕方ない——」

仕方ないだろう

鏡華がそう言いきる前に、

——鏡華ッ！

奏の叫びに似た声にはつとずる

ヴァンもわずかに顔を強張らせている

唱が——聞こえる

二年前にも聞いた

透き通るような、しかし芯の通った

静かに、しかし激しく高ぶるような

もう二度と聞きたくない唱を

「ッ——あの、馬鹿……っ！」

鏡華が珍しく悪態を吐く

すでに今から行っても間に合わない

アヴァロンは——使えない

「おい、夜宙ヴァン」

「把握している。絶唱だろ」

「……休戦だ。流石に俺でもあれは防がないと不味い」

「だろうな。いいだろう。任務失敗になるが……クリスが無事ならそれでいい」

「……いや、俺は俺とお前しか守れないけどさ。ネフシユタンの耐久力に期待してろ」

「なら貴様は仲間の馬鹿さ加減に頭を抱えていろ」

「なんだと……?」

「ほら、くるぞつ」

「ッ——!」

ヴァンの宣言通り、翼が起こした絶唱の衝撃波が平等に襲い来る

——護れと謳え聖母の加護——

——閃ッ!——

——波ッ!——

——轟ッ!——

——裂ッ!——

鏡華は前方に盾を構え、地面に足がめり込むほど踏ん張る

だが、想像以上に重い——唱

翼は偶然手に入れた鏡華や無理矢理手に入れた奏と違い、正等な適合者だ

聖遺物との適合率は恐らく一番高いはず

アームドギアより絶唱を放てば、以前奏が放った一撃より重く、また身体に掛かる負担が軽くなる

アームドギアを介せばの話だが――

「ツ――、ツ――」

「よくやった遠見鏡華、一応礼は言っておく。クリスは恐らく戦闘不能だろう。これで俺達は帰るが……まあ、今は早く貴様の仲間の下に言つてやれ」

一方的に後ろから喋り終わると、鏡華が後ろを向く間に姿を消すヴァン

絶唱に耐え、痺れた腕をだらりと下げながら鏡華は視線を戻し、翼を見る
翼は一步も動かずただ立っているのみ

ただし――その手に「何も握ってはいなかった」が

「お、おい……まさか……アームドギアなしで唱つたつてのか……!?!」

慌てて駆けつけた鏡華は痺れ、しかし既に治癒が始まっている腕を無理矢理動かし肩を引つ張る

振り向いた翼の顔は――誰もが見るに耐えないと云う顔

眼から、口から、鼻から止まることを知らないかのように血が流れ出て

胸を伝い、地面へと落ち、小さな水溜りを作っていた

その吐血量は、人間が出している限界を超えている

「私は人類守護の勤めを果たす防人……こんなところで……折れる剣つるぎじゃ、ない……！」
 それが限界だったのか

まるで刃が折れるかのように崩れ落ちる翼

地面に倒れる前に抱き止める鏡華

翼の身体はひどく軽く感じる

「ツ……あ……ああ……っ！」

「翼さん！」

響も慌てて駆けつけるが、抉れた地面に足を取られ転倒する

その時、土煙を上げて急停車した車から転がるように弦十郎も現れた

「鏡華！ 翼は！」

「うあ……旦那……翼が……翼が……！」

「ツ……」

弦十郎は息を呑み、鏡華から翼を受け取ると、響も連れて再び車を走らせた

鏡華は一人、翼が作った血溜まりに膝を付いていた

「ツ……くそ……くそ……くそ……くそっ！」

また守れなかった

もう取りこぼさないと決めたのに

そう言つて、そう決めて、そう叫んで

この呪ちからいと共に己を鍛え続けたのに

何も守れていないではないか！

「くっ——そおおおおおおおおおおおおおとおおとおおとおおっつっつ!!!」

夜空に轟く咆哮

その叫なみだびを見ていたのは

爛々と輝く月だけだった

学院に併設されている病院に緊急搬送され、集中治療室にて明け方近くまで治療が続けられた結果

翼は辛うじて、一命を取り留めることができた

だが、絶唱の反動は尋常な代物ではなく予断が許されない状態は続けられ、今なお医師による不眠の治療が続けられている

弦十郎は診断を報告した医師に深々と頭を下げると、後ろに控えていた部下と共にネフシユタンの搜索に向かった

複数の足音と弦十郎の初めて聞く厳しい声音が遠退いていくのを感じながら、響は一人休憩室のソファに腰掛けていた

今の状況に響は何もできず、ただ紙コップに入った飲み物が小さく震え波紋を作るのを見ているだけ

「あなたが気に病む必要はありませんよ」

そう声を掛けられ波紋から視線を逸らす

向けた先には緒川が立っていた

緒川はいつも通りの笑みを浮かべると、別のソファに腰を下ろす

「アレは……翼さんが自らの意思で使ったのですから」

「………………。緒川さん……あの、遠見先生は」

「さあ……ただ、かなりショックを受けているでしょう。恐らく、まだ先ほどの場所にいらんじゃないかと」

「そう、ですか……」

響にはそれぐらいしか返すことができなかつた

血溜まりに倒れる翼を抱き留めた鏡華は、普段からは想像できないほど衝撃と動揺を受けていた

余りにも「いつも」の鏡華とかけ離れた表情

忘れたくなくても——忘れられない

まるで、同じことが以前にもあつたような——

「ご存知とは思いますが、以前の翼さんはアーティストユニットを組んでいました」

「…………ツヴァイウィング、ですよね……？」

「その時、翼さんとパートナーを組んでいたのが天羽奏さん。今はあなたの胸に残るガングニールのシンフォギア奏者でした」

鏡華君はソングライターとして影で支えていました、と緒川は繋げる

その表情は先ほどまでの笑みを浮かべていない

「二年前のあの日……ノイズに襲撃されたライブの被害を最小限に抑えるため、奏さんは絶唱を解き放ったんです。そして司令によれば、鏡華君も奏さんを守るため、秘匿してきたアヴァロンを解放したそうです」

二年前、響はそれで助かった

そこまでは覚えていなかったが、奏が自分に叫んでくれて、唱を歌ったところまでは覚えている

「それは私を助けるため、ですか……？」

「……………」

緒川は答えない

否——答えられない

あの時の奏の気持ちは奏本人にしか分かることはない

故にそのまま話を進める

「奏さんは鏡華君と共に行方不明の後、殉職扱い……そしてツヴァイウィングの解散。大切な人達を失った翼さんは、その穴を埋める為にがむしやりに戦ってきました」

ただ一振りの剣として

同年代の少女が知っているはずの遊びも、友人も、時間も、恋も

全てを削り捨て、暇と云う暇を惜しみ

ただただノイズと云う非日常から人類を守る防人として

未だ二十にも満たない少女は戦ってきたのだ

「分かっているよ緒川さん。翼があんな風になったのは——俺のせいだって」

声が二人の耳に届き、弾かれたように音源に振り向く

休憩室の入り口には私服に戻った鏡華が立っていた

顔に固まり、取れていない血が電灯の光に反射して赤黒く輝いている

「遠見先生……その顔は」

「あの場所で蹲ってたからね……防護服や甲冑に付着した血は消せたけど、顔だけはどうしようもなかったよ。後で洗うから心配はしないで」

鏡華はいつものような笑みではなく、やるせない笑みを浮かべながら緒川の隣に座る
「翼をあそこまで追い詰めたのは他でもない俺なんだ。俺が二年前、翼の前から消えたから……」

「自分を責めないでください鏡華君。誰も君のせいなんて——」

「ええ、言いませんよね。でも、自分の咎は自分が一番知っています。……でも、翼

も翼です。二年前の悲劇を繰り返さないために、俺を引き止めるために、あいつは死すら厭わぬ覚悟で絶唱を使つたんだ」

「遠見先生のため……?」

首を傾げる響

鏡華は「ああ……」と呟くと、自分と翼の関係を話した

「俺と翼は家族みたいなものなんだ。小さい頃に俺の両親が事故で死んで、弦十郎の旦那が後見人として育ててくれて……幼馴染って言つてもいいけど、思い返すとやっぱり家族の方がしっくりくるんだ」

「翼さんはいなくなつた鏡華君に再会し、また自分の前からいなくなつてほしくなかつたんですね。でも、剣としての生き方が言うのを躊躇させた。だから行動で示したんですか……」

「……不器用なんですよ。俺も、翼も」

これ以上聞いてられなかつた

二人の会話に涙が止まることなく流れ落ちる

翼の想いも鏡華の想いも、自分は知らなかつた

——奏さんの代わりなつてみせます——

なにが奏さんの代わりだ

翼の激昂の意味を知った今、もう言えない

だけど、口から出てしまった言葉はもう戻ることはない

どれだけ翼を、そして平静を装っていた鏡華を傷付けたのだろう

「ねえ、響さん。僕からのお願いを聞いてもらえませんか？」

溢れる涙を拭うことなく響は緒川を見据える

「翼さんのこと、嫌いにならないでください。そして、翼さんと鏡華君のこと、好きになつてください」

「……はいっ」

この言葉だけは嘘にしない

新たな決意を胸に、響は深く頷いた



鏡華達が住む街の郊外に存在する一つの城

それはさながら——世界と切り離された別の世界

その城の一面に女性が一人テーブルに足を乗せて腰を下ろしていた

その身にはヒールとストッキング以外何も纏っていない

手には古風な電話機を持ち、どこかと電話している

それが終わると、立ち上がり奥に進む

奥には大仰な装置に磔にされた少女——クリスがいた

クリスに声を掛けているのはヴァン

「苦しい？ 可哀想なクリス。あなたがぐずぐず手間取うからよ。手間取ったどころか空手で戻ってくるなんて……」

近付き、クリスの顎に手を掛けようとする

だが、それを撥ね退けるように弾くヴァン

「黙れファイネ。こうなったのは貴様の情報不足と風鳴翼の絶唱のせいだ。それをクリスのせいだけに……」

「あらア、誰もクリスのせいだけなんて言っていないわ。あなたにだって責任はあるのよ。何度も相対しているのに、その都度アヴァロンの奏者を逃がすのはどう云うこと？」

「ふん、初めてやり合つて帰つて来た時言つただろう。遠見鏡華を捕らえるのは不可能に近いと。奴は未だ完全聖遺物の力を抑えている。できる限り引き付けているのだから文句は言わないでもらおうか」

それよりもだ、とヴァンは更に眼を細めながらクリスを見る

息も絶え絶えなクリスは薄目でヴァンを見る

「これ以上クリスにネフシユタンを纏わせるな。詳しいことなど素人の俺に分かるはずがないが……負傷し体内に進入したネフシユタンの破片を『電流で休眠させた後除去』など荒療治で治療するモノに危険が伴わないわけないだろう」

「……」
「おい、なんとか言えファイーネ——！」

歌を紡ぎエクスカリバーのみを具現化し、切っ先をファイーネに向ける
だが、ファイーネは薄く笑うだけで何も言わない

——むかつく

本当に心の底からむかついて堪らない

ヴァンはこの女のことを信頼どころか信用すらしてなかった

遠見鏡華の方がまだ信用に足る人間だ

そんな彼がファイーネに従う理由はただ一つ

「……ヴァン……」

「ツ——」

「あたしは大丈夫、だから……心配すんなよ……」

眼の前の少女がこの女に従うから

残った彼女を守るためだけにヴァンは剣を振るう

全てを失い、いなくなった者との約束を果たすために

「ふふッ、可愛いわよクリス。私だけが愛していると言つてあげられる。どこかの誰かさんと違つてねエ」

「……クリス。この女が何かしたらすぐに呼べ。すぐさま三枚に下ろしてやる」
ヴァンはそう言うのとエクスカリバーを消し、その場を後にする

そして最後に、

「それとフイーネ。俺がいる間はせめて下着は着やがれ」
表情を一切変えずにそう言った

♪♪♪♪♪

「———で？　こんなところまで来てどうした？」

鏡華に呼び出された弦十郎は学生寮の屋上に来ていた

眼の前には鏡華が背を向けている

その視線は月を仰ぎ、振り向こうとしない

弦十郎は何も言わずただじっと待つ

「———おっちゃん」

それは久しく呼ばれなくなった元々の愛称
なんだ、と弦十郎は言う

振り向いた鏡華はポケットから缶を二つ取り出し、一つを彼に向かって放る

缶ジューズ——ではなく、缶ビールだ

「未成年の飲酒は違法だぞ鏡華」

「固いこと言わないでくれ。一応ノンアルコール選択してるし……それに未成年にお酒
教えたのは俺の両親なんだ。そろそろ命日だろうし、お父さんとお母さんに文句を垂れ
てくれ」

「そう云えばそうだったな。……もう、十年ぐらいになるか」

遠い眼をしながら弦十郎はプルタブを開け、煽る

鏡華も同じように開け、煽る

相変わらず苦いがこの苦味が一番両親を思い出せる

(もう、十年近くも経ったのか……)

この約十年間、様々なことがあった

喜ぶことも、怒ることも、哀しむことも、楽しむことも

たった数年——物心付いてからなら短い記憶はすでに磨耗しかけている

臆気で、思い出せることは数少ない

だから、

(さようなら——お父さん、お母さん。これで、最後だ)

あなた達との記憶を振り返るのは今日でおしまいにしよう

空っぽになった缶をポケットにねじ込むと、深く眼を閉じる

そして、眼を開くと

「It's not made to finish with a dream
m」

唱を奏でる

静かに、激しく

厳かに、緩やかに

本来壊す側である奏者は

創るために唱を奏でる

その唱を弦十郎は黙って聞く

そして——

—輝ッ

光が弾けた

鏡華を、アヴァロンを中心に光は広がり

弦十郎を包み、二人を「世界から切り離す」

「これは……」

「《遙か彼方の理想郷》——ここはありとあらゆる通信手段を遮断する一つの世界。ア
ヴァロンが内包し、盗まれるまで騎士王を守りきった力の源。……ここなら誰にも聞か
れず内密に話ができる」

「……………」

「翼にもいつかは話すだろうけど、それ以外は旦那にだけは話しておく。俺の目的を——
——そして、俺に科せられ奏にも科してしまった「呪い」を」

——話すよ



「——えー、君達の担任はお見合いだそうで今日は休むらしいです。代わりに私が務
めさせてもらいます。つつても、三十路越えたあの先生が成功するとは思えないのは俺
だけか？」

教壇に立ち、朝のホームルームを始める鏡華

あれから約二週間が経過した

ネフシユタンの少女及びエクスカリバーの少年、夜宙ヴァンの行方は掴めていない
 ネフシユタンの少女は響限定を標的としていたらしく、二課の情報が漏れている可能
 性があった

鏡華は変わらず不良教師として教師には疎まれ、生徒には人気だった
 翼は未だ意識は戻っていないが容態は安定し、今も夢の中にいるはず

そして響は——変わり始めていた

「うーんと……あれ？　立花？」

出席を取っていると、響がいないことに気付く

見上げれば、未来の隣がぼっかり空いている

「小日向ー、立花はどうした？」

「あ、えつと……。響は風邪で休むそうです」

「風邪？　ふーん、珍しいこともあんのな。ん、了解。——特に報告することはないか

らホームルームはここまで。私の授業は二時間目だからまたその時にな」

鏡華は手元の手帳に欠席を記しながらホームルームの終わりを告げる

生徒が席を立つと、未来を教壇まで呼ぶ

「小日向。立花だけど……。本当はどうしたの？」

「あ、ええと……。実は——」

未来は今朝起きたら響がいなくなっていることに気付く

枕元には「修業。ガツコーお休みします」と書かれた書き置きが残っていたことを鏡華に話した

へえ、と返しながら鏡華は納得していた

響は翼の一件から強くなりたいたいと思い、翌日には弦十郎に弟子入りしていたのである
それから今日まで、空いている時間のほとんどを修業に明け暮れていた

ランニング、足を上げての腕立て、鉄棒に足でぶら下がったの腹筋、中国拳法にボクシング

アクション映画の俳優やアニメのキャラに成りきってやっていた時は流石の鏡華も引いた

一応未来も一人で修業するところを見たことはあったが、やはり心配するのだろう
(つたく……あの真っ直ぐちゃんは……)

頭をぽりぽりと搔き、心配そうな顔をしている未来の頭をぽんと撫でる

「俺も詳しくは知らないけど……立花にも何か思うことがあってやってるんだと思うよ」

「そう、ですよね……」

少し暗い表情になる未来

また彼女の悪い癖だ

悪い方へ悪い方へと考えを繋げて云ってしまっている

このままではまずかな、と思つた鏡華は、

「なあ、小日向」

「はい……？」

「昼休み、演奏聞かせてもらつていいかな？」

いつかの約束を果たすことにした

♪♪♪♪♪♪♪♪

———♪

普段使われない教室に音が響き渡る

ピアノを弾く未来

鏡華は壁に背を預けて眼を閉じている

基本、使われている教室に設置されているピアノはグランド・ピアノであるが、空き教室になつているここに設置されているのあまり場所をとらないアップライト・ピアノ

だ

グランド・ピアノはアップライト・ピアノより連打やスタッカート（音を切り離す）、トリル（その音とその2度上の音を速く反復させて音を揺らす）などを素早くできるのだが

別にそんなこと、未来には関係ない様子であった

まだまだ拙く荒削りな場面もあるが、とても落ち着く
少し眼を開け、弾いている未来を見る

最後の音の余韻を空気に溶かしながら演奏は終了した

鏡華は壁から離れ、手を叩く

「どうでしたか？ 私の演奏は」

「評価かあ……素人の感想でよければだけど、少し緊張してたかな。音に少しだけ硬さが入ってたよ」

「そうですね……」

「ま、悪いと思うところはそれぐらい。いいなって思ったことは、演奏に心が籠もっていたこと、アップライト・ピアノなのにスタッカートとかがすごく上手だった。聴いてて凄く心地よかったよ」

「あ、ありがとうございますっ」

憧れである鏡華に褒められ未来は嬉しそうに顔を綻ばす

笑顔に釣られて鏡華も笑顔になる

音楽と云うのは本当に気持ち安らぐ

聴けばどんな思いが籠められているか瞼の裏に景色として浮かんでくるし

弾けば自分の思いを他人に見せることができるのだ

音楽の前では誰も嘘を付けなくなる

「それじゃあお礼に……」

鏡華はカバンからペンと紙を取り出すと「この曲は小日向のオリジナルだよね？」と訊く

未来が頷くと鏡華は「そうか、よかった」と言つてペンを走らせる

「何を書いているんですか？」

「今の曲の詩を書いてるんだよ」

「えっ……詩、ですかっ？」

「うん。聴いている最中から頭に浮かんじゃってね、どうしても歌にしたいんだ」

「あ、ありがとうございますっ！ その……鏡華先生に歌詞を決めてもらえるなんて、とっても嬉しいです」

未来の言葉に鏡華は「そっか……」と呟く

鏡華の書く姿を未来はじつと眼を輝かせて見つめる

昔から翼と奏が隣で覗き込んできていたので気にしていない

少しすると、鏡華は咳き込み、口を押さえる

「鏡華先生、風邪ですか？」

「ごほつ……まあそんなとこ。——なあ、小日向」

書きながら鏡華は未来を呼ぶ

「はい」

「立花のこときさ、信じてあげてくれないかな」

「え……？」

突然の話題に未来は眼を丸くする

鏡華は詩に眼を落としたまま続ける

「今の立花つてさ、今の俺に似てるんだよ。大事な人に隠したくないのに隠さなきゃいけないことがあるって感じが。今日の一件……いや、最近の様子で小日向も薄々分かってると思うんだけど」

「それは……」

鏡華に言われるまでもなく分かっていた

一ヶ月前から様子がおかしいことも

絶対何か隠していると云うことも

だけど、

「知ってます。……だけど、響は隠しごとはしないって約束してくれたんです。だから

……」

「……俺もそうだよ」

「え……」

「昔、翼と約束したんだ。ずっと一緒にいようって、嘘は作らないって。——だけど、俺は二年前約束を破って翼の前から消えた。こっちに戻ってきててもまだ嘘を吐いてい
る」

「翼さんと、ですか……?」

幼馴染兼家族みたいなものなんだ、と鏡華は言う

ペンをしまうと、未来の前まで歩き、眼の前でしゃがみ片膝をつく

椅子に座っている未来は自然と鏡華を見下ろす形に、鏡華は見上げる形になる

「小日向。どうか立花が隠しごとをしていたとしても許してやってほしい。怒らないでやってほしい。絆を壊さないでほしい。決して俺達みたくになつてくれるな」

——頼む

そう、頭を垂れる

ここまで真剣な鏡華を未来は初めて見た

同時に言葉に籠められた想いも

風鳴翼と鏡華の関係は気になるが、今はそれよりも響とのこと
未来は小さく、本当に小さく「……はい」としか言えなかつた

鏡華はそれだけ聴くと表情を崩す

まるで泣いているみたいだ、と未来は思った

「それじゃあこれを——」

鏡華は手に持った紙を未来に手渡す

真正銘世界に一つしかない未来の曲に付けられた歌

未来は大事そうに胸に抱えると

「ありがとうございます」

今度のはつきりと、そう言った

D.
C.
VIII

感覚が夢のような気がして、ああ、これは夢なんだと自覚する
霧が掛かった空を翼は落ちていく

落ちて——落ちて——墮ちて、墮ちて、墮ちて——
際限なく空を落ちていく

それはまるで片翼をもがれた小さな小鳥

今の自分を表わすかのような夢

でも、自分は飛ばなくてはならない

片翼だろうと大空を飛ばたいみせる

羽ばたかなければ——

「——た——くつ、本当に真面目が過ぎるぞ翼？ その内、本当にほつきりいつちやいそ
うだ」

その、声と共にふわりと後ろから抱きつかれる

こんな安心感を与えてくれるのは世界に二人しかいない
そしてこの声は――！

「奏――！」

振り向く翼

眼の前で微笑んでくれる奏は防護服を纏っている

対する自分は今の防護服を

「鏡華の言う通りガチガチだな。まるで一本の剣みたいだぞ？」

「……一人になって私は、一層の研鑽を重ねたんだ。数え切れないほどのノイズを倒し、死線を越え、そこに意味など求めず、ただひたすらに戦い続けてきたんだ」

「そっか。だったら――」

そう云うや早く

奏はアームドギア、ガングニールを構え、

「その研鑽つて奴――見せてもらおうぞ」

――閃ッ！

大上段からガングニールを振るつた

驚いた翼はそれでも紙一重ぎりぎり避ける

「か、奏!? どうして……」

「ほら、驚いてちや防げるものも防げないぞ翼っ」

「ッ——」

何故奏と戦わなくてはならないのか

翼は叫びたくなる気持ちを抑え、ガングニールの一撃を大剣と化した天羽々斬で防ぐ
これも、私に対する仕打ちなのだろうか

夢の中で奏と戦うことになるなど

これ以上残酷な仕打ちはありはしない！

「あ、別に仕打ちじゃないからな。あたしのストレス解消だからな？」

「へ……」

いきなり変なことを言われ、動きを止めてしまう翼

そんな絶好の隙を逃がす奏ではない

——蹴ッ！

ガングニールで弾き、半回転しながら回し蹴りを叩き込む

モロに喰らった翼は「一、二回バウンドしながらごろごろと転がる」

(……「転がる」?)

よく見渡せば、そこはもう落ちていく空ではなかった

そこは二年前、全てが変わってしまったあの会場

「ん、やっぱり制限時間なしで暴れる^{うたえる}って最高だなあ。久し振りだとそれが一層楽しいね、

まったく」

奏は場所のことなどお構いなしで楽しそうに歌を紡ぎ、力を高めていく

本当に——楽しそうだ

自分はいつからあんな風に楽しく歌うことを忘れてしまったのだろうか

「最近ずっと寝っぱなしだからさ、動くことすらままならねえんだよ。だからさ、翼。今って云う時間を楽しもうぜ」

「……………うん」

翼は頷くと歌い、天羽々斬を構える

これは夢——泡沫^{うたかた}に消えゆく幻想

だったら、奏の好きなようにやらせてやろう

どうせ死にぞこなつた身だ

また見れるだろう

だが——

「いくよ——奏ッ」

「おうっ、来いッ！」

やられっぱなしは少し嫌だった

だから、少なくともさっきの一撃分だけは

返させてもらおうよ——！

~~~~~

「——あはは、いやあく、暴れた暴れた」

「……私は凄く疲れたよ」

「そいつは結構じゃないか。そう思えるんだから。あたしは精神体だから全然疲れないんだよな」

戦いを終えた二人は互いの背に凭れステージに座り込んでいる

思い出に残っていた会場は二人の攻撃でさらにボロボロになっていたが、どうでもよかった

「私……思うんだ。私の命に、意味や価値なんてないって……」

「……誰の命だって、意味や価値はないんだと思うよ。あたしの命だって、鏡華の命だって——でも、それはたった一人、自分自身だけの命の時だけだ。他人がいれば意味や価値が出てくる。あたしの無意味な命は翼と鏡華が、鏡華の命は私と翼が、そして翼の

命は私と鏡華が意味や価値を決めてくれるんだ。あたしはそう考えてるし、それを感じてきた」

「それじゃあ私の命の意味や価値って何？」

「自分で見つけるものじゃないかな」

奏の言葉に翼は「奏は私に意地悪だ」と返す

でも、意地悪な奏は「今は」いない

鏡華が言っていた

二年前と変わらず、と

つまり奏は未だに覚めることのない夢の中にいるのだ

それはいいないのも同じだ

「それはちよつと違うとあたしは思うな」

「え……？」

「あたしがいるのか、いないのか——それは翼が決めることさ」

「私が？ だったら私は——」

いない——なんかと考えない

奏はいる。いつか眠りから覚めて鏡華みたいに戻ってきてくれると信じる

それが気持ちとして表れたのか、景色が会場から水の中に変化する

いつの間にか奏は少し離れた場所にいた

「時間だ。戻らないと鏡華が心配するしな……」

「奏……」

「安心していいよ翼。片翼あかしは必ず舞い戻ってくる。そしたら、鏡華と三人でまたツヴァイウイングとしてどこまで飛んでいこう」

「……うん！」

「それじゃあまたな翼」

そう言つて背を向ける奏

翼はその背が見えなくなるまでずっと見続け——

「あ、そうそう。あたしの眼が覚めたらさ、一緒に鏡華に告白しようぜっ」

「へう!？」

——ることはできなかつた

♪♪♪♪♪♪♪♪

静かに、翼は眼を開ける

それを見た看護士が医師に報告

急いでメデイカルチェックを行おうと指示を飛ばす医師

それをポットの中で見ながら外を見た

外は太陽が空高く昇り、蒼く染まっている

耳を澄ませば、校歌が聞こえてきた

まるで、自分だけが外と切り離されゆつくりと時間が進んでいるかのよう

(そっか。私、仕事でも任務でもないのに学校休むの初めてなんだ)

精勤賞は絶望的かな、と毎年取っていた賞を思い出す

ついでに夢に見た奏の言葉も

(告白か……。恥ずかしいけど、奏と一緒にならどんな結果になっても大丈夫だと思う。

でも……)

奏と一緒にでは昔のままだ

だから、少し奏に嘘を吐こう

目覚めた奏が知った時が楽しみだ

それまで、無様に生き恥を晒していいようではないか

剣が剣のまま人間ひとに戻れるように――

D.  
C.  
IX

基本的に鏡華は呼び出しがない限り、自宅で待機している

時々風鳴家の屋敷で相手をしたり、してもらったりしているが、いつもはこの家だ  
家には未だに眠り続けている奏がいるから

そう云えば、ここ最近奏からの反応が返ってこないな、と鏡華は思う

息による会話、通称吐息言語も、月の出ている間の繋がりもまったくない  
脈も呼吸も正常なので心配はしていないが

——いや、もう正常以外に“なるわけない”のだが

と、そんなことを考えてると、荒い息遣いが聞こえてきた

長短の吐息言語だ

鏡華は吐息を言葉に変換していく

——ただいま

「おかえり。一体どこに行ってたの？ つーか、その精神体でどこか行けたの？」

そう、問題はそこだ

鏡華となら月が昇っている時限定でどんな場所でも話せる幽霊もどきになれる

だが、それ以外の人間には聞こえるはずも見えない  
精々吐息言語が精一杯のはずだ

しかし奏は翼に会いに行ってきた、と言った

夢の中で久し振りに大暴れしたらしい

「へえ……、それはまた面白い奇跡だね。つーか奏って何でもありだね」

———そっか？

「うん、立花を二度も救って、吐息言語も見つけて、俺以外の人間の夢の中に潜り込む。……ある意味旦那と張り合えるんじゃないか？」

———や、それは無理。ダンナはあれだから、超人類だから無理。あれ、ノイズに使えないのが本当に悔やまれねえか？

「……確かにね。《震脚》だけで足止めに盾、しかもその盾にしたコンクリを《崩拳》や《浸透勁》で碎き飛ばせば、一つの弾丸ができれば。まさにシンフォギアを纏わずに唯  
一「邪魔が」できる人だよ」

奏の言葉に鏡華は頷く

だが、いくら人類を超えるような戦闘力を誇る弦十郎でもノイズに対してできることは「邪魔」だけなのだ

決して「対抗」ができるわけではない

できるのは聖遺物を持つ一握りの適合者——奏者のみ

現時点で鏡華が知っている奏者は六人

まず自分自身である遠見鏡華

使用聖遺物は——聖鞞・アヴァロン

二人目は正規の適合者である風鳴翼

使用聖遺物は——絶刀・天羽々斬

三人目は奇跡により偶然奏者となった立花響

使用聖遺物は——撃槍・ガングニール

四人目は以前より鏡華を標的として狙ってくる夜宙ヴァン

使用聖遺物は——星剣・エクスカリバー（仮）

五人目はヴァンがクリスと呼んだ謎の少女

使用聖遺物は——ネフシュタンの鎧

六人目は眠り姫と化し、唯一〃二つのシンフォギアを使える〃天羽奏

使用〃可能〃聖遺物は——ガングニールとアヴァロン

これだけだ

これ以外は日本政府には確認されていないし、海外でも報告はない

そもそも、聖遺物をシンフォギアとして覚醒することができるのは《櫻井理論》を提

唱した櫻井了子ただ一人

ならば、鏡華とネフシユタンを除き、翼と奏は良いとして、ヴァンのエクスカリバーは一体誰がシンフォギアとして覚醒させたのだろうか

一人だけならば挙げられるが、それでも謎は深まるばかり

———♪

ケータイが鳴り響く

「はい、遠見です」

『鏡華、今どこにいる』

発信者は弦十郎だ

「今は家だけど……どうしたの？ 少し焦ってるみたいだけど」

『広木防衛大臣のこと覚えてるか？』

「ええと……昔、時々研究所で暇してた俺と遊んでくれたおじさんだっけ？ 覚えてる

けど……」

『その広木防衛大臣が先ほど何者かに襲撃され——殺害された』

「え……」

わずかに思考が停止する

あの広木防衛大臣が——死んだ？

そんな、そんな……

「一体どこのどいつがあの人を……！　そう云えば櫻井教授が会いに行くって言つてなかつた!？」

『了子君なら大丈夫だ。今機密指令と共に帰つて来た』

『鏡華つたら心配してくれたのオ？　ありがとオ。お札にキスでも——』

「くだらないことは却下で。——旦那、そっちへ行けばいいんだよね？」

『ああ。至急二課へ来てくれ』

頷いた鏡華は「すぐ行く」と告げ通話を切る

奏が問うと、簡潔に述べる

「奏。俺はこれから二課へ行つてくる。もし目覚めても部屋からは出ないで。一応《遙か彼方の理想郷》を展開しておくから」

——ああ。気を付けろよ鏡華

「うん。——じゃあ、行つてきます」



「ひどいな……」

襲撃現場でヴァンは一人呟く

眼の前には銃弾の雨を降らされ、穴だらけになったモノが広がっていた

車両、そして人が

その身に穴を空けられ、液体を流しきっている

ヴァンの後ろでは二人の男性が立っている

どちらも一目では誰か分からない恰好をしていた

「Hey, Van. It will withdraw soon. We are dangerous if it does not come out.」

(ヴァン。そろそろ撤退するぞ。でなければ俺達が危ない)

「Jean who understands, but, I think whether this is the way which we aim at if. It cannot but see.」

(分かっているジャン。だが……これが俺達が目指している道かと思うと、な。見ないわけにはいかないんだ)

「Van.」

(ヴァン……)

友人の言葉を気にしつつも、ヴァンはもう一度骸や残骸を見遣る

直接手を下していなくても、これを命じたのは自分の雇い主だ

こんなことをして本当に平和が訪れるのだろうか

否——来るはずがない

むしろ自分達が増やしている

あの女はそれを分かかっててクリスを、そして自分を利用して

恐らく、時期が来たら捨てるつもりだろう

協力関係にあるジャン達も含めて

「好きばつかできると思うなよあの裸族……」  
クソおんな

吐き捨てたヴァンは黙祷を捧げるとジャン達の下に駆け寄り、二人の腰に手を回す

「It flies to the junction to which I will return. Jean and Edward a face can be hidden firmly.」

(帰ろう、合流地点まで飛ぶ。ジャン、エドワード、しっかり顔を隠せ)

「All right.」

(大丈夫だ)

「He leaves.」

(任せる)

そしてヴァンは大人二人を抱え、空に跳び姿を眩ませた  
二課の職員が駆けつけたのは、それよりすぐ後だった

# D. C. X

防衛大臣であつた広木が殺害され、数時間が経過した

あれから、二課では上層うへからの命令でサクリストD——デュランダルを現在保管されてる最深部アビスからの移送が決定された

移送先は記憶の遺跡と呼ばれる特別電算室

鏡華も知らない場所

弦十郎は「お上の威光には逆らえんさ」と言っていた

決行時間は05:00——マルゴ マルマルつまり明朝五時

鏡華と響はそれまで二課内で休息を命じられた

「鏡華。奏はどうしておいたんだ」

「二応、俺の唱で身体を隠しておいた。記憶の遺跡に移送し終えたらすぐに帰るつもりだよ」

「そうか……」

弦十郎とはそれきりだった

どちらも広木のことか口に出てしまいそうだったからだ

通路を歩いていると響がソファに座っていた  
落ち込んでるように見えるが、

「おい立花。その恰好だとパンツ見えるぞ?」

「へう!?!」

鏡華が声を掛けると変な悲鳴を上げながら足を下ろす響

遠見先生、と呼ばれ「うん」と返しバックを挟んで隣に座る

「どうかしたの?」

「いやあ……未来のことで……」

「……そっか。また嘘を吐いてきたんだ」

「はい……。未来、きつと怒ってるだろうなあ」

「だろうね。でも、小日向は怒らず困った顔をしそうだ」

そうかもしれないです、と響はまた膝を抱えようとする

慌てて止める鏡華はそこで咳き込む

抱えるはずだった手は空振り、代わりに手元のテーブルに置いてあつた新聞紙を掴み、捲る

何気ない仕草で捲ったページに眼を落とすと、そこにはグラビアアイドルの扇情的な写真が載っていた

「ひっ!？」

「ごほっ、けほっ……どうした——って、ああ、グラビアか」

「お、男の人ってこういう写真とかすけべえな本とか好きですよねえ!? もしかして遠見先生も好きなんですか?」

「いや、俺は嫌いかな。見ていて不快」

「そ、そうなんですかあ……それはよかった……」

いや、別に響はどっちでもいいのだが、未来が少しショックを受けそうなので

響は内心ほっとする

新聞紙を元に戻すと、今度は裏面が眼に映る

一面の半分以上を占める翼のアイドル休止情報だった

大文字で過労で入院と書かれている

「これ……」

「情報操作も僕の役目でして」

「緒川さん……」

いつの間にか緒川が眼の前に立っていた

相変わらずの黒スーツだ

「翼さんのことですが、一番危険の状態を脱しました。ですが、しばらくは二課の医療施

設にて安静が必要です。——月末のライブは中止ですね」

ファンの皆さんにどう謝るかお二人も考えてくれませんか、と続ける

鏡華はほつとしながらもフォローを入れておく

「緒川さん、俺は構わないけど、その言葉だと響も悪いって言ってるようなものですよ」

「あつ……いや、そんなつもりは。すみません響さん」

取り繕う緒川に響はくすくすと笑う

緒川も「はは……すみません」と謝る

「伝えたかったのは、何事もたくさんの人間が少しずつ色んな所からバックアップして  
いると云うことです。だから響さんも、もう少し肩の力を抜いても大丈夫じゃないんで  
しょうか」

優しいんですね、と響

恐がりなだけです、と緒川は返す

本当に優しい人は別にいるとも

「ありがとうございます、少し楽になりました。私、はりきって休んでおきますね」

二人との会話である程度気持ちが晴れたのだろう

響はそう言うのと頭を下げ、仮眠室へ走っていった

それを見送る鏡華と緒川

「翼さんも響さんくらい素直になってくれたらなあ」

「あいつは立花以上に素直ですよ。ただ、それを面と向かって出せないだけです」

「……幼馴染としての意見ですか？ それとも……」

「その両方ですよ」

鏡華は笑うと頭を下げ、自分も与えられた仮眠室へ向かう

一人見送った緒川は、

「鏡華君はもつと仲間を頼るべきですよ」

一人、そう呟いた

♪♪♪♪♪♪♪

天下の往来独り占め作戦

妙なネーミングセンスで付けられた作戦名に若干やる気が削がれながらもそれぞれ

持ち場についた

デュランダルは了子の車両に

響も同じくそこに

その自動車を四台の黒塗りの車両に二人で護衛

弦十郎はヘリで上空から監視

鏡華はここに

朝早いので一般車両はあまり通らない

それに加えて封鎖も加えているので、誰も通ることはない

響、了子が乗る車両は十字に護衛の車を伴い普段出せない速度で走らせる

上空からは鏡華と弦十郎がヘリから身を乗り出して周り約数十メートルを監視

そして——それは突然に発生する

突然、了子達が乗る車両の通過直前の橋の一部が砕け、落ちた

「ツ、了子さんー！」

「ツ——！」

冷静にハンドルを右に切り、落下を免れる

その代わりなのか、左側を護衛していた車両が避けきれず落下した

「ツ——旦那ッ、乗ってた人達は!?」

「全員無事だ! ……下水道だ! 下水道から来ているぞ!」

今、響と了子の乗った車両が過ぎた瞬間にマンホールから水が噴き出た

後方を走っていた車両はちょうどその衝撃を受けて吹き飛ば

さらにもう一台同様に吹き飛び響と了子の乗る車両に落ちるが、ぎりぎりの所で避け

た

「わざと当てないようにしている……? やっぱ完全聖遺物デュランダが目的か」

「相手がデュランダルの確保なら、敢えて危険な場所に滑り込み攻め手を封じるっていう寸法だ!」

鏡華と弦十郎が同時に叫ぶ

この時、護衛の車両は最後の一台もノイズに奇襲され爆散  
残りはデュランダルを運ぶ響と了子の車両のみ  
故に弦十郎は近くの薬品工場へ行くように指示

『勝算は?』

「思いつきを数字で語れるかよ!」

その叫びを聞き、了子は工場敷地内へ車両を滑り込ませる

だが、運悪く地面に敷かれていたパイプにタイヤを取られ、転倒した

「南無三!!」

「ツ、旦那! 俺が行くつ!」

言うと同時にへりから飛び降り、騎士甲冑を纏う

さらにプライウエンを具現

その上に飛び乗る

——空航る聖母の加護——

盾にして船

それがプライウエンのもう一つの姿だ  
滑るように空を舞い、降りていく

次の瞬間、

——天降る流れ星——  
シューティングスター

天空より黄金の雨が鏡華に降り注ぐ

否——それは剣

星が鍛えし幻想剣！

「ッ——！」

——護れと謳え聖母の加護——

船としていたプライウエンを盾として掲げ、黄金の剣を防ぐ

だが、空を飛ぶ方法を失った鏡華は黄金の剣が当たれば当たるほど落下の速度は増していく

「あんの野郎……薬品工場でなんてモン撃ち放つてんだ」

悪態を吐きながら盾を上に掲げながら体勢を整え、地面に着地する

眼の前で車両の爆発で吹っ飛ばされ、倒れている響と

「詳細の不明な障壁でノイズを防いでいる了子の姿  
 衝撃の影響でか、了子の髪留めと眼鏡が吹き飛ばされ素顔とストレートに戻った髪が  
 露わになる」

それを見て、鏡華はわずかに見入ってしまった

その姿、その髪、その謎の障壁——

——まさか……？

「呆けている暇はないぞ遠見鏡華」

いつの間にも後ろを取っていたヴァンがエクスカリバーを上段から振り下ろす

横っ飛びに避けると、鏡華は手にロンを具現し、投擲

弾くように軌道を逸らすと、鏡華へ向かって突貫

袈裟に振り、次いで振り上げ、蹴りも交ぜた横薙ぎを

避け、ロンで防ぎ、カリバーンで交差させる

一拍呼吸を置くと、わずかに距離を取る

「……面倒臭いな、ほんと」

「まったくだ。だが、俺はどうしてもお前の聖遺物が必要なんだ。それがあれば……」

「やめておけ。アヴァロンはお前が思っているほど良いものじゃない。人を不幸にす

る」

「……ふん。話は終わりだ。あちらも始めている。こちらも始めよ——」

その刹那

—輝ッ！

ある方向から凄まじい光が発せられる

同時に何らかのエネルギーが風を巻き起こす

弾かれたようにそちらを向けば、響がデュランダルを握り立ち尽くしていた

「なに……」

「完全聖遺物の覚醒……だと」

ありえない、とは云わない

鏡華本人も完全聖遺物を覚醒させているのだから

だが、それでも言いたかった

ありえない——と

「おい遠見鏡華。デュランダルの伝説を簡潔に話せ」

鏡華と同様に呆然と眼の前の光景を見詰めているヴァンが呟く

「デュランダル——フランスの叙事詩に登場する聖剣。聖と云う名を冠するだけあり、その柄には聖母マリアの衣服の一部や聖ペテロの齒など数多くの聖遺物が納められ

ている。恐らく伝承にある無限の力と高き切れ味はそこからだ」

「ちつ……貴様が最強の守りなら、あれは最強の攻めと云ったところか」

分が悪すぎる、とヴァンは吐き捨てる

(アレがあれば……どうにかなるのに……!)

同時に駆け、クリスの元へ

「クリス、撤退だ。相手が悪すぎる」

「だ、だけどデュランダルは……あたしは……」

「いくら完全聖遺物<sup>ネフシユタン</sup>だろうと——いや、ネフシユタンだから不味いんだ。まだいくらでも機会はある」

「……………」

ちらりとクリスは響を見る

鏡華が話しかけているが、まったく反応しない

それどころか、こちらに向けて黄金の光を放つデュランダルを振り下ろしてきた

「ツ——」

「退くぞクリス」

半ば引つ張られるようにクリスはヴァンと共にその場を後にする

残った鏡華は防ぐことなどできず振り下ろされる範囲から避け、様子を見届けること

しかなかった

結局——

護送計画は何がなにやら分からないまま中止の運びとなった

薬品工場は響が振り下ろしたデュランダルの一撃で中枢塔が両断こそしなかったものの、内部まで切断されていた。さらに敷地内は戦闘により半壊

工場閉鎖は余儀なくされた

そして——

「櫻井教授。さっきの障壁は一体……」

「いいじゃない、別に。みんな助かったんだしイ」

「……………」

一つだけ確信できた

櫻井教授は。櫻井了子は、 “了子おばさん” は——

ようやく見つけた “目的” の可能性が高いと

確信、してしまったのだった

## D. C. XI

葬式場とは本当に居心地が悪いものだった

鏡華にとって死のイメージが強く描かれるものであり、畏怖している場所の一つ他にも死のイメージを連想させる場所は他にもあるのだが

葬式場はその中で最も死を感じさせる場所だった

視覚、聴覚、嗅覚、触覚——

味覚以外の四感でそれを感じてしまう

「……やっぱ駄目だ。葬式の匂い」

「俺は無理強いはしていないからな。苦手なら来なくてもよかったんだぞ」

「そうはいかないよ。あの人は関係ないはずなのに両親の葬式に来てくれたんだ。なら、俺だって行かなくちゃ」

両親の葬式が執り行われたのは事故が起きてから十年も経ったある日だった

当時鏡華は幼くしてソングライターの資格を取得。一曲目がヒットし世間で神童と囃されていた頃

両親の葬式は自分の金で何とかする。鏡華はそう決めていた

「あの時は驚いたぞ。十にも満たないお前に『葬式のお金は自分で集めて、やる』なんて言われたんだからな」

焼香と読経を済ませ、外に出る鏡華と弦十郎

朝早いこともあり、朝食を用意してくれていたが、謹んで辞退し車両に乗り込んだ部下は引き連れておらず、弦十郎が運転し、鏡華は助手席に乗った

「まあね。でも、せめてそれぐらいやらないと安心してもらえないって思ってたから……」

「そうか。だが……まさかあんなことになるなんてな」

「……ああ……」

思い出したくない記憶が窓の外の景色に上映される

両親の葬式は滞りなく済んだ。——葬式は

問題はその後だった

鏡華に質の悪い親戚が増えた

た  
葬式にも出てない遠い親戚から、金を無心する電話や手紙が送られてくるようになって

だが、そんな人間は別に構わない。知らない相手であれば着信拒否や居留守、破り捨てればいいだけだから

弦十郎や翼、奏、仕事関係はすべてケータイにすれば完全に片付けることができた問題は身近な親戚——祖父母や叔父叔母関係である

後から弦十郎の調査（私用で使うのはどうかと思うが）で判明したのだが、親類の多くは祖父母を中心に音楽家崩れが多く、鏡華が音楽家になったのは親類にとって恰好の暇潰しの種にされたのだ

一応葬式の場合で知らせた鏡華の家は「教えてしまっていた」  
時には電話で、予告もなくふらりと訪ねて来て

「お前の歌詞は幼稚すぎる」

「何を伝えたいのか分からん」

「音楽とはこうあるべきだ」

「神童と囃されて浮かれるな」

「本当の音楽家と云うものは」

「ウチへ来い。音楽界の何たるかを伝授してやろう」

正直気が狂いそうだった。一人だったら間違はなく狂っていたはずだ

そして、言いたいことだけ言って、帰り際には必ず交通費をせしめて帰る

——遺産すら寄越さないんだ。これぐらい安いものだろう

そう言って、交通費以上。最悪徒歩や歩きで来たにも関わらず

——ああ、そっか

鏡華はその頃によくやく親類達が自分に関わる理由を見いだした

彼らは別に俺が可哀想など「くだらない」理由で接近してきたわけじゃないんだ

ただ、金が欲しくて——俺と云う名声の成った木が欲しかっただけ

「あの後、俺は両親の写真とか何やらを手元に残して家を解体。旦那と翼の家に厄介になつたんだよな。一人で生活できない頃みたいにな」

景色から眼を離し、手袋に包まれた手の平を見つめる

今着ている手袋やコートも父が愛用していたものと同じ品のスペアだ

遺品は風鳴家に保管してある

「旦那。そういうや、あれから二年経ったけど、ウチの親戚はどうしてんだ？ 相変わらず

後見人《ダンナ》に手紙送ってんの？」

「いや。もう諦めたのか、うんともすんとも言ってきてない。ただ……やはりあちこちで吹聴しているみたいだ。しかも最近はその子供達までもそれを做つて吹聴している」

「……ちつ……」

「それに、最近世間にお前が生きていたという情報が少しずつだが広まり始めている。親族達に知られるのは時間の問題だろうな」

「……ま、それ覚悟で戻ってきてんだ。そこから辺でバレたなら俺がなんとかする」

「死亡と発表された当時は鏡華が相続した遺産と鏡華の分の金まで相続する言つてな、事務所にまで乗り込んでできたことがあった。当然偽の遺書で全てツヴァイウイング——翼の資金に回した——と、しておいた」

自分がいなくなつてからのいざこぎに「ありがと」と素っ気なく返す

ツヴァイウイングが人気になるにつれ、親戚達が手の平を返すことなど予測できていた

「……寝る。着いたら起こして」

鏡華は背凭れを倒すと瞼を閉じこれからの予定を考える

一人でいても、頭は働かないだろう

だったら、帰ったら翼の見舞いに行こう。仕事は忌引きで休みを入れてある  
ラジオから流れる音楽に耳を傾けながら、鏡華は思考を手放すのだった

♪♪♪♪♪♪♪

心地よい風が吹き翼の髪を優しく揺らす

耳には囁くような小さく、しかしはつきりした穏やかな歌が届けられる

まるで風を操り、風を楽想しているかのよう

朝早く無理して動いていたら、グラウンドで立花と小日向を見た

それから少し疲れたからベッドで横になっていたらいつの間にか眠ってしまった  
たようだ

——胸の痛み、感じてる——

——私、あなたに恋してるのね——

声の主は優しく、切なく歌い続ける

眠っていた少女——風鳴翼はゆっくりと閉じていた瞳を開く

彼はベッドの横に置かれていたイスに凭れながら歌い続けていた

その手には楽譜があり、ペンが楽譜の上を踊るように動かされていく

また新しい歌を書いているのだろう

——この想い、聞かせてあげる——

——応えてくれる、よね——

そして

最後まで歌い終わり、彼は

遠見鏡華は楽譜から顔を上げ、翼に視線を向ける

「きょう、か……」

「おはよう翼。もう昼だよ」

—— ああ

どうして、あなたは

あなたはそんなに穏やかに笑ってくれるのだろう

私は死すら厭わずに、鏡華のこともかんがえず絶唱を唱つたと云うのに怒らないの？

ただ、立花に覚悟を見せるために

鏡華にどこにも行つてほしくなくて

胸がずきり、と痛む

だけど、それ以上に胸が暖かい何かで包まれる

それは嬉しいと云う—— ううん、違う

これは恋慕

無機物つるぎぶつでは感じられない有機物ひとのこころ

「鏡華」

「うん、なに？」

「おかえり。—— ただいま」

言えなかつた一言

再会した時に言えなかつた言葉をようやく私は紡ぐ

そして——

「うん、ただいま。——翼もおかえり」

「鏡華」

「うん」

「鏡華——大好きです」

「——」

この想いを彼に伝える

奏は一緒に言おうぜ、とか言ってたけど

わざと私は一人想いを告げる

「ずっと——ずっと、大好きでした」

だって——

奏は私に意地悪だから

だったら私もたまに奏に意地悪していいと思う

鏡華は楽譜とペンを散らかっている机に置くと「隣いい？」と訊く

翼は「うん」と頷き、上体を起こすと少し横にずれる

その開いた隙間に鏡華は座ると、翼の手を握る

自分の手袋に包まれた手を絡めて

翼はその肩に頭を預ける

「俺も翼が好きだ。愛している。……奏と同じくらいだけど」

「……どちらか選べないんだよね」

「うん。翼も奏も大切で大好き。どちらかなんて選べない。二股だろうと俺はこの選択  
しかない。でも——」

——ごめん

ごめんなさい、と鏡華は言った

口調だけが泣いているみたいだった

「どうして謝るの？」

「だって……だって、俺はもう——俺と奏は翼と同じ時間を生きられないんだ」

## D. C. X II

「だって……だって、俺はもう——俺と奏は翼と同じ時間を生きられないんだ」

鏡華の言葉は翼にとって意味が分からなかった

言葉の意味だけは判別できる

だけど、その理由が見つからない

鏡華は絡めた手を離し元のイスに座る

「俺は十五年前、両親と旦那の四人でとある遺跡見物に出掛けたんだ。そこでノイズの襲撃を受けて、俺と旦那以外助からず遺跡も全壊した……ってのは以前話したことがあつたよね？」

「うん」

「その時は話さなかったけど……その時、俺は腕が炭化したんだ」

「え……っ!？」

「お父さんとお母さんの機転でその遺跡で偶然見つけたアヴァロン——騎士王の鞘を埋め込んだおかげで腕も再生、怪我也擦り傷程度になったんだ。でも、二人はその埋め込んでいる最中に炭化」

「そう、だったんだ……」

翼はまさかそんなことがあったなんて知らなかった

教えてもいないのだから知らなくて当然だが

「そして俺は旦那に引き取られ、極秘に体内の鞘を調査。それで正式に聖遺物って分かってアヴァロンになったんだ。当時は発動せずにいたから反応を検知されずにいた」  
 「あ、だから鏡華は研究施設にいったんだね。叔父様といるのはてつきり寂しいのかと……」

翼の言葉に鏡華は苦笑する

——まあ、確かに良い隠れ蓑にはなったね

「で、奏にも会って、二人といたいから必死に音楽の勉強して、どうにかソングライターの座を手に入れて——あの事件が起きた」

「ノイズのライブ襲撃……」

「うん。あの時、俺は奏を死なせないためにアヴァロンを無理矢理発動させた。奏を助けられたから後悔とかはまったくないんだけど……アヴァロンの代償に少し落ち込んだかな」

「……代償」

「そう、代償。そもそも絶唱は奏者に対する負担を完全に無視した自爆技。奏みたいに

身体がぼろぼろだと身体が消滅するらしいし、翼みたいに適合率が高くとも瀕死まで追いつめる」

身に染みたでしょ？

そう訊く鏡華に翼はこくりと頷く

今思い出せば、どんなに危険なものか怖くなってくる

あの時の痛みは忘れようもない

「でも、鏡華は少ししか血を吐かなかったよね？ 私はてつきりアヴァロンの治癒能力が高いんだと……」

「まあ、その予想は概ね間違っていないけど……代償はもつと別のモノだったんだ」

鏡華は手袋をはめた手を見つめ、胸に当てる

「代償は二つあってね、一つは——不老不死。一度発動すれば、殺されても死なないし、死にたくても死ねない。老いもしないし、成長もしない。伝承通りの能力だよ」

「だけど、と」

「こんなもの奇跡でもなんでもない」

「ただの——呪いだ」

「ッ——、そんな……」

「これは一度身に埋め込むと解除が不可能だ。そして——俺は知らずに奏に埋め込

んだ」

「あ……」

「これは後で気付いたんだけど、アヴァロンを分割して埋め込むと不老不死はなくなるみたいなんだ。だけど、成長速度はかなり遅くて、怪我をしてもすぐに治る。寿命まで生きて——死ぬだけ」

それに、と鏡華は言う

手袋を外した

露わになった手を見た翼は眼を見開き絶句し息を呑む

昔は華奢で白く、女の子みたいだと思っていた手は——

ほとんどの面積を裂いたような傷が占拠していた

それもただ裂いたような傷跡でない

ただ裂いた箇所を無理矢理広げたような傷

肉が見えているわけではないが、血がまるで肉のように傷の中で固まっている

「ツ——!?!」

「どうやら俺は櫻井教授曰くのアニミックゲインって奴が高いわけじゃないみたいだ。だからこんな風に身体に付加が掛かっている。もし、これが普通の完全聖遺物だったら発動しないだけ。だけど——ネフシユタン以上の治癒能力が仇になったのかな?」

「そん、な……」

手を裏返し、手の平を上に向ける

手の平にも傷跡はびっしりと刻み込まれている

鏡華は自身の手を数秒見つめると、手袋をはめなおす

「分かった？　これが俺が翼といられない理由。もちろんこれから十年ぐらいは一緒にいれる。だけど、俺は翼が活着ている間は絶対に年を取ることができないんだよ」

「……………だから、なに」

「え…………」

「だから、それが何だって言うの!？」

ぐいっと鏡華の胸ぐらを掴むと自分の方へ引き寄せる

ああ、殴られるかな、と思った鏡華はされるがままを受け入れ、眼を瞑る

そして、次の瞬間に感じたのは、

「んっ…………」

「むっ…………」

唇に感じる柔らかい感触

何が何だか分からず眼を見開く鏡華は、超近距離に迫った翼の顔を見遣る

唇はわずかに逸れていたが、だいたいが重なっている

それでも、本当に柔らかく、抗えないであろう感触

それを認識した瞬間、顔が離れる

「な、なななんで……!」

「鏡華ッ!」

「は、はいっ!」

「私のこと、好き!」

「はいいつ!」

「好きか嫌いかわ。はつきり言いなさい!」

「だっ、大好きですっ!!」

翼の迫力があまりにも恐く

直立（のような感じ）で答えてしまう鏡華

翼はだったら、と続ける

「私のことが好きならっ——ッ」

「えっ、ん……!」

翼は漏らしそうになる嗚咽を隠そうと、もう一度鏡華の唇を自分の唇に重ねる

今度は初めから一番深く重なった

鏡華は困惑していたが、重なった唇に新たに加わる感触を感じると

一度唇を離し、お互いの呼吸を整えてから

再三、しかし今度は鏡華から唇を重ねた

誰かがこんなことを言っていた気がする

初めてのキスはとても甘いモノだと

——んなの、真つ赤な嘘じゃねえか

鏡華はキスに没頭しながら内心で吐く

一度目は驚きで柔らかいって云うぐらいしか分からなかった

二度目、三度目は——

少ししよっぱくて——すごく切なかった

♪♪♪♪♪♪

「ねえ、鏡華」

「うん？」

「私も……私にもアヴァロンを埋め込んでくれない？」

「……………」

「成長速度は遅くても少しは早くなったんだよね？ だったら私も埋め込めば、もっと

早くなるんじゃないかな。そうすればある程度元に戻るし、何より私達三人とも最後まで一緒にいられる」

「……………確かにそうかもね」

「じゃあ——」

「——でも、今は駄目」

「ツ——、どうして？」

「たとえ本気だとしてもこんな大切なことをこんな風に考えるのはよくないから。少なくとも翼には考える時間があるんだ。だから、考えて欲しい。俺達が考えられなかった分まで」

鏡華はしやがむとベッドの端に腕を交差して置き、その上に頭を乗せる

その時、ケータイが鳴る

翼は自分のを見るが、自分のは鳴っていないかった

鏡華は「俺か」と呟くとそのままの姿勢で耳に当てる

「はい、遠見です。ああ、緒川さん、どうしたんですか？ ええ、まあはい。……あ、じゃあ俺からの頼まれごと一つーことで立花にも連絡しといて下さい。ああ、お友達もいいよとも。ええ、了解です、お気を付けて」

ケータイをしまった鏡華は視線だけを上げる

翼が少し膨れっ面をしていた

「……鏡華けーわい」

「はい、そこ逃げない。立花だつてあれから色々悩んでたんだ。たぶん小日向も来るからシンフォギア関係は話せないけど——そろそろ向き合ってみようよ」

「……………」

「ちなみに俺はちよつと睡眠不足だからこのまま寝させてもらいます。俺の助けはないと思つてね」

「……分かった」

「素直でよろしい」

鏡華は微笑むともどもぞと身体を動かし

最適な姿勢になると——数十秒後、すぐに寢息を立てて寢入ってしまった

本当に寢不足だったようだ

翼は鏡華の髪を梳くと仕方ないように微笑み、こちら側の手の下に自分の手を差し入れた

戦士は楔は解き、新たな絆を紡ぐ

そして——待つ

自分が否定した少女がどんな覚悟を持ち、ドアをくぐるのを

## D. C. XIII

「はい、はい……分かりました。それじゃあこれから行きます！」

『お願いしますね。翼さんと鏡華君にもよろしく』

響はケータイをしまおうとふうと息を吐く

後ろには未来が数段上の階段に立っていた

「どうしたの響？」

「あ、うん。たった今用事ができたんだけど……未来もよかつたら一緒に行かない？」

「え？ うん、いいけど……どこ行くの？」

「えつとく……行けば分かるよっ」

少し隠し気味の言葉に首を傾げる未来

響は「とにかく行こっ、行こっ！」と未来の背中を押す

初めに寄つたのは病院の中の売店

そこで花を数輪買う

「誰かのお見舞い？」

「うん。未来も知ってる人だよ」

「……………?」

そこから緒川に教えてもらった病室まで行く

眼の前まで来ると響は深く呼吸をし、心を落ち着かせる

「響? 入らないの?」

「は、入る! ……失礼しまゝす」

とか言いながらドアを開けず、ノックをする

ドアの奥から「……………どうぞ」と聞こえた

その声に未来はええ、と耳を疑った

今の声を未来は知っている

と云うか、知らない人は滅多にいないだろう

「今度こそ、失礼しまゝす」

左脇のパネルを操作し、ドアを開ける

開け放たれたドアから響と未来は

「—————」

絶句した

響は翼を知っていたので翼〃本人〃には驚くはずがない

未来は翼とは知らずに入ったので病室の患者が翼だと云うことに驚き

そして部屋の「中」を見てまた驚いた  
汚い。本当に汚かった

雑誌は積まれたり開かれた状態で床に捨てられていたり

何個も使った後のコップがテーブルに置かれていたり

服が様々なところに脱ぎ散らかされていた

下着だけは鏡華が片付けておいていたが

「……どうしたのよ。入らないの?」

翼だけが少し不機嫌そうに訊ねる

その様子からああ、これが普通なのか? と思ってしまう未来

だが、響だけは違った

「な、何があったんですか!? 遠見先生と喧嘩でもしたんですか!? それともファンの

人が強行突破してきて先生と乱闘もしくは暴れたんですか!?!」

「何言ってるのよ。何でそんな飛躍した……」

そこまで言ったところで翼ははっとして辺りを見回す

周りに錯乱しているゴミ、本、服、etc

しまったと思つた時にはもう後の祭り

様々な想像をマシンガンの如く連ねていく響の言葉を顔を真っ赤にして受けるしか

なかつた

「ひ、響……ちよつと」

「もしかしてライバルアイドルからのこう——ほえ、どうしたの未来？」

「多分だけど……」

「へ？ ……え、あ、あ……えつと……」

答えず顔を赤らめて俯くのが答えみたいなもの

とつても納得してしまい新たな言葉が見つからない響だった

ついでに未来はこの光景のおかげで翼に対する驚きはなくなっていた

♪♪♪♪♪♪♪

「もう、そんなのいいのに……」

ベッドの横、鏡華の横に座りながら翼は言う

その頬は赤いままで、指は——寝ている鏡華の頬をつんつん突いていた

「ん……にゅ〜」

「ふふつ、相変わらず、にゅ〜、か♪」

鏡華の寝言（？）に忍び笑う

その間に響が言葉を返していたのもしっかり聞いていた

「それにしても以外でした。翼さんって何でも完璧にこなすイメージがあつたから」

「私はその、元来こういつたことに気が回らないんだ……小日向もすまない」

「いえ……、それより、どうして翼さんは私のことを知っているんですか？」

本を整理していた未来の問い掛けに翼は一瞬だけ言葉に詰まる

そう云えば鏡華から言い訳を聞いていなかったのだ

だから、「き、鏡華がよく話してたんだ。立花と小日向っていう面白い奴がいる、と」

とちらりと鏡華を見ながら言う

幸い疑うことなく信じてくれた未来

「そうなんですか。……あの。……鏡華先生とは——どういつた関係なんですか？」

「鏡華から聞いてないの？」

「幼馴染兼家族ってなら」

少し伏し目がちにそう答える未来に

——ああ、そうか

小日向、鏡華このこが好きなんだ

そう、乙女のカンとやらで確信してしまう翼

他を片付け終えた響はきよるきよると交互に視線を彷徨わせている

「もしかして……恋人とか？」

「恋人、か……。確かに私は鏡華が好きで、鏡華も好きだと言ってくれた」  
「だけど、実際はどうなんだろう」

鏡華は翼を好きと言った

しかし、同時に奏も好きだとも言った

どっちも同じくらい大好き

どちらか片方なんて選ぶことはできない  
だから、

「——だが、私と鏡華は恋人ではない」

こう云う他ない

見ると、未来はほっとしたような表情をしている

やっぱりこの子は恋している

故に翼は、

「でも、あなたには渡さないから」

「ツ——!?!」

「鏡華は私と奏のモノ。欲しかったら——力づくで私達から奪ってみなさい」  
にやりと挑発じみたセリフを言う

言われた未来は息を呑むが、一度深く息を吸い込むと

同じような笑みを浮かべ、

「分かりました。翼さんからでも、きつと……奪つてみせますっ」

そう、宣言した

翼と未来は「ふふふふ」と笑う

二人だけにはきつと間に火花みたいなモノが散っているのだろう。……多分だが

蚊帳の外状態となっていた響は、乙女の戦いにあわあわしていたが、二人が気付くはずもない

しばらくそうしていると、未来は視線を逸らした

視線の先には鏡華の顔と、その頬をつんつんしている翼の指

そう云えば、こんな無防備な顔見るのは初めてかな、なんて思いながら未来は鏡華の顔を覗き込む

「鏡華先生って肌綺麗ですよね」

「ええ。手入れしなくても毎日綺麗だったから凄く羨ましい。……触ってみる？」

「え、いいんですか？」

いいわよ、と翼はそう言って少し横にずれる

未来はお礼を言ってから指を突き出し

恐る恐る肌に触れてみる

キメ細やかな肌

その感触をつんつんと、ぷにぷにと楽しむ

「うにゅ。にゅ〜……」

「ぶっ。にゅ〜、ですかっ?」

鏡華の寝言(?)に響は笑う

翼と未来も笑い、未来はさらに悪戯しながら「可愛いな」と思う

元々鏡華は女の子のような顔立ちだ

普段の言動が言動だから隠れているが、こうして大人しくしていると、妙に可愛いらしい

さらにその寝言だ

これが三人の心をくすぐりまくっていた

しばらくそうやって遊んでいると、不意に鏡華の眼が開いた

「ひゃっ……!」

「うにゅう……はれ?」

その距離にびつくりして、未来は声を上げ、少し背を立てる

鏡華は身体を起こすと、半分しか開いていない瞼で左を見て、

「……………」

右を見て、翼に気付き呟く

それからぬぼーっと、一分が経過

ぽりぽりと後頭部を掻き、未だ半開きの眼で

「うに……久し振りに深く寝たあ……」

「鏡華。ここに在る面子に対して一言」

翼が訊く

鏡華は翼、響、未来を見ながら、

「えっと……翼、立花、小日向——お腹減ったなあ」

「鏡華、おはよう」

「うん。おはよう、翼」

いつもの笑顔で言った

## D. C. XIV

鏡華は起きると、イスに腰掛ける

大きく欠伸して響を見る

「さて、立花。今日来てもらったのは少し訊きたいことがあるからなんだ」

「訊きたいこと、ですか……?」

首を傾げて未来を見る

未来は「私にも分かんないよ」と当然の言葉を返す

翼はベッドに腰掛けて黙っている

「以前立花のプロフィールを見たんだけどな? 趣味が人助けって書いてあつただけ  
ど、あつてるか?」

「え。あ、はい」

「それは何故? 何故人助けなんて、何の得にもならない”ことをしているんだ? ノ  
イズに襲われている奴相手でもそれができるのか?」

わずかに険しい表情で訊ねる鏡華

それがノイズとの戦う理由を聞かせてくれと暗に告げているように響には思えた

翼に視線を送ると肯定するように頷かれた

しかし、響は真剣な面持ちで「……よく分かりません」と答えた

「勉強やスポーツは誰かと競合わなきやいけないけど、人助けって誰かと競わなくていいじゃないですか。私には特技とか誇れるものが無いから、せめて自分に出来ることのみんなの役に立てればいいかなあつて」

照れるように笑うが、今回は鏡華も表情を変えないことはない

響も笑みを消すと思ひ出すように窓から空を見上げた

「きつかけはやっぱりあのライブからだつたかもしれません。あの日、奏さんを含めてたくさんの人が亡くなりました。でも、私は生き残って今日も笑ってご飯食べたりしています。だからせめて、誰かの役に立ちたいんです。明日もまた笑ったり、ご飯食べたりしたいから」

——人助けがしたいんですっ

そう言つて響は笑う

響の後ろで未来はわずかに気圧された気分でした

少し前まで彼女の人の助けは本当にただの「趣味」でしかなかった

だけど——何故だろうか

今の雰囲気で聞くと——すごく違う

まるで別人みたいだった

鏡華は一瞬だけ笑うと、ぱん！と手を打つ

「なら立花。お前がもしノイズすらも倒せる力を手に入れ、その時思っていることは？」  
「一秒でも早く助けに行きたいです！ 最速でっ。最短で！ 真っ直ぐにつ！ 一直線に駆けつきたい!!」

「なら敵が同じ人間だったならっ？」

「どうして戦わなくちゃいけないのかってという胸の疑問を——私の想いを届けたいと思いますっ！」

「ならその胸に秘めたる思いをできるだけ、強く、はつきりと抱き続けろ。そうすればお前の力になってくれるはずだ」

その言葉を受け、響は「はいっ！」と頷く

「そして小日向」

「は、はいっ」

「前にも言ったけど、小日向はどんな時も立花を信じろ。たとえ嘘をつかれていたとしても許してあげてほしい。お前達の絆は互いを支えあえる大切なものなんだからっ」

突然振られた未来も響と同じように返す

よし、と鏡華は頷くと、

「じゃあ早速——二人でふらわーのお好み焼き買ってきて」

——ずるう

その台詞を聞いた瞬間、翼も響も未来も一様に、派手に滑った

——格好良い台詞が台無しっ!! ——

直後、三人からツッコミを入れられたのは最早言うまでもないだろう

♪♪♪♪♪♪♪

響と未来を見送った鏡華は翼を伴い屋上へ来た

既に点滴も終了していたので補助の杖を突いて歩く翼

「やっぱりあの二人ってどこか俺達に似てるんだよね。翼もそう思わない?」

「そう? そこまで似てないと思うけど……」

「あそこまで仲がいいとこ。片方が嘘をつかなければならない秘密を抱えていること——」

指折り数えていく

挙げられるだけ挙げた鏡華は折った指を広げる

「ほら、いっぴい」

「……まあ、そうかもしれない」

座りなよ、と鏡華

お気遣い結構です、と翼

「それより……鏡華」

「うん？」

「鏡華の覚悟って、何？ 鏡華はどうして——戦うの？」

「……………」

ふっと鏡華は笑う

まるでそれが当たり前のように答える

「俺は翼と奏のために戦っているんだ」

「——」

「翼と奏のためにならどんなこともできるし、どんなこともする。相手が誰であろうと二人のためになら戦う。世界だって相手にしてやる」

これが俺の覚悟——戦う理由だよ

表情をまるで変えず——いや、心の底から笑って答える

その答えに嬉しさがこみ上げてくる

その時、鏡華のケータイが鳴る

またか、と思いながら鏡華は取り出し耳に当てる

「はい、遠見です」

『鏡華、ネフシユタンが現れた！ 響君のすぐ近くだつ！ 響君にも連絡した！』

「なっ……！ すぐ行くっ！」

ケータイをしまうと、「くそっ！」と悪態を吐く

「ノイズか？」

「いや、ネフシユタンだ。しかも……立花の近くだ」

「ッ、もしかして……」

「そのもしかしてだ。——行ってくるっ」

背を向けると駆け出し、柵を飛び越える鏡華

下から生徒の叫び声が聞こえ、その後に「おっと、驚かせて悪いな！」と鏡華の声が聞こえた

くすつと翼は忍び笑うと、

「私もうかうかしてられないな」

そう言つて柵に背を向けた

♪♪♪♪♪

不幸だった

やっぱり私って呪われてるのかなあ、と思わずにはいられない響

鏡華の頼みでふらわーに行く途中弦十郎から連絡が入り、ネフシユタンのあの子がこちらに向かつてきているという知らせを受けた

だから響はごめん、と謝って駆け出したのだが

二人の間をあの子が攻撃したのだ

どちらも攻撃を受けることはなかった

なかったが——攻撃を受けた車両が宙を舞い、未来に落下していたのだ

このままでは見殺しだ

だから——響は歌った

歌い——防護服を纏い

——撃ッ！

落ちてきた車両を拳で受け止め、殴り飛ばした

その姿を——見られた

「ひび、きき……？」

「ッ……ごめん、未来」

もう一度謝った響は巻き込まないように森へ消える

クリスも当然のこと、それを追いかける

呆然と見ているしかない未来

そんな未来に、誰かが手を差し伸べる

「大丈夫か」

「えっ……」

見上げると、そこには鎧に身を包んだ少年が立っていた

大体自分と同じ位か一個上

黒髪赤瞳の無表情な少年だった

「悪かったな、戦闘に巻き込んで。あいつもやりたくてこんな荒事ライオットをやってるわけじゃない。許してやってくれ」

少年は未来の手を掴むと立ち上がらせる

そこでふと眼が彼の手に握られたモノにいく

黄金の剣だ

その時、

「——おい、ナンパか。夜宙ヴァン」

声が聞こえた

後ろからだだったので振り向く

そこには息を切らした鏡華がこちらを睨んでいる

初めて見る表情にわずかに恐怖する未来

「ナンパなら好きにしろと言いたいが、生憎とそいつは俺の生徒だ。手出しするな」

「ふん。この恰好でナンパなどできるものか。それとも——この場でやるか？」

ちやき、と剣を——エクスカリバーの切っ先を鏡華に向けるヴァン

その行為に驚く未来

だが、鏡華は驚くことなく諸手を挙げる

「やるか、馬鹿。小日向が怪我したらどう責任取るつもりだ」

「……ま、そうだろうな。俺も無意味な殺傷はやりたくない」

かすかに笑うと切っ先を地面に落とす

一息ついた鏡華は小走りで未来に近付く

「大丈夫か小日向」

「は、はい。でも……響は」

「……そうか。知っちゃったんだな」

鏡華の言葉に未来は頷く

そして、鏡華が響と同じ隠しごとをしていることを

直感で感じてしまう

頭の中がぐちゃぐちゃだ

何が何だか訳が分からない

「ネフシユタン少女はどうした」

「立花響の挑発に乗って場所を変えている。居場所は『お前達』の方が把握しているんじゃないか。ああ、それと安心しろ。ノイズは今回は操れない。小日向、だったか？

ここに残しても大丈夫だ」

「……そうか。——旦那、そう云うわけだから一応スタッフを何人か寄越して小日向の保護をお願い」

通話中にしていたケータイを取り出し言う

スピーカーにしていたのか、未来の耳にも男性の声が聞こえた

ケータイをしまうと、鏡華は未来に向き直る

「小日向。そういうわけだからここにいてくれ。すぐに黒服の怪しい人達来るけど、保護してくれるから」

「……はい……」

「……ごめん。また後で俺から説明する」

そう言おうと歌を口ずさむ

すると、一瞬の内に鏡華の服装が変わった  
まるで現代に蘇った騎士

—— 来い、夜宙ヴァン、と

声を掛けると短い助走で跳躍し森の中へ入っていく  
続いてヴァンも「やれやれ」と呟きながら入った

残った未来は呆然と近くの柵へ近付く

そこからなら歌と衝撃音が聞こえ、見えた

それらを聞いていると、自分の頬に冷たい何かが一筋伝うのを感じた  
感情がぐちゃぐちゃになるのを心の奥底から感じながら

未来はただ、涙を流し続けていた

## D. C. XV

鏡華が響の元へ辿り着いた時にそれは解放されていた

ネフシユタンの鎧を解放し、歌を歌っているネフシユタン少女——否、クリス

その素顔が——露わになっていた

「歌わせたな。あたしは——歌が大っ嫌いなんだっ」

「歌が嫌い……?」

鸚鵡返しに聞き返す響

一方、鏡華はどこか引つ掛かっていた疑問に答えが見つかった

(あの顔……それにクリス……? まさか…… “雪音クリス” か!?)

何故、クリスと云う名前ですぐに思い出せなかったのだろうか

雪音クリス——

シンフォギア奏者候補の一人であつた少女だ

それがネフシユタン少女の正体

そして——クリスは歌う

その歌に二課のモニターに識別コードが表示れる

——イチイバルと

包んでいた光が消えると、クリスが新たな鎧を纏って現れた

紅と黒の二色

今度はバイザーをしていない

はつきり云つてネフシユタンとは相反する基調だ

クリスは歌と共に手首のアーマーをボウガンのように変えると、

——発ッ！

深紫の矢を形成——刹那に放つ

鏡華と響は縦横無尽に襲いくる矢をどうにか躲す

躲されるとクリスは、ボウガンを——そもそも、軽量で形も細く作られている単純構造のボウガンなのに“そんな形”になるのは至極おかしいのだが、できることならばスルーしてもらいたい。後でもっと凄い疑問が出てくるので——武装変換し鉄塊にした

鉄塊は円筒形をしており、何やら先端には円に沿って穴がいくつも空いていた

——え？

ボウガンがコンバートした形を見て、鏡華は眼を丸くする

クリスは構わず、“安全装置”を解除する

その鉄の塊は一般的にこう云われないだろうか

「ガトリングガン」——と

「はい？　ちよ、ちよつとクリスさん？　それ、明らかに現代兵器だよね？　何で神様の弓から現代兵器が出てくるんですかっ？」

そんな当然の疑問が鏡華の口から漏れる

一応ここは戦場であり、鏡華とクリスは敵同士なのだから的外れな気がするがそれにクリスはふん、と鼻を鳴らすと、

「あたしの知ったことか。神様だつてガトリングガン使いたいんだろっ」

「嘘つけえええええええ——っ！！」 「嘘だああああ——っ！！」

思わず鏡華と響がツツコミをクリスに炸裂

そのお返しとばかりにクリスは歌を再会し、鉄筒は回転を開始

——BILLION MAIDEN——

森の中に壮絶な爆音が鳴り響き始めた

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

銃とは申請が通り許可さえ下りれば、誰でも携帯できる

現に猟師などはアニメでありそうなハンドガンではないが、ライフルと呼ばれる猟銃を使用している

が、基本は日本人、と云うか日本では許可されていない  
精々アメリカやカナダ、そこから辺りだろう

だが、これは流石に違法ではないのだろうか？

そう、遠見鏡華と立花響に爆撃に近い銃撃を浴びせているクリスを見ながらヴァンは  
そう考える

いや、シンフォギアは存在自体秘匿されているので例外かもしれないが  
ヴァンはおもむろにケータイを取り出すと登録されている相手へ掛ける  
ツーコールで出てくれた

———なんだ、問題でも起きたか

声の主はエドワード

「エド、既存のガトリングガンエグゼストって人が扱えるものか？ 片手に二門、計四門の三連ガト  
リング砲なんだが……」

そう訊ねると

エドワードは息を呑んでから、高らかに笑った

———ハハハ。何を言い出すかと思えば。ヴァン、ガトリングガンは人間が扱うよう

にできてるんじゃないぞ。無論人間が扱えるものはあるが、お前が聞いたガトリングガンは無理だよ。何だったっけ？ 片手に二門の三連ガトリングガン？ それを両手の四門六連ガトリング？ ハハハ、そんなもの制御できるとしたらそりやお前みたいな奏者かバケモンだよ

ケータイの奥で爆笑されていた

だよな、と思うヴァン

ぜひお前に眼の前の光景を見せてやりたいよエド

更には太腿から腰周りを覆うアーマーから——ここでも云わせてもらうが、あんな軽鎧のどこにあれだけの数が入っているのだろうか。技術的にありえない——ずらつと、小型のミサイルポッドを一列五発の二段、計十発を展開し、

——CUT IN CUT OUT——

一斉に射出

追尾型だったらしく、躲した鏡華と響の元へ進路を変更

逃げられず響の後ろで手をかざした鏡華に突貫し、

——轟ッ！

——爆ッ！

直後、更なる爆発が森の中を蹂躪した

安全圏からずっと見続けていたヴァンは一言

—— ライオット 荒事だ……

そう、眩くのだった

♪♪♪♪♪♪♪

久方ぶりの歌を紡ぎ、感情に任せやたらめったら滅茶苦茶に連撃をかましたクリス  
当然ながら過呼吸に陥っていたので身体全体で荒く息を吐く

辺りは爆煙で見えない

だが、あれだけの攻撃を躲しきれるはずがない

そう思った時、煙が晴れた

煙の奥にあったのは、

「ッ——盾？」

行く手を阻む蒼い筋の入った銀の盾

だが、それは違う

決して盾ではない

それは——

「——劍だっ」

弾かれたようにクリスは見上げる

そこに「立っていた」のはあの時絶唱を唱った少女

蒼い鎧を纏う蒼髪の少女

完全に煙が晴れると、彼女が巨大な劍の柄に乗っていることが分かった

「ツ……痛いつ……」

「たた……。翼、さん……?」

「気が付いたか。鏡華、立花」

顔をしかめながら上を見上げる

そこには入院患者であつたはずの翼

「ふん、死にかけてお寝んねと聞いていたが、足手纏いを庇いに現れたか?」

「もう何も失うものかと——任せきるものかと決めたんだ」

「はっ、ほぎけよっ」

ガトリングガンが火を吹く

飛び降りた翼は歌いながら最低限の動きで避けていくと着地と同時に天羽々斬を袈

裟に振るう

翼はクリスを飛び越える。と、その後ろから鏡華が突貫してきた

「ッ——！」

「せえっ！」

カリバーンを横に薙ぐ

ぎりぎりですべて避けるクリスに休ませることなく背後から刃が襲ってくる

舌打ちしながら跳躍し、ガトリングガンとミサイルポッドを放つ

しかし、鏡華と翼はそれに当たらない

飛び上がった鏡華がロンを振りかざし、石突きを炸裂

落下したクリスは着地するも背後から背中合わせに翼が刃を首に向けていた

(こいつ、前より動きが……)

すぐに落下音が聞こえた

同時にキン！ と甲高い音も

鏡華が背中から地面に落ち、その上からヴァンがエクスカリバーを突き刺そうとしている

「翼さんっ、遠見先生っ、その子達は！」

「分かっている！」

「翼に同じく。——っか、どきやがれっ！」

ヴァンの腹部に蹴りをかまし、吹き飛ばしながら自分は起き上がりつつ後ろに下がる

翼も背中合わせから振り向き青眼に天羽々斬を構えながら鏡華の横に立つ

「刃を交える敵じゃないと信じたい」

「まあね。それに——イチイバルのこととかこれまでどうしてたのかも訊きたいし」

「……ああ」

ヴァンも咳き込みながらもクリスの横に立つ

「大丈夫かよヴァン」

「問題ない。それよりもクリス、無理はするな。イチイバルは久し振りだろう」

「あたしは心配いらねーよつ。絶対勝つ——ッ!？」

最後まで言葉を紡げなかったクリス

何故なら——突如、飛行型のノイズが出現し、クリスの持つガトリングガンを貫いたのだ

驚き叫ぼうとしたヴァンの腹部にもノイズが貫こうと襲撃する

剣の腹で防いだが、吹き飛ばされる

そして最後の一体がクリスを貫こうとして、

「クリス——!!」

「クリスちゃん——!!」

響がそれを体当たりと云う荒技で防いだ

だが、流石に回転していたノイズにその一撃は無謀だったのか  
ダメージが大きすぎてクリスに向かって倒れた

「立花ッ！」

「お、お前、何やってだよっ!？」

「ごめん。クリスちゃんに当たりそうだったから、つい……」

「ッ——バカにして、余計なお節介だっ」

力なく笑う響にクリスは怒鳴る

やる気が削がれた、と鏡華とヴァンは互いを見て剣を納めた

その時だった

「(命じたことも出来ないなんてあなたはどこまで私を失望させるのかしら)」

そう、頭に直接響くような声に全員がはっとする

まるで念話テレパシーみたいだ

鏡華はこの念話を知っており、辺りを見渡す

そして——見つけた

離れた場所に黒服を纏い、サングラスと帽子を被った奇妙な杖を持った女性が

「フイーネー！」

ぞくり、と背中を電流が伝った気がした  
今、クリスは何と言った？

フイーネだと——!?

では奴が、奴こそが

“あの”フイーネか——!

「見、い、つけ、た——!」

全員が——あのヴァンでさえ——戦慄する声を喉の奥から絞り出す  
俺の声ってこんなだったか? と思うが、今はどうだつてよかった

鏡華が一步を踏み出す

地面は草であると云うのにその音がよく響いた

「おい、フイーネさん」

「……………」

「ちよつと——“この時代から死ね”」

その声を皮切りに

ぱつと虚空より槍が具現する——されていく

一本、二本、三本——否!

十本、二十本、三十本——否否！

百本、二百本、三百本——！

数え切れない！

槍と槍の間さえも埋め尽くさんばかりに幅広の槍は、ロンは

鏡華の視認する全天にその姿を具現化する！

その切っ先の先は全て——ファイネ

「鏡華!？」

「てめえをこの時代で『殺しておけば』この時代の不安要素は野生のノイズだけだ。さ

あ——」

——逝けっ

合図を受けた槍の軍は指示通り何の構えもしていない、ただ柵に凭れているだけの

ファイネに襲い掛かる

その数で避けられるはずがない

だが、

「あなた達にもう用はないわ」

まるで

まるで鏡華がいたことにすら気付いてないかのようにクリスとヴァンに告げ

白銀の粒子を纏いながら、フィーネは海の方こうへ消えていく  
当然「全てのロンを避け切つて」消え去る

「待てよおい！ フィーネエエエエー……！！」

「逃がすかよ——絶対殺し尽くすつ」

あれだけあつたロンを撃ち尽くした鏡華は新たにロンを具現化  
クリスが追いかけているにも関わらず撃ち放とうとしている  
だが、それは中止となつた

—閃ツ！

「んが……ッ!?!」

鏡華の背後から、ヴァンがエクスカリバーを一閃

背中を深く斬り裂いたのだ

具現化中だつたロンは溶けるように空に消え鏡華は片膝を付く

「鏡華ッ！」

「おいてめえ、何無闇矢鱈に槍をぶつ放してる。クリスに当たつたらどうするもりだ、あ  
ん？」

その時は両断じゃ済まさんぞ、と

ヴァンにしては珍しく感情が露わになっている

斬られた痛みで鏡華も正気に戻る

その間にクリスはフィーネを追い、海を飛んでいた

ヴァンは肩を竦めると、鏡華の腹へ柄を叩き込み意識を飛ばす

気を失った鏡華の首根っこを掴み、翼に投げ捨てる

すでに響を抱えていた翼は耐えきれず地面にしゃがみ鏡華を支えた

「鏡華！ しつかりして鏡華!!」

「心配はいらん、どうせ血は止まっているだろう。直に気が付く」

それより、と

ヴァンはエクスカリバーを消しながら背を向ける

「風鳴翼。遠見鏡華が大切ならばこれからそいつに近付く全ての人間を警戒しろ」

「何を——」

「不老不死の人間がどれだけの 〃価値を持っていると思う?〃」

「——ッ」

「フィーネ……さっきの女がある組織に遠見鏡華の情報を流していた。——もう一度

言っておく。もう二度と遠見鏡華を失いたくないなら 〃全てを敵に回してでも〃 遠見

鏡華の味方であり続けろ」

できないなら貴様の想いはそこまでだと云うことだ

振り向かず告げると驚異的な跳躍を見せ、翼の前から消える

——— そんなこと

そんなこと分かつている

片手で抱き抱えている鏡華を覗き込む

「私はどんな時でも——— 鏡華の味方だ」

鏡華は全てを世界を敵に回してでも自分達を護ると言った

ならばその逆も然り

自分は護られるだけの存在ではないのだから

新たな覚悟を持ち、乙女<sup>せんし</sup>は戦場へ舞い戻った———

## D. C. XVI

「——いい加減落ち着いたか？ クリス」

「……落ち着けるかよ。何でだよ、フィーネ……」

ヴァンとクリスはあれから人気のない夜の公園を彷徨っていた

海へと消えたフィーネを探したのだが、見つからなかった

だから一先ず、ヴァンの提案で陸までは戻ってきていた

混乱し、暴れかねないクリスを眺めながらヴァンはため息を吐き、ライオット荒事、と呟く

その胸に掛けられた純銀とも云い難い光沢を放つ十字架が静かに揺れる

同時に昔と変わらん、と苦笑を浮かべる

昔はもう少し柔らかい性格をしていたのだが、それでもヴァンはいつも嗜める役割

だった

「……何だよヴァン。いきなり笑うなんて気色悪い」

「何、昔を思い出していただけだ。しかし、気色はないだろ気色は。せめて気味悪いにし

てくれ」

こちららに対して軽口を言える程度には立ち直ったのだろう

喉の奥でくくくと笑うヴァン

クリスは「うっせー。気色悪いでいいだろ」と口を尖らせていた  
何にせよ、こう暗くてはまともな行動は不可能だ

適当な寝場所を隠して——、と

そう考えてふと視線を逸らすと、

「泣くなよ、泣いたってどうしようも無いんだから」

「だって、だってえ……！」

年端もいかない子供がいた

この時間帯ではもう家に帰っているはずの子供

恐らく兄妹だろうか

迷子か、と考えているとクリスがそちらに近寄っていった

「おいこら、弱い者をイジメるなっ」

「イジメてなんかいないよ！ 妹が……」

いきなり声を掛けてきたクリスに驚きながら少年は呟く

その途中で少女はさらに泣きだす

「苛めるなっ——」

「だから落ち着けクリス」

—ぼかり

腕を振り上げたクリスの頭をヴァンが小突く

何で自分が叩かれたのか困惑するクリスにヴァンは肩を竦める

「まったく……ライオット荒事じゃないが、面倒臭いことに変わりないな」

そう言うのと、ヴァンは泣いている少女の前にしゃがむと握り締めた拳を突き出す

「ふえ……」

「ジャンに習っておいて正解だったな。——ワン ツー スリー一、二、三」

—ぼん

軽快な音を立てながら拳を開く

拳から出てきたのは一羽のハト

無論純白ではなくそこら辺にいる普通のハトだ

少女は最初驚いていたが、「お兄ちゃん凄いつ！」と喜び泣きやんでいた

隣で立っていた少年も同じように驚いている

「……で？ 何で泣いていたんだ？」

「……お父さんがいなくなっちゃったの……」

「それで探してただけど、もう歩けないって言って……」

それで、こんなところで泣いていたのだろう

クリスは「はっ、迷子かよ。だったら最初からそう言えよ」とぼやいていたが

——勝手に決め付けたのはクリスだろうが

だが、こんな二人を見ているとまた自分達の昔を思い出す

やれやれ、とヴァンはため息と共にこぼすと、少女を持ち上げ自分の後ろ首に乗つた

ようするに肩車だ

「ヴァ、ヴァン？ 何してたんだよ」

「出会ってしまったものはしょうがないだろう。小僧、一緒にお前達の父親を探してやるから、まずは人がいる場所へ行くぞ」

「う、うん！」

ヴァンは自分を見上げる少年に言う「しっかりと掴まってる」と少女にも声を掛け歩き始めた

クリスは「このお節介」と呟きながら少年の手を掴みヴァンの後を追った

♪♪♪♪♪

こんな時間帯——とは云っても、大体九時を回った頃にはヴァン達ぐらいの子供の

姿は皆無に等しかった

もつとも、ヴァンは現在身長が170以上あるので学生とは思われないだろう  
人工の灯りで照らされた商店街をヴァン達は当てもなくさまよう

ヴァンは無言だったが、クリスは知らない内に歌を口ずさんでいた  
そんなクリスをヴァンの肩の上から少女が見ていた

そのことにクリスが気付くと「何だよ」と見上げる

「おねーちゃん、歌、好きなの？」

「……歌なんて大っ嫌いだ。特に壊すことしかできないあたしの歌はな」

え？ と少女は聞き返すが、クリスは無言を貫く

これ以上何も答えてくれないと悟ったのか、今度はヴァンに話し掛ける

「ハトのおにーちゃん」

「……………何だ」

かなり間があつたが、ハトでショックを受けたわけではないだろう  
きつと。多分

「ハトのおにーちゃんとおねーちゃんって、こいびと？」

「「ふっー」」

同時に吹いた

これが同年代ならば死刑判決なのだが、相手は十くらい違う少女  
手は出せない

「……生憎とそんな関係じゃないな。だいたい、お前らガキにはそんな話はまだ十年早  
い」

「え、そんなことないよ。友達のおつちゃんはみつちゃんともうキスマでしたって  
言つてたよ」

「今時のガキつて奴は……。何で、そう変なとこの成長速度は異様に早いんだ。ゆとり  
世代かよ」

ゆとり世代だからと云つてもそんなところは至極関係ない

強いて云うならば、ヴァンが言った「今時」の方が近いと思われる

まあ、数年『表側』の世界にいなかった二人にとっては本當に今時なのだろう

「じゃあ……家族？ それともきょうだい？」

少女の追求はまだ続く

「そんな感じだ。だからこの話はやめろ」

「そうなんだ。じゃあおにーちゃんとおねーちゃん、結婚してらんだね」

「だから聞けよつ。つーか何でだよっ！」

見事にハモリ、お互いを見て、慌てて視線を逸らす

頬が赤く、熱くなっているのがはつきりと感じられた

——何でこんなガキに翻弄されなければならないんだ

荒事《ライオット》などではないが、本当に面倒

さつき呟いた通りだった

「家族なのに結婚してないの？　ドーサーしてるの？」

「本当に今時のガキは……もう、勝手に決めろ」

「お、おいっ、ヴァン!？」

「諦めろクリス。なんつーか……諦めろ」

「……おう」

遠い眼をされて言われてしまうと、もう何も言えない

ヴァンとクリスは少年少女の質問をテキトーに、本当にテキトーに答えていくのだった

しばらくその精神攻撃を受けていると、突然少女があ、と声をあげた

少年も見つけたのか、「父ちゃんっ」と嬉しそうに、こちらに向かってくる男性に駆け

寄った

ヴァンが少女を下ろすと、少女も一目散に走り寄る

「お前達っ。どこ行ってたんだ。心配したんだぞっ」

「ハトのおにーちゃんとおねーちゃんが一緒に迷子になつてくれたのっ」

「違うだろ、一緒に父ちゃんを探してくれたんだ」

「そうだったのか……。すみません、ご迷惑をお掛けしました」

父親は少女の手を握るとヴァンとクリスに頭を下げる

父親が促すと兄妹も揃つて頭を下げた

「いや、成り行きだったし、その……」

「頭を上げて下さい。こちらもなかなか楽しい時間でしたから。見つかつてよかつたな  
お前達」

クリスは照れて、そつぽを向き、ヴァンは珍しい敬語で応対する

ヴァンの言葉に妹はうん！ と頷く

仲良いんだな、とクリスが眩くのが聞こえる

確かにすごく仲が良い兄妹だ

「なあ、どうしたらそんな風に仲良くできるのか教えてくれよ」

思いついたようにクリスが兄妹に向かつて聞いた

二人は顔を見合わせると、少年が「そんなの分かんないよ」と答えた

「仲良くても、いつも喧嘩してるし……」

「喧嘩しちゃうけど、何時も仲直りして仲良しなのっ」

兄の腕に抱き着きながら答える少女にクリスは「……そっか」と呟く  
ヴァンはそんなクリスを横目で見てから、父親に会釈する

「それでは俺達はこれで。——行こうクリス」

「……ああ」

行く宛などないので、二人は元来た道に戻る

後ろから声が聞こえたが、応えることはしなかった

しばらく歩き、再び公園に着いてしまった

「さて、これからどうする？　クリス」

「フィーネの屋敷に戻る」

即答だった

最初混乱していたのが嘘のようだ

「今だって頭ん中ぐちゃぐちゃで何が正しいか分かんよ。だけど……フィーネに問い詰めなくちゃならねーんだ」

「………………。ああ、そうだな」

領くと歌を紡ぎ防護服を纏う

クリスもイチイバルを

誰もいない公園を飛び出すヴァンとクリス

目的は違えど、ただ一つ

## D. C. XVII

「——と、まあそんなわけで君にはこの件に関して黙っていてもらわなくちゃいけない。一応俺が見張ってるのが一番なのかもしれないけど、規則でね。気付かれないように誰かが監視してるから言動には気を付けて。いいかな？ 小日向」

時刻はもうそろそろ日付が変更される

そんな時刻に鏡華は未来と二人きりで二課の使われてない部屋にいた  
すでに鏡華の背中では完治している

ただ——咳き込むだけ

「……はい……」

「……しつかし、まさか “あんなこと” 言つた直後にバレちまうとはなあ。世の中は相も変わらず不公平だ」

「……あの、響はいつからあんなことをしていたんですか……」

普段であれば、鏡華の言葉に苦笑ぐらい浮かべるのだが、未来は鏡華の言葉を無視してそう訊ねた

鏡華は苦笑を消すと、ため息を吐きながら、

「立花が予約したCD買いに行つて遅くなつただろ？ そんな時からだよ」

「………………。そう、ですか…………」

そんな前からだつたなんて

考えがまとまらない——まとまってくれない

まとめようと束ねれば、余計に考えが散らかつてしまう

どうして？

どうして私に嘘を吐いたの？

約束したじゃない

隠し事なんてしないって

そればかりがまとまってしまう

「絆が築かれるのは数年。絆が砕けるのは一瞬——やれやれ」

まるで自分に言い聞かせるかのように鏡華は呟くと、ポケットから缶を取り出してプルタブを開けた

例によつて缶ビールだ

「…………鏡華先生。未成年ですよね」

「うん」

「よく捕まりませんね」

「まあね。——つて、あれ？」

もう一煽りしようとした鏡華は途中で首を傾げた

缶をテーブルに置くと指折り数えてうーん、とまた首を傾げる

「なあ、小日向。今日つて一月一日だよね」

「え？ ……はい」

ややあつて未来に訊ね、答えを聞いた鏡華はうわちゃー、と変な声を上げた

「そうだ。そうだった。俺——今日が誕生日じゃんつ」

「……はい？」

「すっかり忘れてたよ。うわー……、今日から俺二十代じゃん」

成人じゃん、と鏡華は頭を抱えて呟く

いきなりのことに未来も「は、はあ……」しか答えられない

「えつと……」先ずおめでどうございます」

「うん……ありがとう。そういや、そろそろ帰さないかね。悪いけど、送つてはやれないから、部屋の外にいる黒服のお兄さんに付いて行つて」

「あ、はい……」

「それから——事ここに置いて、『立花を許してやれ』なんて、俺は言わない——つーか、もう言えない。俺は『嘘を吐いていた側』だからな。だけど、これだけは覚えてお

いてくれ。嘘を吐かれた側が心を痛めるのと同様——嘘を吐く側だって心を痛めるんだ」

「……………」

未来は鏡華の言葉に何も応えず

頭を下げて部屋を出て行った

ドアが閉まると、鏡華はぬるい缶ビールを煽った

今日はいつもより、苦い気がした

♪♪♪♪♪

「Although it is the request from from  
 ere to be sure, it is said that work is  
 too careless.」

(たしかにこちらからの依頼ではあるけれど、仕事ずさんが杜撰ずさんすぎると言ってるの)

山奥の切り離された屋敷

その一室——さらにその奥にあるイスに彼女は、フィーネが座っていた

そこは後から無理矢理屋敷に取り付けたような「研究所」のようだ

相も変わらず、すの美しい裸体を晒し、古風の電話でどこかと通話している

「If a leg sticks, it will not have no room to maneuver here. By no means, it is if it is also called your expectation. n...」

(足がつけばこちらの動きが取れなくなるわ。まさか、それもあなた達の思惑と云うの  
なら……)

「If it is God, a colander person is unable to interfere in all. Don't you see if understand most?」

(神ならざる者が全てに干渉するなど不可能。お前自身が一番分かっているのではない  
か)

そこまで聞いたところで

うんざりしながら聞いていたところで

バン！ とぶち壊さん勢いで大扉が開かれた

視線を向けるとそこには——クリスが立っていた

後ろには守るようにヴァンが警戒心剥き出しで立っている

「あたし達が用済みつてなんだよ！ もういらないつてことかよ！ あんたもあたし達を物のように扱うのかよ！ 答えるよつ、フィーネツ!!」

かしやん、と

未だ声の聞こえる受話器を置くと、フィーネは立ち上がる

「どうして誰も——私の思い通りに動いてくれないのかしらア」

そう、眩き

—煌ツ！

振り返ると同時に杖を、ソロモンの杖を、クリスとヴァンに向けて“撃ち放った  
薄緑の閃光は床に着弾すると形を成し、ノイズとなった

「ツ——!?!」

「ツ、てめえっ!」

いきなり召喚されたノイズにクリスは息を呑みながら一歩下がる

それを庇うようにして前に出たヴァンは即座に防護服を纏う

こつこつ、と音を立てフィーネは研究所から屋敷へ“入る“

「流石に潮時かしら。そうねエ、あなたのやり方じゃア精々一つの火種を二つ三つに増やすことぐらいしかできないわねエ」

「あんたが言ったんじゃないか。どれもこれもあんたが——」

「私が与えたシンフォギアを纏いながらも、毛ほどの役にも立たないなんて——そろそろ幕を引きましようか」

そう言うと、ファイネの手から銀の粒子が零れだす

零れ出た粒子は彼女の裸身を覆うと、一つの形を成した

ネフシユタンの鎧

それもクリスの時のように銀ではなく——金

より刺々しく、禍々しく

「私も、この鎧も不滅——未来は無限に続いていくのよ。カ・ディングルも完成しているも同然。もうあなた達の力に固執する理由はないわア」

「カ、ディングル……?」

眩くクリスに「あなた達は知りすぎてしまったわ」と杖を操作する

瞬間、ノイズが一斉に槍となり二人を襲う

「ちっ……!」

未だ呆然とするクリスを脇に抱え、全力で回避するヴァン

「逃げろクリスッ!」

「ッ、でも……!」

「お前はファイネを殺<sup>や</sup>れないだろっ!」

「ッ——！」

大広間から出ると、開け放った入り口にクリスを放る  
受身も取れないまま転がり、止まると顔を上げる

その時には——

「ヴァン——！」

その入り口さえも閉めようとしていた

「行け——クリスッ」

その言葉を最後に

重々しい音を立ててドアは完全にしまった

クリスは胸のイチイバルをきつく握り締めると、歌を紡ぎ防護服を纏い空に飛ぶ  
「ちくしょう……ちくしょうおおおおおつっ!!」

♪♪♪♪♪♪♪♪

重たいドアを閉めると、ヴァンは息を吐き振り返る

すで何十体ものノイズが溢れ、中心にフィーネがいる

「ふふ、自分の身を呈して好きな女を守ろうとするなんて……テレビの見すぎじゃない

かしら」

「テレビなんてここ数年の間見たことなんかない」

エクスカリバーを強く握り締め、ヴァンは構える

「それに、この結果は俺にとつて僥倖に値する」

クリスは行程がどうであれ、フィーネを信頼していた

そんな彼女の前ではフィーネに手を下すのはヴァンでも躊躇われた

だから一人きりは僥倖

残る今のやり残しは——ただ一つ

「フィーネ。てめえは、てめえだけは許さない。ちよつとその綺麗な面——汚させろ」

眼の前のクソ女を殴るだけ——！

## D. C. XVIII

弦十郎からもらったこの非常勤講師と云う仕事

資格をもらった直後は「楽そうでいつか」と浮かれていた

そんな過去の自分に会えるのなら言っておきたかつた

この仕事——刹那も楽じゃないからつ

そんなことを考えながら鏡華は一番下に設置された壇上で楽譜記号の読み方を教えていた

まず当たり前前の事だが、大勢の視線がこちらに向けられている

以前にも言ったかもしれないが、鏡華は人前で何かをすることに慣れていない

次に雑用が多い

正職員である講師からたびたび雑用を頼まれるのだが、それがまた地味に重いし多いのだ

最後に給料が少ない

いや、これは別にどうでもいいことかもしれないが（むしろ非常勤なのだから当たり前だろう）、ソングライターをしていた時の十分の一程度なのだから嘆きもする

まだソングライターの方が楽だった

(ま、今は自分から休業中にしてるんだけど)

どんな楽だろうと、稼げようと、鏡華が歌を作るのは特定のユニットだけだ

それすなわち——ツヴァイウィング

もしくは翼か奏個人限定

それ以外は、どんなに金を積まれようと、どんな高貴な人間からの頼まれごとだろう

と

引き受ける気はこれっぽっちもなかった

例外があるとすれば、鏡華が興味を持ったモノについてののみ

それは曲だったり、人だったり様々だ

小日向の曲がそれに該当するだろう

しかし——

(今の小日向にはあの時と同じ演奏はできないよな……)

ちらりと斜め左上を見上げる

響と未来がいつも通り隣同士で座っているのだが、響はちらちらと未来を見て、未来はそんな視線をまるで感じないかのように黙々と鏡華が板書する文字をノートに写している

あの後、正確には後から帰宅した響がどう対処したのか鏡華は知らない

険悪——ではないが、どこか気まずい雰囲気を出している（響だけが）

「——と云うわけで、D. C. の読み方は *da capo*。 *capo* は『はじめ』と云う意味や英語で *head* を意味し、*da* は英語で言う *from head*。つまり『頭から（演奏せよ）』になります。簡単に言ってしまうえば、そう云う意味を持つイタリア語の書き込みに過ぎないんです。もしテストがあれば、この時期であれば意味を答える問題が多いので、できれば意味は覚えておいてください」

~~~~~

「鏡華、食事はちゃんと取っているか？」

「藪から棒だね翼さん。一応これからのブランチ（朝昼兼用の食事のこと）と夕食はふらわーのお好み焼きで取ってるけど……」

四時間目終了後、午後からの授業がないことを理由に翼のお見舞いに来ていた鏡華は、突然の質問に瞬きする回数を増やしながら答えた

場所は病院の屋上。部屋でもよかったのだが、天候も良かったので外に出たのだ

「い、いや、鏡華は料理ができなかったでしょ？　だからもしよかったら作ってあげようかと思って……」

「……翼。自分が何言っているか理解してる？　俺は確かに簡単な料理しかできないよ。でもね、それ以上にできない翼に言われたくないんですけど？」

しらーつと、見つめる鏡華に翼はうつと言葉に詰まる

一緒に暮らしてた頃は基本的に弦十郎が食事を作ってくれたりしていたので鏡華達は料理をあまりしたことがなかった

おかげでと云ったら語弊が生じるのだが、鏡華達はそろって料理が苦手だ

ただ、上手い順に言うとき意外にも奏、鏡華、翼の順になる

一見がさつそうに見える奏は、実は細かな作業が得意だったりする

りんごを向いてうさぎ——それもリアルなタイプ——掘り起こした時は全員で驚いたものだ

閑話休題

「まあ、気持ちだけ受け取っておくよ。翼は早く良くなることを優先しなきゃ」

「身体に異常はない。絶唱の反動だつて完治した。ただ、司令が最終検査を終えるまでは入院しているとうるさいんだ」

「男手一つで俺達三人を数年育てたからねえ。若干親馬鹿入ってるんだよなあのおっさ

ん

「ふふつ、言えてる」

実際小学校の授業参観などであると報告すると、必ず仕事をサボつてでも来ていた

しかも盗撮まがいの方法で鏡華や翼を撮っていた

本人曰く、「これはあれだ、死んだあいつらの仏前に置いたためだ」とかなんとからしい
中学校からはほとんど出席できなくなり、そんなこともなくなつたが

「ねえ、鏡華」

「んー？」

「えつと……そのね」

「うん」

「奏は今、どうしてるの？」

突然の質問に鏡華はまた、瞬きの回数を増やした

一秒ほど固まった後、苦笑を浮かべた

「突然だね」

「突然じゃない……前から、完全^ア聖遺物^ゲのことを教えてくれた時から考えていたんだ。
鏡華は一人で何もかも背負う感じがしたの。だから、もしかしたら奏のことも、つて」

「……参つたね、こりゃ」

自分では隠してきたつもりだったのだが

——最近の翼は鋭いね

それとも、自分が甘くなってきたのか

「確かに、翼の読み通りだ。奏の肉体は二年前からゆっくりとだけど、完治に向かつてい
る。絶唱の反動も無くなったし、奏を蝕んでいた薬も体内から浄化された。眠ってはい
るけれど、話すこともできる。——もうすぐ、眼が覚める」

「……ほん、と?」

「うん。本当」

鏡華の言葉に翼は顔に手を当て、ややあつて「そう……」と呟き俯いた

太陽の光で目元がうつすらと何かに反射した気がした

「あいつが目を覚ましたらさ、俺が住んでいるところに案内するよ。それで……」

「うん……うん……!」

頷く翼を見て、鏡華は知らぬうちに笑みをこぼす

これで目指していた理想へ手が届く

もうすぐ——もうすぐだ

後少しで全てに片が付く

そのために——

D. C. XIX

翼との約束。奏と会わせる約束

どうやら、その願いは早く叶う事になりそうだ

そう思いながら、鏡華は蹲っていた身体を更に縮めるように丸くした

「はあっ——ぐう……！」

胸を抑える。だがそんな事ではこの痛みは抑え切れない

そもそも抑える方法など、今の鏡華には持ち得てなどいなかった

「はあはあ……ぐうっ！　ごほっ、ごほっ——ごぼっ」

額に玉のような汗を浮かべ、嗚咽を漏らす

途中からはそれが吐くような音に変わり、余計身を縮ませた

汗のように身体全部から流れ出る液体

びり、びり——と何かを破くような音。それに合わせて痙攣する手足

「かはっ！　……はあ、はあ——耐えろ。耐えろ耐えろ耐えろっ」

一心不乱に、うわごとのように、耐えろ、と呟き続ける鏡華

真つ暗な部屋の中で、瞼はあらん限りに開かれ、瞳は猫のように凝縮している

カチカチと噛み合ない歯の音だけが鏡華に聞こえる唯一の音だから聞こえなかった

後ろから足を潜めて自分に接近してくる人影に

人影は足音を立てているにも関わらず、気付いていない

そして、人影が鏡華に覆い被さると

真つ暗な部屋は静かになった

♪♪♪♪♪♪♪♪

見つけたのは、ただの偶然だった

先日響との関係を経ってしまった未来は響が起きる前に部屋を出ていた

こんな気分では誰にも会いたくなく、学校には向かわずに商店街の方に足が向いていた

雨の中を彷徨っていると、突然雨音以外の音が聞こえた

ちらりと見ると、路地裏に少女が倒れていたのだ

放っておくわけにもいかず、未来は少女を背負うとふらわーに運び込んだ

最初はおばちゃんも驚いたが、理由は何も聞かず優しく受け入れてくれた

一先ず少女の服を脱がせて自分が持っていた体操服を着せた

それからは何もする事が無く、店内で座っていた

「未来ちゃん」

おばちゃんが呼ぶ

「はい」

「学校はいいの？」

「……はい、今日は学校、サボっちゃいました」

「そうかい」

笑顔で言う

否定も肯定もしない。だけどそれが今の未来にはありがたかった

「朝ご飯は食べた？」

「いえ……お腹空いてなくて」

「そりゃ駄目だ。朝ご飯は一日を始める食事だよ。美容にもよくなってテレビでもやっ

てたからね」

「あはは……すみません」

「じゃあ、あの子が目を覚ましたらおばちゃんが作ってあげるよ」

おばちゃんの提案に驚く未来

慌ててパタパタと両手を振る

「そんな！　そこまでは、悪いです！」

「いいんだよ。あたしが作つてあげたいんだから。その代わり、今度お友達と来た時はたらふく食べていつてちょうだい」

「——はい」

おばちゃんには叶わない

そう思いながら未来は嘘の笑みを張り付けて言うのだった

その時、ガラリと開く店の扉

未来とおばちゃんが振り向くとそこには——



響は一人で授業を受けていた

朝、未来が一人で出掛けた事は気付いていた。しかし授業を無断欠席するとは思って
いなかったのだ

鏡華に何と言おうか迷いながら学園へ登校すると、ホームルームに担任が、

「それと、遠見先生は所用でお休みだそうです。授業は代わりに先生が担当しますから、

皆さんは普通に授業を受けて下さい」

そう告げたのだ

驚いた響は昼休み、弓美達の誘いを断って、入院している翼の元を訪れた

翼なら鏡華が休んだ理由を知っているかもしれないからと考えたからだ

だが――

「いや？ 私も鏡花が休んだのは初耳だ」

翼の返答も真逆の答えだった

どうしたの、と翼に問われ、響は自分と未来の事を話した

「私、自分なりに覚悟を決めたつもりでした。守りたいものを守るため、シンフォギアの戦士になるんだって。……でも駄目ですね。小さな事に気が乱されて何も手がつきません。私、もつと強くならなきゃいけないのに、変わりたいのに……」

「その小さなものが、立花の本当に守りたいものだとしたら、今のままでいいんじゃないかな？ 私、立花は今ままで良いと思う」

翼の言葉に響は苦笑した

前に未来に同じような事を言われました、も

やはり奏のように人を励ますと云うのは難しいな

素直にそう思う翼

「翼さん、杖を使つてますけど、まだ傷が痛むんですか？」

「大事を取つていられるだけ、気にする程でもない。——絶唱は肉体への負荷が極大の奏者の秘奥……まさに他者も己も全てを滅ぼす、滅びの歌。その代償と思えば安いものだ」

自重気味に言う翼

そんな翼を見て響きは「でも……」と、

「でもですね翼さんつ。二年前……私が辛いリハビリを乗り越えられたのは翼さんの歌に励まされたからです！ 翼さんの歌が滅びの歌だけじゃないってこと、聞く人に元気を与えてくれる歌だつてことを、私は知っていますつ」

時々ハガキや手紙で見る応援のメッセージみたいな台詞

文面なら嬉しいのだが、面と向かつて言われるのは恥ずかしかつた

と二人で微笑んでいると、

「(ト)にいたか、翼」

声を掛けられた

振り向けば、いつも通りのワイシャツ姿の弦十郎がエレベーターから現れていた

「司令……？」

「師匠？」

「ああ、響君も一緒だったか」

「どうしたんですか？　こんな時間に」

問い掛けると、神妙な顔で二人の前に立った

「少し——いや、とても大事な話を二人きりでしようと思つてな」

「あ、じゃあ私は」

「いや、響君がいるのも何かの縁だ。聞いていってほしい」

「は、はい」

響は何かな、と首を傾げつつ翼の隣に腰を下ろす

弦十郎は立ったまま、前置きをすることなく、

「話と云うのは——鏡華の今の身体のことだ」

そう、告げた



ガラリと入り口に立っていたのは鏡華ともう一人

白いローブで身を包んでおり体型はおろか性別も分からなかった

一方、鏡華はいつものコートに身を包んでいるがわずかに覗くコートの中は包帯らしき白い布が巻かれている。それは今まで隠していなかった首にもしつかりと。それも所々が赤く染まって

「き——鏡華先生!？」

ガタツと椅子を倒しながら未来が驚愕する

おばちゃんも驚いた様子で鏡華を見ている

「よつ、小日向。奇遇だな、こんな時間にこんな場所で会うなんて。……つか、学校サボった？」

「そんなことより! どうしたんですか、その包帯はっ!」

「ちよつとした持病みたいなもんだよ。気にすんな」

「ちよつとしたって……」

鏡華の言いように絶句しながら、未来はもう一度じっくりと鏡華の姿を見た

長ズボンを着ているので下半身は分からない、腕や胸辺りはコートから覗く包帯の白さと血であろう赤さ、顔なんて青ざめている上にやつれている

とても、ちよつと、と云える状態ではないことは明らかだった

「それよりおばちゃん。いきなりで悪いんだけど、こいつに何か作ってくれないかな？」

「こいつ、昨日から何も食べてないんですよ」

自分の事を棚に上げ、鏡華はカウンター席に座らせた白ローブを指差しておばちゃんに頼み込む

「そりゃあ構わないけど……何があつたんだい？」

「持病が出てから、こいつ、俺の事を必死に看病してくれたんです。それで何も食つてなくて……」

——くう

可愛らしい音が鳴った

見れば、白ローブがカウンターにべつちよりと俯せになっている

「お腹減った」

綺麗な声

その声で白ローブが少女だと初めて分かった

「ふふつ、仕方ないね。未来ちゃん達にも作ろうと思つてたけど、まずはこの子からだね」

「すみません。お金は払いますんで」

「じゃあ未来ちゃんたちの分もお願ひするよ」

それぐらいなら、と鏡華はポケットから財布を取り出すと、万札を数枚取り出してレジに置いた

おばちゃんは苦笑を浮かべると、鉄板に火をつけ、慣れた手つきで準備を始める
鉄板が温まると油を引き、具材を焼いていく

「お、う、ま、そ、そ」

「本当にすみません。突然押し掛けた挙げ句作ってもらって」

「いいんだよ。鏡華くんは未来ちゃん達と並んでうちの大事な常連なんだから……
それより、その子は誰だい？　もしかして鏡華くんの彼女さんかい？」

「さあ、どうでしょう」

笑みを浮かべて、追求を誤摩化す

それよりも、と鏡華は未来の方を向いた

ビクツと身体を震わせる未来。別に怒られたわけじゃない。だけど身体が無意識に
反応してしまったのだ

「今日はどうして欠席したんだ？　小日向」

「……………」

「…………質問を変える。前の一件が原因だな」

「ツ——」

断言されて、また身体が反応する

鏡華は優しく、「イエスカノーで」とより簡単にした

「……イエスです」

「そうか。……じゃあ、俺が言える事はあんまないな」

あつさりした口調で質問を終えた鏡華は少女の隣に座る
すると、少女が急に声を殺して笑い出した

「くくく……」

「いきなりどつたの？」

「いやー、鏡華が先生らしい所を初めて見たからな。つい、おかしくって」

「どうせ俺には教職員なんて似合ってませんよーだ」

「そういう意味じゃないよ。ただ……そう、新鮮だなんて」

「……そうかい」

言い合いを始める二人

その姿に、未来は胸がわずかに締め付けられる感じがして、
「おばちゃん、私、あの子の様子を見てくるね」

逃げるようにして、奥の部屋に向かうのだった



「鏡華の身体のこと……?」

首を傾げ、鸚鵡返しに聞き返す翼

響も頭の上にハテナマークを浮かべている

「ああ。翼は鏡華の身体を見た事はあるか?」

「私が目覚めた時に一度だけ……でもあれは……」

「……? 遠見先生の身体……?」

知らない響に、翼が誰にも言わない事を約束させて鏡華の事を話した

完全聖遺物であるアヴァロンを使う代償として不老不死に近い身体と消えないであろう傷痕の事を

「そ、そんな……!」

「もちろんそれもある。だが、これから話すのはもう一つ……鏡華本人から教えられた、第三者に貸し与えた代償だ」

「貸し与えたって……」

相手はもちろん奏

だが、響は奏が生存している事を知らない

だから翼と弦十郎はその事は隠して話を続けた

「貸し与えた代償は——定期的に訪れる痛みらしい」

「痛み……」

「具体的に云えば、その時は『身体中が激しい痛みを襲われ、傷痕から大量の血が流れ、裂傷が身体中に広がるそうだ』」

「ツ——!?!」

驚きに目を見張る翼

「じゃあ——じゃあ、あの傷は！ フォニックゲインが低いだけじゃなかったんですか!?!」

「ああ。だが、鏡華はこうも言っていた」

——多分、次で最後だから。そしたら、今度はこの傷が癒される番だ

鏡華の声を真似て——実際はまったく似てなかったが——弦十郎はそのまま告げた

「鏡華……」

「……何で遠見先生は、一人で背負えるんですか?」

会話が途切れた頃を見計らい、響がポツリと独り言のように訊ねた

視線が自分に向けられてるのを、俯いても分かった響は言葉を連ねる

「そんな重過ぎる事を、一人で背負うなんておかしいですよ。私だったら、重さに耐え切れなくなつて潰れてしまいます……!」

「そうだな、響君の言う通りだ。だが、それが鏡華が決めた道であり鏡華の覚悟の表れなんだ」

「遠見先生の覚悟……」

「鏡華の覚悟は大人である俺から見ても、かなりのモノだ。多分、世界中を敵に回しても貫き通せるぐらいの、な」

それを聞いて、響は疑問が浮かんだ

——遠見先生の覚悟って何なんだろう

どうしたら、そこまでの覚悟を貫けるのだろうか

考えたが、響にはこれっぽっちも理解できなかつた

そして、警報が鳴り響いたのは

そんな時だつた



少し時間を遡る

場所はふらわーのカウンター

そこには開店前にも関わらず四人の客が席に腰を下ろしていた

「あの……鏡華先生」

「ん？ どした？」

「隣の人は一体……」

未来の隣に座る鏡華を挟んで向こう側の席には白いフード付きのコートを羽織ったいかにも怪しい人物が、超特盛のお好み焼きにがつついていた

人の三倍は食べる響も驚く量だ

目覚めて、反対側に座ったクリスは視線だけ三人に向けてフォークでお好み焼きを食べている

「ああ、こいつ？ こいつはえーと………かなでもん」

「ぶふっ」

お好み焼きを口に含んでいた奏は少し吹いた

「かなでもん？ ……先生、いくらなんでも下手すぎます。後、かなでもんさん吹き出していますよ」

ジトツとした視線を浮かべる未来

クリスも「下手だな」と言わんばかりの眼で見ながらフォークを口に運ぶ

「(うおい鏡華ッ。何だよかなでもんって。あたしは別に最近生誕五十周年を迎える狸じゃねえぞ)」

「いやいや、この子はかなでもんだよ？ ドクター・コン||サートが発明した今世紀最高傑作のアイドル型ヒューマノイド。型式番号KANADE||MON——通称かなでもんさつ」

「(無視かよつ)」

「(当たり前です)」

語尾に音符が付きそうな言い方の念話で返された少女——というか、奏

何か言い返そうかとも思ったが、お好み焼きが冷めるといけなないのでぐつとこらえ、お好み焼きを食べた

未来は少しの間、鏡華と奏を見ていたが、すぐに諦めたように自分の前に置かれたお好み焼きに視線を落とした

「……っーかよ、お前ら何にも聞かないんだな」

静寂が嫌いなのか、クリスが無言になって数秒後にそう訊いた

「……そう云うのは苦手みたい。今までの関係を壊したくなくて、なのに一番大切なものを壊しちゃったから……」

「喧嘩か……あたしにはよく分かんねえな」

「友達と喧嘩したことないの？」

「友達いないんだ……。地球の裏側でパパとママを殺されたあたしは、あたしはずつと

幼馴染みと二人で生きてきたからな。友達どころじゃなかった。家族同然で接してきた奴はいたけど、ちよつと前にあたしを守るために姿を消して……。理解してくれると思つた人も私を道具のように扱うばかりだった」

それは未来が経験したこともないこと

深入りしすぎたと思つた未来は「ごめんなさい……」と謝つた

鏡華と奏は黙つて食べながら二人を見ている

おばちゃんもお好み焼きを焼きながら耳を澄ませている

「なあ、お前その喧嘩の相手ぶつ飛ばしちまいな」

「へっ……？」

「どつちが強いのかはつきりさせたらそこで終了。とつとと仲直り——そうだろ？」

「そう、だけど……。やつぱり、できないよ」

頷きはしたものの結果として首を横に振る未来

どうして首を振るのか分からないクリスは「分かんねえ」とそのまま疑問を口にする

「ま、雪音の提案も悪かないけどさ。やつぱり、女の子が殴り合うつてどうかと思うんだ

よな、俺は」

でも、考えは正しい

と、鏡華は言葉を続ける

「殴り合いつてき、うまく言葉にできない時カツとなってやっっちゃう、相手に自分の気持ちを伝える会話の一種なんだよね。『どうして分かってくれないんだ』、『何でそれをするんだ』——つて。小日向は話すことができないわけじゃないから、ちゃんと面と向かって話せばいいよ。自分が立花

あいつ

のために何ができるのか、あいつのために何をしたいのか。思い描いたことをはつきりとね」

笑みを浮かべながら言う鏡華

未来は鏡華の言う何かを思い描いたのか、「はいっ！」と暗かった表情が一変、綻ばせて微笑んだ

「よしっ、じゃあ食え。たっぷり食って栄養とつとけ」

「おー」

「はいっ」

「あ、あたしは……」

「食べてるもんね。えっと……」

「クリスでいい」

「じゃあ、クリス」

そんな——

敵も味方も

表も裏も

子供も大人も関係ない平和な日常

しかし——

突然、街全体に高く重い音が響き渡った

それはクリス以外にとつて聞き慣れた音であり

しかし、絶対に聞き慣れたくはない音だった

つまりは、避難警報

ノイズが現れたことを報せるそれが、鳴り響き続けた

♪♪♪♪♪

ガタツと立ち上がった鏡華はそのまま椅子を倒さんばかりに立ち上がる。警報に耳を澄ました

「近いな……おばちゃん、火を消して。小日向、雪音。おばちゃんの確認終わったら外行くぞ。かなでもんは急いで完食しとけ」

てきぱきと指示をする鏡華を呆気に取られた様子で見つめる女性陣だが、耳に響く警報で我に返ると急いで指示に従う

全てが完了するとドアを開け、外に出た

街ではすでに住民が一目散に避難場所へ逃げていた

「なあ、一体何の騒ぎだ」

唯一事情を知らないクリスは逃げ惑う人々とうるさい警報に疑問を抱く

「何って……ノイズが現れたのよつ。警戒警報知らないの？」

「なっ……」

絶句する

ノイズが現れたと云うことはフィーネが差し向けたのだ

他ならぬ自分を捕まえないし処分するため

そして、その過程に「別の犠牲」があっても関係ないのだろう

——あかし、大馬鹿だっ

未来がおぼちゃんに話し掛けている間に、クリスは駆け出していた

人々が逃げるのとは逆方向へ

「あ、クリスッ!？」

未来が呼ぶがクリスは応えず人混みの中に消えた

それと同時に——泣き叫ぶ声と身を切るような叫び声
意識は嫌でもそちらへ向けられる

そこには、泣き叫ぶ女性と後ろから羽交い締めする男性。そして——ノイズに囲まれて身動きができない幼い少女がいた”

「——ッ!!」

「お願いします！ 離してっ！」

「無茶言うな！ あんたまで死んじゃうっ！」

「いやっ！ 嫌ア！ ともおっつ!!」

羽交い締めから逃れようと女性がもがくが、男性の方が体格的に圧倒的に有利だ

ノイズの間から「ママッ！ ママアッ!!」と呼ぶ声が女性をさらにもがさせる

「そんな……」

「ちっ……!」

基本的に奏は短気だ

特に“こういうこと”に関しては異常なほど

だから、奏は一步踏み出した

ガングニールを起動させるまでもない

虚空に“騎士王の槍”を具現しようとして、

「く〜ん——パ〜〜んチ」

ひどく間抜けに近い言葉が鏡華から漏れた直後、

—撃ッ!

一体のノイズが盛大に、そう盛大に雨のあがった綺麗な空に舞った
ジャスト二メートル程舞い、灰となつて還つた

「……え?」

男性も、女性も、おぼちゃんも、未来ですらポカンとしてしまった
まあ、あの“ノイズが空を舞えば誰だつて驚くだろう

「……なんだよ、かなでもん出番ないじゃんか」

唯一奏だけが唇を尖らせ、しかし嬉しそうに呟いた

いきなり引き起きた驚愕な出来事に、一同無言

驚きが過ぎて、反応出来てないのだ

一方、全く固まらない存在がいた

殴り飛ばした張本人、つまりは遠見鏡華が

「大丈夫? ともちやんだつたかな? 知らない奴に囲まれて怖かつただろうねえ」

「う、うん……?」

鏡華はとても良い笑顔を浮かべてともと呼んだ少女に向かい歩く

その間、何故かノイズが襲ってこない

思わず頷くともを抱き上げて立たせ、服に付いた砂を払う

その後はともを抱き上げ、自分も立ち上がった

「ねえ、ともちゃん。ともちゃんだったら、アン●ンマンかドラ●もん。どつちに助けてもらいたい？」

「え？ え〜つと……アン●ンマン！」

「そつか♪ それじゃあ——」

一体今がどう云った状況なのかまったくもって分かっていない（はずのない）鏡華

そして、本当に何でか分からないが、ともが選んだ有名すぎるキャラクターのお決まりの台詞を吐いた

「やめるんだノイズマン。ともちゃんを苛めるなら俺が相手だ！ ……さてと」

とつても棒読みすぎる台詞を吐き、もう一度につこり

そして、《唯一纏わず発動できる裏業、《凶り汚れ果てる理想》を発動》

「カモーン、ノイズマン。人の眼もあるし《武装しない》程度には手加減してやるよ。お前らが死なないわけじゃないけどな」

D. C. XX

天羽奏は一度、確実に死んだ

“死んだ——はずだった”

不老不死たる騎士王の鞘によつて死ぬはずだった魂は鞘と云う鎖で無理矢理繋ぎ止められ

朽ち果てるはずだった肉体は、直前に最良の状態で “保存された”

絶唱によつて受けるはずだったダメージはなかったことになった

全て、鏡華が引き継ぐことになったが

人の生死を、神に与えられし生の刻ときを振とじ曲げた代償は

当然の如く、鏡華に下された

奏の身を蝕んでいた薬の副作用。奏が受けるはずだった絶唱の反動。 “塵と化す痛

み”

その全てが鏡花の身体を襲つたのだ

一度ではなく、ゆっくりと——定期的に

凄惨で惨い仕打ち

この罰が神が下したものののなら、あまりにも非情すぎる
しかし鏡華は——

「いいんだ。奏が死ぬことに比べたら、何十倍何百倍とマシだ」

己の身に課せられた代償を受け止めた

笑顔で——身体中から鮮血を流しながら

嬉しかった。同じくらい悲しかった

だから、天羽奏は

最後の罰を受け止め、己を目覚めさせてくれた鏡華を、永遠に等しい命で鏡華を、寂しい思いをさせてしまった翼のために使うと決めた

喩え世界中から化物と罵られ、蔑まれ、疎まれたとしても

それが、天羽奏の“生きる覚悟”だった



「お、おい……あの小僧命が惜しくねえのか？ ノイズに近付くなんて……。つて云うか——今、あいつ……ノイズ殴らなかつたか？」

ようやく固まっていた思考が戻り、男性が力を緩めてぽつりと眩く

それは女性も同じようで、今なら突貫できるはずなのにペたりと地面に尻餅を着いて
いた

そしてまた未来もおばちゃんも同じだった

「ねえ、未来ちゃん。あの子は一体……」

だが、未来だつて答えられない

説明を受けていたとしても、それは精々最重要機密事項故の制限についてだ
シンフォギアなどしる由もない

だから——

「私の先生だよ、おばちゃん。私の憧れで、私の目標で、私の——」
そう、答えた

♪♪♪♪♪

鏡華は踊る

軽やかに、穏やかに

ノイズの槍を避けて舞い、歌う

「空と自由だけが♪ とくもだちささ♪ はい、ヘリコプター」

……先程挙げた二種類の有名すぎる歌の合作だった

まったく違う内容なのに、最初からこれが正当な歌だと言わんばかりのマッチングである

流石はソングライターと云うべきか

最後のヘリコプターはいらないと思うが

だが、ともに人気らしく、ノイズのど真ん中にいるのに楽しげに笑っていた

「それじゃあ、ともちゃん。ちよつとだけお勉強しようか」

「おべんきよ〜?」

変わらずノイズのど真ん中にいて、その攻撃をかわし続けている鏡華は突然そんなことを言った

「今日の授業は、ノイズの倒し方について」。ノイズにはね、俺達を炭に変えちゃう能力の他に、位階差障壁って云うとっても厄介な能力を持つてるんだ」

「いかい、さしようへき〜? ノイズって嘔吐くの?」

「それは詐称」

何でそんなこと知ってるの、と鏡華は苦笑する

その際、ちらりと奏や未来、以下三名をちらりと見る

ノイズに襲われてはいない

ならば、

「位階差障壁つてのはね、簡単に言っちゃえばオバケみたいなものかな？」

「オバケ？　じゃあじゃあ、ノイズつてオバケなの？」

「まあ似たようなもの。オバケも壁すり抜けたりするけど、脅かした人を舐めたりもするでしょ？　……これがあるから俺達人類はノイズと戦っても攻撃が当たらず、逆にノ

イズの攻撃は当たつちやう。でもね——そこそノイズの弱点でもあるんだ」

カリバーンを形成するはずのエネルギーを球体に変え、見られずに足下へ設置

間髪入れずに踏み抜き、エネルギーを炸裂させる

結果として、弦十郎がしたような《震脚》のようになり、鏡華は空高く舞い、ノイズの密集から離れた

ノイズは身体を槍と変え、鏡華へ迫る

「俺達人間を槍で攻撃する時、ノイズは絶対に身体を“こちら側へ”出すんだ。出しておかないとすり抜けちゃうからね。で、その中で一瞬、本当に一瞬だけ存在が一番濃くなるんだ。俺達は刹那……一瞬よりも疾くそこを狙い——」

槍を避けた鏡華は、片足を後ろへ下げ、

—撃ッ！

ノイズの真ん中辺りをまるでボールを蹴るかのよう蹴り抜いた

「——ぶち抜くっ」

蹴り飛ばされたノイズは自壊し、灰となる

「とまあ、こんな感じ。ただし、確率的には自分が死ぬ確率の方が高いから、絶対真似しちゃ駄目だからね」

と——、

鏡華はさも自分は簡単にできると言わんばかりに言うが

実際は鏡華はそれだけでノイズを倒したわけじゃない

無論今の説明は了子の提唱した『櫻井理論』から抜粋したので間違いはない

鏡華の場合、アヴァロンをその身に埋め込んでいたので、生身でも倒すことができ
てしまうのだ”

響も状態としては同じだが、一度の発動以降常時発動している完全聖遺物ではないの
で生身では不可能だ

「は——い」

「いい返事だ。——それじゃあ、お母さんのところに行きな。ノイズは俺が通さないか
ら」

抱っこしていた鏡華は、ともをおろした

地面に立つと、鏡華の言い付け通り一目散の所に駆けていく

女性はともが飛び込んでくると、また涙を流してその華奢な身体を強く抱き締めた
「おーい、かなでもくん」

「んあ？ 何だー？」

暇そうに、しかし身体だけはいつでも動ける状態であった奏

鏡華はちよいちよいと招く様に手を動かす

ちよこちよこと鏡華に近付く

「俺がノイズを引きつける。奏は小日向とおばちゃんを連れて逃げて。ついでに途中で隠れ家に帰って」

「おう。鏡華はその後どうすんだ？」

「ある程度片付いたら包帯と食い物買って帰るよ」

「分かった。まあ、あれだ。死ぬことはないだろうけど、死ぬなよ」

「あいあい」

背を向け、鏡華はノイズと未来達の中間に位置取る

奏は抱擁を続ける母娘に駆け寄った

白いコートに顔にマスクを付けている奇妙な姿の奏を見て、母娘は警戒するように見上げた

「感動の抱擁は後でも出来るからさ、今は早く逃げようぜ奥さん」

「は……はい」

女性を立ち上がらせると、さつき羽交い締めにして止めていた男性の方を向く

「おっちゃん、この親子避難シエルターまで連れてつてくれ」

「あ、ああ……。だけど、あいつはいいのか？ その、足止めなら俺も——」

「鏡華あいつの邪魔になるだけだ。それにおっちゃんじゃあ逆に組み敷かれて炭化終するだけだ

ぜ？」

「だが……いや、わかった。この親子のことは任せろ」

まだ言いたげだったが、しかし、頭を振ると何も聞かないで承諾してくれた

男性はともを抱き上げ、女性と共に最寄りの避難シエルターへ向かった

「未来、おぼちゃん。二人も早く行くよ」

「でも、かなでもんちゃん。鏡華君は……」

「おぼちゃん」

遮ったのは奏ではなく未来

振り返れば、未来は胸に手を当てていた

大丈夫だよおぼちゃん。鏡華先生は大丈夫」

「………………。……分かったよ。そこまで言われちゃあ信じるしかないね」

うん、と未来は頷く

そしてもう一度鏡花を見ると、

「鏡華先生——ッ！」

「あいゝ？ な——」

「私イ、先生のことー、異性として大好きです——っ!!」

「に……………はいい？」

背中を受けた言葉に思わず鏡華は振り返る

一瞬、何を言われたか分からなかったが、すぐに頭の中でリフレインする

「いつか、答えを聞かせて下さいねっ」

極上の笑みで言い切った未来

明るくそう言った未来は奏の方を向いた

「翼さんにも言いましたけど、私、諦めも負けもしませんからね——『奏さん』」

奏だけに聞こえる声でそう言うと、身を翻しておばちゃんの手を引つ張つて駆けてい

く

一方、鏡華は真つ白になった脳内を必死に再起動して情報処理に明け暮れていた

——え……………あ？ はい？

鏡華は決して鈍感ではない

未来の好意にまったく気付いていなかったわけではなかった

しかし、それはあくまで「教師として」「好意を向けているのだろう——」と
 思っ
 た

だが、鏡華は一つ自分のことで勘違いをしていた

確かに鏡華は鈍感でも愚鈍でもない

人からの好意を感じることはできる

しかし——それを愛「LOVE」と感じることはできない

人からの好意は——翼と奏を除いて——全て好き「LIKE」と考えてしま
 うの
 だ

それが鏡華にある唯一の人間としての欠点

奏も少なからず驚いていた

正体がバレていたことは別に構わないのだが（と云うかバレてない方がおかしい）、今
 まで鏡花の視点から見てきた未来では考えられない程ストレートな告白だったからだ

鏡華の方は——未だ混乱しているのか、あうあうしている

子犬を連想させて可愛かったが、それも云ってられず奏はロンを具現化して一息に投
 擲する

びゅん、と風を切って一直線に駆け抜けた槍は鏡花の顔の真横を横切り——襲いか
 かるうとしていたノイズを貫いた

「……………あう？」

今頃気付いたのか、後ろを振り向く鏡花

頬がわずかに裂け、血が流れ落ちる

「(きよ〜う〜か〜?)」

流石にそろそろ駆け出さないと未来達に追いつけないので、駆け出しながら念話を送る奏

「(は、はいっ)」

「(告白されたくらいであうあうしてんじゃねえよ。初心な子供か)」

「(ううっ…………)」

へこむような声に奏は吹き出しそうになる

そこでふと思い立った

「(鏡華ー、好きだぞー)」

「(うん。俺も奏が好きだよ)」

「(……………)」

「(奏?)」

——— なんてやねんっ

本気でそうツツコミを入れたくなった

長年家族やら仲間やらで傍にいたからかもしれないが、何故か自分の告白には素面で
 反応する鏡華

—— 何でかなあ

まあ、その追求は後でもできるので
 まずは未来とおぼちゃんに追いつくのが先だった

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「こ、困った……。本当に困ったぞ」

ノイズの攻撃をプライウエン使用の《護れと謳え聖母の加護》で防ぎ、炭化させてい
 く鏡華は本気で悩んでいた

—— 私、先生のこと、大好きですっ

今なお省略されたその言葉が頭の中でダ・カーポされ、鳴り響いている

「ちよ、誰かマジでヘルプミー！」

泣き言を漏らしながらノイズを殲滅していく

と、そこで気付いた。自分を狙っていないノイズが一定の方向に向かっていることに
 疑問に思っていると、

「遠見先生!？」

響の声が聞こえた

振り返れば響が走り寄ってきていた

「よお、立花」

「よお、じゃありませんよ！ 身体は大丈夫なんですか!？」

「身体？」

「師匠が言ってたんです。遠見先生のシンフォギアは遠見先生の身体を定期的に傷つけているって」

かなり端折ってあったが、鏡華には伝わった様で「勝手に話すなや」と頭を抱えていた

その時、鏡華の頭の中で声が響く

「(鏡華っ!)」

「(どうしたの?)」

「(悪い、未来とおぼちゃんとはぐれた。ノイズに襲われて離ればなれになっちゃったんだ!)」

「(ッ、すぐ行く!)」

念話を受けた鏡華は響に向き直る

「立花、小日向がノイズに襲われてるらしい」

「未来が!？」

「ああ。行くぞ」

「はいっ!」

そして、鏡華は思った

立花に任せるか、と

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「——これはまあ、万事上手く云ったのかな?」

高く狭い道に設置され歪な形に変形したガードレールの上に座り、真下の光景を眺めながら鏡華はぼつりと呟いた

隣にはガングニールの防護服を纏った奏が同じように座っている

結果として、鏡華の考えは上手く云った

彼らの真下には小川が流れていて、鳥が気持ち良さそうに浮かんでいて

近くの土手で響と未来が泥だらけの顔で最近一番の笑みを浮かべて笑い合っていた

「もう、心配はいらないな」

「だな」

防護服を解除し元のコートを羽織る奏

仮面も付けて不審者に逆戻りだ

「さて、じゃあ予定とは少し違うけど、飯と包帯買って帰りますか」

「おう。飯はあたしの好きなもんな」

「出来合いのものだけね」

鏡華も防護服を解除し、包帯だらけのコート男に戻る

夕焼けに染まる町を見て、そして一言

「そーいや——開いてる店ってあるのか？」

「——あ」

その一言で、この日の夕食は無しとなるのだった

D. C. XXI

夕食がなくなり意気消沈した鏡華と奏は、どうしたものかと目の前に座る存在を見つめた

身体を可能な限り縮ませて毛布を被っている姿は、小さな子供に見える

「(っ)か、可愛いんですけど！ 鏡華鏡華、抱きしめちゃっていいか!?)」

「(や)めなさい。すぐに嫌われ——)」

「うりやー。うりうりー」

「ぎやー！ や、やめろーっ!」

「言ってる傍から頬擦りすんなよ……」

溜め息を吐いて、奏を無理矢理引き剥がす

ついでに胸も揉んでおいた

「うひゃあつ!?!」

「どした?」

「な、なにいきなり胸を揉んでんだよっ」

「いやー、マシユマ口みたいだったから」

「そんな、そこにあるからの感覚でも乙女の身体を揉むな！」

鏡華から慌てて離れると自分の身を掻き抱く奏

面白いものが見れたなー、と思いつつ鏡華は再び向き直った

よく見れば、少し顔を赤らめている

「で？ 何で俺達の隠れ家にいるのかな？ ——雪音」

「……たまたまちょうど良い隠れ家みたいだったから居候させてもらおうとしただけだ」

「まあ良いんだけどさ。……一つだけ答えてもらっていいか？」

「なんだよ」

「夜宙は？」

「ッ……」

途端、クリスの顔が強張る

「ヴァンは……分からねえ」

「……そうか」

それだけで理解したのか、鏡華はそれ以上追求してこなかった。

不審に感じたクリスは鏡華に訊ねた。

「……あたしを追い出さないのか？」

「何故？　云つとくが、俺は無一文の野郎を追い出す程鬼畜な人間じゃない」

「じゃなくて——あたしとお前らは敵だろ？　味方に突き出すとか……」

「俺はそんな面倒な事する気はない。——奏は？」

「鏡華に同じく」

「……………」

「俺達は隠し事が多いからな。今更隠し事が一つ増えたつて変わりやしないんだ」

——お前がここにいようといまいと関係無いってこと

常備してたらしきポテチの袋をクリスに放ると、自分は棒状のクッキーを食べる。奏も鏡華の手元からクッキーを一本引き抜き口に啜える

呆気にと取られていたクリスだったが、吹っ切れたのか、袋を開けてポテチを食べ始めた

「もぐもぐ……鏡華、クッキーゲームしようぜ」

「別にいいけど」

自分のを食べ終え、新たなクッキーの端を奏に啜えさせる。手を離して鏡華も反対の端を啜えた

ぼりぼりと部屋に音が響く

「ぼりぼり……」

「……………」

「もぐもぐ……………」

「……………」

「ぽり……………」

「……………」

「もぐ……………」

「……………」

「つて、恥ずかしすぎるわーっっ!!」

耐えられなくなつた鏡華が残り数ミリとなつたクツキーを噛み砕いた。パキツと小気味良い音が聞こえた

残つたクツキーは奏がもぐもぐと食べ切る。

「勝負は私の勝ちだな、鏡華」

「その前に羞恥つてのを覚えようよ、奏は！ 人前でやるゲームじゃねえだろ!? これじゃあ罰ゲームじゃねえかつ！」

「それに気付くことなく誘いを受けた鏡華が悪いぞ」

「悪いぞ、じゃねー！」

絶叫する鏡華

アホらし、とばかりに背を向けポテチを頬張るクリス
 しかし——、

「よしつ、次はクリス、やろうぜつ！」

「ツ——!?!」

魔の手はクリスに伸びんとしていた

咳き込みながら、クリスは吠えた

「やるかああ——っ!!」

その日の隠れ家は、とても賑やかだった

とても——賑やかすぎる程

次の日、鏡華が学校に遅刻したのは云うまでもなかった

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

翌日は残念な事に天候は雨だった

だから外を歩き交う人は少ない

出なければならぬ社会人は大勢いるが、基本、弦十郎配下の人間は歩く必要はない
 「ビデオを返却するう? こんな雨にかよ」

呆れたように言う鏡華

相手は出掛ける準備をしている弦十郎

「期限が今日までなんだ、仕方ないだろう」

「まあ、旦那ならよほどのことがない限り大丈夫だけどさ。——ウチには来んなよ」
先に釘を刺しておく

弦十郎の魂胆など、最初から分かっていた

ビデオを返却は方便ではなく、本気なのだが

「——バレてたか」

「つたりまえだ。現時点でのアヴァロンの結界領域は半径数百メートル。見張りたかつたら超遠距離の望遠鏡でも使ってくれ」

「……そこまで広げていると云うことは、目覚めたのか？」

「さあてね。昨日、自動自傷行為に励んでたから、注意深くなんてるだけじゃね？」

自分のことなのに他人事のように話す鏡華

だが、弦十郎にはそれが演技だとはつきりと分かった

「そうか。——それじゃあ、話に行くのはまた今度にしよう。せつかくの宿から追い出したくは無いからな」

「おう。会話は俺と奏に任せとけ」

外に出掛けるのを見届けた鏡華は自分の飲み物を飲み干すと、部屋を出た

今日は響が未来をここに連れてくるそうだ

ただ、鏡華にとってそれはあまり歓迎するべきではない出来事だった

何故なら——昨日、告白されたばかりなのに、何を話したらいいか分からないからだ

やれやれ、といつもなら奏の溜め息が聞こえるのだが、生憎と奏は昨日の晩に目覚めたので幽霊もどきは出来なくなってしまっている

今、奏が鏡華を通じて出来ることと云えば、念話と相手がダメーヂを負ったか分かるぐらい

——やれやれ

声に出さず、代弁する鏡華

代弁、とは云うが、実際のところ自分に対してなので代弁でも何でもないのであるが

休憩所の所に向かうと、そこには緒川を含めた翼、響、未来、了子の五人がガールズトーク(?)に花を咲かせていた

「ふん——っ！」

直後、目の前に現れたのは赤い何か

それは真つ直ぐ鏡華の顔面を、もつと云えば眼を直撃した

「ぎゃーすつ!!」

突然の攻撃に反撃も回避も出来ぬまま、モロに喰らった鏡華は床をゴロゴロと転がり眼を押さえる

「ま、まア私も忙しいから、後はその不死身君の恋バナにでも、花を咲かせて頂戴」

「ハ、このお婆さん、サトリ——うおあつ!!」

言い切る前に落ちてくる赤い尖ったもの

と云うか、了子のヒールだった

その奥に見えるモノは刹那に意識と視界から除外する

「じゃあねエ。バツハハ〜イ」

了子はまるで気付いていないかのようにそのまま歩くと、自分の研究室がある方へ消えていった

と云うか、二歩目が鏡華の腹を踏ん付けていた

「聞きそびれちゃったね」

「むう、やはりガードは硬いかあ。だけど、いつか絶対了子さんのロマンスを聞き出してみせる! その為に——」

響が向き直ったのは、いや、見下ろしたのは痛みに悶える鏡華

その瞳はとて、とつてもきらきらしていた

「遠見先生の恋バナを聞かせて下さい！」

「えー」

「色々！ 特に翼さんが奏さん、どっちを取るかで！」

「……その前にさー。どうしても立花に言いたいことがあるんだけど」

鏡華は寝たままの姿勢で、面倒臭いような表情で

諦めたように、言った

「派手な紫。パンツが見えてるぞ」

無論——

直後に響が素っ頓狂な声で叫び

翼と未来が鏡華を踏ん付けて蹴飛ばしたのは、当然のことながら云うまでもなかった

♪♪♪♪♪♪♪♪

時間を少しだが遡りたい

響と未来が翼に会い、もう一度自己紹介を交わした直後まで

「ああ、それと。『教師である』鏡華とも仲良くしてやってほしい。鏡華も立花同様、面倒な性格だからな」

「いいえ。教師じゃなくても」鏡華せん——鏡華さんとは仲良くしたいと思つてますから。翼さんの分まで支えてみせます」

「ほう。鏡華と何かあつたのか？ すまないな、迷惑を掛けてしまつて」

「ふふ、迷惑だなんてとんでもない。むしろ、もつと甘えてもらいたいです」

「そうか。ふふふ……」

「そうなんです。ふふふ……」

二人にしか伝わらない意味で離し、笑う翼と未来

顔と声は笑っているのだが、眼だけはまったく笑っていない

立場的には蛇と蛙なのに

蛇と蛇の睨み合いだ

響と緒川が蛙の立場に立っているような気分になっていた

「お、緒川さあん！ 何だかものすつごい修羅場になつていますがあ!! これは一

体何事ですか!？」

「は、はは。恐らく鏡華君を介して宣戦布告をしているんだと思います、よ? ……確証

はありませんが」

「あー。一昨日……あれ、もう昨日かな? 未来、先生に告白したつて……」

「何ですつて?」

聞こえたのか、翼が眼を見開き響に詰め寄る

「どう云うことだ立花！ 誰が告白したと……」

「だ、えつと、あの。み、未来が……」

「告白しました。私」

はつきりと言い放つ未来

きつ、と睨む翼を前にしても微動だにしない

「小日向……」

「翼さん、言いましたよね？ 欲しかったら——力づくで私達から奪ってみなさいと」

「……………ああ」

「私、喧嘩とかそう云うことは得意じゃないんです。人から奪うことなんてできません。だから、力づくは無理でも……それでも、せめて翼さんと奏さんの場所まで辿り着きます」

「……………」

「勝てなくても、負けません」

宣言に近い言葉に翼は声を失い、じつと未来を見詰める

未来は表情を変えず、見詰め返す

そして、息を吐くと「そうか」と呟いた

元々、自分から挑発した言葉だ

挑戦されては——受けるしかない

それを見ていた緒川は、

(変わったのか、変えられたのか——どっちなんでしょうね?)

そう考えていた

その後、了子が輪に入り、恋バナに話題が変わり

鏡華が蹴り飛ばされるまで——時間は元に戻る

蹴り飛ばされた頬を押さえながら鏡華は、自分の隣に座っている翼と未来が徐々に自分に、じりじりと寄ってくるのを感じつつ視線をコーヒーに移した

——あれ、恋バナってガールズトークだね? 何で男の俺が詰め寄られてるの?

「じゃあ、遠見先生の一目惚れってどっちが先だったんですか?」

「ねえ、立花。話が繋がってないのに、じゃあって、間違ってるって中学中退の俺でも思うんだよね」

「それ、私も聞きたい。鏡華は私と奏、どっちから好きになったんだ?」

「もしもし? 皆さん、聞いてます?」

しかも翼は明らかに無理をしている

恋バナなんて乙女全開の話題など、翼は経験した事もなく耐性もないはず。なのに自分から積極的に聞いてくる

変に未来を意識しているのか、それとも——

助け舟なんて出す気ない笑顔の緒川を見て、溜め息を吐きながら、鏡華は口を開いた
「同時だと思うよ。今だからぶつちやけるけど、俺、出会った時は翼も奏も——嫌いだったもん」

「……………え……………?」

「翼は俺のこと、女の子だと勘違いしてたし。奏は握手しようと差し出した手を噛み付いてきたし。初対面の印象は、それはそれは最悪だったよ」

懐かしむように眼を細める鏡華

その反面、翼は顔を俯かせていた。心なし、背後にずーんと縦線が見えなくもない

だけど、と鏡華は続ける

その手を翼の頭に乗せながら

「何年も家族みたいに接して、まあ、色々あって、俺はこの二人が好きだなんて思ったんだ。どっちが、じゃなくて——両方が同じくらいに」

「はう……………」

「なんて云うか……………ちそうさまです」

「むう……」

翼は顔が沸騰し、響はぺたりと合掌した

一方、面白くないと云った様子の未来は頬を膨らませていた

「ところで、小日向さんや」

「何ですか？」

「いい加減、俺の太腿をつねるのはやめてもらえませんか？」

「そんなことしてませんよ？」

——してますよねっ

ツツコミたかったが、仕方なく黙っておいた

今はつねるのではなく、突いていたので、本当に仕方なく黙っておいた

「それより！　今まで好き勝手聞いてきた立花はどうなの!?　恋バナの一つぐらいある

んでしょ？」

「翼さん。察してあげて下さい。響の残念な恋愛経験なんて面白いと思えますか？」

「翼、立花の皆無な恋愛話なんて聞いてやるな。残念な事になるぞ」

「未来と遠見先生酷いっ！」

代わりに響をイジることので我慢しておくことにした

「じゃ、じゃあ！　未来はどうなの!?　いつ遠見先生のこと好きになったの？」

「え!? えつと……」

今度は未来が躊躇う番だった

翼もそれに悪そうな笑みで便乗する

「それは確かに聞きたいな。会ってもない鏡華のことを、一体いつ好きになったのか」

「……会いました」

「ん?」

「私、鏡華さんと会ったこと、あります」

へ? と翼と響の驚きが重なる

鏡華もハテナ顔になりながら、思い出そうと頭をひねっている

「覚えていませんか? ツヴァイウイングの二曲目のことを」

「……? ……あつ」

そのキーワードで鏡華の頭の中で思い出が鮮明に蘇った

あの頃、二曲目で少し悩んでいた時期があった

「曲はできてたけど、タイトルが思い浮かばなかったんだよな」

「それで人気のない公園のベンチで寝てましたよね」

「そうそう。ああ、そうだ。そんな時、俺に話しかけてきた女の子がいたわ」

「色々話しましたよね。曲のことで悩んでいることも」

「ああ、うん。愚痴っぽく話したら、曲のタイトルを考えてくれたんだよな」

——んで、そのアイデアをそのままタイトルにつけた

その言葉に、翼はようやくと疑問が解けた気がした

二曲目のタイトルを聞いた時、鏡華っぽくないと思っていたのだ

まさか他人の考えをそのままタイトルにするなんて、当時は思っていなかったが

——なるほど、そういうことか

「……あの、翼さんや」

「なに？ 鏡華」

「横腹をつねらないでくれませんか？」

「つねってなどいない」

「……………」

はあ、と溜め息をもう一度吐く

つまりは、あれか

未来は自分のアイデアを名前に付けられたり、その時のことで惚れられたということだ

「ところで翼さん」

緒川が話しかける

横眼で見ながら、鏡華はコーヒーに口をつける

「そろそろ次のスケジュールが迫ってきてる時間だと」

「あ、もうそんな時間か」

「え？ もうお仕事してるんですか!？」

響は驚く

苦笑しながら「まだ慣らしと云った感じだがな」と翼は言った

「お忙しくなりそうですね」

「そうだな。休んだ分のスケジュール合わせをしないといけないし」

「で、でも！ まだ慣らしなんですよ？ 以前みたいな過密スケジュールじゃないん

ですよね!？」

「え、ええ……」

緒川を見て、頷くのを見てから答える

「だったら翼さん！ デートしましょっ!」

「で、デート!？」

「ぶふっ」

いきなりの発言に、鏡華は吹き出した

翼は困惑し、未来は困ったような笑みを浮かべているのだった

D. C. XXII

響のデート発言から数日後——

鏡華は一人で、とある自然公園の時計の下で立っていた

約束の時間は十時

にも関わらず、真上の時計は十時三十分を差している

「はあ、よかったよ。奏が寛大で」

そうでなければ今頃、鏡華は遅刻どころか欠席していたかもしれないのだ

——デート？　おう、行ってこいよ。あたしは今度、翼とダブルデートの時まで

待つてるからさ

そんな約束をして送り出されたのだが、

「絶対裏がありそうだな」

そう思わずにはいられない鏡華だった

まあ、概ねその通りであって、奏は現在、プライウエンを使って、人が認識できない

高さから鏡華を見ていた

そんな所から見れるのか、と思わずにはいられないが、奏の手には小型の望遠鏡が握

られており用意は万端だった

閑話休題

溜め息を吐いて、
“包帯の巻いてない左手”を見る。早速回復が始まった証拠である
左腕

一面を覆っていた傷は、肘までだが綺麗さっぱり無くなり元の綺麗な腕に戻って——
——などいない

わずかに引つ搔いたような傷が残っていた

「まあ、いいんだけど」

完治したのは、左腕だけ。その他の部分は未だに傷が残っている

それに、元の女の子みたいな腕よりこちらの方がまだマシだ。むしろ良かったと思っ
ていた

と、そんな風にな腕を見ながら忘我に浸ること暫し

公園の一角から、男のどよめきが聞こえてきた

鏡華はふう、と息を吐き（決して溜め息ではない）、ようやく来たことを確信して振り
向いた

振り向いて——固まった

「ま、待った……かな？」

「お、お待たせしました……」

目の前には天使の姉妹が二人、自分に声を掛けていた

姉の方は長い蒼髪を靡かせ、モデルも肌足で逃げる印象を与えた。透き通った湖を連想させる水色のワンピースに白を基調としたボレロを羽織った姿は美しい以外褒め言葉はない。目を隠すように深く被った小さめの麦わら帽子がまた可愛らしさを引き出している

一方、姉ばかり評価していたが、妹の方も引けは取らない。黒を基調とし白で装飾されたゴシッククロリータ調の服を着ている。普通は膨らんでいるスカートは膨らんでないが、それが逆に清楚さを漂わせていた。胸元にはオレンジ色のリボンが可愛く結ばれている

「ツ……、ツ……!」

鏡華は鼻血を出さなかつた自分を褒めたかつた

二人の歩く前が、聖書に登場した先導者よろしく分かれていたのだ
ついでに声を掛けられた鏡華にかなりの視線が集まつた

主に敵意と嫉妬が九割。一割は面白がるような気配

特に女性からの視線が多かつた

自分の恋人の視線を奪う彼女達に声を掛けられるあんたは何様よつ、的な感じで

「鏡華？」

「どうしたんですか？」

「ツ……いい、いや、何でもない。全然何でもない」

文法が間違っていることに気付けないまま、鏡華は我に返る

「翼と小日向が可愛過ぎて見蕩れて我を失っていたわけじゃないからなっ！」

我に返りすぎて、墓穴を掘っているのは気にしてはいけない

と云うか、鏡華の「可愛過ぎて見蕩れた」宣言は天使姉妹——翼と未来の顔を沸騰させてしまい、気にする事はできなかつた

——そんな三人を見ている人影が、いや、三人を見ている人間など自然公園には山ほどいるが、その中でも二人が見ていた

「ぬふふ……未来と翼さんの服を、了子さんと一緒に三日三晩協議していた甲斐がありましたっ」

「確かに。周りまでもが見蕩れてしまうのは計算外でしたが……それも誤差の内ですよ響さん」

サンングラスを掛けた男女——と云うか、響と緒川だったが——が物陰からじつくりとねつとりと、楽しそうに悪そうに三人を見ている

とてもノリノリな二人だ

「あ、移動するみたいですね」

「追い掛けましょう。隠密なら得意です」

「おおつ。期待してます、緒川さん！」

普段はストッパー役である翼や未来がいないことをいいことに、止まる事を知らない残念な二人

緒川なんて、この日のこの役のためだけに、有給を使っていた

しかも――、

『こちら二課の藤堯。三人はこのままシヨツピングモールに向かう模様です』

『ネット上には未だ反応無し。――ついでにノイズの反応もありません』

オペレーターまでもがノリノリでサポートしていた！

もし鏡華が知ったら、「どんだけ暇な組織なんだ二課はっ！」と叫んでいただろう

実際、二課はノイズと情報操作専門の組織。それ以外の時間は、とても暇なのだ

そこに舞い降りたのが、ダブルデートという娯ら……否、スキヤンダル間違いない無しの行動

「こんな面しろ……もとい危険（報道的な意味）を見逃す事などできるわけないっ！」

それがオペレーター二人の考えであり行動理由だった

当然、彼らの顔がにやけていることは言うまでもないだろう
残念ながら（？）、弦十郎と了子は参加しなかったが

この作戦は過去稀にみる大規模（笑）のものだった

「じゃあ、行きましよう！ 私の指示通り動いて下さいね」

「ラジャー！」

そして、二人はギクシャクとした三人を追い掛けるのだった

そんな二人の遙か後方

約数十メートル後ろには、一人の男が「誰にも見られることなく」、白昼堂々盗撮を
していた

一眼レフのカメラにはかなりの距離の撮影も可能な望遠レンズが装着されている

赤いワイシャツにスラックス。言わずもがな——弦十郎だった

「ふっ……姪っ子と息子の初デート。現場で見なくてどうするか」

正確には鏡華とは養子縁組をしたわけではないので息子ではないのだが、引き取つて
から育ててきたので息子同然と弦十郎の中では解釈されていた

ちなみに、だが。弦十郎の姿は誰にも見られていない。隠れている訳でもないのに

理由は一つ。《圏境》もどきを使って気配を消しているからだ

こんなことに体術の秘奥儀使つてんなよ、とツツコミたくもなるが、ツツコむ人がいないので誰もツツコミを入れることはなかった

「さて、シヨツピングモールなら……あそこがベストだな」

そして、弦十郎は《瞬動》で姿を消した

盗撮と云う名の記念写真を撮るために

まあ、結局の所——

鏡華、翼、未来にとって初デートは、三人だけで行えないのだった

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「いやあ、最初はマジでビクツたわ。俺に声掛けてくるこの二人は一体どこの天使様だつてな」

「そ、そうか……?」

「き、鏡華さんも、その服、よく似合ってますよ。格好良いです」

「ん、あんがと」

一先ずは予定していたシヨツピングモールに行くことになった鏡華達

公園での人垣が割れるような出来事は起きなかったが、大抵の人々は何事かと振り

返つては鏡華を取り巻く二人に見蕩れていた

「さて、と。どこ行きますか？」

「すまない。私はこういう場合、どこへ行つたらいいか……」

「だよねえ。俺も同じくだし……小日向、どうしたらいい？」

「えつと……響と出掛ける時は大体適当でしたから……」

きよろきよろと辺りを見渡し、興味が生まれた店を指差す

そこはインテリアを扱うお店

「まずは、あのお店に行きませんか？」

「ん、了解。……つーか、こう云う時、立花がいてくれると助かるんだけどなあ」

「昨日、急に行けなくなつたつて言つてましたけど——どこで何をしているのやら」

「そうなのか？ 私の方も緒川さんが急に有給を取つたみたいなんだが……」

「……あのさ、二人共」

何となく思いついた鏡華は二人を呼ぶ

未来と翼は立ち止まって振り返る

「立花響プラス緒川さんイコール？」

「……？」

「……彼らには面白い、第三者は傍迷惑な行動」

「翼、正解」

——つまりは

がばりと辺りを三人で見渡す

そして——見つけた

サングラスを掛けて、不自然なくらい明後日の方を向いている響と緒川の姿が

「……いたね」

「いたな」

「響が残念で本当にごめんなさい」

「小日向が謝る必要はない。緒川さんも残念だから」

「……よしっ」

鏡華は一息つき、決心すると、

「逃げるぞっ！」

二人の腕を掴んで走り出した

どちらもヒールなど、踵の高い靴は履いてないので転ぶ事なく鏡華の速度に合わせてら

れた

響と緒川もそれに気付き、

「あっ」

「追い掛けましょう」

鏡華達が逃げた先を慌てて追い掛けた

曲がり角を曲がった瞬間、

「ほらね」

溜め息混じりに頭を搔いていた鏡華がいた

「緒川さん……」

「響……」

翼と未来も呆れた様子で響と緒川を見ている

瞳にはジツトリとした気持ちが生かんでいた

そんな瞳を突きつけられた響と緒川は、観念したように、

「ご、ごめんなさうい」「すみません」

平謝りに徹するのだった

「たぐくつ、仕方ねえ二人だな」

「仕方ない二人だ」

「残念な二人です」

無論、三人の言葉に言葉を返せない二人。

デートが始まって、約数分。

響と緒川は三人に見つかり、デートから遊びになるのだった。

なお――、

「響君と緒川君があつきり見つかったか。せつかくのデートを……。これは、給料を下げるしか無いな……」

パシャパシャとシャッターを切っていた弦十郎がそう呟いていた。

当然、誰にも気付かれる事は無かったが。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

三人のデートは、響の参入によって、ただのガールズ何とかになつていた。

鏡華は緒川と共に、一步引いた場所からガールズトークに花を咲かせている三人を眺めていた。

「どうぞ、鏡華君」

緒川が買ってきた紙コップを、どうも、と受け取り喉を潤す。

「すっかり蚊帳の外ですね」

「別にいいですよ。見ているだけでも楽しいから」

「そうですか」

「はい」

そう言つて三人を、恐らくは翼を見つめる鏡華。

緒川には、その瞳がとても穏やかに見えた。

「本当に好きなんですね、翼さんのことが」

「好きですよ。……奏と同じくらい、ですけど」

「どつちかを選ぶ……なんて、鏡華君には無理でしたね」

鏡華は、間違つてるとはわかつているんですけど、とやるせない笑みを浮かべる。

そんな鏡華に、緒川はフォローできる言葉が見つからなかった。

「大変かもしれませんが、頑張ってください」

だから、それぐらいしか言えなかった。

鏡華もそれを理解しつつ、お礼を言うだけに留め、翼達に視線を戻した。

——と、視線を戻しても翼達三人の姿はない。

よく見ると、数人の人垣が三人を——というか、翼を囲んでいた。

「人気者は辛いね。——ちよつち行つてきますわ」

「場所は確保しておきます。あまり目立つことは駄目ですよ。ついでにサングラスをど

うぞで」

「はいはい」

そう言つて、二人は立ち上がり、人垣の方へ向かい、鏡華はサングラスを掛けながら人垣と翼の間に割り込み、緒川は響と未来の救助に入るのだつた。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

数人のファンをどうにか撒き、安全地帯で少し休憩した四人は（緒川はいつの間にかいなくなつていた）、新しい服を調達しつつファッションショーを始めた。

もちろん、着替えたのは女子だけで、鏡華はずっと観客だ。

普通の服から始まり、可愛らしい服、格好良い服、時には大胆な服を着ては鏡華と翼の反応を楽しんでいた。

そんな四人や恥ずかしがる翼を弦十郎はシャツターをパシャリ。

昼食は喫茶店やフードコートに入らず、出店で食べ歩きをした。食べ歩きの経験のなかつた鏡華と翼にとってそれは新鮮だつた。色々と食べたが、鏡華が翼の頬に付いたソフトクリームを舂めとつて、翼の顔が沸騰寸前だつた時は、色々と大変だつた。

翼が照れ、未来は羨ましそうに、恨めしそうに翼を見つめ、響は悪そうな笑みを浮かべていた。

弦十郎は、鏡華が翼の頬を舐めた瞬間を逃さず、パシヤリ。

そして――

「翼さん！ 遠見先生！ 記念にプリクラ取りましょう！」

「ぷりくら？」

プリクラを知らない翼と鏡華は揃って鸚鵡返しに聞いた。

簡単に説明すると、二人の背を押してプリクラの中へ入る。同時に未来に耳打ちを忘れない。

耳打ちの内容に赤面する未来だったが、決意の籠もった表情で頷く。

「じゃあ、いきますよー」

合図と共にシャッターが切られる瞬間、

「えいつ」

「へっ？」

「なっ」

未来が鏡華の頬にキスをするのだった。

当然、その後、負けじと翼も頬にキスをする写真を撮ったり、二人いつペンでキスするのを撮ったり――

ほとんど鏡華を困らせるのだった。

まあ、そんなことを説明しなくともいいだろう。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

デートと云う遊びは、陽が傾くまで続いた。

初めての所、おすすめの所、とにかく様々な場所を遊び倒した四人は、最後に響と未
来の案内で街外れ、高台に足を運んだ

「大丈夫？ 翼」

「大丈夫。……だけど、二人の体力には驚いた」

息を切らして、鏡華に手を引かれている翼。鏡華は翼の速度に合わせて階段を昇って
いく

階段の上では響と未来が二人を見下ろしている

年下の女の子に体力で負けている事に、少なからずへこみそうになりながら、鏡華は
翼と共に階段を昇りきる

階上で二人を待っていたのは、小さな公園だった

「ふう……。それにしても、今日は知らない世界に迷い込んだような気分だった」

「そんな事ありませんよ」

響は翼の手を取り、高台の端へ連れて行く。鏡華と未来は一步後ろで二人を見守る。「見てください。コンサート会場、あそこが待ち合わせの公園。で、シヨツピングモール。あつちには未来と一緒によく行くふらわー。私達が戦って、戦ったからこそ、今日行つた場所があるんです」

だから、と

だから——知らないなんて言わないでください

「」

もう一度、翼は眼前に広がる街を見つめる

何を思っているのか、鏡華には分からない。しかし、きっと奏との事なんだろうな、とは分かっていた

——戦いの裏側、か

以前、奏が言っていたのをふと思い出した

命の価値と同じくらい奏でが考えていた事で、確か奏はこんな風に言っていた気がする

——戦いの裏側とか、その向こう側には、また違ったものが見れるんじゃないか

それはきつと、今、目の前に広がる世界の事なのではないか

もしかしたら、奏は知っていたのかもしれない

「——奏」

「うん？ どうした鏡華」

「やっぱり奏は凄いな」

「何だよ藪から棒に」

「気にすんな。思っただけだから」

鏡華の念話に、奏は深く聞かず、そっか、とだけ返した
鏡華はそれきり黙り、一つの事を考えているのだった

D. C. XXIII

「復歸ステージ？ 何だよそれ」

「翼……蒼いシンフォギアの奴がアーティストフェスに無理矢理自分をねじ込んでもらってな。倒れて中止になったステージの代わりって奴だ」

「……あたしには関係無いね」

そりやそうだけどな、と鏡華は苦笑を浮かべ切り分けたお好み焼きをクリスに渡す
奏は既に頬張っている。ちなみにもう三皿目

「まあな。だけどき、コミュニケーションって大事だろ？ どんな些細な事でも人と会話するのは大事だと思うよ、俺は」

「……………」

「ふああ、ふいいひゃん。ふおれより、くふあねえんふあつふあらもふあうふお？」

「駄目に決まってるだろ、一人で三つ食ってんだから」

「……よく分かるな」

素で驚くクリス

長年の付き合いつて奴だ、と鏡華は返す

「そこでだ、奏。そのアーティストフェス、俺達も出るぞ」
「はい？」

「会場は二年前に全てが始まったあの場所。そこで過去を終わらせるんだ。ツヴァイ
ウィングの復活でな」

ツヴァイウィングの解散

遠見鏡華の聖遺物覚醒

天羽奏の休眠

風鳴翼のソロ活動

立花響の運命

それら全てが始まったあの会場で終わらせる

「なるほどねえ。いいじゃん！ 乗るぜ、その案」

「決まりだな。——雪音」

「あん？」

「おそらくだが、このプランが成功したら俺達はこの家を出て行く事になる。そうした

——雪音はどうする？」

「どうするって……」

何をするか、なんて決まってなどいない。結局の所、あれからずっと逃げ続けて、隠

れ続けているだけだ

だけど——

「ヴァンを探しにフィーネの屋敷に戻る」

それだけは決めていた

無事ならばすぐにでも連絡をしてくれるはずなのに、あれから一度もない

と云う事はヴァンの身に何かあつたと云う事だ

鏡華は、

「そうか。頑張れよ」

そう言つて自分のお好み焼きを頬張つた

クリスもそれまでに力を蓄える為に渡されたお好み焼きを口に入れた

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

明かりの点いていないフィーネの屋敷

常世の闇にうつすらとフィーネの輪郭が浮かぶ

彼女が見ている先、そこにはクリスも縛り付けられていた器具が、明かりもないのはつきりと見えていた

今度はクリスマスではなく——「左手のない」ヴァンが縛られているのはつきりと見えた

強情ねエ、とフィーネは嫌そうに言う

ヴァンに答える気力は残っていない。それでも瞳は力強くフィーネを睨みつける
その瞳にフィーネは溜め息を吐き、部屋を後にした

後に残ったのは——ヴァンの絶叫

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

昼休み。翼は鏡華がクリスマスに話した事を響と未来に話し、チケットを渡していた
鏡華は翼の隣で楽譜を書いている

「立花にとつても、辛い会場だな」

「……ありがとうございます」

申し訳なそうに言った翼に、響は逆に明るい声でお礼を言った

思わず響の顔を見上げる

「いくら辛い過去でも、いつかきつと乗り越えられます。そうですね、翼さん」

「……そうありたいと、私も思っている」

そんな二人を微笑ましく思いながら、鏡華は仕上げた楽譜を翼に渡した

「ご要望通り、出来たぜ翼」

「ありがとう鏡華。……ソロになってから作っているソングライターの方には申し訳ないが……」

「ああ、それ、俺だぞ」

「は？」

突然の暴露に翼は素つ頓狂な声を上げてしまった

別にもう隠さなくてもいいのだ

「翼、ソングライターの名前は知ってるか？」

「えっと……確か、ミハナ・トーキョウだったような」

「ミハナ・トーキョウ。トーキョウ・ミハナーこれを感じに直すと」

携帯端末に「遠鏡見華」と打ち込む

それで翼は、あつと声を上げた

「そう、名字と名前の順序を変えてカタカナにただけ。気付くかなって思ってたんだけどな」

くくく、と笑う鏡華に頬を膨らませる翼

響はちらりと未来を見た。未来は少し不満そうな表情を浮かべていた

少し寂しいような羨ましいような気持ちだった

「ま、頑張んな」

そう言つて鏡華は紙とペンを鞆にしまい、立ち上がる

「小日向、立花。そろそろ教室戻るぞー」

「あ、はい」

「それじゃあ翼さん、ステージ頑張つて下さいね!」

「ああ」

鏡華の先導で三人は教室へ戻ろうとする

その途中、鏡華は振り返り、

「ああ、そうだ。翼、フェスの時、入念に喉の調子を整えておきなよ」

「……? うん」



「奏、着替えたか?」

「おう。だけど、あたしにはちよつと可愛すぎないか?」

「そう? 格好良い服の翼と対照的な感じで良いと思うけど」

着替え終わり、くるりと一回転した奏を見て、鏡華は思ったままを口にす

今の奏の服装は二年前の衣装を少し変えたものだ。フワフワしていたフリルのスカートがロングスカートになり、露出度は控えめになっている

「ま、いいや。それじゃあ、行こうぜ鏡華」

「うん」

共に全身を覆い隠すコートを身に纏って部屋を出た

その時だった

鏡華の携帯が鳴ったのは

「……………」

「最悪な展開だな」

奏の悪態に同意の頷きを返しつつ電話に出る

予想通り、電話の相手は弦十郎で、ノイズの出現を知らせるものだった

溜め息を吐いて、鏡華はプライウエンを出現させその上に乗る。奏も鏡華の腰に手を回して乗った

そして、スケボー感覚——ただし速度はかなりの速度——で走り出した

『今から響君と翼に連絡を……』

「あー、旦那。翼には連絡しないでくれ。今日のあいつの戦いはもう始まるうとしてん

だ」

『……………ふっ、響君と同じ事を言ってるぞ』

「あ、そう。……………見つけた。んじゃない旦那。後で会おうぜ」

一方的に電話を切る

速度を上げ、走っている防護服姿の響の隣まで追いつく

「立花！」

「へ？ ……遠見先生!?!」

「乗れ、急ぐぞ！」

「は、はい!！」

後ろに乗っている人物の事を聞く間もないまま、響は狭いプライウエンに飛び乗った

「遠見先生! この人は誰ですか?」

「よっ、久し振りだな響」

答えたのは奏。フードを少しズラして顔を見せた

当然の事ながら驚く響

「え? ええっ!?! か、奏さん!?! な、なんでどうして?」

「話は後だ。ノイズが見えたぞ」

「悪いな響。ちゃんと後で話すからさ、ノイズの事、頼むぜ」

「……はいー！」

奏にそう言われたら、頷くしかない

精一杯首を縦に振り、鏡華と共にプライウエンから飛び立つ

「今回はマジでガチで時間がないんだ。速攻で終わらせるぞ立花！」

「はいー！」

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「風鳴翼の夢を——よろしくお願いしますっ」

万感の想いを籠めてグレイザーに頭を下げる緒川

グレイザーは微笑みながら手を挙げ、踵を返す

だが、彼の前には人が歩いてきていた

全身をコートで覆い隠した二人組

二人がグレイザーの前に立つと、一人が頭を下げた

「ミスター・グレイザー、ですね」

「……君は？」

「忙しいのは存じています。ですが、帰るのは少しだけ待ってもらえませんか」

グレイザーの言葉を無視して、お願いする青年らしきコートの人間
声を知っている緒川は、グレイザーの後ろでわずかに驚いていた

「何故かね？」

「これからステージで『起こす』奇跡が、あなたに対する返答になるかと」

お願いします

そう言つてもう一度頭を下げ

「起こす、ときたか。起こる、のではなく」

「Yes」

グレイザーは少し考える仕草を取り、頭を下げた青年を見つめる

視線を移して隣にいるコートの人間を見て

コートからわずかに飛び出していた赤毛を見て、

「……まさか」

そう、呟いて、

「面白い。もし、それが本当なら、まさしく奇跡だ」

踵を返した足で——踵を返した

青年は足音で「ありがとうございます」と判断し謝辞を述べた

グレイザーが戻り、二人組も歩みを再開する

途中、緒川の隣を過ぎる時、

「お待たせ、緒川さん」

そう、一言だけ告げた

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

私は歌が好きだった

こんなにも好きだったんだ

これまで、みんなの為にずっと歌ってきた私だけど、今度はそのみんなの中に私を入れてほしい

もつとたくさんの人に私の歌を聴いてほしい

たった一つの我が儘

「だからどうか——許してほしい」

言葉は少ないが、それでもその一言、一字一句に自らの想いを籠めて翼は観客の前で
そう言った

観客は拍手と歓声で、その答えとした

答えなど、初めから決まっていた

——ありがとう

その言葉の代わりに、翼は、つうと一筋の涙をこぼした

そして——

『許すさ——当たり前だろ』

その声が聞こえてきた

初めは幻聴だと思った。だけど、その声を翼だけでなく観客も聞いていたようなので幻聴ではなかった

全員が戸惑う中、中央の扉が開かれた

そこに立っていたのはコートを纏った二人組だった

『だけどさ、翼一人で行くことはないんじゃないかな、ってあたしは思うんだよな』
ゆっくりとした足取りで二人組は真っ直ぐステージに向かってくる

迷う事なくステージに昇る

二人組は翼の二メートルぐらい離れた場所で立ち止まり、
『行くなら三人で行こうぜ』

同時にパサリとフードから頭を出した

現れたのは鏡華と——

」

紅の髪を払い、自分を真正面から見詰める瞳

全ての音がなくなつた気がした

だけど、はつきりと目の前の少女の声だけは伝わってくる

「待たせたな翼。天羽奏、ここに完全復帰だぜ」

「かな、で……奏ッ!!」

翼は溢れる涙を拭う事なく奏に抱きついた

胸に飛び込んで来た翼を奏は強く抱きしめる

「奏……奏、奏——ワアアッ!!」

「ごめんな翼。二年も一人ぼっちにさせて。片翼でよく頑張った」

涙は流さなかつたが、それでも瞳に目一杯溜め込み、奏は優しく翼の髪を梳く

抱き合つた二人を観客は見て、ざわめきだす

鏡華は翼が落としたマイクを拾うと、一礼して口を開いた

「ご来場の紳士淑女の皆様。私は遠見鏡華。ツヴァイウィングソングライターの作詞作曲家を生業とし

ています」

ざわめきは更に大きくなる

「突然の登場で混乱しているでしょうが、要点だけ言わせてもらいます。——天羽奏と遠見鏡華は生きていました」

どんどん大きくなっていく

それはまるで、クレッシェンドしてくるように

「二年間、どこで何をしていたか。そんな質問は必要ないでしょう。今必要なのはこの一言だけだと私は確信を持って言えます」

百を、千を、万を超える観客を前に

一を、十を、百を、千を、万を超えるテレビの前の視聴者に

人前で喋るのが苦手だった青年が今——宣言する

「ツヴァイウィングは今宵この時を以て——活動を再開するッ!!」

爆発するような歓声

連鎖するように会場全体に声と云う波紋は広がっていく

奏は抱きしめていた翼を離すと、立ち上がるように手を差し伸べ、促す

「疑問や質問は後だ! 紳士淑女の皆様、ツヴァイウィングの歌が聴きたいかつ!」

口々に肯定の叫びを挙げていく

「分かりました! そんな皆様のご要望にお応えして、メドレー形式でいきますっ!」

鏡華が観客を相手にしている間にコートを脱いだ奏が、

「翼、飛ぶぞ。あたしと翼で!」

「ッ……うん! どこまでも、行こうっ!」

二人、手を繋いでステージ中央に立つ

スポットライトが二人に当たる

「それじゃあ飛び立ちましょう！ メドレーは全三曲。『Zwei Wing』、『ORB

ITAL BEAT』、『逆光のフリーゲル』!!」

全てのボルテージが最高潮のまま、ツヴァイウイングの歌が始まる

それは三人が退場するまで続いた

そして――

翌日、全ての新聞の一面は全てツヴァイウイングの記事が

ニュースやネットでは、アーティストフェスの最高視聴率は五十パーセント以上と云

う快挙を成し遂げた事が報道されるのだった

D. C. XXIV

リディアンでは、朝から昨夜のアーティストフェスの話で持ち切りだったその話をしていないクラスなどない

当然、響と未来が在籍するクラスも然りだった

「いやー、本当に凄かったよね！ ツヴァイウィングの復活なんて」「うんうん。まるでアニメみたいだったわ！」

「でも、この二年間、天羽奏さんは何をしていたのでしょね」

三人組も響と未来の周りでその話題を話している

響と未来は本当の事が言えず、同意するように頷くだけ
そうして時間が過ぎると、

「ホームルーム始めるぞー。席に着いた着いた」

鐘の音と共に鏡華が入ってきた

それに生徒は驚いた

てつきり教師は辞めたのかと思っていたのだ

「せんせー！ ツヴァイウィングが再開したのに、どうして教師を続けているんですか

「？」

「ツヴァイウィングが復活したからと云つて、辞めるなんて勝手な性格はしていませんよ先生は。少なくとも一年はいるから、そのつもりで」

お喋りはここままで、と手を叩きながら場を鎮める鏡華

全員が黙つて、今日の予定を話していき、滞りなくホームルームを終わらせた
終わると、響と未来が近寄ってくる

「遠見先生！ 昨日は凄かったですね！」

「おう。立花と雪音のおかげだよ。二人のおかげで簡単に始末出来たんだからな」

「えへへ、奏さんに応援されたら、頑張らないわけにはいきません！」

互いに親指を天に突き立てる鏡華と響

それを見て未来は苦笑を浮かべる

「そういえば、今日は翼さんと奏さんは？」

「翼は普通に学校。奏は検査を受けて家で待機、かな。なんだつたら下で落ち合う事も出来るけど」

「いやー、それは悪いですよ。奏さんだつて、きつと本調子じゃないと思いますし……」

「何言つてんだ響。あたしはいつでもテンションマックスだぜ」

「あ、そうなんだ。よかつ——」

言いかけて、はたと止まった

てつきり鏡華が言ったのかと思つて返答したが、それにしては砕けた言い方だった
未来も首を傾げていた

そして、声の主が、

「やつ、響。昨日ぶり。未来は数日ぶりだな」

鏡華の背後からによつきりと顔を出した

「か、奏さん!？」 「奏つ!？」

驚いた声を上げる響

何故か鏡華も

二人の声は当然クラスにいた全員に聞こえ、全員が奏の存在に気付いた

「お、おまつ、何でいんだよ！ 検査はどうした!」

「こんな朝早くにするわけないだろ。鏡華の教師つぷりを見に来たんだ。どう、似合うか?」

くると回つて自分の服装を見せつける奏

奏の今の服装は、リディアンの制服だった。ただ、ちよつと小さめだったが

「……どこからパクつてきた」

「翼の部屋の椅子の上から。やー、一度制服着て来てみたかつたんだよなあ」

「早く脱いで翼に返せ。じゃねえと伸びるぞ絶対」

「え？ 身長が？」

「制服が、だ！」

「やん。ここで脱げだなんて、鏡華のえっち」

悪ノリした奏は随分と楽しそうだった

とつてもノリノリである

もちろん、鏡華からすれば、相乗りするわけにいかず、

「誰かこいつ追い出せえっ！」

頭を抱えて叫ぶのだった

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「本当に驚いた。奏が校内にいるのを見かけた時は眼を疑ったよ」

放課後、いつもの屋上で翼が奏を見ながら呟いた

足元のベンチではぐったりした様子で鏡華が寝そべっていた

授業以外の休み時間、ずっと奏の相手をしていたのだ。ストッパー役に徹していたのでかなり疲労していたのだ

「お疲れ様、鏡華」

「まったくだよ。しかもこれから立花達とふらわーで食うだろ？ 体力持つかない……」

「食って回復すればいいじゃん」

「回復した途端削られるのはかなり参るんだよ。……はあ」

勢いをつけて立ち上がると、鞆を肩にかける

「そんじゃ、ま。行きますか」

「うん」

「おう」

特に反論のなかった翼と奏は頷き鏡華の後に続く

今日は柵から飛び降りる事なく、歩きで校門に向かう

だから、そこに行くまで気付かなかった

かなりの人垣が出来ている事に

「おいおい、マジかよ」

「あれを抜けるのは……骨が折れそうだ」

鏡華と翼が嫌そうに呟く

一応予想はしていたのだが、放課後を狙ってくる辺りがいやらしいと云うか面倒と云うか

はつきり云って迷惑だった

「はあ……翼。立花にメールしといて」

「分かった」

「奏は俺と対処」

「はは、鏡華、不機嫌ですな」

「不機嫌っつーか、迷惑」

営業スマイルが出来る事を確認し、鏡華と奏は、翼を後ろに守るように先に歩いて、人垣に向かつていく

少しすると、人垣から「あ、来たっ」と声が上がったのが聞こえた

一斉に敷地に入ろうとする取材陣を警備員が防いでいる

「敷地内には入らないで下さい！ 下校する生徒の邪魔になってます!!」

声を張り上げる鏡華

取材陣は入ろうとするのをやめ、今か今かとレコーダーやマイクを握りしめて鏡華達が来るのを待っていた

内心で溜め息をこぼし、鏡華は変わらぬペースで校門を過ぎる

そして、営業スマイルを浮かべようとして——鏡華は表情を凍らせた
人垣にいたのは取材陣だけではなかった

下校中の生徒だけではなかった

野次馬であろう一般人だけではなかった

鏡華の眼の前にいたのは――

「ああ、そうです。間違い無く鏡華君です！」

「感動の対面です。約二年ぶりの再会！」

「――さんの眼には涙が浮かんでいます」

一番会いたくなかった――遠見家親戚の、とある一家だった

顔を手で抑え、天を仰ぐ

〔鏡華……〕

〔大丈夫。大丈夫さ、奏。ただ……口が汚くなるかも〕

〔それこそ大丈夫だ。鏡華が何て言ったって、あたしと翼はずっと味方だ〕

〔……ありがとう〕

奏の暖かい言葉に、鏡華は自分の心を落ち着かせ、暴走しないように冷たく縛る

「仮面の笑み」を浮かべてこちらに駆け寄ってくる親戚一家を、鏡華は「微笑み」で

一礼し、

「誰ですか？」

そう、嘘を吐き捨てた

しん、と静まり返る人垣。それは一家も同じだった

家長だろう男が冗談だと笑い飛ばす前に、鏡華自身が、

「ああ……思い出しました。確か、親戚の中で最初に僕に説教を垂れて、金をせびった方ですね」

さも今思い出したように、この場の全員に聞こえるよう通った声で言った

ざわり、と波紋が広がる

「おいおい鏡華君、冗談は——」

「いやあ、懐かしいですね。あの頃はよく家に来ては説教に來てましたけど、今日も説教ですか？ 精神的に疲れてるんで勘弁してほしいんですけど。あ、もしかして遺産代わりの交通費ですか？ 困ったなあ、今、金ないんですけどねえ……」

困った表情で頤に手を当てる鏡華

わなわな、と震え青褪める男は鏡華を睨む

すると、驚きで固まっていた報道陣の一人が鏡華にレコーダーを向けた

「そ、その話は本当でしょうか？」

「本当です」

答えたのは、意外にも翼だった

「翼」

「叔父が引き取らなかつたら、彼は間違いなく狂っていました。それだけ彼の家には毎日といつていいくらい親戚が来ていたんです」

「翼、もう言わなくていいよ」

鏡華は優しく囁き、翼の説明に区切りをつけさせる

まあ、その通りなんですけど、とも言つて、親戚に視線を向ける

「すみません。名前も覚えていない親戚の皆様。もう帰つてもらえないでしょうか。そして、どうか、私にこれ以上関わる事も吹聴する事もしないでください」

——— お願いします

そう、必要のない頭を誠意の言葉と共に下げる

そして———



「———それから、親戚の人はどうしたんですか?」

ふらわーの座敷で、未来が聞いた

「何も言わず帰つてくれたよ。まあ、報道陣がいたおかげだけど。いなかつたら、どんな罵詈雑言だったか」

「鏡華さん。罵詈雑言ばりぞうごんです」

「あり？」

「威厳がある悪口は新鮮だな……」

間違つた熟語を訂正する未来

知らない熟語を使うから、と呆れる翼

奏と響は笑いながらお好み焼きを頬張る

「おばちゃん、おかわりだっ」

「なんですと!？」

「響より早い……」

ペロリと平らげた奏に、おばちゃんは、

「あいよ。それにしても豪快な食べっぷりだねえ。作るこつちもやる気が出て来たよ」

嬉しそうに焼いていく

響も負けじと食べ切ると、おかわり、と宣言した

「ねえ、鏡華」

そんな二人を見て、翼は鏡華の耳に顔を寄せて囁いた

「奏つてあんなに食べる方だったっけ？」

「昔は普通だったけどな……。多分、だけど。二年間、強制的に眠らせた事が原因かも」

「どういう事？」

「俺と奏は飲み食いしなくても、生きる事は出来る。逆に、いくらでも食べる事もできる。奏は二年間、食べる事も飲む事もしなかった。別に死ぬ事は無かったけど、突然そんな体質になって、身体がついていけなかったんだと思う。だから眼が覚めてからの奏の胃袋は」

「食べなかつた分も食べたいと反応するわけか……」

ようやくと納得した翼は奏を見る

既に奏は二枚目を食べ終え、おかわりを要求していた

響は「なんとつ」と驚いている

「……鏡華」

「ん？」

「食費は大丈夫？」

「……………寂しいかも」

「そっか」

しよんぼりする鏡華

そんな鏡華に翼は自分のお好み焼きを一口サイズに切り取り、

「鏡華、口あけて」

「あーん」

躊躇いも無くあけた口に翼はお好み焼きを食べさせる

俗に云う「はい、あーん」——というヤツだ

もちろん、鏡華にも翼にもその気はない。昔から誰かが病気にかかれば、代わりに誰かが食べさせていたし、相手の料理をもらう時は大抵こんな感じだ

「……………」

そんな様子を未来はバツチリと目撃してしまい、

「鏡華さん、鏡華さん」

「ん?」

「あ、あーん……………です」

即座に実行に移した

その大胆な行動に、

「ぶふっ」

響はお好み焼きを嘔き出しそうになり、

「やっぱ、変わったよなあ」

奏はしみじみと呟き、

「あーん」

鏡華は特に何の意味も持たず、口を開いた
パクリと啜える

「お、美味しいですか？」

「うん、美味しい。相変わらずおばちゃんのお好み焼きは美味しいなあ」

「……………」

鏡華のあまりにいつも過ぎる姿に、声が出ない未来

—— ゆ、勇気を出したのに……

そんな未来に翼が声をかける

「小日向、私達の間では、日常茶飯事なんだ」

「えー…………」

「恥ずかしくなったら、身が持たないと思う」

よく見ると、翼もわずかだが頬を染めていた

翼も恥ずかしくなったのか、と思うと、仕方ない、という思考が生まれた

「んじゃ、次はあたしの番だな。はい、あーん」

「じゃあ、私もします！」

そして、何故か奏と響もノツてくる始末

鏡華は嫌そうな顔をする事無く、次々と放り込まれるお好み焼きを食べていく

そんな五人を見て、

「まるで雛鳥に餌をあげてるようだねえ」

おばちゃんは面白そうに、そう言った

♪♪♪♪♪♪♪♪

風鳴家に帰ってきた鏡華と奏は、リビングに入るとベタツと畳に突っ伏した

「二人とも、床に寝るのは行儀が悪いぞ」

唯一、突っ伏さ無かった翼が鏡華と奏を嗜める

「食い過ぎた……」

鏡華は少し張った腹に触れて、苦しそうに訴え、

「満腹満腹。やー、食った食った!」

奏は楽しそうに、食べる前と変わらない腹をさすりながら言った

そんな二人に苦笑した翼は、「お茶を入れるよ」と台所へ向かった

「奏」

「あいよー。台所の片付けだな」

「私はそこまで信用が無いのか」

自覚がある分、あまり反論ができない翼

急須に茶葉とお湯を入れ、先にお湯を入れて温めておいた湯呑みと共にお盆に乗せ、リビングに戻る

その頃には、鏡華と奏も消えていた

首を傾げていると、二人が戻ってきた。着替えたのか、鏡華は包帯を巻いたまま甚平を。奏もきつと伸びたであろう制服から、何故か鏡華（つまり男用の）の甚平を着ていた

「うーん——久しぶりに軽装になった気分だ」

「そう云えば、鏡華っていつも完全着装だったよね」

「外では、傷を見せるわけにはいかないからな。包帯も大袈裟過ぎるし」

だからと云って、中でも包帯を取るわけにはいかないのだが

「はい、鏡華。奏」

「ありがとう」

「サンキュ、翼」

湯呑みを受け取り、苦さと甘さが程よく混ざったお茶で喉を潤す
ふう、と息を吐いて、もう一度畳に倒れる鏡華

「長かったな。この二年間。俺と奏にとっても——翼にとっても」

「おう」

「うん」

天井を仰いでいた瞳を静かに閉じる

聖遺物の呪いによつて、十全ではないにしろ、欲しかった日常を取り戻す事は出来た
だからと云つて、今日が自分達の物語の終わりではない。まだ、やっていない事は山
程残っている

その全てを終えるまで、自分達の物語を終わらす事など出来ない

だけどーだけどもだ

今日ばかりは

二年もの間、張り詰めて、張り裂けそうで、張り巡らせた心と身体を、
「やっとな……終わつたんだ……」

そつと、休ませよう

D. C. XXV

ミュージックフェスから数日後

響は久し振りに風鳴家にお邪魔していた。今日は未来も一緒だ

向かった先は、修行に使っていた——わけでもない道場

「え？ 使つてないの？」

未来にも驚かれる

弦十郎が響に教えたのは、アクション映画を見て、その俳優になりきり、ランニング、サンドバッグ、スパーリングぐらいだ。

——にも関わらず、響が習得しているのは弦十郎と同じ中国拳法なのだから、どんな修行すればそうなるのか、未来には皆目見当もつかなかった

「にしても珍しいね。未来が師匠の家に来るなんて。遠見先生がいるか分かんないよ？」

「うん。今日は、響の修行を見ておこうかなって」

「ほえ？ 私の修行？」

うん、と頷く未来

自分は響と一緒にノイズと戦う事は出来ない。でも、親友の助けになりたかっただから、自分にも出来る事があるんじゃないかと思ひ、今日は修行を見に来たのだ。道場に着くと、待つていたのは、

「ほら、腕が下がつてゐるぞ鏡華。まだ後十回はあるんだから根性見せるよ」

「か、奏……流石にこれは……。き、鏡華、重くない？」

「重くないつ……と言いたいけど——人間は男女関係無く肉の塊なんだ、二人分なんて重いに決まつてゐるだろう、がつ！」

背中に奏と翼を乗せて腕立てをさせている鏡華だった

かなり汗を掻いており、かなりの時間を費やしているのが感じられる

啞然と見詰めてゐると、奏が響と未来を見つける

「おつ、いらつしやい！ 響、未来」

「よ、よく来たな。立花、小日向」

いつも通り、元氣一杯な奏と少し作つたような声の翼

響と未来はそれぞれ挨拶を返す

「あの、遠見先生は何をしてゐるんですか？」

「ん？ ご覧の通り、筋トレさ。あたしと翼はその手伝い」

「頼んだ覚えは、ねえ……けど、なっ！」

どうにか唸りながら残りの十回を終える鏡華

べたりと床に倒れると、荒い息を吐きながら、胡坐を搔く

身体は上半身裸のようで、包帯が巻かれているのがはつきりと分かった

「だ、大丈夫ですか？ 鏡華さん」

「大丈夫なもんか。軽くストレッツチ気味に考えていたのに奏のせいで重労働並みの運動になっちまったわ」

じつとりとした眼付きで奏を睨む鏡華

どうやら翼は二人に巻き込まれたようだ、と響と未来は思った

「ところで立花。ちよつと、俺と一戦しないか？」

「はい？ 遠見先生と勝負、ですか？」

「ああ。ここままで運動したからには最後までしたいし。何より、立花。お前とはいつペ
ん一対一^サでやってみたかったんだよ」

「ツ……はい！ 遠見先生の期待に沿える様、この立花響。全力でお相手しますっ！」
やたら意気込む響

苦笑を浮かべる鏡華は、手をプラプラさせて、

「まあ、とにかく——ジャージに着替えてこい」

制服のまま戦おうとする響に至極真つ当な言葉を投げたのだった



響のジャージ(どこにでもあるジャージだ)は何故か風鳴家で保管されているので、着替えにはそう時間はかからなかった

鏡華も包帯を左腕だけほどこき、黒の肌着にジャージのズボンという恰好をしていた互いに少し距離を置き、道場の中央で構える

どちらも徒手空拳。弦十郎に師事を仰いだので扱う武術は中国拳法だが、構えはやはり人それぞれ

鏡華は身体を横にして、左手を腰に、右手は握り締めた掌を上に向け突き出す構え。鏡華自身は八極拳だと思っている

響はボクシングのように両腕を胸と頭の間辺りで構えるスタイル。響自身もこれが中国拳法の構えだと考えている

どちらも——間違っている事には気付いていない

気付いているのは、観戦している奏だけ。もちろん間違っている、なんて言わない言わずに、手を高く挙げ、

「んじゃま、いぎ尋常に——始めっ」

勢いよく振り下ろす

先手を取ろうと動き出したのは響。鏡華は響の動きに合わせて突き出した手を動かす

距離を詰め、最後の一步で力強く踏み込むと突く様に拳を放った

突き出した手で払い、鏡華が攻めに転じる。

本格的に弦十郎に師事した響と違い、鏡華のスタイルは型こそ中国拳法だが実際は適当だ

響は払ったりせず身体をズラし拳や蹴りを受けないように躲す

再生能力を有している鏡華と違い、響は本番ではノイズの攻撃を受けずに倒すスタイル。自然と全ての攻撃を躲すようにしているのだ

「すげーな。一月でこひとつきこまで成長するのか。俺も真面目に習つとけばよかったよ」

「目標がありましたから！」

「だろうね。目標があれば、人間はいくらでも頑張れる」

俺も頑張れた、とフェイントを掛けて掌底を放つ

下から上に、斜めに決り込む様打たれた一撃を上体を反らす事で躲す響。元に戻らず反った勢いでバク転で距離を取った

シンフォギアを身に纏っていないのに、大した実力だ

「ふう……いきますっ！」

ドクンと鼓動が響の心に響いた。同時に宣言して踏み込む

そこで鏡華は眼を見張った

いつの間にか、響が懐に入っていた

「ッ……っ!？」

「疾い……い！」

翼と奏、未来も驚く

既に響は拳を打ち込むモーションを取っている

ぞくり、と背中に悪寒が盛大に奔った鏡華は両腕をクロスした

—撃ッ!

それは——その一撃は、今までとは比べ物にならないものだつた

拳を打ち込み、ガードしていた腕が出してはいけない音を道場全体に響かせた

そして、鏡華が壁際まで吹き飛んだ

全員が絶句し、まともに動くことができなかつた。それは響も同じだ

唯一、吹き飛ばされた鏡華だけが壁にぶつかった拍子に肺の中の空気を全て吐き出

し、呻き声をあげた

その声でようやく我に返る

慌てて駆け寄る翼達

「鏡華！ 大丈夫!？」

「がはっ、ごほっ……大丈夫。身体に問題はないよ」

「ご、ごめんなさい遠見先生！ 私……」

「ああ、立花が謝る必要はない。これは俺の方で予測しとくべき事だった」

楽な体勢で座り、息を整える鏡華

「大丈夫か鏡華？ 骨がイツた音が聞こえたけど」

「まあ、盛大にイツたね。多分複雑骨折くらいにはイツたんじゃね？」

「ええっ!？」

「すぐに治ったけど」

自分の腕を見回し、あっけんからんと言つてのける

鏡華の身体は重い傷ほど治癒が早くなる。鏡華が予想した複雑骨折なら一瞬で治るのだ

「本当にごめんなさい遠見先生。でも、どうしてだろう。私、人の骨を折る力なんてないの……」

「本当だったらな。だけど、今の立花の身体にはシンフォギアが——ガングニールが融合しちまつてるだろ？」

“似ているようで異なる体質”である鏡華と響

恐らく、響の身体の変化を一番理解しているのは鏡華だろう

「全力で立花が行動すると、それに呼応するようにガングニールが立花の身体能力を上げるんだと思う。殴る前、身体で何か感じなかったか？」

「えつと……凄く曖昧なんですけど、身体中に力が巡るような、そんな感覚なら……でも、私、歌ってませんか？」

「そこが俺でも分かんないんだよな。完全聖遺物でもないのに立花の力になる……ま、俺の専門分野は作詞作曲と戦闘だから分かるわけないんだけど」

あつさり思考を停止させる鏡華。腕を回しながら立ち上がる

その様子を見て、完全に大丈夫だと確信した翼と響、未来

奏は大丈夫か、と声をかけていたが、初めから心配などしていなかった

「立花、これから全力出す時は気を付けてくれ。もしかしたら最悪のケースもありうるかもしれないし」

「り、了解です」

「んじや、手加減も考え、覚えながら、もう一回やりますか」

「はいー」

視界の端でやれやれと言いたげな翼と奏を捉えながら、鏡華はもう一度構えを取った

既に、自分なんかよりも強くなっているだろう少女を見据えて



数時間後。陽は既に傾き、世界を緋色に染め上げていた

ぶつ倒れるまで続けた鏡華と響はシャワーを浴び、元の服装に戻っていた

「凄いな立花は」

ポツリと翼が呟いた

「はえ？ 何がですか？」

「いや、鏡華も言っていたが、一月ひとつき足らずで本当に強くなったものだ、と思つてな。それもアームドギアを使わずに」

「あー、……私、考えてたんです。どうして、私はアームドギアが出せないんだろうって。半人前はやだなあつて」

「……………」

「でも、今はそう思いません」

そう言うのと、そつと翼の手を取つた

「アームドギアがあると、翼さんや遠見先生、奏さん、そして、クリスちゃんとかうして

手が繋がりませんから——仲良くなれませんから」

「立花……」

アームドギアが無いのを逆に考え、無い方が良いと言い切る響

多分、昔の翼であれば否定していた考えだ

だが、今は違った

砕いて壊し、束ねて繋ぐ——

誰もが繋がる手を持っている。響の戦いはきつと、誰かと繋がる事

それが——

「実に——立花らしいアームドギアだ」

「へ？」

「いや、何でも無い」

この様子だと響は気付いてないようだ

教えるべきか、教えないべきか

翼は少し考えて、教えない事にした

教えなくとも、響ならば自分で知ると思ったのだ

「じゃあ、行きましょう！ 今日もふらわーでたくさん食べますよー」

「おいおい、またか？ ほとんど毎日行って、おばちゃんに迷惑が掛からないか？」

「大丈夫ですよ。おばちゃんだって、『常連が出来てぼろ儲け。ウツヒツヒ』とか笑ってるはずですよ！」

いや、それはない、と翼は苦笑を浮かべて即答した

あのおばちゃんがそんな黒い笑みを浮かべるはずがない

「とにかく、早く行きましよう翼さん！ 未来達が待ってます」

「……そうだな」

鏡華達は既に外で待っている

翼も響に急かさねながら外へ出ると――

鏡華が門かんとめきに門を掛けているところだった

「鏡華？」

「やべえ……」

鏡華が呟く

耳を澄ますと、外がにわかに騒がしかった

「どうしたんですか？」

「パパラッチっつーか、報道陣っつーか」

「ッ……！」

それだけで翼は理解し、驚き、頭を抱えそうになった

きつと、今、外に出れば質問攻めに遭うだろう。当然、ふらわーにもついて来るはず
「仕方ない。立花、小日向。ふらわーは無しだ」

やれやれ、と頭を振る鏡華は屋内に戻る。奏と翼もため息をこぼしてついて行く
響と未来はこういつた事に慣れていないので、素直に鏡華の指示に従った

「さて、と。どうしますか」

「あたしがありあわせで何か作ろうか?」

居間に戻った鏡華に奏が提案する

「夕食もそうだけど、どっちかってーと立花と小日向だよ。多分、今日は帰れそうにねえ
しな」

机に置いていたケータイを手に取ると、どこかへ電話する

数秒待つて、

「あ、寮監ですか? 非常勤の遠見鏡華です」

作った声で話しかける

恐らく、リディアン of 学生寮の寮監にかけているのだろう

簡単に挨拶を交わし、本題を話す

「———ですの、立花響と小日向未来の外泊を許可して欲しいんですが……。ええ、彼
女達に關してなら心配いりません。……いや、夜這いとか言わんでくださいよ。私にそ

んな度胸なんかないんですから。それに、二人には風鳴翼と天羽奏が付いていますんで。……はい、はい。分かりました。ありがとうございます」

それでは、と鏡華は通信を切った

「二人共、外泊許可を貰ったから、今日はここに泊まってきな」

「え、でも……」

「いいんですか？」

「ああ。あ、パジャマとかいるか……翼、奏。後で適当なパジャマを貸したげて」

居間を出ながら、翼と奏に指示を出していく

頷いた奏は自分のパジャマを持ってこようと立ち上がった翼を止めた

「翼……響と未来にはあたしのパジャマを貸すから」

「え？ 何で？」

「……翼は、散らかしている自分のパジャマを貸す気なのか？」

「……………あう」



「ふう……………」

シャワーを浴び直した鏡華は自室へ戻り布団に倒れ込んだ

今頃、翼達女子メンバーは布団の中に潜り込みながら女子バナに花を咲かせているだろう

「しつかし、久し振りに食った翼の料理と、立花の料理——とんでもなかったな」
しみじみと色々凄かった夕食の事を思い出す

凄過ぎて——何と表現すればいいか分からないのだ

だから、心の底にそつと仕舞い込むのだった

布団から起き上がった鏡華は、電気を消してカーテンの隙間から外を見る。二階に自室を構えているのは鏡華と弦十郎の男組だけなので、盗撮されても何ら問題は無い

静かだが、微かに人の気配を感じる。まだ粘っていると云う事だ

——ご苦労なこつて

音も無くカーテンから離れ、部屋を出た

向かう先は当然、女子達が寝床にしている和室——ではなく、地下にある音楽室

防音加工の施された部屋にある唯一の楽器、グランドピアノ

椅子に腰掛けた鏡華は思いのままに弾き始める

時に優しく、時に激しく

外に音が飛び出していかないのをいい事に好き放題奏でる

「あれ？ 遠見先生……？」

なのに、響が部屋に入ってきた

この部屋は教えていないはず。なのに何故——

「お前、どうしてここに？」

「トイレから戻る時、凄く微かに音が聞こえたんです。思わずその音を探したら、ここに」

「……………」

呆気にとられるしかなかった

歌が大好きなのか、それともただ凄いだけなのか

鏡華にはまったく分からなかった

「それにしても遠見先生。ピアノ弾けたんですね」

「ん、まあな。小日向ほどじゃねえけど」

「そんな事ないですよ。未来と同じくらい凄かったです！」

力一杯に言ってくる響に苦笑してしまう鏡華

ポーンと最後に高い音でピアノを閉じる

「さて、明日はちよつと早いからな。部屋まで送ってやるから早く寝ろよ」

「はい。よかったあ、道に迷ってたんですね」

「あー、この屋敷、無駄にでかいからな」

ぎしぎしと木造にありがちな音を立てて鏡華は和室を歩を進める

その横を付いて行く響

その横顔をちらりと見る

立花響——二ヶ月前まではどこにでもいる元気娘だったのに、今では立派な世界を守る戦士

彼女には後悔や面倒という感情はなかった

いつも前向きで、初めの頃は奏の代わりになると言った

途中からは奏の代わりではなく、「立花響」として戦う事を決めた

今では想いを持ち、誰からも認められる戦士になった

「ん？ 私をジツと見て、どうしたんですか？」

「いや、何でもないよ」

誤魔化す様にぼんと頭に手を置く

ハテナを浮かべていた響だったが、突然ハツとすると、

「だ、駄目ですよ！ 私に惚れたら！ 遠見先生には翼さんや奏さん、それに未来がいる

んだからっ」

「くっ……っ……ばーか。誰が惚れっかよ」

そう、遠見鏡華が立花響に向ける感情は恋慕などではない
あるはずがない

だから、即答されへこむ響を笑いながら、鏡華は自分意思か聞こえない声で呟いた
「俺は——立花^{おまえ}響に憧れてんだよ」

まるで英雄みたいな響に

鏡華は憧れていた。自分も翼と奏の英雄になりたいから——

D. C. XXVI

静かな山中に存在するフィーネの屋敷

その屋敷を取り囲む黒い服の男達。——合わせて八人

中には、以前、夜宙ヴァンと同行していたジャン・テイラーとエドワード・レイエスの姿もあつた

彼らが今回標的とするのは、取り囲む屋敷の主にして、自分達の飼い主と契約を“結んでいた”フィーネの抹殺

そして、ジャンとエドワードは同時にヴァンの救出と——

「——」
リーダー格が突入を命ずる

ジャンとエドワードは玄関から突入する。そのまま大広間まで辿り着くと、フィーネがようやくと気付く

だが、二人はあくまで囷だ。本命は窓から突入する六人

フィーネが胸元から拳銃を抜く。が、遅い

リーダーの発砲がフィーネの腹部を捉え、フィーネは倒れ、拳銃を取り落とした

その隙に、ジャンとエドワードは別の部屋へ突入する。大広間にはヴァンの姿が見えなかった。ならば別の部屋にいるはず

だが、入れそうな部屋にヴァンの姿はない

どこだ、と声を上げようとした時だった

大広間の方角から仲間の叫び声と連射される銃撃の音がしたのは

ジャンとエドワードは互いに頷き、背中にかけていたアタツシユケースを隠すように置き、大広間に戻った

そこに広がっていたのは、

「あらア、まだ残っていたのね」

黄金の鎧に身を包んだフィーネと、

「……………」

全身を黒く染まった鎧で覆ったヴァンと、

身体の一部を無くした、事切れた仲間の姿だった

「V a n n e e !」

ジャンが叫ぶ

瞳に光を灯していないヴァンは、

「G e t a w a y ……ハ、リー……………」

そう言つて——劍を構えた

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「俺がフィーネの事を知つてたのは、アヴァロンの記憶にあつたからなんだ」

弦十郎が運転する車両の助手席に座りながら、鏡華が話す

内容はフィーネが初めて姿を見せ、鏡華が暴走したような行動を見せた時の理由だ

「記憶、だと?」

「記録と云つてもいいな。アヴァロンにはその場の状況を記録出来る能力がある。だから、カリバーンやロン、プライウエンを使えるんだと思う」

「そうか……。その記録に、フィーネが?」

「ああ。記録だと、彼の騎士王の前にも姿を現していたようなんだ。その時の顔がはっきりしていて、だから俺はフィーネを知っていたんだ。奴がノイズの原因かもしれないって」

「……そうか」

二人を乗せた車両。その他にも二台の車両がタイヤを止めたのは、フィーネの屋敷だった

十分に警戒させた上で、先に鏡華と弦十郎が中に入る

大広間には先客がいた。物言わぬ骸と成り果てた八人の死体と

「あつ……あたしじゃない！」

雪音クリスの計九人

分かつている事だ。死体は全て斬り捨てられている。銃撃戦を主とするクリスには

到底出来ない殺し方だ

「分かつている。旦那」

「うむ」

弦十郎は手を挙げる

次々と黒服のスタッフが大広間に入り、機能しなくなった機械や死体を調べ始めた

鏡華はクリスに近付く

「お前に人殺しなんて出来ないって分かつてるよ。誰も疑っちゃいない」

「だったら……」

「司令！」

クリスの言葉を遮るようにスタッフの一人が弦十郎を呼んだ

全員の視線が声を上げたスタッフに向けられる

「こんなものが……」

スタッフの足元に横たわる一つの死体

その腹に紙が貼つてあつた。血で書いてあつたそれは——

「ソレニ触ルナ！」

スタッフが剥がそうと手を伸ばした時、片言の、だがはつきりとした日本語が飛んできた

全員が警戒する中、声を上げた人物が隣の部屋から出てきた

「ソレハ^{トラップ}罠ダ！ 剥ガスト設置サレタ爆弾ガ爆発スルゾ！」

「エド！」

名前を呼んだのはクリスだ

慌てて駆け寄り、倒れそうになるエドワードを支える

だが、体重差によるけそうになるクリス。それを支えた鏡華

ゆつくりとエドワードの身体を横たえる

「エド！ しつかりしろよ！ なあ、何があつたんだよ！」

懸命にクリスが叫ぶ

鏡華は冷静にエドワードの身体を調べる。肩から腹部にかけての袈裟斬りの傷跡

一目で分かる——もう、助からない

そして、この傷を与えたのは恐らく——

「ハハ……情ケナイ姿ヲ見セチマツタナ。クリス嬢。ジャンモ死ンダヨ」

「ツ……んな事はどうでもいい！ は、早く医者に……」

「致命傷ダ。助カラン」

理解しているのか、エドワードは淡々と自分は死ぬと言った

クリスから、今度は鏡華へ視線を移す

「オ前ハ……？」

「夜宙ヴァンが欲した騎士王の鞆の保有者、遠見鏡華」

「ソウカ。オ前ガ……」

エドワードは呟くと、握っていたアタツシユケースを震える手で鏡華へ差し出してきた

「これは？」

「ヴァンニ、渡シテクレ」

「……了解した。必ず、奴に渡す」

「Thank you」

鏡華の敬礼に、エドワードは微笑んだ

そして、クリスに顔を向けると、

「クリス。オ前ハ大人ガ嫌イダト言ツテイタガ、キット、クリスノ両親ハ愛シテイタト思

ウ、ゾ」

「な、何を……」

「夢ヲ諦メルナ。キツト……両親モ、ソウ、願ッテイ……ル……」

そう言つて、瞼を閉じた

その瞳は永遠に開かれる事はなかつた

フィーネの屋敷に、クリスの泣き叫ぶ声が響くのだった

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

大型飛行ノイズが出現し、翼や響が出撃した時

鏡華は学校に戻つてきていた屋上から空を見上げるだけで、他に何もしてない

「なくにやつてんだ？ 鏡華」

ひよっこりと覗き込むように鏡華と空の間に入る奏

「胸騒ぎがするんだよ」

「胸騒ぎ……」

「第六感つつかか。言葉じゃ説明できない」

「それで出撃しなかつたんだな」

翼達が出撃した事は知っていた

だが、鏡華は出撃しなかった——否、出撃できなかった
嫌な予感が頭から離れないのだ

「奏」

「何だ？」

「学校にノイズが現れた時は——」

「おう。出来る限りギアは使わない」

「頼む。バレるのは俺だけでいい」

その予感は正しかった

何故なら——

告げた瞬間に警報が鳴り響いたのだから



翼達が交戦すると同時刻

リディアンにノイズが襲来した

一課が「囷となって」ノイズを引きつけている間に、教師達が生徒達をシエルターに

避難させていく

鏡華は、

——貫き穿つ螺旋棘——

「ツ……キリがねえな！ 一課はシエルターに撤退しつつ避難を急がせてください！
ノイズはこちらが引きつける！」

私服のままノイズを斬り捨てながら弦十郎の代わりに指示をとばす
シンフォギアを纏った鏡華の言葉を、隊員達は疑わずに行動に移していく
鏡華の脇をすり抜けて隊員に向かうノイズをカリバーンで串刺しにする

「(奏、まだ避難は済まないのか!?)」

「(無茶言うなよ！ 全校生徒の数は鏡華が一番知ってるじゃないか！ 後、数分はかかる！)」

「くそつたれ！」

悪態を吐き捨て、空中に具現させたロンで大型ノイズを塵芥にかえる

それでも、ノイズの数が尽きる事は無い

無尽蔵とはまさにこの事だ

「やってられつかーっ！」

誰もいなくなつたグラウンドで鏡華は吠えた

吠えて、プライウエンも使い空を高く跳ぶ

「どんだけいるんだよオイ！ 正直飽きてきたんですけど」

そろそろ避難も終了している頃だろう

奏と合流しようとして視線を奏のいる場所に向けると

奏は未来や詩織達と一緒にいたのが見えた

それを狙うノイズの姿も

「——つて、やらせるかよっ!!」

プライウエンを蹴り跳ばし、その勢いで空を駆ける

途中で更にプライウエンを蹴り、速度をどんどん上げていく

そして、鏡華の蹴りは、ノイズごと窓ガラスを蹴り破った



ノイズごと窓ガラスを蹴り破った鏡華は、廊下の壁を蹴って壁に刺さるのを防いで廊下に着地した

左右には、左にはノイズが本来狙っていた一課の隊員が、右には奏と未来、詩織達三人がいた

「鏡華……何やってんだ」

「き、鏡華さん」

慣れていた奏と未来は鏡華の名前を呟いたが、

「……」

三人は驚きで声を上げる事が出来なかった

鏡華は立ち上がると、

「ふはは、ザマアみろ！ 奏を狙うからだばーか！」

敵役みたいな笑みで炭化したノイズを馬鹿にしていた

——子供かつ

心の中でツツコミを入れたのは奏と未来だけではないはずだ

「と、トミー先生……？」

「い、今どこから……」

「んなことあどうでもいい。全員、シエルターへ向かえ！」

疑問を一蹴し、鏡華は命令する

こんな状況のため、従う他ない

「あ、私、まだ逃げ後れた人がいないか探してきますっ」

「……奏、付いて行って」

「あいよ」

「一課の方、その生徒三人をシエルターに」

「あ、ああ」

テキパキと指示を出していく鏡華

だが、急げ、と言おうとした瞬間、言葉を失った

全員が首を傾げた。奏が口を開きかけ、

「そうか……お前の方から来たのか」

先に鏡華が言葉を連ねた

そして、後ろを振り向いた

奏達の後ろ、隊員の前に、一人の騎士がいた

全身を黒ずくめの鎧で隠した——奴

「な、なにあれ……？」

「ふう……奏、別ルートで要救助者の救出を。一課は避難を急げ」

一步、前に踏み出す鏡華

奏は頷き、未来の手を引いて背後の道を走った

「せ、せんせ——」

創世の声よりも疾く

漆黒の騎士が手に劍を具現させ走り出した

「Aggios, avallon eleison imas——」

鏡華も聖詠を、そして輕鎧を身に纏う

その手に具現せしはカリバーン

同時に駆け、距離がゼロになる直前に、刃を交える

「……ぐっ!?!」

重い。

何度も交えた刃だと云うのに、劍から伝わる重さは桁違いだった

今まで手を抜いていたと云うのか——否、恐らく違う

兜の下にあるであろう感情を感じられない

喜びも怒りも哀しみも楽しみも

感情そのものをシャットアウトしているのだろう

つまり、恐怖さえ今のヴァンは感じていない——のだろう

「よ、せ……。そこの女生徒共ガールを連れて、逃げろ……」

兜の下から聞こえる声

だが、その声とは裏腹に、劍にかかる重みは変わらない

「意識が残っているのか」

「ジャンとエドが命を賭^{ライフ}してくれたおかげ、でな。だが、身体^{ライフ}の自由だけは戻らん。だから——」

「だから、逃げろってか？　はっ、随分と上から目線なのな」

剣を押し返し、腹を蹴り飛ばす

さほどダメージを受けていないヴァンは空中で身体を捻ると、難なく着地した

突撃せずにエクスカリバーを構える

その構えは——振り下ろす構え

「早く……逃げろお!!」

「んな時間があるかよっ!!」

鏡華も後ろに跳び、創世達の前に立つと歌を奏でる

慣れている　悲しむことはない

いつだって　眼をあけたら　私しかない

友も　家族も　なくなつて

最後は一人

鏡華の前に盾が具現化する

わずかに光を灯し、歌うごとに光は強さを増していく

迷いはない　考えたこともない

いつだって 結果は決まっている

敵も 味方も 倒れて

最後は一人

ヴァンも奏でる

似ている様で異なる歌を

歌うごとに剣に光が集まる

幻想のような美しさ。だが、その威力は現実のもの

「な、何よ……こんなの、こんなのまるでアニメじゃない……!!」

あまりにも現実離れた光景に弓美が叫ぶ

鏡華は落ち着かせる言葉を知らない

だから、

「お前らっ、早く行けっ！ 完全に防ぐなんて出来ねえぞ！」

怒鳴り散らす勢いで叫んだ

それでやっと我に返った一課の隊員が創世達を無理矢理引っぱり奥へ連れて行く

二人だけとなった廊下に鏡華とヴァンの歌声だけが朗々と響き渡る

「どうなつても知らんぞ——!!」

——ヴォーテイガー想聖なる星刃——

本来は黄金の輝きは黒く染まり、本当の一撃ではない光の彗星

しかし、それでも凄まじい光量の閃光がエクスカリバーから放たれた
「ツ、耐えろよ。俺の身体——!!」

——護れと謳え聖母の加護——

黄金の輝きがドーム状に広がり鏡華を覆うように発生する

二つの閃光は、邪魔な光を排除しようと鬨ぎ合う

閃光が拮抗し、辺りを黄金と漆黒で染め上げ

そして——

「おお——オオオオオアアアアアア——ツ!!!」

黄金と漆黒は混ざり合い、混沌と化し

全ては——白く生まれ変わった

♪♪♪♪♪♪♪♪

未来は奏でと共に校内で逃げ後れた人がいないか、まだ探していた

呼びかけに応える生徒はいない

全員が避難したのか——塵と化したか

知る事は出来ないが、校内には誰もいない事はわかった

「未来、もうそろそろあたし達も避難するぞ」

「あ、はい！……奏さん！」

偶然、未来は奏を襲おうとするノイズを見つけ叫ぶ

奏が振り向いた時にはノイズは槍となつて襲いかかっていた

「ちつ……い！ Agios, avalon eleison imas」

唱う聖詠はガングニールのものではない

鏡華と同じ、アヴァロンの聖詠

騎士装飾を身に纏つた奏はロンを具現化、ノイズを切り裂く

舌打ちと共に未来に向き直る。そこで今度は奏が気づいた

未来の後ろにノイズがいる事を

「逃げろ未来ッ！」

「ッ——！」

叫び駆け出す奏

間に合うか——ギリギリだ

ノイズが未来に押し掛かろうとした瞬間、

「未来さんっ！」

横から黒服の男が自分ごと未来を突き飛ばした
押し掛かりに失敗はノイズは、

——ASSAULT∞ANGRIFF——

奏の突進撃の前に炭と消えた

「未来！ 緒川さん？」

「ははっ……もう一回同じ事ができるかは分かりませんが、間に合ってよかったです
いつもの笑みを浮かべ、緒川は未来の手を取り起き上がらせる

「さあ、逃げますよ！ 奏さん、勝手ですみませんがしんがりをお願いできますか？」
「この場で戦えるのはあたしだけだからな。当然だ」

「ありがとうございます」

走り出し、エレベーターまで一直線に駆ける

エレベーター前にはノイズがいたが、

——LUFT∞DOLCH——

奏の一閃が放った真空の刃があっさりと塵と化す

三人が入り、緒川が端末にケータイを翳そうとした瞬間、

「待て！……いつも、頼むっ!!」

叫ぶ声と共に、何かがエレベーターに投げ込まれた

思わず抱きとめる奏

抱きとめて、氣付いた

身体を覆う鎧は半分以上砕け、瀕死の状態の——ヴァン

ハツとして顔を上げると、

「はっ——はあっ……間に合った、みたいで何よりだ……」

廊下の先に、鏡華がいた

ヴァンと同じく鎧は砕け、満身創痍の状態で——

ノイズが何体も押し掛かっていた

「鏡華ッ！」

「鏡華さんっ!?!」

「鏡華君!?!」

全員が叫ぶ

だが、鏡華は行け、と声を張り上げる

未来が飛び出そうとする

それを奏が掴まえ阻止する

ノイズが奏達に気付き、緒川が断腸の思いでエレベーターを起動させた

閉じられる扉の隙間から最後に見えたのは

鞭のような何かが、鏡華を貫いている光景だった
「鏡華さんーッッ!!」

D. C. XXVII

「まさか了子さんと戦う日が来るなんて——二年前から時々思ってたよ」

ファイネと化した了子を前に、背後に未来と緒川、意識のないヴァンを庇いガングニールの防護服を纏った奏がガングニールを構える

エレベーターで二課本部へ降りつつあった奏達を襲ったファイネ

到着すると同時に奏がアヴァロンを解放^{パージ}して意表を突き、今に至る

「ほお……私の正体に気付いてた、と?」

「アヴァロンの記憶にあつたからな。了子さん、騎士王に一回会ってるよな?」

「まさか、そこから知られているとは……あの時、姿を見せるべきではなかったか」

——まあ、いい

ファイネは鞭を両手に構える

守る対象がいる奏は攻勢に出る事は出来ない

もう一度、アヴァロンを纏って、守りながら撤退を考えた時、

「待ちな、了子」

そんな声と共に

—撃ッ

奏とフィーネの間の床が吹き飛んだ

そこから飛び出して来た——弦十郎

「えー……」

眼が点になりながら呆れたような、嫌そうな声を上げてしまう奏

どんな時も思ってたが——彼、弦十郎

「まだ、私をその名で呼ぶか」

（あたしが言うのもなんだけど——人間、やめてね？）

相も変わらざるの超人っぷりだった

だけど、これでどうにかなった

奏は三人の腕を掴むと、後ろに跳び、*“巻き込まれないように距離を置いた”*

弦十郎のサポートをしたかったが、正直に云って、今の奏は力を制限している。バレないように振る舞っているが、実はノイズでも結構精一杯なのだ。故に足手まといにしかならなかった

だから、奏は弦十郎のサポートよりも鏡華に呼びかける事に専念した

だが、念話に鏡華は応答しない

（どうしたんだよ鏡華！ まさかノイズにやられちゃったり？）

奏以外誰も知らないが、今の鏡華もアヴァロンを奏に半分渡しているので十全に実力を發揮出来ないでいた

ノイズぐらいには負けはしないだろうが、”もしも”という場合もある
鏡華に気を取られていた奏は、

「司令！」

緒川の声と未来の息を呑む音に引き戻された

弦十郎とファイネの戦いは、既に決着がついていた

ファイネの勝利によつて

「旦那アツ！」

鏡華の事を頭の片隅に捨て置き、奏は特攻した

跳び上がり、ガングニールとロン、二槍を両手に握り、

「うおおおおおッ！」

—— SPIRAL E∞ORKAN ——

—— 閃ッ！

—— 裂ッ！

「無駄な事を……！」

—— ASGARD ——

だが、鞭が陣を組み、バリアのようなものを形成させたファイネには届かない届かない事に歯噛みした奏は一槍でバリアを攻撃しながら、もう一槍を、

——LAST∞METEOR——

—撃ッ！

—爆ッ！

真下に叩き付ける！

当然、床は碎け散り、爆風が二人を襲う

即席の煙幕はファイネの視界を一時的にだが閉ざす

「小細工をつ」

—閃ッ

鞭を一閃し、煙幕を掻き消す

煙の晴れた廊下には——誰もいなかった

「逃げた、か……？」

ふと、辺りを見回していたファイネが眼を下ろすと、ケータイが落ちていた

拾い上げて、見ればそれは弦十郎の物

自分のケータイは先程の弦十郎の一撃の衝撃で壊れてしまっていた

「ふふ、何たる幸運か」

三日月に歪める唇

ケータイを端末に通し、デユランダルの保管場所の扉を解錠する

ここまで来れば、全てを掌握するのは容易い

フィーネは踵を返し、二課のシステムに侵入しながら地上へと戻る

戦士達が戻つて来る間に、“仕込みを済ませるために”

♪♪♪♪♪♪♪♪

崩壊したりディアン

そこで翼達に聴かせたフィーネの真実

十二年前のアウフヴァアツヘン波形検査の時、覚醒した遥か太古の巫女の亡霊、それが
フィーネ

彼女が騙し続け築いた二課本部へ通ずるエレベーターシャフトこそが天を穿つ荷電
粒子砲、カ・ディングル

それで月を、“世界を分けたバラルの呪詛の源である月を撃ち砕き”

重力崩壊による天変地異を恐れるだろう人類を完全聖遺物によって統一・統制する事

こそ

太古より続くフィーネの野望であり——宿願だった

「それは、お前が世界を支配するって事だろう！」

クリスはそれを安いと笑った

安さが爆発しすぎてる——と

少し意味が分からなかったが、気持ちは分からない訳ではない

翼はシンフォギアを纏い、剣を、天羽々斬を構える

両隣では響とクリスも纏い、戦闘態勢を取っていた

「ふむ……」

フィーネも鞭を構えようとして——ふと、動きを止めた

その視線は三人ではなく、どこか別の場所に向けられていた

「いや、それも一興というものか」

「おい！ 余裕ぶっこいてんじやねえよ！」

クリスが叫ぶ

鬱陶しいように見下すフィーネは、その瞳のまま笑みを浮かべ、指をパチンと鳴らし

た

途端、隣の瓦礫が崩れた

何が起こるのか、固唾を吞んで警戒する翼達に届いたのは、

「ああああああああアアアアアアアアアア——フィフィフィフィエエエエツツ!!」

天地に轟く、獣のような咆哮

——ズバン

斬というはずの音が鈍く響く

巨大な瓦礫を崩して現れたのは——鏡華

「鏡華——!?!」

「ひ、ひびく……!」

白と黒のコントラストが美しかった防護服は全てが漆黒に染まり、所々砕け

黄金の剣だったカリバーンも今は聖なる剣から魔剣へと堕ちている

それよりも惨いのが、鏡華の傷だ

腕、足、胸——肉体のほとんどにノイズが槍となつて突き刺さっている

突き刺さつた箇所からはとどめどめ無く、黒く濁つた血が溢れ出て止まる事を知らない

壮絶な痛みを味わっているはずなのに、鏡華は歩みを止めない

一步進むごとに血がごぼりと水溜りを作っていく

「フィフィフィエエエエー!!」

それしか言葉を知らないかのように、叫び、跳躍する鏡華

フィーネはその場を動かさず、指だけをクイツと動かした瞬間、鏡華の手がいきなり逆に曲がり、

—突ッ

「ぐふ……っ」

鏡華の胸をカリバーンが貫いた

落下を始める鏡華。更に、四肢を貫いていたノイズが四肢から飛び出し、再び鏡華を
狙い、

—突ッ

—突突突突突ッ！

急降下し、鏡華を地面へと縫い付けた

煙が舞う。フィーネには届かない

「鏡華——！！」

翼が叫び、駆ける。爆風の中に飛び込む

反応はない。焦るばかりだった翼に、天が味方した

否——天は敵に回ったと云うべきか

一陣の風が吹いたのだ。爆風は徐々に散っていく

煙の切れ端に、鏡華の手が見えた

「きよ——う、か……」

慌てて駆け寄ろうとした翼だったが、その足は最後まで進む事が出来なかった
足が言う事をきいてくれない

完全に煙が消えた翼の目の前には

胴体に全てのノイズが突き刺さり、宙に浮かされていた鏡華がいた

手足はだらりと投げ出されて———されど剣だけはしっかりと握り締めていた
ノイズが炭化し、鏡華は地面に倒れる

「鏡、華……鏡華？」

ふらふらと千鳥足のように翼は鏡華に近付く

その間に鏡華に身に纏っていた鎧が砕け散り、元の服装に戻る

剣も砂のように手からこぼれ落ち消えた

翼の声に鏡華は———反応しない

一応、胸は上下している。それでも反応がないのだ

「いや……いや———」

頭を振り、鏡華の頬に触れる

触れた感触は———ぬるりとしていた

恐る恐る自分の掌を見る翼

掌は——べったりと黒く染まっていた

「いやああああああああああ——!!」

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

時刻は少し遡る

二課のシステムを掌握された奏達は徒歩で避難区画まで来ていた

奏と未来がヴァンを、緒川と藤堯が弦十郎を支えていた

一番近くの、落石で閉じ込められた部屋の前に奏が立つ

“ズキズキと痛む身体”を隠し、ガングニールを構え、

——LAST∞METEOR——

——突ッ

——塵ッ!

突き刺し、出力を抑えて放った一撃で落石を周りに跳弾しないように破壊する

入った部屋には、偶然か必然か、弓美達が身を寄せ合っていた

「奏さん!? 小日向さん!」

「よかった……! 皆よかった!」

三人が無事で安堵する未来

奏は未来に預けていたヴァンと弦十郎を椅子に座らせる

その間に藤堯は無事だったシステムに干渉し、緒川は他の場所を探しに部屋を出て行った

その時、

「う……ううっ……」

椅子に座らせていたヴァンが呻き声をあげた

その声に聞き覚えのあつた弓美達は、恐怖でわずかに離れた

うっすらと瞼を開ける

「(こ、ん)は……?」

「安全地帯、と云つた所かな」

「天羽、奏か……」

徐々に覚醒する意識の中、ヴァンは静かに左腕を挙げた

「天羽奏……左腕を斬れ」

「はあ?」

「この手は、フィーネが俺を従わせるために付けた義肢だ……。これがある限り、俺は、いつお前達を襲うか分からん。機能が一時的に停止している内に……早く」

よく見れば、わずかに震えている

奏は少し眼を閉じる。鏡華を通して見た夜宙ヴァンはクリスの時以外は必ず最善の手を打ってきていた

ならば、今回のコレも最善策なのだろう

「分かった。痛くても、我慢しろよな。男の子」

「はっ。女の貴様に言われんでも、承知の上だ」

嫌みを言い合って、

奏はカリバーンで、

――斬ッ

ヴァンの義手を斬った

「ッ!! が、あああああ!」

ヴァンは予想外の痛みだったのか、眼を見開き、椅子から転がり落ちた

だが、それ以上は叫ばなかった。呻き声を喉で殺し、切断箇所を思い切り握り締めて痛みに耐える

弓美達は身を寄せ合って彼を怖がる

数十秒間続き、荒い息を吐いたヴァンは震える足で立ち上がった

「どこ行く気だ?」

「はあっ……クリスの元に、決まっている、だろうが……」

「そんな身体で行かせると思ってたのか？ それに行つた所で足手まといだ」

「知つた、ような口を利くな、天羽奏……あいつを守るのは、俺の役目だ」

「はっ、役目ね。あたしにはあんたが我が儘言つてるようにしか聞こえないけどね」

ヴァンの前に立ち塞がり、行く手を阻む奏

一触即発の雰囲気になりかけた時、

「モニターの再接続完了。こちらから操作出来そうです！」

藤堯の声が二人の意識をモニターへと移した

全員がモニターを凝視する

回復した回線が映したのは、ちょうど、

『フイイネエエエー！！』

鏡華が叫び、跳躍した時だった

「鏡華君！」

「ひ、ひどい……！」

オペレーターも絶句する鏡華の傷

弓美達には耐えられるはずもなく、何度目か分からない悲鳴をあげた

そして、自身の剣で自身を刺し、ノイズに貫かれると同時に、

「がっ！」

奏もまた、〃痛みを受けて片膝をついた〃

「ごほつ、と咳き込む。咳には血が混じっていた

「奏!?!」

「奏さん!?!」

弦十郎と未来が驚き、未来が駆け寄る。間近で奏を見て、眼を疑った。

奏の腹部に傷が出来ているのだ。それはまるで鏡華が受けた傷のようで――

「っ――今のあたしと鏡華は、痛み系を共有リンクしてんだ。まあ、気にすんな

「リンクって……」

「早い話が一心同体って奴。――つと、行かせないぜヴァン」

抜け出そうとしたヴァンを支えにしていたガングニールで入り口を塞ぐ

「ちっ、痛みに悶えていればいいものを」

「我が儘なガキんちよ一人ぐらい、止めるなんて訳ないさ」

「ツ、いい加減にしろ！ 何故そこまで俺を止める!」

「ヴァンが、あたしより子供だからさ」

「ツ――！ つぎけんな!」

ヴァンの琴線に触れたのか、今までにない形相で叫ぶ

「子供だからだと!? ああそうさ! 俺はガキなんだろう! だがな! 大人が勝手に無能だからガキが動くしかないんじゃないやねえかつ! 大人が俺達に何をしてくれた! 奪い! 殺し! 貪り! 従わせる! 俺達を守ってくれるどころかこき使うだけだ!」

怒気を纏つたまま聖詠を歌い、シンフォギアを纏う

色は元に戻っていたが、回復が済んでおらずボロボロのままだった

「こき使うだけ、か。じゃあさ、ヴァンの両親はどうだったんだよ。ヴァンをこき使ったのか?」

「……いいや。父や母は良くしてくれた。彼らだけは例外だ」

「じゃあ——」

「だが殺された。俺とクリスの前で」

奏の言葉を遮り、言い切る

少しでも思い返せば、鮮明に蘇る地獄

「天羽奏。貴様は幸運だ。家族がノイズに殺されて」

「何だと……!」

「俺達の両親は、〃同じ人間に殺されたんだ〃。ノイズならすぐに死体は消えるが、人間に殺されれば死体は残るんだ」

「ッ……………」

「父達は即座に殺された。母達は俺とクリスを守るために何度も身体を売った。だが、クリスに手を出そうとした奴に殺された！ だから俺は決めた！ もう大人は頼らない。クリスが信じたもの、自分が信じるもの、信用に値する奴だけを俺は信じてきた！」
フィーネは信用ならなかった

だが、力を与えられた。クリスが信頼していた

だからヴァンは言う事を聞いていたのだ

奏は、少し夜宙ヴァンの事を甘く見ていた、と思っていた

クリス以外の人間の事は信用してないと考えていたが、どうやらそれは間違いらしい
何故なら、ヴァンは今こう言った

——信用に値する奴だけを俺は信じてきた

その言葉が本当ならば、

「最後だ。そこをどけ、天羽奏」

「嫌だ」

「この……………」

「だって、あたしはこれを渡してないからな」

そう言うのと、奏はアヴァロンを具現すると、更に中から何かを取り出した

「よっ……と。便利だねえ、やつぱ」

アヴァロンを消し、奏は取り出した何か——アタツシユケースをヴァンに渡す
怪訝そうな表情のヴァンに、奏は、

「ヴァンが信用してた奴からの預かり物さ」

「……………」

びくつと片眉を上げ、一先ず剣を消し、アタツシユケースを開ける

片手で開けたので、中身がこぼれ落ちる

軽い音と共に中身が床に突き刺さった

「これは……………」

ヴァンが、いや、ヴァンだけではない

弦十郎、藤堯、二課のメンバー、リディアン全員が中身に驚いた

「あっ！ハトのおにーちゃんだ！」

その時、背後から明るい声が響く

振り向けばそこには、以前一緒に父親を探した女の子がいた

D. C. XXVIII

「アアアアアッ！」

翼が剣を振り下ろす。刃の先にはフイーネ

怒りを向けているが、その剣筋に乱れはない

フイーネがどうやって鏡華を追い込んだのか、翼は知らない

鏡華の実力は一つの事で劣っていても、武器を使い分ければ自分を追い込むぐらいの実力は持っている

その鏡華があそこまで傷を負い、また、話にだけ聴いてた《凶り汚れ果てる理想》の反転直後まで戦っていた

それほどの実力なのだろう——か？

フイーネ——櫻井了子は研究者だ。自分と違い、戦闘技術は編み出す事は出来ても使用に移す事は難しいはず

「ッ……！」

罎迫り合っていた剣を鞭で奪われ、一步だけバク転で下がる

手と足を入れ替え、脚部のアームで鞭を防ぎ、攻める

——逆羅刹——

フィーネも鞭を回転させ、《逆羅刹》を防ぐ

だが、翼は一人ではない

「たあああああつ！」

足りない部分は補ってくれる“仲間”がいる

響が横から攻める

不意を突かれたフィーネは鞭でなく箆手で防ぐ

——爆ッ！

——轟ッ！

衝撃に身を任せて距離を取る

フィーネもその場からではこちらに攻撃出来ない位置まで下がった

それでいい。翼と響は囷

本命は——

「こつちだ——！」

クリスだ！

——MEGA DEATH QUARTET——

極限までチャージしたギアを固定砲形式に変形させ、コンバート大型ミサイルを放つ

フイーネを狙ったミサイル——それも囿
もう一基の狙いはカ・デインギル

「させるかアッ！」

——斬ッ！

伸ばした鞭でミサイルを両断する

空中に停滞しながら、自分に襲いかかっていたもう一基のミサイルを探すが、どこにも見えない

三百六十度を見渡し——見つけた

もう一基は、天へと向かっていた——クリスを乗せて

フイーネは気付かなかったが、これには翼と響も驚いていた

見ているだけしか出来ないでいる中、それは聞こえてきた

今までとは打って変わった透き通る静謐な歌声が

誰もが瞳を見開いた

クリスは奏でているのだ——絶唱を

誰も手出しも——口出しも出来ない

宙に蝶の文様が浮かび上がる

カ・デインギルから放たれる粒子砲

クリスからもこれまで以上の砲撃が放たれる

そして——地面から飛び出す彗星

黄金の尾を引くそれは止める間もなく宙へと——クリスの元へと一直線へと向かつていく

拮抗が破られ、粒子砲がクリスを呑み込もうとした瞬間、黄金の光が弾け

数十秒続いたそれが消えて見えたのは、

「なっ……！ 馬鹿な！ 軌道を逸らした、だど!？」

わずかに欠けた月

「雪音……」

落下するクリス

「ヴァン、さん……?？」

そして、クリスを守るように抱きしめて落下する——ヴァンだった

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

再び時は遡る

「あつ！ ハトのおにーちゃんだ！」

奏達がいた部屋に現れたのは、以前、ヴァンがクリスと一緒に父親を捜してあげた女の子

すると、後から女の子の兄も、そして緒川も戻ってきた。その後ろには兄妹の両親らしき人物が

わずかにヴァンは驚いた。男の子が怪我をしていたのだ。深くはないが、かすり傷では済まないレベルだった

「お前達……それに小僧、その怪我は」

「ああ、これ？ 妹を助けたら瓦礫の下敷きになっちゃって」

「私がお兄ちゃんを助けたの！」

「違うよ！ おあいこだろ」

こんな状況でさえ、変わらぬ兄妹

それを見て、ヴァンは笑みを止められなかった

目の前の純粋な兄妹愛。それはヴァンが取り戻したかった過去の一つ

叶えたい理想の一つ

それが今ではどうだ。互いに相手を想っても、純粋さは忘れてしまっていた

「くっ、くはは、ははははは！」

一頻り笑うと、ヴァンは兄妹に背を向けた

「礼を言おう、お前達。まさか年下に大事な事を思い出させられるなんてな」
 「……? どーいたしましてっ!」

にぱっと、訳が分からないまま笑みを浮かべる女の子

ヴァンはまた笑みを浮かべると、アタツシユケースから落ちたモノ——劍を見据える

ジャンとエドワードが残した劍。予想が正しいのならこの劍の銘は——

「——エクスカリバー」

銘を呼び、劍の柄を掴む

途端、掴んだ腕のあちこちが裂けた

「おにーちゃん!?!」

「ぐっ?! ——ッ——!」

驚いたヴァンだが、掴んだ柄は決して離さない

離せば恐らく——“資格を無くすだろう”

痛みは既に左腕で麻痺しかけている

「It can be heard——a Excalibur. It is wear
 k t o m e l i k e a k i n g . A l s o g r e a t l y , t h e r e
 i s n o t h i n g . A l s o s t r o n g l y , t h e r e i s n o t h i

ng. But, preparedness is above a king. Therefore, it heralds. Your Lord is me from today. As it is, it rusts, and decays, the glory which was the king's sword is held, or it can choose, and my name is Van. Van Yozora Ainsworth

〔聞け、エクスカリバー。俺には王のように力は無い。偉くも無い。強くも無い。だが、覚悟は王より上だ。故に告げる。貴様の主は今日より俺だ。このまま錆びて朽ちるか、王の剣であった栄光を抱くか、選べ。我が名はヴァン。ヴァン・ヨゾラ・エインズワース〕

ズズ、ズズツ、と少しずつエクスカリバーを持ち上げる

鉛のように重いエクスカリバーにヴァンは焦る事無く言葉を連ねていく

「Tommy origin, as for your fate, my fate is your origin. I will stand a no other here! Respond, if it follows! A star train and carries out Excalibur!」

（貴様の命運は我が元に、我が命運は貴様の元に。誓いを此処に立てよう！ 従うなら

ば応えよ！ 星が鍛えし聖剣よ——！)

微弱に点滅を始めるエクスカリバー

それがだんだんと強まっていく

胸のペンダントもそれに呼応するように輝きを増していく

遂に輝きが視認限界に來ると、奏以外は眼を背けたり瞑った

奏は網膜が焼けようと、焼けた端から回復していくので、しかとこの光景を焼き付けた

そして——

——輝ッ！

世界が白く塗り潰された

染め上げられた世界が次第に元の色を取り戻していく

視界が戻っていく感覚に、眼を閉じていた未来達はゆっくりと眼を開き——目の前の光景に眼を奪われた

「夜宙ヴァン With 完全聖遺物・エクスカリバー」

ヴァンの鎧は完全に修復されていた。それだけではない

かつて見せた黄金の剣が、より美しく——神々しく輝いている

そして——失われたはずの左腕が元に戻っていたのだ

（お前が力を貸したのか？ ——アヴァロン）

胸に手を当て、奏は体内に宿る鞘に語りかける

「おにーちゃんかヒーローみたいに変身した……」

ポツリと男のが呟く

それはシンフォギアを知らない者から見たら真つ当な答えだろう

振り返ったヴァンは優しく微笑み、

「変身して当然だ」

「え？」

「俺は、特定の人間限定のヒーローだからな」

ポンと頭を叩くヴァン

そのままヴァンは部屋を出る

部屋を覗いていた緒川と両親が無意識に後ろへ下がら道を作る

ヴァンは無言で進み、途中で全力で駆けた

「俺達は……無力だな」

ヴァンがいなくなつて、初めて弦十郎が呟いた

ヴァンの言葉は確かにその通りだ。言い返すことは出来ても、彼の信念や覚悟を曲げ

させる事は出来ない

「んなわけないでしょ、弦十郎の旦那」

「奏……」

「無力かどうかは、これからのあいつに対するあたし達の行動で決まってくると、あたしは思うな」

「……ふっ、子供に教えられるとはな」

「旦那に育てられたからねー」

にしし、と笑う奏はもう一度モニターを見る

翼と響、クリスが戦っている間、その場をまったく動かない鏡華

——そろそろ起こしに行きますかね

胴体が痛むのも飽きてきた頃だ

未来と眼が合い、笑いかけ、アヴァロンの能力を使い

未来以外に気付かれる事なく——その場から消えた

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

避難地区から十分離れたヴァンはエクスカリバーの一撃を以て、天井を砕き、地上へと出た

その勢いで天に昇り、宙そらの向こう——クリスの元へ向かった
 既にカ・ディングルの粒子砲は放たれている。クリスが呑み込まれるのも時間の問題
 だ

呑み込まれる瞬間にヴァンはクリスの真後ろに到着し、唱壁を張った

「ツ……！　これ、は……？」

「唱壁——ギリギリ間に合って良かった」

「ツ!?　ヴ、ヴァン——！」

「済まないなクリス。遅れてしまった」

優しくクリスに囁く

振り向いたクリスは、絶唱の痛みの中でも泣き笑いを浮かべた

「ああ、おっせーよ。馬鹿ヴァン」

「許せ——と言っても許してくれそうにないな」

「当たり前だろ。勝手にいなくなつて……」

「じゃあ、今度は先に約束するよ」

片手でエクスカリバーを構え、もう片方の腕でクリスを抱きしめる

唱壁に亀裂が入り始める

「俺は、ヴァン・ヨゾラ・エインズワースは、もう二度と雪音クリスの傍を離れない。一

生、傍にいて、雪音クリスの夢を叶えるために生きると誓う」

「どうした？」

「あ、いや……なんか、告白みたいだなんて思ってた……」

「くく、案外、そうかもな」

「え？」

クリスは聞き返そうとしたが、ヴァンの「ほら来るぞ」と云う言葉に意識を粒子砲へ戻す

唱壁は今に破れそうなほどヒビが入っていた

「ヴァン、防ぐ事は出来るか？」

「流石に残りの力では無理パワーだな。逸らすのが精一杯だ」

「じゃあ、逸らすか」

「ああ」

互いに笑い合う

クリスも小型の拳銃を構える

—パリン

乾いた音と共に唱壁が砕け散る

ヴァンとクリス、二人の最後の一撃が粒子砲を迎え撃つ
 だが、数秒もしない内に二人は呑み込まれた
 最後まで微笑みを浮かべて――

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

落ちて、落ちて、墜ちて――

動けなかった。翼も、響も、フィーネも

翼と響はクリスとヴァンの姿に眼を奪われて

フィーネはカ・ディンギルの粒子砲が逸らされた事に驚いて

奏は、

「おーい、いつまで寝てるんだ鏡華？　へい、スタンドアクトゥプ」

空気を読んでなかった

ガングニールの柄先で、ツンツン鏡華の頭を突つく

いや、ゴツ、ゴツと物騒な音が出ているのでツンツンではないだろうが

「か、奏……？」

「たーくつ、アヴァロン返すからさっさと起きろよ」

胸に手を当て、アヴァロンを具現化する

そのまま、アヴァロンを鏡華の胸に埋め込んだ

瞬間、

「がはっ！ ごほっ、ごほっ……！ いでえな畜生……！」

鏡華が覚醒した

咳き込み、痛む胸を抑え、ふらつく手足で、生まれた子鹿の様に立ち上がる

「はああつ……ぐそつ、身体全部が痛えな……戦況は」

「クリスとヴァンが月の破壊を防いで『ダウン』つてところかな」

「……そっか」

ふらふらと歩き、翼と響の元へ二人で向かう

最後の一步のところで瓦礫に足を奪われ、倒れそうになるのを響に受け止められる

「無茶しないでください！ 遠見先生。まだ身体が……」

「血が足んねえだけだ。それより……」

響に支えられながら、鏡華の視線はフィーネへと注がれる

フィーネは冷ややかな眼で森の中へと消えたクリスとヴァンを見ていた

「自分を犠牲にして月への一撃を防いだか……はっ！ 無駄な事を」

「ツ——！」

「見た夢も叶えられず、惚れた女一人守る事すら出来ず死ぬとは——とんだ愚図の駒だったな」

ズグン——と

響の心をファイネの言葉が抉った

それが小さいか大きいかは分からない

しかし、その穴を埋めようと、響の身体の中で GANG ニールが脈動した

ズグン、ズグンと

どんなに修復しても “埋める事の出来ない” 穴に、GANG ニールは、

「それが——」

「た、立花……?」

真横でその言葉を聞いた鏡華は

いや、鏡華だけではない。翼も、奏も

今の響の言葉に戦慄を憶えた

「命を握り潰した奴ガ言ウコトカアアアアアアアアアアアア——!!!??」

GANG ニールは—— “侵食を以ってして修復を試みた”

全てが黒く染まった響が吼える

それだけで、地面から砂利が、小石が宙を舞う!

「立花？ しつかりしろ立花！」

腕を肩に回している鏡華は叫ぶように声を掛けるが、響は反応すらしな

むしろ、回した腕を無意識に握り締めており、鏡華の腕が悲鳴を上げ始めていた

「ぐうっ!」

「融合したガングニールの欠片が暴走しているのだ。制御できない力に、やがて意識は

浸食され——破壊衝動だけに塗り潰されるだろう」

「ッ、まさか、お前……!」

翼は以前目の前で櫻井了子が言っていた言葉を思い出した

響の身体とガングニールは以前にも増して体組織と融合している事を

身体能力と回復速度はそのせいであると——!

「響の身体で実験してやがったのか？ 了子さん——!」

「■■■■■■■■■■——!!」

「たちば——がつ!」

支えていた鏡華を地面に叩きつけ、響は驚異的な速度でファイネに迫る

薄ら笑いを浮かべ、ファイネは鞭の障壁でガード。そのまま一撃を与える

後ろへ吹き飛んだ響。だが、地面に着地した瞬間、その姿を消した

中国拳法・闊歩——にギアを加えての縮地

その勢いのままフィーネの懐に迫り

— 撃ッ！

— 轟ッ！

— 爆ッ！

余波に鏡華達は眼を背ける

爆風が晴れると、フィーネが瓦礫の上に倒れていた——上半身と下半身が半分以上千切れて

息を呑む翼は更に眼を見開いた

死んでいるはずの状況に関わらずフィーネが——こちらを見て微笑んだのだ

「ッ、もうやめろ立花！ ガングニールを抑えろっ！」

鏡華が叫ぶ

荒い息を吐いて振り向いた響は——敵意を鏡華へと向けていた

「鏡華あつ！」

「来るな！」

— 撃ッ！

— 煌ッ！

— 轟ッ！

D. C. XXIX

疾る

疾る疾る疾る疾る——！

交わる黒と黒の拳が

地を砕く震なる脚が

限界を超えて、堕ち逝く王と破壊の獣の血闘は繰り広げられる

——硬気・崩撃——

——■ ■ ・ ■ ■ ■——

——撃ッ！

——砕ッ！

——裂ッ！

互いの一撃がぶつかり合い、周りの瓦礫が衝撃で砕け散る

本能のまま響は懐に入り込む。鏡華は後ろに下がらない。超接近戦ならぬ超接触戦

に鏡華は応えた

ギアを纏った響の拳に、鏡華は何も纏わず、ただ《凶り汚れ果てる理想》を発動した

肉体で挑む

軋む。空気が、地面が、鏡華の拳が

軋む端から拳の修復は始まっていく。完全聖遺物としての本来の力を取り戻したア
ヴァロンを以てすれば、治癒はこれまでより格段に早い

ならば何故、鏡華は鎧を纏わないのか

それは鏡華と奏しか知らない

「うおおおおおっ！」

「■■■■■■——！！」

血を流すのは鏡華だけ

だが、響も流すものはある

それは心だ——鏡華はそう考えている

考えているから——響を早く助けるために拳を振るう

——撃ッ！

——轟ッ！

——爆ッ！

——裂ッ！

「ッ、——ッ——！」

血に足を取られ、衝撃を逃がしきれず鏡華は吹き飛ぶ
背中から地面に倒れた鏡華の視界に入る——空を跳ぶ響の姿が

「ッ——！」

この距離からでは回避は出来ない

鏡華は腕をクロスさせ防御の構えを取った

しかし、今の響に、そんな防御など紙に等しい

響のアームドギアは、束ねて繋ぎ——砕いて壊すものなのだから

——撃ッ！

——撃撃撃撃撃撃ッ！！

殴る

殴る殴る殴る殴る——！

鏡華を砕くために、壊すために、ひたすら殴り続ける

腕が砕けようと、胸から砕ける音が聞こえようと、鏡華の身体が地面に埋もれようと
響はただ殴り続ける！

「■■■■■■——！！ ■■■■■■ッ！！」

最後の一撃

響の意味だけで腕部のパーツをオーバーライドさせ、

—撃ッ!

それを遠慮も、容赦も、情けも
全てを無用で鏡華に全力で打ち込んだ!

♪♪♪♪♪♪♪♪

響がおかしくなった事はモニターからも確認出来た

弦十郎でさえ、今の響には絶句し言葉を紡ぐ事は出来なかった

「響……?」

「あれ、本当にビツキーなの……?」

創世は信じられないと云った様子で呟く

モニターで鏡華と戦い始める

「もう、終わりだよ……」

消え入れそうな声で呟いたのは弓美

「学園もメチャクチャになって、響もおかしくなって……」

「まだ終わりじゃない! 響だって——」

「あれが私達を守る姿なの!」

絶叫。モニターに映る響が唸る声が届く

「分かんないよ。どうして皆戦うの!?! 痛い思いして、怖い思いして!! どうして戦うのよっ!?!」

そう、誰に分からず弓美が問い掛けた時だった

—壊ッ!

部屋の天井から何かが突き破って、簡易ベッドに飛び込んできた

全員が見る先には——

「どうして……皆戦う、か……」

ボロボロになって、血だらけになって

それでも立ち上がろうとする鏡華がいた

「鏡華さん!?!」

「地上から殴り飛ばされてきたのかっ!?!」

あまりの威力に藤堯は啞然とする

いや、威力もそうだが、それでもまだ立ち上がる鏡華にも驚きだ

壊れ、役目を果たせなくなったベッドに掴まりながら、鏡華は弓美を見つめる

「そんな単純な事も分からないか? 板場。アニメが大好きな君が……」

「ッ……!」

「守りたいからだよ。世界を、この街を、友達を、好きな奴を——全部、守りたいんだよ」

地球を、街を、響を、未来を、弓美達を、何もかもを守りたい

アニメだってそうだ。大抵の正義の味方は守るために戦っている

「お前だってそうだろう？　なあ——立花」

そう言った瞬間

鏡華が落ちてきた穴から、響が降りてきた

「響いッ！」

「響君！」

「立花さん！」

「ビツキー……！」

「響……」

弦十郎や友人達の呼びかけに

「■■■■ウ——」

響は応えなかった

唸り声をあげて、鏡華だけを睨む

「なあ立花。やっぱお前凄いや」

鏡華だけはいつもの調子で話しかけた

「前、話してくれたよな？ 助けたい人がいたら、一秒でも早く助けに行きたいって。最速、最短で。真つ直ぐに、一直線に駆けつけたって」

響が開けた穴を指差す

「その言葉通り、お前は、一番助けたい人の元へ一直線に着いたな。凄いよ。———だけどな」

「■■ツ！」

鏡華に飛び掛かる響

振るわれる拳を身体半身をズラして躲し、クロスカウンターで響を殴る

「今のお前に、人助けをする資格はない。聖遺物に呑み込まれてるお前には」

吹き飛んだ響は身体を捻り、壁を蹴り、愚直に鏡華に突撃する

周りに未来や弦十郎がいる以上、鏡華にクロスカウンターや軸をズラす以外の回避は許されない

—蹴ッ！

その場で上半身を捻り、全身を回す勢いで側頭部へ蹴りを放つ

だが、響も吹き飛ぶ際に、鏡華の顔面に後ろ蹴りの要領で蹴りを見舞った

「ぶっ……腐つても弟弟子って事かよ……いや、妹弟子か」

血が混じつた唾液をペツと吐き、口元を拭う

ガアツと吠え、縮地を発動。その速度に鏡華は反応出来ない

《凶り汚れ果てる理想》を発動していなかったら、の場合だが

—轟ッ!

拳と拳が激突し、衝撃が広がる。非常食や棚が衝撃でヒビが入る

右で打ち、左で殴り、蹴りで火花のように血飛沫が舞う

《崩拳》、《轉身・膀打》、《鉄山靠》、《裡門頂肘》、《外門頂肘》、《浸透震脚》——!

同等の技と技の応酬。ぶつけ、ぶつかり、殴り、殴られ、蹴って蹴られ——

見ている側からしたら、もう見ていられなかつた

鏡華は血を流し続けている。流せる血など残っていないだろうに

響は何も流さない。だけどきつと、ナニかを流してしまっている。心のどこかで

響が何度目か知らない壁に激突し、鏡華がその場に膝をつく

荒い息を吐き、鏡華は震え血で紅く染まった瞳で、立ち上がろうとする響を見つめる

「なあ、立花……前、風鳴の屋敷で言った事を覚えてるか?」

そんな状態でありながら、鏡華は唐突に話す

聞こえてなくてもいい。ただ、どうしても言っておきたかつた

「俺は、お前に惚れてなんかない。あの時は聞こえなかつたかもしれないけど、俺は——

—お前に憧れているんだ」

独り言のように言葉を続けていく

「二か月前まで、何も知らない、ただの、人助けが趣味な少女だった。それが、幸か不幸かノイズを倒す力を手に入れた。最初は覚悟もなく、奏の代わりで戦場に立った。途中からは代わりではなく立花響として戦場に立った。覚悟を決め、親友と袂を分け、その後より強固な絆を手に入れた」

「……………」

「その姿に、自分がなりたかった姿に、俺は羨み憧れ——『嫉妬した』」

最後の言葉に、未来は思わず鏡華を見て——言葉を失った

鏡華の身体が黒く染まってきているのだ——響のように

自分の身体の事だ。鏡華が気付いていないはずがない。なのに鏡華は放置して響に話し掛ける

「何で俺はお前みたいに上手く出来ないんだ。何で翼の心を開かせたのが出会ってたかが二か月の立花なんだ！ 何でお前はそこまで強くなる！ 俺が届かない高みにお前はいて、どうしてお前は堕ちるんだよっ!!」

—蹴ッ！

床を蹴り、黒化した拳を振りかざす

響はその攻撃に反応して、拳を——振りかぶらなかつた

動かなかつた。立ったまま、鏡華を睨んでいた

動いたのは——響の瞳からこぼれ落ちる雫

「……わ……私ダツテ、センサーガ羨マシくて……嫉妬して、た……！」

「ツ——!?!」

——撃ッ!

止められない拳

だが、軌道だけは変えた

鏡華の拳は、紙一重でズレ、響の顔の真横を通過して壁を粉碎した

拳から血が流れる。黒く染まるのは止まっていた

「——響……?」

未来が呟く

響の黒化は治まっていない。未だ黒く染まり続けている

「未来は遠見先生の話をするたび、嬉しそうな顔をしてた……いつも、先生の話をしてた……。このままじゃ、未来が私の前から消えちやう……前みたいになつちやう……そんなの嫌だよオ」

「たち、ばな……」

「先生が羨ましいって思っていた。先生に嫉妬していたつ。先生がいなければ未来がいなくなることはないって思った！ 先生がいなくなればいいと思ったつ!!」

——撃ッ！

その音は何だろうか？

——ボキッ

すごく硬いもので——何かを押し折ったような音

——バシヤ

そこから液体がこぼれるような音

——ブシユツ

落ちるのではなく、霧を吹き出すような音

鏡華は自分の身体を見下ろして、ああ、とやつと気付いた

響の貫手が自分の胸を貫いていた。きつと、ブシユツは後ろに血が吹き飛んだ音だろ

うな、と思った

その割には、痛みがない。もう、痛過ぎて、感覚が麻痺しているのだろう

不思議な事に、身体を動かすには支障がなかった。ただちよつと息がし辛かったが

鏡華は静かに自分の胸を貫いている響の腕をズルリと抜いて見た

自分の血で黒く染まった手——いや、元からか——を見て、鏡華は苦笑した

「こら、立花。お前の拳は壊すためじゃないだろ。お前の拳は——束ねて繋ぐものだろ?」

もう片方の腕を持ち上げ、響の背中に回し、そつと自分の方へ抱き寄せる

「そうだよな。そうだったな。人間辞めた俺でも負の感情があるんだ、まだ人間の立花が負の感情を溜め込んでもおかしくはないよな」

無意識に、あるいは無自覚に涙を流す響に、

「ごめんな、立花」

鏡華は、謝った

何になのか、何で、なのかなんて弓美達には知り様がない

唯一、理由を知っていた未来だけは胸が締め付けられそうだった

どんなに話しても響は嫌な顔をせず話に相槌を打ってくれていた。だが、その裏では響自身も気付かない感情が渦巻いていたのだろう

「いっしょ」

血を吐く

瞼が重い。今にも閉じてしまいそうだった

だけど、それを行うのはもう少しだけ後だ

片腕だけで響を逃がさない様抱きしめ、もう片腕でプライウエンを具現化。船とし
把っ手を掴む

「戻ろう立花。全てに片をつけるために、な」

「響！ 鏡華さん！」

「鏡華！ 響君！」

未来と弦十郎が叫ぶが、鏡華は応える事なくプライウエンで駆けた

ゆっくりと向きを変え、高速で穴に突っ込んだ

「ぐべっ……耐えろ、耐えろ……」

一心不乱に唱える

今、意識を飛ばしたらプライウエンも消え、二人共真つ逆さまだ

そして、数秒の短い高速飛行は終わりを見せ、プライウエンは空中へ飛び出た

限界を迎え、プライウエンは消え、鏡華と響は空に投げ出された

そして、空を舞う二人が見た

—翔ッ！

—轟ッ！

空を舞う、蒼炎の翼と紅炎の嘴を持つ鳥が

天を穿つカ・デインギルに向かい、

—煌ッ！

—爆ッ！

—裂ッ！

煌めきに消えるその姿を

眼に焼き付いたその炎鳥に鏡華は、

「……どこまでも翔べ——ツヴァイウイング」

静かに微笑み、その瞼を閉じた

D. C. XXX

「……フィーネ……」

「待たせたな、了子さん。いや、あたし達が待った方か？」

ネフシユタンの鎧によつてフィーネの完全修復が完了すると同時に、翼と奏が話し掛けた

蒼と紅。この一対を再び見る事になるとは——

「二年前の仕返しと云うべきか」

「んな事アどうでもいいよ。今は了さんを止めるのが槍と剣を携えたあたし達の役目だ」

とか真面目な事を言いながら、その場に座りだす奏

流石の翼も咎める

「奏——言ってる事とやってる事が違う」

「いいからいいから。——どうしても聞いときたい事があるからな」

「聞きたい事？」

「そ、聞きたい事。了子さん——いや、今はフィーネって呼ぶよ。あんたの目的は世界

を支配、なんかじゃないよな」

突然の質問に翼は眼を丸くする

「あなたの目的は更にその先——創造主とやらに想いを伝えたい、ただそれだけだろ？」

「……は？」

「……それも鞘の記憶、か？」

「おう。騎士王に仕えていた？ 魔術師がフィーネと話した後には騎士王に暴露してた」

奏の説明を聞き、フィーネは珍しくこめかみを手で抑えていた

そんなフィーネを、奏はからからと笑う

「あの不愉快な魔術師め……数百年経た今になっても嫌がらせをするか」

「まあ、あの騎士王も苦手な対象だったみたいだし？ 諦めた方がいいぜ」

「……えと……」

話が付いて行けない翼は置いてけぼりだ

奏としては置いてく気はなかったが、話している内容が鞘の記憶を見た自分と、過去のフィーネになった人物の記憶を引き継いでいる今代のフィーネしか知らないものだ。教えようにも時間が足りない

そうこうしていると、フィーネも近くの瓦礫に腰掛け、欠けた月を仰いだ

「もう、ずっと遠い昔になるか。あのお方にお仕えする巫女であった私は、いつしかあの方を、創造主を愛するようになっていた」

フィーネの口から語られ始めた物語は、フィーネ自身の恋の話だった

それはきつと、以前響に話してしまいそうになった恋バナ

「だが、この胸の内の気持ち伝える事は叶わなかった。伝える前に失われたからだ。創造主と話す事の出来る唯一の言語——統一言語が、バラルの呪詛によつて奪われたからだ」

月を仰ぐフィーネの表情に翼は思わず、え、と疑問の声をあげそうになった

冷めた眼、見下す顔。自分達を見る時は冷徹な表情しか見せていなかったフィーネが切なそうな、しかし、熱の籠った表情を浮かべているのだ

——何だ、それは。それではまるで

恋する少女の顔ではないか、と翼は思った

「お前達なら理解できるだろう。想いを伝えられぬ胸の痛みは」

「ああ……嫌と云うほどすく……」

胸に手を当て、同情はせず、同意する翼

昔は、今の三人の関係を壊したくなくて言葉に出来なかった。募る想いは、胸を締め付けるばかりだった

「だけど、あなたの行動は防人として看過出来ない」

「ふっ………たった一つの、幾星霜経ても色褪せぬ、ささやかな願いも叶えさせてはくれぬのか？」

「叶えさせたい、つーか、恋する乙女を応援したいのは山々なんだけどな？ その結果で地球が大変な事になるのは勘弁、御免被りたいわな」

やれやれと首を振りながら、奏は立ち上がる

その手にガングニールを具現させて

「つーわけで、世界をまもるために、フィーネのささやかな願いを踏みにじらせてもらいますわ、うん」

カ・デインギルが再充填を始めた光を背に、奏は言った

「その世界が不老不死の化物と剣を受け入れない世界だと知っていても？」

「その時は、その時だっ」

「そうさ！ そんな時はあたしと翼、鏡華だけで生きるだけさっ！」

互いに背を合わせ、得物を構える翼と奏

「飛ぶぞ翼！ この場に剣と槍はあたし達だけだ」

「二年前と——同じ言葉だ」

「でも、中身は違うだろ？」

「ああ！ 風鳴翼の歌が戦うためだけでない事を彼女だけでなく、奏、君にも知ってもら
うぞ——！」

♪♪♪♪♪♪♪♪

言われるが早く、奏はその場で跳躍
槍を投擲の姿勢に構え、

—— STARDUST ∞ FOTON ——

— 煌ッ！

— 疾ッ！

— 撃ッ！

大量複製した槍と共に投げる

座っていたファイネは爆風から跳び上がり、着地と同時にソロモンの杖を起動させた
周囲にノイズが現れ——翼に両断された
片っ端からノイズを斬り捨て、ファイネに迫る

脚部のアームも展開して剣舞を舞う

鞭で防いだファイネは鞭の軌道を変え、

—撃ッ！

翼の剣を押し返す

反動で胴が、がら空きになった翼。その脇を掻い潜るかのように奏が二人の間に入つた

—撃ッ！

—戟ッ！

二槍を存分に振るい、フィーネの鞭に対抗する

徐々に押されていくフィーネは自ら後ろへ跳び、距離を取つた

だが、距離を取つたつもりが——

——千ノ落涙——

今度は翼の数十本もの剣が降り注ぐ！

しかもそれだけで終わらない

——L U F T ∞ D O L C H——

地上からは奏が放つた真空の刃がフィーネを襲う

舌打ちを盛大にかまし、フィーネは二本の鞭を一本ずつ向け、

——A S G A R D——

同時障壁を形成

—撃ッ！

—爆ッ！

—轟ッ！

だが、鞭一本で編んだ障壁の防御力などたかが知れている

数本で、数刃で、その障壁はヒビが入り、二桁目で完全に砕け散った

「ちいっ……っ！」

悪態をつくファイネ

その懐に同時に攻め入る翼と奏

「せえ——」

「——のっ！」

—撃ッ！

野球のバツティングよろしく

翼が右打者で奏が左打者。バツトは天ノ羽々斬とガングニール

ファイネをボールに見立てて——二人は全力で聖遺物バツトを振るった

ゴキッ、と骨が折れた盛大な音を立てて、ファイネは吹き飛んだ

カ・デインギルにその身を埋めて、停止する

その距離、その速度——奏は思わず、

「場外ホームランっ！」

ガングニールを肩に担ぎ、ピース

この二年間、翼と奏はまったく別の生き方をしていた

翼は孤独に戦場に身を置き、自身を剣として生きていた

奏は眠り姫と化し、戦場とは程遠い場所で眠って生きていた

奏が眠りから覚めた後も、道場で軽い模擬戦はしたものの共に戦ってはいなかったにも関わらず——二人が見せた美しき連携技の数々

まるで、本当に一対の双翼のように——

「奏、行こう！」

「おう！」

翼の掛け声に、奏は応じ、身体を屈め、低い姿勢で地を駆けた

その場で膝を屈め、跳躍する翼

フィーネが気付いた時には、翼は《天ノ逆鱗》を発動させ、奏は《ASSAULT∞ ANGRIF》で地を駆けていた

「ッ……！」

忌々しそうに顔を歪め、フィーネは《ASGARD》を再度展開

今度は更に二重、三重、四重と強固なものにする

—撃ッ!

その障壁に、《天ノ逆鱗》が激突する

火花が散る。だが、障壁はびくともしない

それで——よかつた

翼は器用に巨大剣を動かし、巨大剣の柄部を上に向け——障壁ごと向きを変えた

二刀を両手に持ち、更にそこから翼は翔ぶ

刃は蒼の炎を宿し、翔ぶ姿は——

——炎鳥極翔斬——

「まさか、始めから狙いはカ・デインギルかつ!？」

「その通りだぜっ!」

フィーネの足下まで来ていた奏が言った

——ASSAULT∞ANGRIFF——

奏もガングニールの穂先を天に向け、空を翔んだ

すぐに翼に追いつき、隣り合わせで翔ぶ

「ッ、させるかアッ!!」

鞭を伸ばし、翼と奏を止める

加速させ、逃げる奏。翼は速度が上がらず、

— 斬ッ！

「か……っ！」

鞭が翼を仕留めた

上昇が終わり、落下を始める

奏は引き返す事なく上昇を続ける

——やはり、私は……私では、奏のいる場所に辿り着けないのか
弱音を吐きそうになつた

だけど、上昇を続ける奏を見て、思い出した

風鳴翼と天羽奏。二人揃つて双翼——ツヴァイウイング

片翼では出来ない事も、両翼揃えば出来ない事はない

両翼揃えば——どこまでも飛んで行ける

奏は翼を助ける事も引き返す事もしない

だがそれは、翼を信じているからだ

自分の半身である——自分の片翼である翼を信じているからだ！

臉を開け、刃に再び炎を宿す

カ・ディングルの壁からわずかに突き出た突起に着地し、もう一度翔ぶ

絶句したフィーネが再び鞭を振るう

だが、届かない。翼の速度に、鞭は二度とその刃で彼女を裂く事は叶わなかった
奏の所まで辿り着く。奏は——笑っていた

「おっせーぞ翼」

「ごめん、奏」

翼も微笑んだ

その瞳を空へ向ける

二人の眼前には、空を翔ぶのに邪魔な馬鹿でかい塔が

「邪魔だあつ——!!」

二人の声が、炎が交わり、重なり——二人を包み、鳥となる

蒼炎の翼、紅炎の嘴——その名は

——双翼ノ唱——Zwei∞Wing——

今、高らかに天を双翼が舞い歌を奏でる——!

♪♪♪♪♪♪♪♪

鏡華が地上に戻り、モニターに映し出された光景は

一人を除き、誰も立っていなかった

天ノ羽々斬——反応消失

ガングニール・天羽奏——反応消失

イチイバル——反応消失

エクスカリバー——反応有り。所有者のバイタルは不明

アヴァロン——反応有り。所有者のバイタルは微弱

ガングニール・立花響——反応有り。ただし精神状態に問題

ネフシユタンの鎧——健在

凄惨な状況に、友里あおいは口を覆い、眼を背ける

何も出来ない自分に、血が滲む程拳を握りしめる弦十郎

モニター内でネフシユタンの鎧を纏ったフイーネが吠える

手当たり次第に瓦礫を崩す。その眼からは一筋の涙が流れていた

何かを叫んでいるようだが、音は届かなかった

弓美は泣いていた。弓美だけではない。創世も、詩織も泣いていた

当然、未来も。泣いて——信じていた

諦めない。諦めてたまるか、と

ただ、すがりつかないと崩れてしまいそうで——

その時だった

仰向けに倒れている鏡華に、フィーネが近付き

——突ッ！

無造作に鏡華の胸を手で貫いた

「鏡華さん！」

引き抜いた手に握られていたのは——未だに鼓動を続ける肉塊

未来には肉塊が心臓だと簡単に判断出来た

「あ——あ……いや、やめて……！」

だが、未来の眩きは誰にも聞こえなかった

だから、フィーネは何かを眩いた後、それを、いとも簡単に握り潰した

初めて、未来が悲鳴をあげた

直後、データが送られてきた

藤堯は震える声で、データを伝えた

アヴァロン所有者バイタル——完全停止、と

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「……やはり、予想通りか」

握り潰した鏡華の心臓を見下ろし、冷静になったフィーネが興味深そうに呟いた

人間の駆動源とも云うべき心臓は潰した。データもバイタル完全停止のサインを出している

“しかし、鏡華の呼吸は止まっていない”。間近で確認しないと分からないが、鏡華は生きていた

これが鞘の力の一部なのだろうか？

鞘は、所有者に不老不死を与えるとされているのが存在する諸説の中で共通する点だ。騎士王に不死と永遠の刻を与え、盗まれるまで決して血を流させなかった魔法の鞘だが、ここで疑問が生じる

不死と不老を与える点は問題ない。これまで見たものが証拠になる。しかし、鏡華はこれまで、特に今日の戦いで無尽蔵とも云うべき血を流してきた。今も流れている

可能性としては——三つ

第一に、鏡華が鞘に認められていないと云えば、それだけで解決する——他の力も使われてなければの話だが

第二に、鞘に認められているが力が限定されている。鞘が認める相応しい行動をしたのなら解除されていく——そんな条件があるなど、数百年前の記憶を遡っても聞いた

事がない

第三に、新たな主に合わせて能力を変えた——別の能力を隠しているのかもしれないが、この可能性は限りなく低い

「……いや、考えても詮無き事か」

今大事なのは考える事ではない。長い思考を終えたフィーネはそう言った

この疑問を解消する時間は、これから無限に存在する

フィーネはそう決め、鏡華から離れた

向かう先は黒化から抜け出し、防護服も解除され——心が砕けた響がいた
あれから、まるつきり動く気配を見せない

——まあ、当然か

友達になれたと思つた雪音クリスは絶唱を唱い消え

風鳴翼と天羽奏はその身を犠牲にしてカ・デインギルを破壊した

先生と慕っていた遠見鏡華に関しては、己でトドメを刺したようなものだ
心が砕けなくて——何が砕けると云うのか

「だが——お前には感謝している」

唯一初めての融合症例、立花響

彼女の実験例があったから、今、フィーネはネフシユタンの鎧と自分を融合させる事

が出来た

ヴァンとの一戦も、米政府の奇襲の際にも融合のおかげで対処する事が出来た。しかし、自らが融合症例となった今、立花響の存在は不要だった

「新霊長は私一人いれば十分だ。私と並ぶ存在は——全て絶やしてくれる」
鞭を響にかざす

新霊長となる事が出来た礼に、苦しまず逝かせてやろうと近づけた瞬間
歌が聞こえてきた

まだ生きていたスピーカーから小さく、だがはつきりと
未来達の声が聞こえてきた

「ちっ……耳障りな。どこから……」

フィーネは鬱陶しそうに辺りを見やる

だから気付かなかった。響が、心の折れた響が反応を見せた事に
最後の力が解放される事に——

D. C. XXXI

叫んだ未来はその場でしゃがみ込み、自分の身体を掻き抱いた

心臓の音がうるさい。自分を心配してくれる弓美達の声さえも聞こえない

アヴァロンとは鏡華の聖遺物だとは聞いていた。その所有者のバイタルが停止したと云う事は――

「ッ、認めないっ。私が認めちゃいけない!」

声を出して頭の中で認めてしまいそうだった事実を振り払う

それだけでドツと汗が噴き出た

「小日向さん……?」

「信じるんだ。響を。鏡華さんを……皆を!」

身体を掻き抱いたまま、立ち上がる未来

弓美はおかしい、と頭を振る

「どうして? どうしてそこまで信じられるのよっ! 遠見先生死んじゃったんだよ!」

響も壊れちゃって……何で信じようとするのよっ!」

「私達が信じなかったら、誰が響達を信じるの!」

初めて、未来が叫んで言い返した

滂沱の涙を流して、しかし諦めないという意味を宿して

未来の意思に、息を呑む弓美

その時だった

廊下からドタドタと足音が聞こえてきた

振り返ると、緒川が一般人や同じ生徒を連れて戻ってきていた。一緒に探してくれていたのか、先程の兄妹家族もいた

「司令！ 周辺シエルターにて生存者を発見しました！」

「そうか！ よかった……」

安堵の息を漏らす弦十郎

と、緒川の近くにいた女の子がモニターを見て、あつと声をあげた

「お母さん。恰好良いお姉ちゃんだよ！」

母親の制止も聞かず、女の子はモニターの前までやってくる

創世が母親にビツキーの事を知っているのか訊く

母親が少し言葉を濁し、多くは語らなかつたが、響が女の子を助けてくれた、と言つた

「響の人助け……」

「ねえ、恰好良いお姉ちゃん、助けられないの?」

女の子の言葉に、未来達は揃って顔を俯かせた

助けたくても、どうしようもない——詩織は自分に言うように女の子に言った

だが、女の子は、

「じゃあ、一緒に応援しよう!」

純粹にそんな事を言った

その言葉に未来はハツとした。助けられなくても、声を聞かせられれば——

自分達が無事だと知らせれば——

「司令!……ここから響達に声を、無事を知らせるにはどうすればいいんですか?」

答えたのは、藤堯だった

学校の施設がまだ生きていれば、リンクしてここから声が送れるかもしれない——

と

方法がある事に、未来は笑顔を浮かべると、涙を拭い、その場所を訊いた

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

緒川が案内した場所は小さな抜け穴だけの頑丈な壁だった

壁の向こうに切り替えるためのレバーがあるという

だが、大人である緒川には通る事は出来ない

覚悟を決め、未来が口を開こうとした瞬間、

「あつ、あたしが行くよ！」

先に弓美が口を開いた

アニメに喩え、その役割が体格の小さい自分にあるからと

「でも！ それはアニメの中で——」

「アニメを真に受けて何が悪い！ もしここで行かなかったらあたしはアニメ以下だよ！ 非実在青少年にも成れやしない！ 響の友達だって——胸を張れない！」

嬉しかった

あれほど絶望していた弓美が響のために頑張ろうとしてくれる

それは創世と詩織も同じだった

響が頑張っている。なら、その友達も頑張らないとね

小さな抜け穴を抜けた先に四人を待っていたのは、理解出来ない装置

それと、かなり高い位置に設置してある切り替えのレバー

——何であんな高い場所にあるのよ！

弓美が愚痴るが、時間が勿体なかったのですぐに行動に移した

一番体力のある未来と創世が一番下に

四つん這いになった二人のその上に詩織が四つん這いで乗り

一番上に一番小柄な弓美が背中に乗った

「お、重い……」

とは言わなかった。云って傷付くのは自分だと分かっているからだ

弓美が背伸びして手を伸ばす。それでもレバーには後少しだけ届かない

台になってくれている三人のために急ぐが、急げば急ぐ程、指はレバーをかするだけ

「くん、っのおっー」

気合い一発、膝を曲げて跳躍する

思い切り体重を掛けられ、崩れる未来と創世と詩織

弓美も着地出来ず、三人の上に落ちる

だが——レバーは切り替わった。装置が起動し周りが明るくなっていく

未来達は痛みも忘れて笑い合った

戻ってきた未来達

藤堯とあおいのおかげで既に準備は出来ている

未来は頷くと、その場にいた他のリディアン生と共に——歌を歌った

歌はリディアン校歌

この戦いの前、響が落ち着くと云った歌だ

歌い、響達に知らせる

自分達は無事だと。皆が帰ってきてくれるのを待っているから。だから

だから——負けないで

——煌ッ！

その時だった

モニターから煌めきが見えたのは

フィーネも慌ててそちらを見た

そこには、バイタルが停止したはずの鏡華が片腕を天に突き出して立っていた

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

倦怠感が身体中を支配して、正直立っているのもやっとだった

しかも胸の辺りが空洞になっている気がして、ちよつと苦しかった

だが、目覚めの時は今しかなかった。未来が、弓美が、創世が、詩織が、皆が歌って

くれた今しか

「お前……どうして動ける?!」 心臓は握り潰した! 回復するにしてもまだ時間が掛か

るはずなのに、何故!？」

「あー……だから、空っぽな気がしたんだ」

フイーネの言葉で納得出来た

まあ、今は「放っておいても大丈夫だろう」

むしろ、今から解放する能力の余波で、腰まで伸びた髪が鬱陶しかった

未来達が奏でてくれる調べに、鏡華も乗っかるように口を動かした

「——It, s not made to finish with a dre
am」

(——夢は夢で終わらない)

されどそれは校歌に非ず

天上へ捧げる唱でも、透き通る唱でも、静謐な唱でもない——訴えの絶唱を

——a knight unification we are nobly v
aluable a king——

(騎士統べる我らが気高く貴き王よ)

——Please do not choose not a sheath b
ut a sword——

(鞘でなく剣を選ばないでください)

— A sheath is a proof of protection. A
proof which protects all—

(鞘は守護の証。総てを護る証)

— If People is protected as long as
you choose a sheath, as long as a oath
will be taken—

(貴方が鞘を選ぶ限り、民草を護ると誓う限り)

— Let, s change with our sword of your
s—

(我らが貴方の剣と成りましょう)

— As long as it is with our noble val
uable king—

(我らが気高く貴き王と共に在る限り)

「An Utopia is on my breast—!」

(理想郷は——この胸に)

刹那、世界が変わった——錯覚を覚えた

鏡華の頭上に黄金の鞘が具現化し、光を放つ

光は決して強くもなく——ましてや弱くもない

スピーカーから聞こえる歌に呼応するかのように点滅を繰り返す

すると、どうだろう。響の身体が同じように光を発しているではないか！

否——光は響だけではない。森から、カ・ディングルの残骸からも発していた！

「な、なんだ——！」

「騎士王の——否！ // 俺の鞘 // の最後の能力——！ // 代償の無い味方の治療 //

！ // それがこの——」

—— 辿り着きし永久の理想郷——

「馬鹿なっ！ // 代償なしで致命傷クラスの傷をも癒すと云うのか!？」

「誰かが俺達を支えてくれている！ // それがどんなに些細な応援でも構わない！ // それ

だけで俺達はっ!!」

鏡華が叫ぶ

鏡華だけでない。鏡華の言葉に連ねるように全ての人の頭の中で叫ぶ

『まだ、歌えるっ!!』

風鳴翼が！

『頑張れるっ!!』

立花響が！

『護れるっ!!』

夜宙ヴァンが!

『羽ばたけるっ!!』

天羽奏が!

『戦えるっ!!』

雪音クリスが!

—煌ッ!

光が、柱と化す

緋色、蒼色、赤色——三色の光が、空へ飛ぶ

緋と黄金の螺旋、黄金一色は鏡華の元へ集う

—輝ッ!

光が弾けた時、フィーネは己が眼を疑った

何だ、アレは。アレは私が作ったモノだと云うのか

「お前達が纏っているモノは何なのだ!!」

「決まってるだろ」

鏡華も防護服を纏い、代表して叫ぶ

この身に宿しているのは聖遺物

ノイズに対抗するための世界の切り札
他ならぬアナタが創り上げた兵器

知る人はこう呼ぶ――

――シンフォギア、と

D. C. XXXII

一新された翼、響、クリスの防護服。四肢に生えているような翼で空に浮かび、制止している

鏡華とヴァンは先代が同じ聖遺物を纏いながら、その騎士装飾は同一であり——真逆のものだった

鏡華は戦闘服とは思えない荘厳な鎧を身に纏い、鎧ごと身体を覆っているマントは細部まで装飾が行き届いている絢爛な代物。長くなつた髪は首筋の辺りで紐で結ばれていた

逆にヴァンは、戦闘に特化した鋼色の鎧。マントは汚れる事も厭わない漆黒の色。しかし、手に握る星の剣だけは変わらぬ美しさを放ち、黄金に輝いていた

一番変化があると云えば奏だろう。奏の防護服は鏡華の元の騎士装飾をベースにして、各部にガングニールの防護服を付けた。二つの聖遺物が交わつた防護服になつていたので

「高レベルのフォニックゲイン……これは二年前の意趣返しか」

二年前、ツヴァイウイングのライブ

あれは観客を利用してフォニックゲインを高め、ネフシユタンの起動実験を行っていた

今回は未来達の合唱によってフォニックゲインを高め、ギアのロックを外した過去にフィーネはこれを利用してネフシユタンを起動・強奪した

それが、今度は野望を妨げる要素として立ち塞がったのだ

『んなことあどうでもいいんだよ！』

「念話までも……！ 限定解除されたギアを纏ってすっかりその気か！」

「言葉を慎め、フィーネ。俺と遠見鏡華は今や“王”だ。巫女如きが吠えるな」

ヴァンが一步、前に出る

「どこまでも私を邪魔をするかっ！ 王だど!? 刹那すら生きていない餓鬼が王？ はっ、笑わせてくれる！」

再びソロモンの杖を取り出すと、自分を囲むようにノイズを生み出す

——ノイズの災禍は、全てお前の仕業か？

翼も念話で訊ねる

『ノイズとは、バラルの呪詛にて相互理解を失った人類が同じ人類“のみ”を殺戮するために作り上げた自立兵器』

『人が、人を殺すためにっ？』

『バビロニアの宝物庫は開け放たれたままだな？　そこからまろびいずる十年一度の偶然を私は必然に変え、純粹に使役しているだけの事』

初めて聞く情報に翼達はわずかに驚く

しかし、ほとんど理解出来ていない

クリスマスも「また訳の分からない事を！」と叫ぶ

唯一ヴァンだけは、

「遠見」

一番詳しそうな鏡華に訊いた

『……バビロニアの宝物庫つてのは、天地開闢、原初の王が蒐集した宝を納めるために築き上げたたとされる無尽蔵の宝物庫の事だ。王の死後、蒐集された宝は各地へ渡り、担い手を選び、伝説を作つたらしい。この場なら——ガングニール、イチイバル、カリバーンがそれだ』

知っている事を素直に答える鏡華

尤も、蒐集された宝は、今各地で伝えられている聖遺物の原典……最初の形を成していたものだ

響やクリスマスが持っている聖遺物が宝物庫に入っていたわけではない

閑話休題

—疾ッ

ノイズが一斉に槍となつて襲いかかつてくる

翼、響、クリスは空中で躲し、鏡華と奏はプライウエンを駆り、空へとあがる。唯一飛翔能力を持たないヴァンは鏡華がプライウエンを貸し与え、同様に空に浮かび上がる。「今更ノイズかよつ。了子さんも戦闘になると芸が乏しいんだな」

奏が馬鹿にしたように言う

フィーネは微笑を浮かべ、ソロモンの杖を天高く掲げ、

「——墜ちろオツ!!」

—煌ッ!

—発ッ!

—輝ッ!

—散ッ!

閃光を空へ放つた

一直線に天空へと向かつた翠の閃光は途中で弾け、街中へ散布される

散布された光は瞬く間にノイズと形を変え、街を——否、大地を埋め尽くした

大地だけでない。空中にもノイズが現れる

「あちこちからノイズが……!」

「おっしやあつ！ どいつも纏めてぶちのめしてくれー！」

威勢良く飛び出すクリス

だが、それをヴァンが止めた

「待てクリス。フィーネが……」

そこまで言つた時だった

フィーネが天高く掲げたソロモンの杖を

—突ッ

自分の腹へ、突き刺した

全員が絶句する

刹那、街中へ散布したノイズがフィーネの元へ集まつていく

「ノイズに取り込まれて……？」

「自爆……？ いやっ！ 違うっ！！ ヴァンツ！！」

「^{オーライ}了解した！」

何かに気付いた鏡華がプライウエンを蹴り、空へと躍る

ヴァンも同様に跳び、同時に槍群と剣群を生み出す

—真・貫き穿つ螺旋棘—

—^{シュテル・ザ・シューティングスター}天降る星光の煌めき—

次々と放たれる。その数は数秒で既に計り知れない

しかしソロモンの杖を刺すと同時にフィーネを覆ったドロドロのナニかがそれを妨げる

ならば、と——共に聖剣を振りかざす！

「これなら！」

鏡華がカリバーンを構え、

「どうだっ！」

ヴァンがエクスカリバーを振るう

——想い選定す煌めきの閃光——

ヴァルアフル・ファンタズム
——今際に抱く貴き夢——

——輝ッ！

——閃ッ！

——裂ッ！

——波ッ！

黄金の刃が輝き、光が刃と化した

閃き、空を切り裂きながらドロドロとしたものに包まれたフィーネを焼き尽くす

ジュツと干上がるような音が聞こえたが、焼き尽くすには至らない

寧ろ——

『来れ——デュランダルツ!!』

カ・デインギルの動力源としていたデュランダルをも呑み込み、逆に閃光を放つてきた

鏡華はプライウエンで防ぎ、ヴァンはエクスカリバーで斬り裂いた

地上へ降りると、ドロドロとしたものは徐々に巨大化していき、カタチを成した

そのカタチに絶句する鏡華

「黙示録の紅き竜……緋色の女——大淫婦、ベイバロン……!　　そうまでして勝たないかあんたはっ!」

「どう云う事だ鏡華」

「あの紅い塊は黙示録に記されている悪魔の化身、またはその悪魔が竜となった姿。ベイバロンは『悪魔の住む所』であり、『汚れた霊の巣窟』と比喩された聖母。アレゴリーどちらも滅びの力であり……堕ちた事を証明する化け物だ」

それも今回の場合、ネフシユタンの鎧、ソロモンの杖、デュランダルを共に取り込んでいる。伝承通り——それ以上の力を有している事もはつきりしている

五人に対して一人。されど完全が二、欠片が三、融合が一に対して完全が三

人数ならばこちらの方が上だが——聖遺物の純度では圧倒的にフィーネが有利だ

『逆さ鱗に触れたのだ。それ相応の覚悟は出来ておろうな』
「それがっ！」

どうしたと言わんばかりに、クリスがギアを変形、外部ユニットのようなものを駆使し、

——MEGA DEATH PARTY——

弾幕を一齐射出

全てが命中した——かに思われた

弾幕は全て命中した。だが、ネフシユタンの防御力を継承しているのか、擦り傷さえ与えられていない

「ならばっ！」

——蒼ノ一閃——

閃ッ！

「でええっ！」

——撃ッ！

「せい、やつ！」

——SPEERAOALSBALD——

閃ッ！

—貫ッ！

翼の《蒼の一閃》、響の一撃、奏の槍投擲が直撃する

今度は紅き竜の表面を斬り裂き、貫通させる事が出来た。しかし——そこまでだった

驚異的なスピードで瞬時に回復していつてしまふ

『いくら限定解除されたと云つても所詮は玩具。完全聖遺物に対抗出来ると思うてくれるな』

「だったら俺達がつ！」

ロード「道を切り開くまでつ！」

限定解除された欠片のシンフォギアが駄目ならば、完全聖遺物である鏡華とヴァンが地上へ叩き付けられる触手を掻い潜り胴体部分を駆け上がる。フィーネがいる場所まで全力で駆け、飛び上がり、

—真・貫き穿つ螺旋棘—

ヴァルアブル・ファンタズム
—今際に抱く貴き夢—

—突ッ！

—輝ッ！

—突突突突突ッ！

―閃ッ！

技を同時に放つ

ファイネはデュランダルを持つ手を払うように動かす。途端、周りの黄金の逆さ鱗がカーテンのように間に割って入った

爆風にファイネの姿が見えなくなる

鏡華とヴァンは悪寒が背筋を奔るのを感じ、距離を取り同時に《護れと謳え聖母の加護》と唱壁を発動する

刹那に爆煙を切り裂いて閃光と触手が二人を襲った

「ぐっ………！」

「ッ………乗れ！」

衝撃に弾き飛ばされ、鏡華はプライウエンを具現させて着地する。ヴァンも鏡華の具現したもう一つのプライウエンに上手く着地した

『いくら完全聖遺物であろうと、数はこちらの方が上。不老不死の鞘と星が鍛えた剣が相手だろうと、攻撃、防御、制御、全てのステータスを上回る私の方に分がある』

ネフシユタンの防御力と再生能力

デュランダルの攻撃力と無限エネルギー

ソロモンによる制御、肉体となるノイズの精製

最悪の三つが合わさったとも呼べる

しかし——同時に翼とクリスの脳裏に突破口を見いだす事になった
『聞いたか!?』

「チャンネルをオフにしろ！ 鏡華っ」

「分かっているつもりだ。だがそのためには……」

鏡華が見据えた先

そこには——鍵となる響がいた

「いけるな？ 立花」

「えと——はい！ やってみせます！」

「上等！——奏！ 雪音！ ヴァーン！」

鏡華の叫びに、奏とクリス、ヴァンがファイネの前に躍り出る

阿咩とも呼べる呼吸で三人は一斉に技を放つ

奏が《LOST∞METEOR∥SPIRALE》を

クリスが《MEGA DEATH PARTY》を

ヴァンが《シユテル・ザ・シユルテイイングスター天降る星光の煌めき》を

ファイネは当然、黄金の逆さ鱗を盾として展開する

三撃と逆さ鱗がぶつかり、爆煙がファイネの視界を遮る

その瞬間を狙い、力を溜めていた翼の腰に手を回し、鏡華は「跳んだ」
景色がスライドされたように瞬時に入り替わる

「なっ……お前達、どこから!？」

目の前には驚きに眼を見開くフィーネの姿が

鏡華は腰に回していた手を翼の手と重ねる

「——遙か彼方の理想郷・応用編」

「(こ)ならば、防げまい——!」

頭上に掲げ——天ノ羽々斬を一緒に振り下ろす

その威力は《蒼ノ一閃》に非ず

この一撃は——

——蒼ノ一閃・滅破——

「ツ——!!」

フィーネに出来たのは、持っていたデュランダルを盾として構えただけ

《滅破》の威力は凄まじく、衝撃波は逆さ鱗を内部から吹き飛ばす程だった

もちろん、鏡華と翼にも反動のように襲ってきたが、鏡華がすぐに翼を抱えて「跳び

外へ回避した

逆さ鱗が破壊されると同時に、内側から吹き飛ばされてくる黄金の剣

それはデュランダル。無限のエネルギーを生み出す完全聖遺物

「それが切り札だ、響！」

「勝機を零すな！ 掴み取れっ！」

奏と翼が叫ぶ

だが、響の元へは飛距離が足りない

しかしその分は、

—タンツ

—タンツタンツタンツ！

クリスの精密射撃が補う

驚異の精密射撃でデュランダルを響の元へ届ける

「

覚悟を決め、デュランダルへ手を伸ばし—— 掴む

転瞬——あの時のように空気が反転した。そして、掴んだ箇所から一気に響の身体

を浸食し始めた

新装たるシンフォギアの力を以てしても完全聖遺物の浸食を抑える事は出来ない

それでも、響は聖遺物の衝動に抵抗している

ぎりぎりで抑えられているが—— 凌駕するには至っていないのだ

「ぐうう……■■■■——！」

今にも呑み込まれてしまいそうな時だった

完全封鎖されていたはずのシエルターが内部から吹き飛んだ

爆風から飛び出してきた——弦十郎、藤堯、あおい、緒川、弓美、創世、詩織、そ

れと——未来

モニターを見ていた未来が言ったのだ

——響は、響のままできてくれるって！ 変わらないままでいてくれるって！

——だから、私は響が闇の呑まれないように応援したいんです！

——助けられるだけじゃなくて、響の力になるって誓ったんです！

だから危険を承知で地上へ出た

「つて、扉そんを粉砕な出来るの、旦那だけだよな。腹に穴空いてるのに無茶するよ」

まったくだ、と鏡華も同意する

現に腹に巻いた包帯に滲んだ血が徐々に広がっている。傷が開いたのだろう

「正念場だっ！ 踏ん張り所だろうっ！」

「強く自分を意識してください！」

「昨日までの自分を！」

「明日からの自分を！」

弦十郎に続き、緒川、藤堯、あおいが叫ぶ

暴走しそれでも響は視線を向ける

そんな響の後ろから、翼とクリスが手を伸ばし、響の手に重ねた

「屈するな立花！ お前が束ねた覚悟を私にも信じさせてくれっ！」

「全員がお前を信じて、一切合切お前に託してんだ！ お前が信じなくてどうすんだよ
！」

翼とクリスも響を支える

それでも暴走は止まらない

徐々に——徐々に浸食は深まっていく

「あなたのお節介を！」

「ビッキーの人助けを！」

「今度は私達が！」

詩織、創世、弓美も声援を送る

鬱陶しそうにフィーネは声援を送る弦十郎達を睨む

「黙れっ！」

デュランダルを奪われたからなのか、閃光は放たなかった

触手を伸ばし、弦十郎達に振るう

だが、その触手が届く事はなかった

「安心しろ立花ア！ お前のダチには指一本——触手一本たりとも触れさせねえからよっ！ だからお前はデュランダルを信じろ！ 制御出来るお前自身を信じろ！」

切断には至らなかったが、届く前に触手から弦十郎達を守る鏡華

触手は三本。残り二本は——

「よっ、はっ、とと——聖遺物を無理矢理制御しようと思うな響！ 信じる奴にこそ聖遺物は力を貸すんだ！」

奏が蹴散らしながらアドバイスを与え、

「クリスが認めているんだ。ライオット暴走している場合じゃないぞ立花響！」

ヴァンが剣と唱壁を駆使して近付けさせない

されど、友達を、仲間を攻撃されたからか、逆に暴走は進み——直前まで呑み込まれた

しかも、翼とクリスの腕にまで浸食を始めている

「■■■■、■■■■——ッ!!」

「響イイイイイ——ッ!!」

吼え、デュランダルを振り上げた瞬間だった。

未来の叫びが響き渡る

多くの言葉が投げかけられる中、未来だけはたった一言——名前を呼ぶだけだったその叫びに胸の内に消えかけた立花響と云う意思が息を吹き返す

そうだ——今の私の力は私だけの力じゃないっ

助け助けられ、紡ぎ紡がれ、束ねて繋げた——皆の力なんだっ！

「皆の力が！——この衝動に——塗り潰されてなるものかつ!!」

侵食が止まる。振り上げられていたデュランダルが一層輝き、響を覆っていた侵食を掻き消す

——輝ッ！

輝きは響のシンフォギアにも伝わり、翼のようなスラスタが黄金に輝きだした

「その力——何を束ねたっ!？」

響が完全聖遺物を凌駕した事に絶句する他ないフィーネは困惑する

「きつと、あんたじゃ一生分かんねえだろうよ」

鏡華がぼつりと呟く

数千年も孤独に戦ってきたフィーネには、誰かが教えない限り絶対

「響き合う皆の歌声がくれたシンフォギアで——ッ!!」

叫び、再び振り上げたデュランダルを三位一体で振り下ろす！

——Synchro gazer——

友達や仲間の手を取り合い、心を一つにして初めて使える必殺の一撃

手を繋ぐのではなく心を繋ぐアームドギアを持つ響にしか使えない、響だけの技
煌きと輝きを放ち、光の一撃はフィーネへと向かう

「デュランダルの一撃など——！」

『だったら、それにプラスするってのはどうтусか？』

わざわざ念話を使って話してくる鏡華に、フィーネは視線を向けて驚愕した

鏡華とヴァンが黄金の剣を構えていた。奏は後方で未来達に被害が及ばないよう《護
れと謳え聖母の加護》を展開している

「三対二から二対三。形勢逆転って事で——喰らつとけつ」

「星が鍛えた一撃——得と知れ」

——信義を糺す金色奇蹟の残照——

——総て貴き幻想——
ラスト・ライト

——輝ッ！

——閃ッ！

——裂ッ！

これまで以上の光の斬撃が空を裂き、フィーネへと向かう

一閃だけであれば、ネフシユタンでどうにか防ぐ事が出来た。だが、自分に向かって

くる閃光の数は三

防ぐ事など出来はしない

視界を真っ白に染めて、フィーネは最後まで瞼を閉じる事はなかつた
だから見えた。自分に伸ばしてくる二本の腕を——

D. C. XXXIII

——櫻井了子は遠見鏡華にとつて、何だったのか

幼い頃、両親は様々な遺跡を巡っていたので、何日も家を空ける事が多かった別に寂しい思いをした、と云う記憶はなかった。幼いからなのか寂しくないからなのか、今となってはどうでもいいことだ。両親が家へ帰ると必ず鏡華に付きっ切りで傍にいてくれたのも原因の一つだろう

それと、了子の存在もあつた

理由は不明だが、鏡華は了子に両親が不在の時によく預けられていた

研究で忙しかつたはずなのに、了子は鏡華の傍にいて、色々と話をしてくれた自我がようやく芽生えたばかりで何一つ理解できない鏡華に

それから数年後。確か——中学か高校の頃

鏡華は「了子おばさん」から「櫻井教授」と呼び方を変えた

何で変えたのかも覚えていない。了子おばさんと呼びトラウマを覚えたのか、単に気恥ずかしくなっただけなのか

心境に変化は——変化しすぎていた

鞆を体内へ埋め込んでから鏡華は変わったと云つてもいい

ただ、少なくとも初恋ではない事は確かだ。鏡華の初恋は翼と奏なのだから
 だけど、もしかしたら鏡華にとつて了子は恋に似た感情を抱く女性だったのかもしれない

例えるなら——母親に対する感情

それが呼び方を変える起因になつたとも言えなくもない

実際、櫻井了子は遠見鏡華にとつて母親のような存在だったのかもしれない
 だから——

あの閃光の中、鏡華は響と共に櫻井了子ファイネに手を差し伸べたのかもしれない

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

始まりから実に一日が経とうとしていた

落ちていく太陽を背に、欠けた月へ向かつて進む鏡華と響

二人の間には、黄金の輝きは失われボロボロのネフシユタンの鎧を纏つたファイネが
 二人に肩を貸されていた

「たーっく、相変わらず了子さんに甘い鏡華は。初恋の相手だからか？」

「え!? そうなのか!？」

奏の指摘に翼が驚く

まるで変わらない二人に苦笑し、

「ばっか、んなわけあるかつ! 俺の初恋はお前らだつっの」

疲れたような笑みを浮かべて、二人が赤面する台詞を言い返した

心臓は未だ回復しきってない。正直、自分でもフィーネを背負ってこれたのが不思議だった

響にフィーネを下ろすのを任せ、鏡華はその場に座り込む

「もう終わりにしましょう了子さん」

「私は……フィーネだ」

「どっちでも一緒です。了さんは了さんなんだから」

きつと、分かり合えます

自信たっぷりと言い切る響

今の響は怒りに流されるばかりではない

皆の想いを背負い、自分の想いを貫いているのだろう

だから、黒幕だったフィーネに対しても自分の心情がブレる事はない

「ノイズを作り出したのは先史文明期の人間」

立ち上がり、背を向けて語り始めるフィーネ

「統一言語を失った我々は手を繋ぐことよりも相手を殺すことを求めた。そんな人間がわかり得るものかつ。だから、私はこの道しか選べなかつたのだッ！」

「人が言葉よりも強く繋がれる事。分からない私達じゃありません」

それがぎっかけだったのか

フィーネはキツと響を見据えると

—迅ッ！

鞭を振るつた

響は簡単に避け、フィーネ懐に迫り拳を放つた

だが、その一撃がフィーネに届く事はなつた。響が寸止めにしたのだ

「私の勝ちだアッ！」

それでもフィーネは吼えた

鞭はどこまで伸び続け——それは月にまで到達した

「え？　ちよ、ちよつと……嘘、まさか？」

思わず鏡華も立ち上がり、月を仰ぐ

フィーネは全ての力で引つ張り——月を動かした

「はあああああ!!　月動かしたああああああつ!!　何してんのこのおばさん——!!」

恐らく、今日一番の光景に鏡華は驚愕して絶叫した
翼達も絶句しているが、そんな中、奏だけは、

「あはははは！ マジか!? 了子さんマジすげーっ!!」

大爆笑しながら腹を抱えていた

笑いすぎて笑い声が「あひやひやひやひや！」と聞こえるのも気のせいではないだろ
う

「私の邪魔をする禍根はここで叩いておくっ!」

「あんたまで死ぬでしょうがっ! そこ、考えて動かしたの!?!」

「私は永遠に存在し続ける巫女、フィーネ! 聖遺物の発するアウフヴァツヘン波形が
ある限り、私は何度だって蘇り続けるのだっ!!」

「無理矢理心中! 月の欠片人力で牽引するわ、壮大な無理心中するわ! やっぱ了子
おばさんの頭おかしい!!」

ネフシユタンが負荷によつて崩れていく。恐らくネフシユタンと融合したフィーネ
の肉体も――

それでもなおフィーネの不敵な笑みは変わらない

誰もが臍を嚙んだ時、

――こっつん

乾いた、とても小さな音が響いた

それは、フィーネの胸に拳を「当てた」音だった

殴ったのでも、打ったのでもなく——当てた。ただ、当てただけ

「うん——そうですね。それじゃあ、いつか、蘇る度にその時の皆に伝えてください」

——世界を一つにするのに力なんていらぬ事を

——言葉を越えて私達は繋がれる事を

——私達は未来に繋げていける事を

「私には伝えられないから。了子さんにしか出来ない事だから——」

「お前、まさか——」

響の真意を悟ったのか、フィーネは呟く

今度は響が不敵な、だけど強気な笑みを見せた

「了子さんに未来を託すために——私が現在いまを守つてみせますね！」

きつとフィーネの読みは正しいだろう

この子は間違い無く——

そう考えると、何とも呆れる話である

敵だった自分に未来を託す、なんて、過去に敵対した誰一人も考えた事がない希望だ

「本当に——もう」

気付けば、[〃]了子[〃]は眩いていた

「放っておけない子ね。あの子にそっくりだわ……」

「あ……」

鏡華は思わず呟く

それに気付かず、了子は響の胸を突つくように触れた

「胸の心うたを、信じなさい」

最後に了子は、ゆっくりとした足取りで鏡華に歩み寄る。一步踏み出すごとに了子の身体は塵と消えていく

胸に迫るナニかに鏡華は背を向けてしまった

それでも了子は微笑んでしまう

「本当に恥ずかしがり屋な子。いろんな所が華夜にそっくりね」

「……るっさい。つか、どうして俺の世話してたんすか」

「華夜……あなたのママと大学まで同期……って言っても華夜は何回も浪人で年上だったけど、まアとにかく同期だったのよオ。だから、華夜の子供は私の子供でもあるわけ」

「あ、そうっすか。通りで——」

何だ、と鏡華は心の中で毒突いた

了子さんに対するこの感情はそう云う事だったのか——恋でもない、愛でもない、この感情は

気付くのに二十年も掛かったが、鏡華は了子に向き直り、

「二十年間、ありがとうございました——義母さん」

そう言つて、頭を下げた

了子は驚き、だけど「ガラじゃないんだけどねエ」と言いながら鏡華の頬に触れ、

「どんな事があつても、前を向きなさい。後ろなんか振り向いちゃ駄目よ。前を向いて

自分が信じた道を歩みなさい」

——私の、たった一人の息子かぞく

一言、伝えた

それが最後の言葉だった

了子の全身は塵と化し、風に乗って空に消えていった

鏡華は肩を震わせる。しかし涙だけは流さなかつた

震えを止め、空を仰いだ鏡華は、

「立花。後を頼んで良いか？」

膝から崩れ落ちながら背を向けた響に聞いた

心臓の修復は半分ぐらい。この身体で月まで行くのは出来なかつた

「はい！ 何とかします！」

「頼む。……その代わり」

「はい？」

「帰ってきたら、小日向との事、ちゃんとはつきりさせるから」

「つ……はい！ 良い答え、期待してますからね！」

努力はするさ、と苦笑いで答える鏡華

響は未来に向き直ると、

「それじゃ、ちょーと行ってくるから——生きるのを諦めないで」

笑顔で言つて——飛び出した

飛翔を続ける響から唱が響き渡る。命を燃やす——絶唱を

「鏡華」

響き渡る中、翼が鏡華に近付く

顔を上げ、何？ と聞き返す

「私も行つてくる。雪音もだ」

「そうか」

「ああ、そうだ。ちなみに奏と夜宙は置いていく。全員、過去に私や雪音を置いていったからな」

「……今度は俺達が待つ番、ってわけか」

不思議と否定する言葉は見つからなかった

立ち上がり、翼を見下ろそうとした瞬間――

「ん――」

「ッ――!」

唇が重なっていた。翼が飛びつくようにキスをしたのだ

当然、全員の視線はバツチリこちらに向けられていた

それが分かっている、翼は不敵な笑みを浮かべている

「――行ってくる」

「……ったく。ああ、行つてらっしやい」

不貞腐れたように送り出す鏡華

あちらではクリスもヴァンと言葉を交わし、飛び立っていく

翼とクリスが豆粒程大ききさまで遠ざかった頃、ヴァンが近付いてきた

「よお」

「おお。別れのキスは済ませたのか？」

「貴様らみたいにも人前ですか。――それより、そろそろ決着ケリを付けよう。遠見鏡華」

「だな。決着を付けないと俺達も始まらないし――それに、王は二人も存在出来ない」

「その通り。^イどちらかが王となり——^スどちらかが騎士に戻る」
「奏、見届け、頼むな」

「委細承知、つて奴だ」

共に黄金の剣を顕現させ、交差させる

二度三度、軽く打ち合い剣を触れ合わせる

その音に響達を見ていた未来達の視線が鏡華達に注がれる

歩き出しながら、鏡華とヴァンは歌いだす

迷いはない 考えたこともない

いつだって 結果は決まっている

敵も 味方も 倒れて

最後は一人

慣れている 悲しむことはない

いつだって 眼をあげたら 私しかない

友も 家族も なくなつて

最後は一人

同じ歌を、同じ速度で紡ぐ

同じ速度で歩き、同じ速度で剣を掲げる

「でも」

でも 忘れたわけじゃない

いつだって 傍には 君がいた

差し伸ばされる手 温かいから

どうか このままで

最後には私は一人 だから

どうか もう少しだけ このままで——

風に乗せて歌い上げる

余韻を乗せて風はどこまでも吹きすさぶ

辺りは闇に染まり、星々が輝き—— 月が閃光に包まれた

ハツとして月を見上げる。だけど、鏡華とヴァンと奏だけは見ない。見ようとしな

い

「流れ星……」

降り注ぐ流れ星を見て、未来は泣き崩れる

流れ星、墜ちて燃えて尽きて、そして——

「いざ尋常に——始めっ!!」

奏の声が響いた

同時に二人は《己が栄光を祖国の為に》を発動
かなりの距離をあげた鏡華とヴァンが走り出す

だんだんと速度は増していき、

未来達がもう一度見た時には、

「雄雄雄雄雄オーオーッ!!!」

声を張り上げ、互いに剣を振るわんとしている鏡華とヴァンが見えた
剣が交差し、衝撃と閃光が鏡華とヴァン、奏を包み込む

二人の王、命賭して交えて、そして——黄昏が終わりを迎える

D. C. XXXIV

あれから三週間後

一月近い時間をかけて、響は未来の前に姿を現した

響としては、本当はもつと早く駆けつけるつもりだったが

だが、そうさせてくれない問題がいくつか

まず、国内と云うか政府——つまりは大人の問題で

次に、国外、米政府からの声明による攻撃——つまりは機密漏洩の問題で

最後に、怪我を治す事に専念していたため——つまりは生命の問題で

むしろ絶唱を放つたのに三週間で完治した事の方が驚きだ

翼とクリスも完全復活している所を見れば、新生シンフォギア——後にエクストラ

イブと呼ばれるあの形態が奏者の身体に掛かる負担を大幅に軽減してくれたのだろう

置いてかれた鏡華とヴァン、奏は、決闘の後しばらく人前になかったが、目立った

傷もなく元気な姿を未来に見せていた

特にあれほど血を流し致命傷を負っていた鏡華も全てが完治していた

——しばらくは無茶出来ないけどな

そう言つて髪を切りながら鏡華は笑つていた

そして、鏡華とヴァンの決闘

決闘の勝者は——鏡華

勝者が受け取つた報酬とは——今代の王

そう、後から未来は聞いた。だけど、王とは何をするのか、それは答えてくれなかつた

だけど、それでもよかつた。自分の前に彼はいる。誰一人欠ける事なく帰つてきてくれたんだ

これ以上欲せば、罰が当たると云うもの

全壊とも云つてよいリディアン音楽院は移転する事が決定した。それまでの間、生徒には教師が急ピツチで作成した問題集を渡し、帰省させる事になった。奏者である響、翼は当然ながら、居残る事を決めた生徒——と云つても未来や弓美達ぐらいだが——には宿舍が提供された

再開には、最低でも後半月ぐらいは掛かるそうだ。まあ、政府も非公式に協力しているので再開は時間の問題だった

ふらわーのお好み焼きが大好きだった響と鏡華と奏。響の豪快な食べっぷりを見るのが好きだった詩織は移転の話聞いた時、少し残念そうだったらしい

弓美は移転を好機と考え、新リディアンでアニソン同好会を発足させようとしていた。多分、響や未来、創世や詩織、籍だけなら翼も入るだろう。元々アニソンは好きな方だった鏡華が顧問を務めるだろうし、きつと弓美の同好会設立は上手くいくだろう——きつと

これで、後日“ルナアタック”と云われるようになる月の欠片の破壊から一月程の話は終わりだ

これから語るのは、ノイズの驚異が尽きなくとも人の闘争が終わらない未来を

未だ危機はそこら中に潜み、悲しみの連鎖はどこかで必ず生まれる世界を

明日へ向かい、歩いていく少年少女の一先ずの決着の物語

遙か彼方を目指し——辿り着きし理想郷での物語だ

♪♪♪♪♪♪♪♪

様々な重低音が響く工事現場

ここは新たなリディアン音楽院となる場所

作業員がせつせと機械を駆使して建築してくれていた

そんな作業を、すでに出来上がった校舎の屋上で鏡華は長い後ろ髪を靡かせて見てい

た

相変わらず暑そうなコートを着て、肌を隠している

完全聖遺物に戻そうと王になると結局の所、鏡華の身体に刻み込まれた傷痕が消える事はなかった

まあ、それでもよかった。この傷は呪いなのだ。定期治療によってなくなるまで残っていて欲しかった

「——ここにいたんだ」

後ろからの声に鏡華は作業員から視線を外し、振り向いた

振り向いた先には、制服を着た翼と奏がこちらに来ていた

ちなみに、奏が着ている制服は翼のではなく最近届いた奏用の制服だ

だからと云って、奏がリディアンに通えるかどうかは微妙だったが

「翼。奏も」

「ああ」

「にしても鬱陶しそうですな、その髪。切らないの？」

「切っても切れないんだよこの髪。切ったらすぐに伸びるし——この長さになったらこれ以上長くなる事もないし……諦めた」

カリバーンを具現し首根っこでバサリと無造作に斬り捨てる。斬り捨てられた髪が

風に乗る前に——短くなった髪が元の長さまで伸び、斬り捨てられた髪が粒子のように消えてなくなつた

「……ね？」

「そのよう、だな。奏はどう？」

「あー、あたしはこのぐらいが好きだから切つてないけど、多分、あたしもそうなんじゃないか？」

「どうやら鞆は記録した俺達の最も万全の状態に戻すようなんだよ。《辿り着きし永久の理想郷》発動した時、切らなかつたからなあ。この長さをデフォルトにしちまつたみたいだ」

「……不老不死も、存外面倒なんだよな。悪くないけどさ」

肩を落とす鏡華と奏

そんな二人に苦笑を浮かべる翼

それより、と言葉を連ねた

「用があつて私達を呼んだのだろうか？ 鏡華」

「まあね。正直に言つてしまえば、今回は翼と奏は観客だ。メインは別だ」

「それって……」

そこまで言つた時

出入り口の方から音が聞こえた

三人が振り向けば、そこには――

「お、お待たせしました……！」

「あれ？ 翼さんと奏さんも……？」

未来と響が

二人も制服を着て、鏡華が指定した約束の時間通りに来てくれた

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「~~~~♪」

鼻歌を歌い、クリスは一人でなだらかな山を昇っていた

その手にはバスケットボックスが握られていた

昇り切ると――眼の前には半壊したフイーネの屋敷が姿を現した

屋敷の前には進入禁止のテープが貼られ、黒服が数名見張りをしていた

クリスは立ち止まる事なく進み、黒服の前に立つ。すると、

「お話は窺っています。どうぞ」

「どーも」

テープを持ち上げてくれた

ぶつきらばうに言葉を返し、持ち上げられた箇所から屋敷の敷地へ足を踏み入れる奏者であるクリスは弦十郎の計らいによつて屋敷に入る事を特別に許可されていた。

開け放たれた大扉から屋敷内へ入り、大広間に向かいながら声をあげた

「ヴァーン」

屋敷内にはクリスを除けばヴァン以外いない事は知っていた

声が屋敷に三度反響する頃に、

「クリスカ」

ヴァンが姿を現した

泥だらけの姿にクリスは何してたんだ、と聞いた

「ちよつと……^{グレイブ}墓をな」

「墓?」

ヴァンの先導にクリスは付いて行く

裏口から出た先、一目につかない場所に、ヴァンが言った墓があった

盛つて固めただけの土に太い枝と紐で固定した十字架を刺しただけの簡素な墓。そ

れが七つ

「これって……」

「四つは俺達の両親の墓。二つはジャンとエドの墓。一つは——フィーネの墓だ」
「フィーネの？ でも……ヴァン、フィーネの事が」

「ああ。大嫌いだ。根底は変わらない」

だが、とヴァンは言葉が続けた

フィーネがああ地獄から救ってくれたのも事実だ

八年前、戦火に巻き込まれた団体は半分以上が捕虜になった

助かったのは——ヴァンとクリスだけ

皆殺しの憂き目に遭った——どちらも

脱走の計画を立てたヴァンが自分達を捉え、家族を、仲間を殺した奴らを皆殺しにしたのだ

護身術として教わっていた短剣一本で

それから三年間、弦十郎の部下が発見するまで、雑草を食べ、泥水を啜り、盗みを働いて生きてきた

その部下も怪しかったから殺したのだが

それを見てフィーネに憑依されていた了子が自分達を拾ったのだ

甘い言葉をクリスに囁いて

「あいつは利用するためだったとは云え、俺達に着るものを与えてくれた。腹一杯の食

料を与えてくれた。戦う術や力を与えてくれた」

「そうだよな。それに、何だかんだ言ってこれを奪う事もしなかった」

胸にぶら下がるギアのペンダントにそっと触れる

頷くヴァンも触れようとして、手を止めた

自分のペンダントはもうなかった。完全聖遺物を所有した時からどこかへ云ってしまつたのだ

ヴァンとクリスは少し間黙禱を捧げ、その場を後にした

土で汚れた手を洗い、二人は景色の良い小高い丘にやってきた

黒服は来ていない。彼らの仕事は屋敷の見張りだからだ

クリスがバスケットボックスを開け、サンドイッチを取り出してヴァンに渡す

「ん」

「サンキュ」

嚴重に布で封したエクスカリバーを脇に置いて受け取り、頬張るヴァン

無表情で食べるヴァンを横目で見て、クリスも自分のを取り出して食べ始めた

「なあヴァン」

「何だ？」

「これから、どうすんだ？」

「これから？」

飲み込んで鸚鵡返しに聞く

「あいつらはあたし達に良くしてくれるけど……そのまま受け入れていいのかな……？」

「……そうだな」

もう一個取り出して頬張ったヴァンは地平線の彼方に眼を向ける

食べ切ると、自分なりの答えを口にした

「いいんじゃないか。一先ずは」

「一先ず？」

「風鳴弦十郎に聞いたが、奏者として働けば少なからず給金が出るらしい。しばらく溜めれば夢の足掛かりになる」

「まあ、そうだな」

「ついでにクリスに友人も出来て一石二鳥だ」

「ばっ……！ と、友達じゃねえよ！ あいつらは、その……利害が一致してる仲間と云うか……」

顔を真っ赤にして語尾がしぼんでいくクリスにヴァンは笑う

クリスは正直じゃないだけで根は優しい少女だ

否定はするが、全否定だけは出来なかつた

———こう云う性格の女の事をなんて呼ぶんだっけな

「そ、そういうヴァンはどうなんだよ！ 遠見鏡華や天羽奏と仲が良いじゃねえか！」

「あいつらは下手な大人より信頼するに値する奴らだからな。もつとも、風鳴弦十郎や緒川慎次は信用程度だが」

「信頼と信用つて一緒だろ」

「違うな。信用は『信じて用いる』。信頼は『信じて頼る』なんだ」

「……………？」

首を傾げるクリスを、ヴァンは優しく撫でる

「いつかクリスにも分かる時が来る」

「そ、そっか…………。つて、いつまで撫でてんだよ！」

「いつまでも」

「ツ…………好きにしろっ」

頬を赤く染めそつぽを向いてサンドイツチを齧るクリス

ヴァンは、「好きにさせてもらおう」と言つて撫で続けた

恥ずかしかつていたクリスだが、その表情は気持ち良さそうに変化していた

「そう云えば」

「ん？」

「今日だったな。答えを出す日」

「答え？」

「遠見が小日向未来の告白に答える日」

「へえ。どんな事になるのやら」

「実は昨日、偶然小日向未来に会ったから聞いてみた」

「何て？」

「フラれたらどうするんだ、と」

「何て返ってきたんだ」

ヴァンは未来の言葉遣いで返答を紡いだ

クリスは驚いたが、すぐににやつと笑うと、

「流石はあの変スクリーンボール 人の親友を名乗るだけあるぜ」

「まっただくだ」



風が靡く屋上

そこで三人と二人が対面していた

鏡華を先頭にした翼と奏

未来が前の響

「おはようございます。鏡華さん」

「ああ、おはよう小日向。それに立花」

響は頭を下げるだけにしておいた

「髪、長くなりましたね」

「まあな。これからはこれが俺のデフォルトだ」

「似合ってますよ」

「はは、サンキュ」

他愛のない話

だが、いつまでも話を逸らしてはいられない

「いつかの返事、考えてきた」

「そう、ですか」

鏡華が真剣な顔で言う

それに小日向も表情を改めた

「それじゃあ、聞かせてください。ちよつと、恥ずかしいけど」

「ああ。悪いな。普通は二人つきりで言うもんならうけど、俺達は結構歪んでいるからな」

「構いません」

最後の戦いが終わって、鏡華は一人で考えていた

鏡華は一度息を吸い、ゆっくりと吐くと、未来に向き直った

「小日向の事は、多分、好きだと思うよ。この三か月で色々魅力的な所も見つけた。このままいけば本当に異性として好きになっていたと思う。けど——やっぱり小日向と付き合う事は出来ない」

「……理由を聞いても、いいですか?」

震えるのを精一杯抑えた声で、未来は訊ねた

「小日向と付き合う以前に——俺は翼と奏が好きなんだ。翼と奏と付き合いたい。多分、俺達の関係は歪な、世間じゃ認められない関係だと思う。けれど俺はそれで良いと思っっている。歪でもいい、偽物でもいい。俺達が真剣ならそれでいい——とね。だから、小日向とだけ、一対一の恋人にはなれない」

最後まで、言い切った。否定の言葉を

響には努力はする、と言った。だけど、やはりこれしか答えが出なかった

「……分かりました」

未来は震えていなかった。落ち着いた声で呟く
「だけど、次の瞬間、」

「あーあ、やっぱりフラれちゃった。予想はしてたけど、やっぱり胸が痛いです」
そんな風に笑った

てつきり落ち込むのかと思っていた鏡華は驚く

それは翼と奏も、そして響も同じだった

「あ、あの、小日向さん？」

「鏡華さん。私が何て翼さんに宣戦布告したと思います？」

「え？ えつと……翼？」

「ええと——勝てなくても負けません、だった」

戸惑う鏡華に、翼も戸惑いながら答える

「はい。勝てなくても負けません。だから——妥協案ならぬ修正案を提案します！」

「し、修正案？ 妥協案？ どっち？」

「鏡華さんの話を聞く限り、鏡華さんは私の事を異性として見てくれてたようですね。思った以上の言葉が聞けて、嬉しいです」

「や、あの……」

「マズい——マズいマズいマズい！」

鏡華の直感が警報を鳴らしている。警鐘なんかガンガン打ち響いている。

前門の狼、後門の虎（間違っている？ 今はそんな事言ってる場合じゃない！）以上にマズい！

前門の暴走響、後門の弦十郎、左門のネフシユタン纏ったファイーネ、右門になんておぼさんて呼ばれ青筋立てた了子おぼさん、天空には黙示録の紅い竜！

簡単に云ってしまえば——逃げ場など、どこにもなし！

「鏡華さんは私の事、好きだと言いましたよね？ 魅力的な所もあつたと。本当に異性として好きになっていたとも。しっかり、この耳で聞きました。そして、私と付き合えないの是一对一とだけ。つまり！ 私は翼さんと奏さんと同じ恋人関係にはなれると云う事です！」

「……………!!」

——し、しまったああっ！

そういう抜け道があつたのか！ 見落とした！ つーか気付かなかつた！
勝たなくても負けませんとはそう云う事だったのか！

どうだこの作戦！ とか言いそうな未来の笑顔に本気で頭を抱えそうになった

（なにこの子！ 了子おぼさん以上の策士じゃん！ ラスボス？ いや、裏のラスボス
クラスだよね!!）

「どうですか？」

「い、いや、それは——ほら、翼と奏が……」

「先着順とか云つたら、世界中で同じ恋をしている人達を否定する事になりますよ」

「世界中の歪な恋人達人質に取られた!？」

「それに、翼さんと奏さん、両方を好きになつてゐる時点で一番とか二番とかなくなつて
ます。なら、私が入つても問題はないはずですよ！」

「それは、まあ、そうなんだけど——」

言葉に詰まつてしまう

未来を言葉で言い返せないでいると、

「くっ——くはははは！ あははははは！」

奏が笑い出した

腹を抱えて床をごろごろ転げ回つてゐる

「す、すげえ！ あの未来が、内気だった未来が、ここまで鏡華を言い負かすなんて！

あははははは！」

「か、奏……」

「はあー、笑つた笑つた。——あたしに異存はないぜ。鏡華、据え膳食わぬは男の恥
だ。未来も入れちゃえよ」

「だ——駄目に決まっているでしょっ!」

反論したのは翼だった

「こ、こういうのは先着順だ! うん、早い者勝ちなんだ。恋人の枠には私と奏がいるんだから、もう無理だろう!」

「翼さん、常識的に云えば、恋人の枠は一つです。よって、枠組みは翼さんと奏さんの二人がいる時点で壊れちゃってます。それで先着順を主張するのは無理があります!」

「くっ……ならば、鏡華が付き合えないと言ったのはどう説明するんだ!」

「鏡華さんが付き合えないと言ったのは、一対一だけです。それ以外は否定してないの
で、良いと云う事です」

「ッ……!」

「もう、やめようぜ翼」

横から止めに入る奏

翼は情けない声で「奏え」と呼んだ

「まあまあ、落ち着きなよ翼。それに、あたしだってタダで交際を認めようなんて言っ
ないさ」

「え……?」

「未来。そこまで言うからにはあたし達と勝負する気はあるんだろうね」

「当然です。証明なくして認められはしませんから！」

「その意気や良し。んじや、勝負方法はどうしますかね……」

うんうん唸り、天を仰いで考える奏

しばらくして、ポンと手を打った

「じゃあ、修業期間を設けた後、翼との家事三戦勝負とするか」

「望む所です！」

「ちよつと待つて奏！ それでは明らかに小日向が有利だろう！ それに奏はしないのか?!」

「あたしは認めてんだもん。やつても意味ないさ。翼もこれを機を家事レベルひいては乙女レベルを上げようぜ」

「無理だつ！ 奏も知ってるだろう、小学校から私の家庭科の成績は一なんだ！」

「未来ー、恋人の仲間入りを果たしたら鏡華の昔の頃の写真を見せてやるよ」

「本当ですか？ 嬉しいです！ 奏さん」

「ノンノン。これからは奏お姉様って呼ぶように」

「はい！ 奏お姉様！」

「話を聞いてくれーっ!!」

女子だけで盛り上がる中、置いてけぼりにされた鏡華は呆然とそれを見ているしかな

かった

ハツと我に返ると、止められない三人ではなく、同じく呆然としていた響に詰め寄つた

「立花！ どうにかしてくれ！ お前の親友だろ!？」

「……そうですね。私、未来の親友ですもんね」

「だろ！ なら——」

「遠見先生」

「は、はひっ!？」

「未来を泣かせたら——暴走しちゃうぞ」

「——」

味方が一人もいなくなった

脅されて、鏡華は掠れた声で、「はい」と呟くしかなかった

♪♪♪♪♪♪♪♪

ノイズの驚異は尽きる事なく、人と人が争う事もまた尽きる事はない

それでも——

少年少女は欲しかった理想郷を一時であれ、手に入れた

以前より想い描いていたような幻想郷ではなかったのかもしれない

絆を取り戻したかった少年は、人を辞め、新たに歪な絆を手に入れた

一振りの剣は、過去から解き放たれ、剣でありながら人に戻った

険の開かなかつた眠り姫は、人を捨てる事を強制されて目覚めの時を迎えた

一先ずの終焉を迎えた彼らに与えられたものは、十全たる幸福ではなかったのかもしれない

だけど、嘆き、悲しむような絶望でもなかった

結果だけを見て、述べてしまえば——これでよかつたのだろう

きつと、十全——完璧な幸福など、誰にも与えられない泡沫の空想なのだ

決して届かぬ空想を夢見て、もがき、足掻き続け、その時点で最善で最良の幸福を手に入れる

それが人の人生。それが——遙か彼方の理想郷へ歩む人の生き方

——これにて、彼らの物語の幕を閉じる

だが、忘れる事なきように

この物語は、彼らの長く、されど短い人生を鮮烈に彩る人生の一ページ、第一楽章にしか過ぎない

遠見鏡華の——風鳴翼の——天羽奏の——

立花響の——小日向未来の——

夜宙ヴァンの——雪音クリスの——

風鳴弦十郎の——緒川慎次の——その他大勢の——

第一楽章が終わったのなら、第二楽章が始まる

そう、彼らの人生の終わりは、理想郷よりも遙か彼方なのだから——

Part o s s i a 幸せのカタチ

結婚とは女の最高の幸せ——らしい

どこかの雑誌や漫画で書いていたのを、鏡華はうろ覚えだが頭の片隅に残っていた。生憎と鏡華自身は男だったので最高の幸せかどうかは分からなかったが、好きな人と結ばれるのは嬉しい事だ

ただ——鏡華は、自分を好きと言ってくれる彼女“達”に最高の幸せは贈れない。日本は重婚禁止の国の一つ。好きな人の中に重婚可能な国の人間がいれば、外国でなら認可されるのだが、鏡華を含めて全員が生粋の日本人だ。重婚は不可能である。では、どうすれば鏡華は彼女達に最高の幸せを贈れるのだろうか——

「——で？ 何故、そんな事を俺に話す」

呆れたようにヴァンは問い返す

持っていたグラスの中で氷がカランと踊った

「いや、相談出来る男がお前しかいなくて……」

「二課内に男はいるだろう」

「全員、恋人がいねえんだよ。つか、二課って独身率が高いんだよな」

藤堯はオペレーター能力は高いのだが、こう云う事に関しては何タレそうだし、緒川は仕事が恋人。唯一、了子とデキても良かった弦十郎もない。もちろん、所帯持ちの職員はいるのだろうが、知り合いの職員にはいなかった

「その点、ヴァンは雪音がいるだろう？」

「俺とクリスはそんな関係じゃない」

「だけど好きだろ？」

「ああ」

「ならそれでいい。頼む、アドバイスかなんか、適当でもいいから教えてくれないか？」

両手を合わせて頭を下げる鏡華

拝み倒されるのが鬱陶しいヴァンはグラスを置き、

「分かったからその姿勢をやめろ。——だが、俺も貴様らのような関係に詳しい訳じゃない。それでもいいのオーケイか？」

「ああ、それでいい」

「ふむ……一応、海外で貴様らのような一夫多妻家族は見た事があった。俺の父親が率いていたNGO団体のメンバーの中にも、そう云う関係になって海外に残った人はいた」

「おお」

「だが、海外だけだ。日本国内ではバレル可能性だつてあるからな」

「つまり、やつぱ海外に籍を作らなきゃ駄目つて事か」

「国籍を作れるのかは知らん。それに、貴様自身も言つたろう。重婚可能国籍を持つ女を見つけたなきゃいけない、と」

「それは無理だ」

即答する鏡華

「これ以上他を作る事は出来ない」

ハーレム主義じゃないのだ鏡華は。ただ、選べなくてこうなつただけ

「では諦めるんだな。だいたい、婚姻届さえ出さずに式だけ挙げればいいだろう。まあ、

尤も——^{アイドル}人気者を嫁にだなんて、大スキヤンダルで済めばいいのだが」

「……一番の問題はそこなんだよな」

ツヴァイウィングは現在、日本国内でナンバーワンに近いユニットになりつつある

一月後かそこらには最近世界中を賑わせている海外のソロシンガーとのコラボも企画されているくらいだ

そんなユニットがスキヤンダル——確実にとんでもない事になりそうだ

「はあ——これじゃあ、結婚とかは当分先になりそうだ」

「ま、諦めろ。貴様には無限に近い時間があるのだからな」

「……………」

「それより——だ」

そう言つて真剣な表情を見せるヴァン

自然と鏡華も表情を引き締める

「俺も遠見に教えてほしい事がある。相談に乗つたんだ、こちらの話も聞いてくれ」

「あ、ああ。俺が知つてる範囲ならいくらでも相談に乗つてやるよ」

「サンキュー助かる。実は——」

重ねた両手に額を乗せ、ヴァンは言つた

「指輪つて、どうやって渡せばいいんだ？」

「……………」

「いや、本当にどうすればいいんだ？ 誕生日を勘違いして渡せばいいのか？ それと

もそれとなく？ いや、雰囲気が大事だと聞いた事があつたな。どこか景色の良い場所

で真剣に告白して渡すのがベストだろうか。ああ、人前で言うのも祝福を貰えていい

か。——なあ、どうすればいい？」

「まずは落ち着け」

ヴァンも意外と緊張する事があるようだ

珍しい一面を見た鏡華だった



何でも、ヴァンはクリスに指輪を渡すつもりらしい。別に結婚指輪と云う訳ではないようだ

俗世間に疎いヴァンにとって、普通の渡し方が分からないようだった

鏡華は一先ず、「良い雰囲気になつたら渡せば？」と言つておいた

正直、鏡華も渡し方など知らない。その場になつたら自然と渡せるんじゃないかね？ とか思っているのだ

あてもなく、復興が進んでいる街をぶらぶら彷徨う

ツヴァイウィング復活の際、堂々と登場した鏡華だったが、やはり世間の眼はツヴァイウィングに向けられており、鏡華の顔を覚えている人は少ない

こうして変装せず歩いて、声を掛けられる事もない

小一時間程、歩いた鏡華が辿り着いたのは——ふらわーだった

建物も看板もぼろぼろだったが、店内には明かりが灯っていた

(そーいや、最近はロクに来てなかつたな)

ちようどいいや、と鏡華は開け放たれた扉から店内に入った

中では、包帯を頭に巻いたおばちゃんが皿洗いをしていた

わずかに部屋の奥から物音が聞こえたが——ま、気のせいだろう

「いらつしやい——おや、鏡華君じゃないかい」

「ちわつす。お久し振りです」

「本当に。ここ一か月ぐらい、何してたんだい？」

「んー、後片付け……ですかね」

本当は、事後処理、と云うのが正しいのだが

ただ、おばちゃんはそれで「家屋の片付けか何か」と勘違いしてくれた様で、そうかい、とだけ返した

鏡華が一番近いカウンター席に座る

おばちゃんは洗い物を変わらぬペースで済ませ、普通のでいいかい？ と聞いた

お願いします、と鏡華

無言の時間が続く。しばらくして、肉や生地が焼ける匂いと音がフラワーを包む

「なあ、おばちゃん」

「何だい？」

「おばちゃんって結婚してんの？」

唐突に鏡華が訊ねる

おばちゃんにも突然だった様で、腕が止まっていた

「何だい藪から棒に。そりやあしてたよ」

「旦那さんは……?」

「もうずつと前にあの世であたしを待つてるはずだよ」

「すみません」

一度も見えてない時点で察するべきだった

自分の事ばかり考えていた鏡華は即答する勢いで謝った

「何年も前の話さ。気にしなくていいよ」

「……はい」

「で、それがどうしたんだい?」

「……………」

ここで鏡華は少し口を閉ざした

自分の交際関係を言うべきか、迷ったのだ

だが、結局は言う事にした

この人なら、自分達を避けたりしないと信じて

「実は——俺、今、三人の女子と付き合ってるんです」

「——」

ピシツと

おぼちゃんの身体がさつき以上に硬直した

お好み焼きはちようど皿に乗せた直後だったので焦げる事もなかった

「それは……三股つて奴かい？」

「あー、いえ、三股は三股で間違つてないんですけど……」

一先ず、これまでの事を簡潔に話す

もちろんシンフォギアの事は内密にしたまま

話の途中までは真剣だったおぼちゃんだが、未来が告白したくだりになると、途端に吹き出した

「あの子がそんな事を言ったのかい！　はは、そりや凄いい」

「笑い事じゃないっスよ……」

「それで、翼ちゃんと奏ちゃんに加えて、未来ちゃんとも付き合いだした訳かい」

「小日—— 未来の論理は間違つちやいませんでしたからね。奏もすつかり乗り気で、立花も付き合わないと俺を殺る気満々だったし——」

小日向、と名前で呼びそうになり、頭を振つて名前で呼び直す

—— 恋人なんだから名前で呼んでやれよ！　つか、呼べっ！

と言つた未来——ではなく、奏。未来が言っていたら、きつと翌日は槍が降つてい

ただろう。いや、真面目に

それから、今度は結婚と指輪、プロポーズについて話した

「まあ、まず婚姻届は提出出来なさそうだね。結婚式は身内だけならなんとか」

「やっぱり……そうっすよね」

「指輪については……ま、アクセサリーでいいんじゃないかい」

「うーん……」

とは言ったものの、翼と奏にはギアのペンダントがあるし、ピアスはちよつと邪魔になる

未来はまだ学業があるので凝った物はあげられない

「でも、一番大切なのは、式とか物じゃない。度胸さ」

「ど、度胸っすか?」

「そうさ、度胸さ」

それから、鏡華はおばちゃんの結婚までの道のりを聞くハメになった

どうやらおばちゃんは、お見合いの席で旦那さんと出会った様で、その旦那さんには他にも候補はいたらしい

だけどそこはおばちゃんの云う度胸とやらで旦那さんの愛と隣を手に入れたようだから数十年前、おばちゃんと旦那さんはこの場所で、ふらわーを切り盛りしてい

た。ノイズが旦那さんを殺すまでは

「辞めたい、とか思わなかったんですか？」

「あの人が死んだ直後は思ったさ。けどね、逃げたつて後悔だけが後を追い掛けるだけだつて教えてくれた人がいてね、むしろこの店を続けていれば、あの人にもう一度会えるんじゃないかつて思えたんだよ」

「強いんですね」

鏡華の言葉に、弱いだけさ、と苦笑を浮かべるおばちゃん

「まあ、これくらいかね。あたしが言える事は」

「ありがとうございます。あいつらに言う時の参考になりました」

「そうかい。そりや良かったよ。なら——早速言つておやり」

「……………」

不思議そうに首を傾げ水を飲む鏡華

おばちゃんは部屋の奥に視線を送り、

「ほら、出ておいで」

そんな事を言った

途端、ぞろぞろと出てくるわ出てくるわ

買物に出掛けていた翼と奏、響と未来、そしてクリスが——

「ぶーっ!!」

当然、鏡華は飲んでいた水を吹き出した

それはもう、盛大に外に向かって吹き出すのだった

~~~~~

「おばちゃん……ひでえ」

「あたしは何も知らないよ。この子達は勝手に隠れただけだし、鏡華君が勝手に喋っただけだからね」

ぐうの言い様もないとはまさにこの事だろう

入った時に聞こえた物音は彼女達の音だったのだ

かなり恥ずかしい気がして、鏡華は思考を停止、机に突っ伏した

「つか、何で隠れてた……」

「いや、鏡華を脅かそうとして……」

「そんなびつくり要素、日常には求めてない」

「そっかー。鏡華は自分の部屋に裸のあたしがいるびつくり要素もいらなわけですか？」

「うん。 いらぬい」

「おろ？」

てつきり、それは別腹だ、だとか何とか言ってくるのか思つてた奏は首を傾げる

その代わり、突つ伏した鏡華はとんでもない爆弾発言を投下した

「そんな恰好の奏がいたら確実に、にやんにやんタイムに直行して次の日まで抱き続けると思つから」

「……………」

とんでもない爆弾に、全員の思考が停止した

そう云つた事に疎い気がしたクリスでさえも顔を真っ赤にしてる

「ちよ、ちよつと鏡……………」

「別に欲求不満つて訳じゃないですよ？ ただ、目の前にそんな恰好の恋人がいれば、誰

だつてプツツンするはずですよ」

「しつかりしろ、鏡華！」

眼の前で手を叩く翼

それでどうやら思考を回復させた鏡華は、顔を上げた

「ああ、翼……………」

「正気に戻つたか？」

「翼までそんな事しないでよ？ 流石に二人纏めてなんて……歯止めが利かないよ」  
 「いい加減、眼を覚ませ——！」

翼の全力の拳は

—打ッ！

しかと鏡華の脳天に直撃し——床に叩き付けた

防御もせずモロに喰らった鏡華は、頭を強打し——暫し、眼を回すのだった

最後に鏡華が言った言葉は、

「ヴァンよお……やっぱ、その渡し方はないぜ……」

と、至極的外れの物だったと云う

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

鏡華が眼を覚ましたのは、風鳴の屋敷だった。それも自分の部屋

酷く頭が痛かった。直後の記憶もトンでいるらしく、翼達が出てきた所までしか覚え  
 がない

「何やらかしたんだ俺……？」

そう言いつつ、着けたまだだった手袋を外し、服を脱ぐ。包帯はどうしようか迷い、仕

方なく放置してタンクトップを着た。髪を頂点で結び、ポニーテールに部屋を出ると、屋敷内はとても静かだった

外を見れば真つ暗になっていたので、少なくとも数時間は眠っていたようだ  
廊下を歩き、居間に入った鏡華を待っていたのは――

「か、奏、やつぱり……この恰好は恥ずかしいよ!」

「だ、だよな。流石のあたしもそう思う」

「奏さんでも恥ずかしい事あるんだ……」

翼と奏、未来がバニーガールの恰好をした

しかもタイツを穿く前だったのか、剥き出しの足が眩しかった

何故、どうしてそれを着る事になったのか――

そこで、思い至った。あれ、もしかして消失した記憶が原因?

三人の姿に見蕩れていると、未来が鏡華の存在に気付いた

「き、鏡華さんっ!?!」

「ツ……!」

「へう!?!」

奏が珍しく、素っ頓狂な声をあげる

あの奏が恥ずかしがる所なんて始めた見た

まあ、一先ずは——

「何か——すみませんっ」

その場で土下座した

三人も固まる。鏡華も土下座の姿勢で固まる

「あ、えつと……鏡華。何で謝る？」

「いや、そんな格好してんのって、もしかしたら俺の発言が原因かもしれないな——って思っています」

「ああ、うん。確かに、鏡華の発言が原因だ」

「やっぱ俺そんな事を言ったの!？」

「……覚えてないのか？」

「何か頭が凄く痛いんだよ。そのせいか、翼達が出てきた所までで記憶が終わってんだ」  
「……………」

奏と未来の視線が痛い翼だった

だが、翼は、

「そ、そうか！ きつと何かとぶつかったんだろう！ 鏡華はドジだなあ！」

誤摩化す事にした！

当然、気付かない鏡華は、そうか。ぶつけたのか、と納得していた

「とにかく、部屋から出るから服に着替えたら？」

「あ、ああ。そうだな」

「あ、待てよ鏡華」

出ていこうとする鏡華を引き止める奏

「こ、この姿に何かよからぬ事、考えないか？」

「よからぬ事？」

「ええと……例えば、よ、欲情する、とかです」

「……………」

鏡華は無言だったが、部屋を出ていく際、ぽつりと、

「するに決まってるじゃん」

と、言ったのを三人は聞き逃さなかった

部屋を出てくと、すぐに三人は顔を寄せ合い、密談を始めた

「や、やはりさっきの言葉は、無意識で言ったのではないか？」

「かもな。大体、だつ……！　こほん、にやんにやんタイムなんてヘタレの鏡華には無理

だぜ」

「……………奏さん」

「何？　未来」

「実は奏さんって——ピュア？」

「ぶっ」

「え？ そうなの奏？」

「今、抱くつて台詞をにやんにやんタイムって言い直しましたし……」

「あ、あうあう……！」

「どうやら小日向の指摘はあながち間違いではないようだ。奏が動揺している所なんて私は初めて見たぞ」

「昔つてお風呂とか覗かれました？」

「ああ、あつたな一度だけ。その時は奏が桶を投げて追い払ったが……そう云えばその時も動きが早く、顔が真っ赤だったような……」

「も、もういいだろ!? 過去の話ですぜ!? それより、早く着替えようぜ！」

話を切り上げ、バニーの服(?)を脱ぎ捨てる

その時だった。扉の向こうから声が聞こえてきたのは

『だからちよつと待てつて旦那! 居間には入れないんだつて!』

『何故だ? 別にエロ本があつたつて咎めはせんぞ。むしろ見せてみる』

『いや、エロ本より過激つつか——とにかく入らせん!』

『む。そう言うからには入れさせない覚悟はあるんだろうな?』

『じ、上等だ！ 居間に入りたければこの俺を——』  
『ふん！』

鏡華の叫び声は最後まで続かなかつた

旦那から察するに弦十郎だろうが、彼の気合い一発の声と共に廊下と居間を仕切る襖が外れ、鏡華が吹き飛んできた

ごろごろと転がり、鏡華は火傷する勢いで背中と頭を畳に擦り、眼を開けた先には――

「……………へ……………？」

「あ……………あ……………」

裸の奏がおり

詰まる所、裸姿の奏を真下から見上げる恰好になっていた

そして、

「きやあああああ——っ!!」

奏が乙女らしい悲鳴をあげるのを初めて聞いたのだった

## Part o s s i a 幸せのカタチ2

黄昏時を過ぎた風鳴の屋敷。その部屋の一つ、鏡華の部屋

部屋には三人の女子と一人の縮こまった男子がいた

「ひつく……えぐ、ぐすん……見られた。鏡華に全部見られたあ……」

泣いているのは、誰であろう奏

いつもの様子では想像も出来ない奏の姿に、ますます鏡華は身体を縮める。同時に可愛いなと思ってしまうのは記憶の底に封印した

そんな奏を抱きしめて慰めているのは、普段は逆の立場である翼。未来も隣に座って慰めている

「奏。鏡華だつて悪気があつて見た訳じゃないんだ。叔父様から見せないようにした結果がああなつて……」

「そ、そうですよ。それに、司令には後で私と翼さんがキツク言っておきますからー」

ちなみに、鏡華を吹き飛ばした原因である弦十郎は翼と未来に怒られてへこんでいる一応、彼なりに罪悪感はあるのだろう

「それでも、鏡華に見られたのは変わんねえよ……」

「いや、それはそうなんだが……」

翼も困った様子で言葉を紡ぐ

マズい。何がマズいのかつて——こんなに落ち込む奏は初めてなのだ

対処法が分からないでいた

仕方ないので、

「鏡華」

「あんですか？」

「鏡華が蒔いた種だ。鏡華が何とかしろ」

「はあ!？」

「ああ、ついでだ。小日向を送ってくるから、任せたぞ」

「へっ? え、ええ?」

人に任せて、逃げ出した!

ついでに未来も引つ張って部屋を出てく

取り残された鏡華は閉じられた扉を見ていたが、再び開けられない事を悟ると背後を

振り返る

振り返れば、同じように絶句してぽかんと口を開けたままの奏が扉を凝視していた

「逃げた……」

「ああ、逃げたな……」

「翼が、あたしから逃げた……」

「俺も逃げられた。あれ、後でお仕置きするのが一番いいよな」

「明日、翼が着る服はスク水だけだ」

「バニーにしない？ スク水探すの面倒」

そうだな、としょんぼりする奏

言葉数が減ってしょんぼりする奏を見て、鏡華は苦笑を浮かべて立ち上がった

歩くとバレるので、鏡華は《遙か彼方の理想郷・応用編》を発動。瞬間に奏の後ろを取っていた

驚く隙を逃さず、鏡華は優しく奏を抱きしめた

「ッ……！」

「悪かったって。んな恥ずかしがるなよ」

「は、裸見られたんだ。誰だって恥ずかしがるわ！」

「ま、そうなんだろうけど」

首に両手を回し、赤髪に顔をうずめる

ふんわりとした感触にふわりと鼻腔をくすぐる良い匂い

「何してんだよ鏡華」

「んー、良い匂いだなつて」

「あたし達の自慢の彼氏が変態になった……!」

「うおい! 誰が変態だ! 誰が」

「遠見鏡華。あたしと翼と未来の彼氏。三股、ハーレム三昧のソングライター」

「ごめん、それ以上やめて。俺が泣きそう」

半ば泣き声で言うと、奏はやつと笑つてくれた

思わず鏡華も笑つて抱きしめる腕に力を籠める

「まー、なんだ。本当にごめん」

「いいよ。鏡華だから、仕方ないから許す」

「そりやどうも。俺に出来る事なら命令一つ聞くけど?」

「じゃあ、もちつとだけぎゅつと」

「もちつとつていつまで?」

「んー……んじゃ、翼が帰つてくるまで」

「仰せのままに」

鏡華は奏を自分の元へ引き寄せせる

奏もそれに逆らわず、むしろ背中を預けた

それから、鏡華と奏は取り留めない会話で盛り上がった

他愛のない会話はずっと続いて、そして――



「まったくもう。いきなり連れ出すなんて酷いです」

「すまない。他に良い言い訳が見つからなくて。……だが、立花も待つてる事だしちよ  
うどよかつたんじゃないか？」

「それはまあ、そうですね……」

複雑そうな表情を浮かべる未来

翼と未来は弦十郎の運転する車の後部座席に座って、宿舎に向かっていた

もちろん指示したのは翼。奏に辱めを与えた罰なのだそうだ

「だけど、まさか奏さんがあそこまでピュアだなんて初めて知りました」

「ああ、あれは私も驚いた。奏、私にはセクハラ紛いの事はしてくるのに、自分は乙女  
だったんだな」

「乙女って……」

翼の言い方に苦笑を覚える未来

「だってそうだろう？ 人にはセクハラ紛いの事をしてくるのに、自分は裸を見られた

だけで泣いてしまう。乙女と言う以外何と呼ぶ」

「は、はあ。後、翼さん。同じ事二回言ってます」

「む……」

思わず口を閉じる翼

すると、口を開いたのは意外にも運転席にいた弦十郎

「奏の両親は娘を溺愛してな、自然とそういう教育を受けてたんだろう」

「英才教育とかお嬢様教育、と云うアレですか？」

「表現としちゃあ間違っていないな」

だからか、と納得する翼

そうこうしている内に、宿舎の前に到着した

未来だけ降り、窓を開ける翼

「それじゃあ、また明日。立花によろしく言っておいてくれ」

「分かりました。司令もありがとうございます」

「うむ。お休み、未来君」

「はい。あ、翼さん。奏さんの事ですけど……」

「なあに心配はいらん」

未来の質問意答えたのは翼ではなく弦十郎だった

「鏡華の事だ。どうせ、すぐに仲直りして仲良く乳繰り合ってるだろう」

「……翼さん」

「了解した。叔父様、早急に戻ってください。嫉妬と云う銘の刃が鞘走る前に」

「はっはっは。ああ。それじゃあな未来君」

笑い声で返した弦十郎はそう言つて車を反転させて、元来た道に戻っていく

未来はふうと笑みをこぼし、宿舎に入っていくのだった

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

帰宅した翼が鏡華の部屋で見たのは

ベッドに入つて規則正しい寝息を立てている鏡華と奏の姿だった

まさか、と不安が頭をよぎり、音を立てずに近付いて掛け布団をめくつてみると

服は着たままだった

勝手に大人の階段を昇ってくれなくてほつとする反面、羨ましいと云う気持ちも涌き

上がる

と、よく見れば、奏が鏡華の腕を枕にしている反対側——逆の腕が空いているでは

ないか

恐る恐る掛け布団をめくり、空いている場所に自分を潜り込ませる

その瞬間——鏡華の睨が開いた

「ひゃっ！」

声を出しそうになって、どうにか押しとどめる

が、ちよつと漏れてしまったようだ

瞳だけが翼を捉える

「ああ、翼か。お帰り」

「た、ただいま」

「で、どうして俺のベッドに乗って、俺の腕を奏みたいに枕にしようとしてるの?」

「だ、駄目なのか? 奏は良くて私は駄目なのか!」

上目遣いにちよつと涙眼の翼に、鏡華は首を横に振る

「いや全然。だけど、ちよつと待つて欲しいかな」

そう言うと、ゆつくりと奏の頭の下にあつた自分の腕を引き抜く

両腕が使えるようになると、手が届く場所に置いてあつた紙とペンを取り、薄暗い中、

何かを書き始めた

「何を書いているの?」

「新しい歌詞。寝てたら思いついたから今の内に書き留めてんの」

「そうか。……出来たら、私と奏に歌わせてくれ」

「んー、どっちかかって云えば、これはユニットよりも翼だけの方が映えると思うんだよな。和風ロックだから」

「そ、そうか」

手早く済ませ、紙とペンを元の場所に戻す

「さて、と。それじゃあ寝ますか」

布団に潜り、鏡華は奏を抱き寄せる

「な、ななな何を……!」

「ほら、翼は俺の反対側に来て」

「……? うん」

言われた通り先程まで奏が寝ていた位置で身体を横にする翼

翼の手を掴んで引つ張り奏を抱きしめているような位置に置く

「……まるで、奏が私と鏡華の娘みたいな光景だな」

「みたい、じゃなくてそれを表現してみたんだけど。起きた奏が驚くのが眼に浮かぶな」

「まったく……」

とか言いながら案外満更でもない様子の翼

自分から最適な位置に手を置き換える

「お休み鏡華」

「ああ、お休み——お母さん」

「ッ、言うな——お父さん」

言い返してやったが、鏡華は笑みを浮かべてさらりと受け流した

そのまま夢の世界へ誘われる

仕方がないな、と思いつつ翼も瞼を閉じるのだった

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

早朝、奏は眼を覚ました

誰よりも早く寝てしまったのだ。一番早くに起きるのは当然だろう

目が覚めて——自分が置かれている位置に気付いた

「どう云う事だ？　これ」

片や鏡華の身体が

片や翼の身体が

奏の身体を包み込んでいる

「どうやら、寝ている間に体勢を変えられてこんな寝方になっていたようだ

「だけど——存外、悪くないな。こう云うのも」

奏に両親の記憶は残っていない

記憶喪失とか、幼かったからではない

上書きされたのだ。ノイズが両親や他の人間を殺した時の記憶によって

あの時の記憶は鮮烈に奏の網膜から脳内に、昔の記憶を上書きしてまで焼き付いた

だから——新鮮で、嬉しかった

「なあ、翼、鏡華」

未だ眠り続けている二人の頬をそつと撫でる

「いつまでも、それこそ一生、あたしと一緒にいてくれるか?」

奏は独りぼっちが一番怖かった

独りだと何も出来なくなる。自分が自分じゃなくなりそうな錯覚に陥る

翼を独りにしてしまった自分にこんな事で怖がる事など許されないかもしれないが、

「あたしは——世界があたし達を見捨てても、三人一緒に良いな」

そう、聞こえない二人に願った

のだが——

「くっ——くくく……」

「ふ、ふふふ……」

押し殺した笑い声のデュエットが聞こえてきた

眼を見開き、二人の顔を交互に見る

「お、お前ら……！　まさか最初から眼覚まして……！」

「んー、俺は存外悪くないなって所で」

「私はどう云う事だつて所だ」

「どつちも最初からだつた！」

うわー、と真つ赤になった顔に手を当てる奏

そんな奏を見て、鏡華と翼は示し合わせたように奏を二人同時に抱きしめた

「にや、にやにを……！」

「俺達はどこにも行かねえよ。もう二年前の出来事はごめんだ」

「まったくだ。私を孤独にさせた鏡華と奏には、罰として一生傍にいてもらうからな」

「——」

——まったく

本当にまったくだ

この二人といると、焼き付いた記憶が剥がされていく気分だ

「そりゃっ」

ベッドのバネを利用して寝たまま跳躍すると云う荒技を披露する奏

落下地点を修正し、翼と反対の鏡華の隣に寝た姿勢で落下する

驚いている隙に今度は鏡華を真ん中にして抱きついた。鏡華をちよつと押し、翼にも抱かせる場所に移動させる

「お？」

「だったら、二人のその台詞——プロポーズとして受け取つとくぜ？」

「……………」

「元より、そのつもりだ」

二人からの熱い視線に、鏡華は視線を彷徨わせる

プロポーズはもうちよつと大事な場所で云うつもりだったのだが——

「まあ、いいか。俺達に普通なんて無理だろうし」

「そうだけ鏡華」「そうだよ鏡華」

奏と翼の声が重なる

諦めたように首を振った鏡華は、二人を抱き寄せ、

「風鳴翼さん」

「はい」

「天羽奏さん」

「おう」

「結婚出来ないと思う。誰からも祝ってもらえないかもしれない。それでも……それで  
も一生——俺と一緒にいてください」

「もちろんです」

「当たり前だろ」

面と向かって、生まれて初めてプロポーズした

即答で返答する翼と奏。鏡華を抱きしめ返す

それだけで胸が温かくなる

幸せのカタチは人それぞれだ

例え歪であろうと、自分達が幸せならそれでいい

それが——世界から見捨てられようとも

## Part o s s i a 優しく不平等なセカイ

「本<sup>マジ</sup>当でどうするんだ。これ……」

ヴァンの掌に乗っている掌サイズのケース。中には指輪が納められている

別に買おうと思つて買ったのではない。元々、その場の勢いで買つてしまったのだ

(まさか見るだけの買い物だけのはずが、店員の話に乗せられて買つてしまうとは……)

俺もまだまだだ)

溜め息を漏らし、ケースをポケットにしまう

今日のこれからの予定はない。ノイズが出現すれば、いい「暇潰し」になるのだが、

その連絡及び反応も一切ない

仕方なく、フィーネの屋敷へ足を向ける事にした

フィーネの屋敷、とは云うが実際、家主は死亡しており、廃墟に近い状態と報告されている

以前、弦十郎に聞いたが、あの場所は非公式に政府の私有地になつていているらしい。まあ、すぐに売りに出されるらしいが

それを聞いたヴァンは、何でそう考えたのか自分でも分からないが、屋敷を買い上げ

た。無論、そんな金はなかったの、奏者として働いている金から払う事で契約した。フィーネが使っていた機材などは全て二課が回収した。残っているのは日用品が少しと電気やガスが通つてゐる事

「はあ……まあ、いいか」

何故か溜め息がこぼれる

今日で何度目だろうか。幸せが逃げる、などと云う迷信が正しいのなら間違ひなく今週分くらいは幸せは逃げたはず

一生分の不幸は使い切つたと思つてゐるが

しばらく歩いてゐると、川沿いの道路に出た

その時、

「お兄ちゃん！ 頑張れー！」

そんな、やけに記憶に残つてゐる声が聞こえてきた

ふと視線を向けると、少し行つた先の街路樹の一本の周りに人だかりが出来ていた。全員が街路樹を見上げてゐる

——何かやつてるのか？

つい氣になつてヴァンは人だかりに近付いた

近付いて——また溜め息を吐くハメになつた

街路樹の下には、いつぞやの女の子が

そして、街路樹には女の子の兄が昇っていた

「何やってんだ……」

思わず、呟く

見なければ関わる事もなかったが、見てしまった以上放つとく事は自分の中の何かの  
せいで憚られた

人だかりを押しわけ、女の子の近くまで進む

「おいっ」

「え？ あつ、変身するハトのおにーちゃん！」

「……………」

——ライオット 荒事にしないでくれ

本気でそう願うヴァンは、女の子の目線までしゃがみ、

「変身するはやめてくれ。せめてハトだけにしろ」

開口一番、それを告げた

「それより、お前の兄は何をしているんだ」

「引つ掛けたふーせんを取ろうとして昇ってるの！」

バルーン  
「風船？」



嫌な予感がして見上げれば――

「わ、わっ、わわっ!」

男の子が枝を踏み折り、体勢を崩していた

「お兄ちゃん!」

「くそがつ!」

今から昇つていては受け止められないと判断したヴァンは

――蹴ッ!

舗装された地面を “壊さない様に” 踏み締め跳躍し、街路樹の幹も同じように蹴り、決して細くない枝を眼前に掲げた腕で折りながら落下しそうになった男の子を逆の腕で抱きとめた

その時には下から驚きの声が上がっていた

「うわっ!」 お、おにーちゃん?」

「黙ってる。舌を噛むぞ」

ぴしやりと言いつち、もう一步を蹴り込み最後の跳躍を行う

街路樹を飛び越す前に引つ掛かっていた風船を抜き取るのも忘れない

落下が始まるのを感じ、ヴァンは軽く息を整え着地に備える

着地の瞬間、膝を折り衝撃を軽減した痛みを最小限にする

途端、歓声が沸く

鬱陶しそうに眉を潜めたヴァンは男の子を下ろし、近付いてきた女の子に風船を渡す

「おにーちゃん、ありがとう！」

「もう手放すな。さて……」

小僧、と男の子を呼ぶ

なに、と言った男の子の頭を——ヴァンは思い切り殴った

ぐーで。結構本気で

「いったあ……」

「この馬鹿が。妹を守るのは構わんが、それで自分が大怪我しそうになっては元も子もないだろうが」

「ご、ごめんなさい……」

「つたく……。まあ、いい。今度からは態度だけでかい年上だろうと無視しろ。どうせ、そんな奴に限って中身はガキなんだから」

わざと周りに聞こえるように、しかもガキの辺りを強調して言う

当然、反応する輩はいるわけで、

「んだとコラ」

さつきまで男の子を携帯で写真撮って笑い者にしていた男子学生達が近寄ってきた

よく見れば、ピアスなんかも付けている

——リディアンの生徒とは大違いだな

一瞥し、場違いな感想を抱く。だからと云つて顔はあくまで子供達の方へ向ける

「ほら、反省したらさっさと妹連れて帰れ。今度は離すなよ」

「う、うん！ それじゃあねおにーちゃん！」

「またねー！」

笑顔でぶんぶん手を振る女の子を連れ、男の子は言われた通り帰るようにその場を後にした

ヴァンは無表情で手を振り、二人が見えなくなると、

「さて、行くか」

「さっきから無視してんじゃねえよ！」

「黙<sup>シヤ</sup>つていろ。クズがききやんきやん吠えるな」

売り言葉に買い言葉

彼自身、そんな事は一切考えていないのだが、受け取る相手が考えてしまう  
スタスタとその場を去ろうとするヴァン

男子学生は怒りに任せて、拳を振るう

周りの野次馬が色々と声を上げる

(潰すか……ん?)

物騒な事を考えていたヴァンだったが、何かに気付いた後ろからの一撃を見ずに躲し、伸ばしてきた腕を掴み引つ張る前のめりになっていた男子学生はそのまま、

「何やってんだ馬鹿ヴァン——！」

—打ッ!

ヴァンを殴ろうとしていたクリスに殴られた

地面に叩き付けられる男子学生

呆然と声はやむ観衆

「よおクリス。奇遇だな。買ひ物は済んだのか?」

「ああ。けど、ちよつとヴァンの事が気になつたから探そうと思つてたら、アホな事して馬鹿を見つけたから殴つた。結果的にスクリュール人ポールが喰らつたけど」

「ふふ、クリスの一撃をもらつたんだ。クスも本望だろう」

「そ、そうか……。つて、それは何か嫌だぞ!」

「だろいな。俺も嫌だ」

「あ、ああ、そう……」

そんな事はお構いなしにスタスタ去っていくヴァンとクリス

まるで男子学生は初めから眼中にないかの様——眼中になかったが  
野次馬達は、そんな二人を呆然と見送るしかなかった

♪♪♪♪♪♪♪♪

ヴァンとクリスが屋敷に着いた時には、既に空には満天の星が浮かんでいた  
夕食はお持ち帰っていた、ふらわーのお好み焼き

「初めて食べたが……なかなか美味しい食べ物だな」

「だろ。何回食べても飽きないんだ」

「確かに。しばらくはこれだけでもいいな」

ヴァンにも好評のお好み焼き

食べ終わると、軽く掃除をして入浴する

「でも、着るもん……」

「あるぞで」

「何でだ!?!」

「風鳴弦十郎が持ってきて常備しているのが何着か」

「あのおっさん……。人のサイズまで知っていると、いよいよ肉体言語で会話しない

といけない段階になってきたぜ」

「あいつに肉体で……敵うか。クリスなら」

「どういう意味だそれ！」

「気にするな」

フィーネが改築しなかった二階には、日用品であるベッドとタンスがいくつか

体格の良い男——例えば弦十郎——が三人くらい寝転がれるベッドにヴァンとクリスは寝転んだ

別に恥ずかしい気持ちはない。昔から寝る時はいつもこんな感じだった

昔に比べてちよつと距離は空いたが、それでも心の距離までは空く事はない

「なあ、ヴァン」

寝転がり、ヴァンとは反対の方向を見つめているクリス

「どうした？」

「誰かに何か渡したのか？」

「……いきなり何だ」

「遠見鏡華が言ってた」

「あの糞フアツキン・ロード王……」

——今度会った負かす

本気で決心するヴァン

「ヴァン……誰に何をあげたんだ？ あたしに内緒で」

「……別に、何もあげてない」

「誰かにあげるんだな」

「……………」

今日のクリスはやけに鋭かった

いや、ヴァンが隠し切れてないだけかもしれないが

冷や汗が背筋を伝う気がした

「あの……クリス？」

「あんだ？」

「もしかして……怒ってるか？」

「怒ってない」

怒ってました

素っ気なく即答すると云う事は怒っている、または拗ねている証拠だった

やれやれ、とヴァンは頭を掻き、色々と考えながら口を開いた

「隠していたのは悪かった」

「ヴァンが謝る事なんてねーよ」

「まったく……相変わらず拗ねやすいお姫様だ」  
プリンセス

「だ、誰がお姫様だっ」

思わずヴァンの方を向いて、怒鳴り返してしまうクリス

だが、当のヴァンも反対の方向を向いて寝ていた

「ヴ、ヴァン？」

「明日、話す。今日はもう寝ろ、クリス」

「ちよっ……おい!？」

また叫ぶが、既にヴァンは答えず寝息を立て始めた

流石に呆れて声も出ないクリスだったが、

「ツ……勝手にしろよ! 明日なんか聞く気ねえからなっ!」

意地を張って、毛布にくるまった

(ヴァンの奴……! 何だよ、あたしがどれだけ……)

そこまで考えて、ふと思考を止めた

あたしが——何だ? あたしは嫉妬してるのか?

馬鹿らしい、と一蹴したかった

だが、鏡華の口からヴァンが誰かに何かを渡そうと聞いた時、胸が締め付けられるよ

うだった

決戦の時、ヴァンが言った言葉。クリスは一語一句違わずに思い出せる

その言葉をあれから一言も言ってくれない。だから、余計に辛かった

もしかしたら、ヴァンが傍からいなくなってしまうそうで——

(ずっと一緒にいてくれるんじゃないかなかったのかよ。あたしの夢を叶えるために生きるんじゃないのかよ)

涙がこぼれそうになり、毛布を引っ張って身体に巻き付け眼を閉じる

どうか明日が、ヴァンとの最後の日になりませんように、と願いながら——

♪♪♪♪♪♪♪♪

隣から、完全に眠った気配を感じヴァンは音もなく上体を起こす

ちらりと隣を、クリスを見る。彼女も眠りが深いと云うわけではないが、これぐらいでは起きない

ヴァンが声を掛けた瞬間、起き上がるが

よく見れば、目端に涙が浮かんでいる

(すまない、クリス)

謝りながら指で涙を拭い取る。髪を梳いてやると、

「ヴァン……どこにも行かないで……」

彼女らしからぬ弱気の寝言が聞こえた

その言葉にズキッと胸が痛む

——覚悟決めて、腹括るしかないか

ヴァンは起き上がり、自分の服が置いてある棚へ近付きある物を取り出して——

♪♪♪♪♪♪♪♪

クリスの目覚めはいつも良い

翌日も朝日が昇る前に、まどろむ事なく上体を起こして——気付いた

隣で寝ていたはずのヴァンがいない

「嘘だろ——ッ?」

跳び上がりそうになって、そこでもう一つ気付いた

自分の手に何かが収まっている事を

見下ろせば、掌には掌サイズのケースが収まっていた

「何だこれ」

寝ている時、掴んでいたのだろうか

しかし、寝る前にこんなケースは部屋にも、ましてやベッドにも置いてなかった  
 恐る恐るケースの蓋を開いて――

しばし、惚けてしまった

数秒、十数秒、数十秒惚けて――我に返る

蓋を閉じて、部屋を飛び出そうとして、寝間着だった事に気付いて、慌てて着替え始めるのだった

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

屋敷の近くの崖でヴァンは星剣を振るっていた

一心不乱に。もしかしたらがむしやらかもしれない

型など存在しないかの様に振り続ける

振る速度は徐々に上げていき、一定のスピードに達すると振るのをやめ、また速度を  
 上げながら振り始める。むき出しの上半身は雨に打たれたように汗でびしょ濡れだっ  
 た

始めてから約三時間が経ち、ヴァンはやっと星剣を下ろした

近くの小川で汗を流し、星剣を担いで屋敷に戻ろうとした

だが、崖まで戻って来たところで、足を止めた

屋敷からクリスが走ってきた。ヴァンを見つけると、一目散に

「ヴァンッ！」

到着したクリスはヴァンの名前を叫びながら、手に持ったケースを突き出した

「何だよこれ！」

「何って——指輪だが？」

「誰かに渡すもんじゃねえのか!？」

もしかして——気付いてないのだろうか

クリスは鈍感ではないと思っていたが——否、鈍感じゃないから気付かないのかも  
しれない

仕方ない、と云う風にそっぽを向いて、ヴァンは言った

「渡すものだよ——クリスに」

「だつたらあたしじゃなくて、そのクリスって奴に——って、え？ あたし？」

「クリスだクリス。本名は雪音クリス。今、俺の前に立っている奴に渡すつもり  
の指輪だ」

「えっ、ええええ——っ!!」

絶叫も絶叫——大絶叫

予想とはまるで見当違いのヴァンの答えに、クリスは顔を真っ赤にさせて大いに驚いた

そんなクリスを見て、ヴァンは必死に指輪を渡す方法を考えて自分を思い出し、笑い出した

——本当に、くだらない事で考え込んでいた自分が馬鹿みたいだ

正直、適当に答えた鏡華の答えが一番シンプルで的確だった

こんな時を良い雰囲気と云うのは、少し違うが——まあ、いいだろう。俺達に良い雰囲気なんて似合わない

最初は喉の奥で押し殺すように笑っていたが、終いには声を上げて大笑いだ

「わ、笑い事じゃないっ!」

「くははは! ……いや、すまない。どうにも、おかしくてな」

「はっ、どーせ、あたしはおかしい奴だよ」

「クリスじゃない。どう渡そうか悩んでいた自分にだ」

笑みを苦笑に変え、ヴァンは星剣をその場に突き刺した

瞬間、クリスの華奢な身体を抱き締める

「にや、にやにを……!」

「俺は、ヴァン・ヨゾラ・エインズワースは、もう二度と雪音クリスの傍を離れない。一生、傍にいて、雪音クリスの夢を叶えるために生きると誓う」

「……………」

それは、あの戦いの最中に言われた言葉

一字一句忘れようもない、告白のような台詞

「その言葉と俺の想いをカタチにした物——と言えば貰ってくれるか？」

「つ…………馬鹿！ 好きな奴が渡してきた指輪なんだ——貰えないわけないだろうっ！」

クリスもヴァンの背中に両手を回して言う

「ヴァンはどうなんだよ。誤魔化した言い方しないではつきりしろよ」

「…………好きだ。俺は、雪音クリスを——愛してる」

「…………ああ。あたしも愛してるぜ、ヴァン」

わずかに離れ、見詰め合う二人

ちようどその時、朝日が昇り、二人を照らす

見詰め合った二人の影は、ゆっくりと近づき——静かに重なり合う

世界はいつだって不平等だ

二人の大切なものをありったけ奪ったのだから

それぐらい——世界は変に優しかった

だって、一番大切なものだけは奪わず、幸せを贈ってくれるのだから——